博士論文

アメリカ社会における
「ファット／肥満」概念構築の民族誌

：リスクと社会運動からの人類学的探究

碇　陽子

アメリカ社会における
「ファット／肥満」概念構築の民族誌

：リスクと社会運動からの人類学的探究

An Ethnography of the Construction of United States American Conceptions of "Fat/Obesity"

Anthropological Investigation from the Perspective of Risk and Social Movements

東京大学大学院総合文化研究科

超域文化科学専攻（文化人類学）

碇　陽子

Yoko Ikari

目次

序章　リスクと社会運動から理解する、アメリカ社会における「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用 1
1.　現代アメリカの「ファット／肥満」の民族誌に向けて 1
2.　本論の視座 1：「ファット／肥満」概念の分析に向けて 4
2.1　問題としての肥満 4
2.2　人類学からの多様性の説明 7
2.3　社会学からの肥満問題の相対化 10
2.4　本論の視座：問題としての「ファット／肥満」という概念 16
2.5　社会構築主義の混同 19
2.6　用語の問題 21
3.　本論の視座 2：リスクと社会運動 23
3.1　リスクと「リスク社会」についての研究整理：文化人類学を中心に 23
3.2　新しい社会運動／アイデンティティ・ポリティクスについての先行研究 28
3.3　ファット・アクセプタンス運動を理解するための本論の視座：「リスク社会」のアイデンティティ・ポリティクス？ 34
4.　フィールドワーク 39
4.1　本論の舞台：アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリア 39
4.2　フィールドワーク概要 41
5.　本論文の構成 42
第一部　肥満・リスク・制度 45
第 1 章　集合のリアリティ・個のリアリティ：アメリカの「肥満問題」から考えるリスクと個人 46
1.　はじめに：集合的事象としてのリスクと個人 46
2.　集合のリアリティ・個のリアリティ 48
2.1　「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」の矛盾：「リスクの医学」の誕生と確率論的病因論 48
2.2　錯綜する病因論と不確実性との対峙 49
３．「肥満問題」とリスクの個人化 51
3.1　「肥満エピデミック（Obesity Epidemic）」 51
3.2　BMI 小史 55

4.　累積的リスクと「肥満になる」意思決定 57
4.1　子どもの肥満をめぐる責任ゲーム 57
4.2　責任主体と累積的リスク 61
5.　交錯する集合のリアリティと個人のリアリティ：第２章に向けて 63

第２章　空転するカテゴリー：福祉・公衆衛生政策からみる「貧困の肥満化」 66
1.　リスクの犯人探し：貧困の肥満化という問題 66
２．貧困の肥満化 67
2.1　貧困対策におけるアメリカ農務省による公的扶助の役割 67
2.2　貧困の肥満化 70
3.　公的扶助としての食料支援プログラムと肥満対策 74
3.1　カリフォルニア州の「肥満の原因となる環境」への取り組み 74
3.2　WIC プログラムの概要 76
3.3　栄養カウンセリングの現場を中心に 79
4.　引き受け手のないリスク 86
4.1　貧困者層の肥満対策の複雑な構図 86
4.2　引き受け手のないリスク 89
5.　おわりに：第二部に向けて 91

第二部　ファット・社会運動・科学 93

第３章　ファット・アクセプタンス運動の展開にみる「ファット」カテゴリーの特殊性 94
1.　はじめに 94
2.　本章の問題意識：カテゴリー・アイデンティティ・差異 96
2.1　デビッド・バレンタインによるカテゴリーの議論を振り返って 96
2.2　マイノリティ・カテゴリーとしてのファット 97
3.　ファット・アクセプタンス運動の歴史 99
3.1　ファット・アクセプタンス運動の誕生：1969 年 99
3.2　第二波フェミニズムの中の「ファット」：1970 年代 100
3.3　「障害」との連携：1980 年—1990 年代 105
4.　考察：ファット・アクセプタンス運動のジレンマ 107
4.1　名乗りにおける齟齬 107
4.2　公民権法が想定する個人観と ADA が想定する個人観とその両立：「集合としての差異」と「集合の中の差異」 109
5.　おわりに：第４章に向けて 112

第４章　ファット・アクセプタンス運動とフェミニズムの「ぎこちない」関係：ファットである自己、女である自己、その自己規定の困難 114

1. 本章の目的 114
2. フェミニズムを乗り越えようとする人びと 116
2.1 なぜフェミニズムは太った女性が受ける差別や抑圧に無関心なのか 116
2.2 美的性的な身体としてのファット：1970 年代から 1990 年代前半におけるフェミニズムからの影響、そして、フェミニズムとの距離 117
3. スージー・オーバックとの同盟をめぐる出来事 125
3.1 フェミニズムとの同盟が招いた騒動 125
3.2 フェミニストの「特権」 128
3.3 小括：フェミニズムとファット・アクセプタンス運動の「ぎこちない関係」 129
4. ファットのなかの「多様性」:「ファット鶴プロジェクト（1000 Fat Cranes Project）」をめぐる人種差別批判 132
4.1 「ファット鶴プロジェクト（1000 Fat Cranes Project）」 132
4.2 「ファット鶴プロジェクト」に対する人種差別批判と文化的他者 136
4.3 普遍主義と文化相対主義、ポジショナリティをめぐる問題 140
5. ファットであること、女であること、その自己規定の困難：第 5 章に向けて 142

第 5 章 「ファット」であることを学ぶ：ファット・アクセプタンス運動において情動的関係から生まれる共同性 144
1. 本章の目的 144
2. 先行研究の整理 145
2.1 社会運動の場において形成される共同性 145
2.2 社会運動の場において生成する情動的関係性 147
3.1 「ファット」であることを学ぶ 150
3.1 「ファット」から連想されるもの 150
3.2 年次大会の概要 152
3.3 転倒する「ファット」と「痩せ」の意味 154
3.4 「ファット」として生きることを語り合う 155
3.5 配慮の空間：身体実践から立ち現れてくる「ファット」 157
3.6 ユーモラスな空間 158
3.7 笑いの効果：言語使用実践から見る「ファット」 160
4. 考察 165
4.1 情動的な関係性から生み出される共同性 165
4.2 笑いによる自他の跳躍：折り重なった矛盾の交渉 166
5. おわりに：第 6 章に向けて 168

第 6 章 ファット・アクセプタンス運動による対抗的な〈世界〉の制作 170
1. 本章の目的 170

1.1　公民権としての「ファット」の危機 170
1.2　本章の視座 171
1.3　〈世界〉という言葉の選択と本章の目的 171
2.　カテゴリーのもとに作られる〈世界〉 174
2.1　生まれつきの「ファット」 174
2.2　疫学理解の「誤謬」：相関関係と因果関係の混同 176
2.3　対立するカテゴリー：「肥満」カテゴリーと「ファット」カテゴリー 177
3.　Health at Every Size の組織化と事実作製 178
4.　制作中の〈世界〉と既存の世界 180
4.1　世界間の通じなさ 180
4.2　「パラダイム・シフト」、あるいは、同時にある二つの世界 182
5.　考察：〈世界〉制作と世界間の通約（不）可能性 185
5.1　ファット・アクセプタンス運動による〈世界〉の制作 185
5.2　世界間の関係 188
5.3　世界間の連続性と同一性について 190
6.　「徹底した相対主義」：「リスク社会」とファット・アクセプタンス運動の世界 192
6.1　部分的に通約（不）可能な存在として生きること 192
6.2　あらゆる視点から離れた世界はない 193

終章 195
1.　「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用 195
1.1　事実と価値 195
1.2　「リスク社会」における「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用 195
1.3　論じきれなかった点 201
2.　ファット・アクセプタンス運動の現在とその将来 202
3.　ファット・アクセプタンス運動を通して見える「多様性」のあり方 204

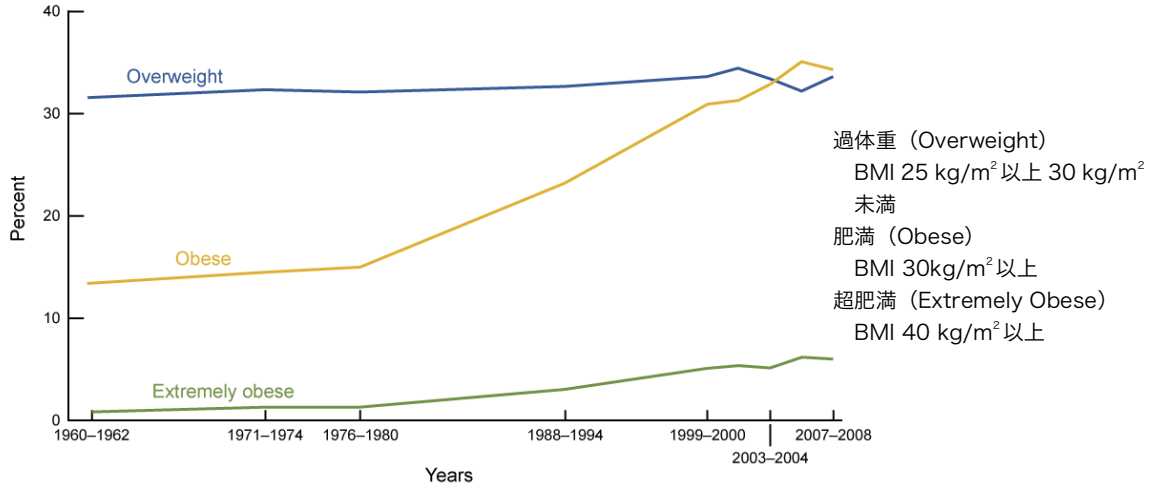
参考文献 206

序章：リスクと社会運動から理解する、アメリカ社会における「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用

1. 現代アメリカの「ファット／肥満」[1]の民族誌に向けて

本論は、リスクと社会運動から理解する、現代アメリカ合衆国（以下アメリカ）の「ファット／肥満」概念の構築と人間存在の相互作用についての民族誌である。

よく知られているように、アメリカでは、先進国のなかでも一番肥満率が高く、現在、国内では肥満が社会問題化している。アメリカ疾病予防管理センター（Centers for Disease Control and Prevention）のデータを見ると明らかなように【表 0-1】、肥満者数は 1980 年後半から急激に増加し始めている。現在では、体重と身長から割り出される体格指数（Body Mass Index：以下 BMI）の数値[2]が 30 以上の「肥満（obesity）」カテゴリーに分類される人は、国民の約 3 分の一を占める。BMI が 25 以上の「過体重（overweight）」のカテゴリーに分類される人と合わせると、全人口の 6 割以上を占めるといわれる。



【表 0-1：「アメリカ合衆国の成人（20–74 歳）の過体重、肥満、超肥満の動向：1960–62 年から 2007–2008」】疾病予防管理センターの HP より［http://www.cdc.gov/nchs/data/hestat/obesity_adult_07_08/obesity_adult_07_08.htm］（2014 年 1 月 13 日最終閲覧日）。

---

1 本稿では、人が太っている状態を指す言葉として、「肥満」と「ファット」を適宜使い分けながら使用する。理由については本章において後述する。

2 体格指数（Body Mass Index : BMI）は、「体重／身長 ²」の計算式から算出される人の肥満度を表す。身長 160cm の人であれば 77kg で、170cm の人であれば 87kg で、BMI が 30 となり肥満のカテゴリーに入る。BMI の歴史については、詳しくは第 1 章を参照。

州ごとには、2013 年現在、肥満率 30%を超える州は 53 州中 20 州にのぼる（【表 0-2】参照）。特に、肥満者の数は、中西部、なかでも、ミシシッピ州やアラバマ州などの南部に多いといわれる。これには、さまざまな理由が挙げられる。例えば、高カロリーの南部の伝統的な料理のせいだと言う人もいれば、貧困層が多い地域だからとみなす人もいるし、冗談半分で、体重を気にしない人が多いため正しい体重を自己申告してしまうから肥満率が一番高くなるのだと言う人もいる。しかしながら、どれも定かではない。本論の調査地であるカリフォルニア州は、BMI が 30 以上の人の割合は 24%となっている。

州	%	州	%	州	%	州	%
アラバマ	32.4	イリノイ	29.4	ネブラスカ	29.6	サウスカロライナ	31.7
アラスカ	28.4	インディアナ	31.8	ネヴァダ	26.2	サウスダコタ	29.9
アリゾナ	26.8	アイオワ	31.3	ニューハンプシャー	26.7	テネシー	33.7
アーカンサス	34.6	カンザス	30.0	ニュージャージー	26.3	テキサス	30.9
カリフォルニア	24.1	ケンタッキー	33.2	ニューメキシコ	26.4	ユタ	24.1
コロラド	21.3	ルイジアナ	33.1	ニューヨーク	25.4	バーモント	24.7
コネチカット	25.0	メーン	28.9	ノースカロライナ	29.4	バージニア	27.2
デラウェア	31.1	メリーランド	28.3	ノースダコタ	31.0	ワシントン	27.2
コロンビア特別区	22.9	マサチューセッツ	23.6	オハイオ	30.4	ウエストバージニア	35.1
フロリダ	26.4	ミシガン	31.5	オクラホマ	32.5	ウィスコンシン	29.8
ジョージア	30.3	ミネソタ	25.5	オレゴン	26.5	ワイオミング	27.8
グアム	27.0	ミシシッピ	35.1	ペンシルヴァニア	30.0		
ハワイ	21.8	ミズーリ	30.4	プエルトリコ	27.9		
アイダホ	29.6	モンタナ	24.6	ロードアイランド	27.3		

【表 0-2：アメリカ合衆国の州と海外領土ごとの自己申告による成人肥満率（2013 年）】[3]

2000 年代になると、公衆衛生やメディアのあいだで肥満予防の気運が高まり、病気のリスクとなる肥満増加に警鐘を鳴らすために「肥満エピデミック」という言葉が生まれた。同時期、肥満問題や健康への一般の人びとの関心も高まり、アメリカ人はなぜ太るようになったのかという問いに対し、食品産業、遺伝、生活スタイルの変化など、さまざまな要

3 CDC の HP より［http://www.cdc. gov/obesity/data/table-adults.html］（2014 年 10 月 25 月最終閲覧日）。データは、BRFSS 調査にもとづく。BRFSS 調査とは、行動リスクファクターサーベイランスシステム（Behavioral Risk Factor Surveillance System）のことである。BRFSS 調査では、毎年、州の衛生局がアメリカ国内の成人に電話によるインタビューを行い、データを収集する。身長と体重は、自己申告である。

因から説明しようとする一般書の刊行も相次いだ[4]。それに加えて、肥満であることは、病気のリスクの問題だけでなく、貧困の問題、ジェンダー差別や人種差別など、さまざまな問題枠組みと関連づけられて説明されるようになってきた。公民権運動以降さまざまな差別が問題化されてきたが、太っている者に対する差別は、容認されている最後の差別だとも言われている［Puhl and Brownell 2001: 788］。こうした肥満問題の根底には、アメリカ社会の根深い肥満嫌悪があると言わざるをえない。

こうした諸状況を踏まえると、「肥満」や「ファット」というカテゴリー（概念）は、人種やジェンダーなどと同様、人びとを分類する「新しい」カテゴリーになりつつあるといっても過言ではない。そこで、本論では、「ファット／肥満」という「新しい」カテゴリーが、アメリカ社会において、どのように形成され、また、それがどのように人びとの行為や経験の理解の方法に影響を与えるのか、こうした概念と人間の存在の相互作用について描くことを目的とする。別の表現で言うなら、これは、アメリカで「新しく」誕生しつつある、肥満やファットと呼ばれる種類の人びとをめぐる民族誌である。

ここで、民族誌の具体的な対象について、肥満やファットと呼ばれる種類の人びとのなかでも、特にどのような人びとを扱うのか、若干言及をしておく必要があるだろう。本論は二部構成になっているが、第一部では、肥満のリスク化という問題をテーマに、肥満のリスクを予防するための公衆衛生の取り組み、肥満のリスク・グループとされる貧困者層の人びとを分析の対象とする。肥満が病気のリスクとして公衆衛生の管理の対象に取り込まれる過程で、肥満のリスクを自分の問題として引き受け、体重の自己管理に努力する責任主体が形成されたり、また、肥満のリスク集団が作られ、それらの人びとに予防介入が行われるというのが第一部のストーリーのおおまかなバックグラウンドである。

第二部では、1969 年にアメリカで誕生した、太った人びとの市民権の承認を求める社会運動であるファット・アクセプタンス運動とその参加者を分析の対象とする。ファット・アクセプタンス運動は、人種やジェンダー、障害、エスニック・マイノリティの人びとによるアイデンティティ・ポリティクスが持つ特徴と重なる部分も多い。しかし、ファット・

4　例えば、医療ジャーナリストのマイケル・フメントによる *The Fat of the Land* という本［Fumento 1997］、2000 年代には、グレッグ・クライツァーによる『デブの帝国―いかにしてアメリカは肥満大国となったのか』（原題：*Fat Land*）［クライツァー2003］や、科学ジャーナリストのエレン・ラペル・シェルによる『太りゆく人類』（原題：*The Hungry Gene: The Inside Story of the Obesity Industry*）［2003］、ポール・カンポスによる過度に肥満を問題化する傾向に異議を申し立てる *Obesity Myth*［Campos 2004］などがある。また、肥満が社会問題化するにつれ、食の問題にも関心が向けられた。直接肥満の問題を扱っているわけではないが、ファーストフードがもたらす健康問題、労働問題、食の安全の問題などを扱ったエリック・シュローサーによる『ファーストフードが世界を食いつくす（原題：*Fast Food Nation*）』［シュローサー2001］、栄養士マリオン・ネスルの『フード・ポリティクス（原題：*Food Politics*）』［ネスル 2005］、日本でも公開され話題になったモーガン・スパーロックのドキュメンタリー映画『スーパー・サイズ・ミー（原題：*Super-Size Me*）』などがあげられる。

カテゴリーはそれらのマイノリティ・カテゴリーとは大きく異なる特色を持つため、アイデンティティ・ポリティクスという枠組みだけで理解するには限界がある。例えば、太っている当事者とは誰のことか、太っていることは肌の色などとは異なりコントロール可能なことではないのか、などの点でアイデンティティ・ポリティクスの枠組みで理解することは難しい。そこで、本論では、リスク／「リスク社会」という分析の枠組みを取り入れることで、ファット・アクセプタンス運動という社会運動を理解する際の限界を乗り越えようと考えている。民族誌の登場人物は第一部と第二部で異なっていて、第二部のファット・アクセプタンス運動は第一部のリスクの話と関連性がないように見えるが、それは正しくない。既に述べたように、太っていることは、病気のリスクにかかわる問題、貧困の問題、ジェンダー差別や人種差別などの問題を内包する。全ては独立した問題ではなく、絡み合いながら、アメリカの肥満問題を構成している。ファット・アクセプタンス運動の人びとが、肥満や体重を病気と結びつけることに異議申し立てを行うようになったのも、第一部の社会的背景（後述する「リスク社会」）があるからだと考えられる。

以上、おおまかな本論の目的と分析対象を述べたところで、本章の構成を述べておく。まず、第 2 節と第 3 節では、本論全体にかかわる先行研究の整理をしておく。第 2 節は、「ファット／肥満」に関係する人類学や社会学を中心とした先行研究の整理を行い、「ファット／肥満」の概念を分析する理由付けを提示する。続く第 3 節では、「リスク」と「社会運動」をめぐる人類学的な先行研究を概観整理し、その二つのテーマの関連性を指摘しておく。第 4 節では本論の基となったフィールドワークの概要について説明し、第 5 節では本論全体の構成に言及する。

2.　本論の視座 1：「ファット／肥満」概念の分析に向けて

2.1　問題としての肥満

文化人類学は、自己とは異なる境遇に生きる人びとの多様な生の有り様を描き、説明し、他者理解に至るための実践的立場であると考える。しかしながら、文化相対主義といわれるその立場から、異文化の他者の太った身体について語ろうとするとき、奇妙な決まりの悪さを感じる。アフリカのニジェールの女性の「太らせる」慣習についてフィールドワークを行ったアメリカ人人類学者のレベッカ・ポプノーが、あるエッセイのなかで吐露した感情は、その決まり悪さを言い当てているように思われる。彼女は、調査中に、ヘルスケアの施設で体重計に乗ったときに、体重が減っていることに対し、心がうずくような喜び（twinge of happiness）を感じたと書いている。痩せたことを、純粋な喜びの感情ではなく、心がうずく感情と表現する理由は、調査対象であるニジェールの太った女性は美しいが、自分自身は痩せている方が良いという思いが表出してしまったことから生じる決まりの悪さに由来する［Popenoe 2005: 26］。本章では、この決まりの悪さや違和感の所在の理由を解きほぐしながら、先行研究の整理と本論の目的を説明していくことにしよう。

ファット／肥満を研究する学問的立場は、大きく三つに分けられるだろう。一つめの立場は、肥満が人間の健康に及ぼす影響について研究する科学関連分野の立場である。この立場は、肥満の生物学的な側面に注視し、肥満はさまざまな病気のリスクとなり、疾病率や死亡率を高める不健康な状態であり、予防改善すべき対象だと捉える。この立場には、肥満を予防、治療するために対策を講じようとする保健医療に携わる者たちも含まれる。

二つめの立場は、太った身体の文化的社会的側面に注視し、その身体を多様性の一つとして捉える立場である［e.g. Becker 1995; Boero 2007; Brink 1995; de Garine 1995; Pollock 1995; Popenoe 2004; Sobo 1994］。この立場は、一つめの立場に対する批判的立場であり、西欧的な価値観を相対化する目論見がある。なかには、肥満を問題化することがスティグマや差別を生み出してしまうことを懸念し、身体の被構築性やその政治性を批判的に暴く者もいる［e.g. Bordo 1993; Kulick and Meneley (eds.) 2005; LeBesco 2004; Saguy and Riley 2005; ウルフ 1994］。もっぱら肥満が健康に与える影響については触れない者が多いが、肥満をめぐる科学的知識の正当性に疑義を呈する論者もいる［e.g. Gard and Wright 2005］。

三つめの立場は、前者二つの立場の中庸な立場で、応用実践の人びとが取ることが多い。すなわち、文化によって価値観は異なるものの、健康問題としての肥満は普遍的な問題であるとし、各地域の文化的社会的社会的な文脈を検討しながら、より現実的な対策を探るべきとする立場だ［e.g. Brewis 2011; Brewis et al. 2011; Moffat 2010; Puhl and Brownell 2001］。身体的多様性を称揚し、健康問題を置き去りにすることは人道的立場から正しくない。肥満は健康の面から改善すべき対象であるが、単に減量を促すのみでは、スティグマや差別、さらには摂食障害などの別の問題を生み出すだろう。特に、最近懸念されはじめているのは、「太っていることは不健康で悪いこと」とする肥満やファットにつきまとう否定的なイメージや規範が、グローバルに広がりつつあるということだ。ここ 10 年 20 年で急速に身体サイズの文化的多様性が失われ、同質化の傾向が広がってきているという報告もある［Brewis et al. 2011: 274］。

とはいえ、この立場の人びとは、文化的価値観と健康という普遍的価値観の間で苦悶しているのも事実である［e.g. Moffat 2010; Yates-Doerr 2013］。グアテマラの肥満について調査するイェーツ＝ドーアは、糖尿病や高血圧、メタボリック・シンドロームなどの食関連の慢性病で苦しむ人びとの経験を軽視するわけではないとしながらも、彼らの苦しみが、体重や身体測定といったことに還元されてしまうことを問題視している。数値に還元することは、病気を治療しているというより、彼らの病の苦しみを悪化させる可能性もあるのではないかと指摘する。実際、グアテマラの人びとにとって、測るという行為は品物の売買のときに行われるもので、人間の体重や身体は測るものではない。そのため、お腹や体重を測る行為に対し笑ったり、怒ったりするのだという［Yates-Doerr 2013: 63–66］。

筆者が、違和感を感じる立場として問題にしたいのは、文化人類学者や社会学者の多くがとる特に第二の立場と第三の立場（の一部）についてである。すなわち、肥満が健康に

害悪をもたらすということを理解しながら、太った身体を多様性の一つとして称揚する第二の立場や、太った身体を多様性の一つとして捉えながらも、同時に肥満の改善を目指す立場は、基本的には矛盾する立場である。これらの立場には、他者の多様性を描く態度に、自文化を基準として異文化を判定する自文化中心主義的な態度や、異文化に対する根本的な無関心が隠されているのではないだろうか。

実際、筆者が、文化人類学の立場から肥満を対象として調査を進めるに従って、この違和感は大きなものとなっていった。すなわち、太っている身体やそれをめぐる人びとの様態を多様性の一つとして相対化する一方で、「私自身が太ること」に対する嫌悪感から自由でないことに気づくと同時に、健康のために減量することが、スティグマや差別を生み出すポテンシャルをはらむということにも気づき始めていたからだ。他者の多様性は、われわれにとって治癒の対象となる。だからといって、対象から完全に離れたところに自身の立場を置いて「自分自身が感じる違和感と研究とは別」というように割り切ることは、自己欺瞞ではないかと葛藤を感じていた。つまり、オリエンタリズム批判で何度も繰り返されてきた、異文化に住む人びとの固有性を描くことを通じて、それらの人びとに、われわれとは全く異なる存在というまなざしを投げかける「他者化」の罠にはまり込んでいるのではないかと感じ始めたのだ。ポストコロニアルを経験した人類学とその関連学問は、望ましくないとされる自己の欲望を棄却するために、それを「野蛮」で「未開」の「他者」に投影し、本質化し、表象する「他者化」という近代の二元論的態度に対し批判的であったはずだった［cf. サイード 1986］。

しかしながら、急いで付け加えなければならないのは、文化相対主義をめぐる「自分自身が感じる違和感」は、例えばアフリカ大陸を中心に行われている女子割礼（Female Genital Mutilation：以下 FGM）という「他者」の「野蛮」な習慣を、一つの文化的価値観として容認できるか否かという、文化相対主義の知的な議論の題材として取り上げるときの違和感とは、おそらく異なる。この違和感の違いは、当事者性に関わるものであると考えられる。

第三世界で行われている FGM は、西欧のフェミニズムからの FGM 批判をめぐる議論という形をとって、これまで繰り返し文化相対主義の課題にのぼってきた［cf. 岡 2000; 千田 2002］。すなわち、西欧社会の知識人階級の女性や女性団体は、全ての女性の人権を求め、FGM を女性差別的な慣習であると糾弾した。しかし、これは西欧のフェミニズムを基準にしたものであり、そこには、「アフリカの野蛮で遅れた慣習」という西洋中心主義的な見方が含まれているのではないか。そもそも、FGM を施されたアフリカの女性と、西欧の女性は、「同じ女」というカテゴリーで括ることは可能なのか。西欧のフェミニズムからの FGM に対する批判もまた、優劣の価値観を押し付けているのではないか。FGM 批判は、こうした文化相対主義と普遍主義、第一世界のフェミニズムと第三世界のフェミニズムといった対立を生み出す契機ともなった。そして、われわれはここから声高に FGM 廃絶を訴える西欧中心主義のフェミニズム的な態度に注意深くあるべきだという教訓を学んでい

る。

しかしながら、ここで指摘したいのは、FGM という「野蛮」な慣例に対し、それを文化相対主義的な立場から簡単には糾弾できないとする立場をとるとしても、あるいは、女性に対する蛮行であると訴えるにしても、これを文化相対主義の格好の課題として論じる人びとは、自分自身が決して女性性器切除をされることはないという位置を確保していたということである。つまり、FGM は自分からどこか遠い世界の「他者」が行っている習慣であり、われわれが当事者になることはないという認識があった。

それに対し、太ることは自他の区別を峻別するものではない。自分自身が当事者になることも容易に想像しうるのだ。ゆえに、自分自身が太ることに忌避感や嫌悪感を持ちながら、太った他者をその嫌悪感から除外することは、二枚舌であると言わねばならないだろう。

では、太った身体の多様性に目を向けながら、その多様性を単なるわれわれの他者化やロマンティシズムの対象としてではなく、多様性そのものとして記述するために、人類学から果たしてどのようなアプローチが可能なのだろうか。ファット／肥満を課題として、本論全体を通して、この問いを考えていきたい。次節では、主に上記の第二の立場からなされた人類学を中心とした研究群をレビューしながら、本論の立場を説明していくことにしよう。

2.2　人類学からの多様性の説明

身体サイズは、それぞれの社会でさまざまな意味を持つ。西欧社会、特に、アメリカ社会では、痩せている身体は、健康や美、自己統制、魅力、富を象徴するといわれる。それに対し、太った身体は、不健康さ、醜さ、そして、自己コントロールの欠如、怠惰など道徳的な含意を持つ。

ところが、西欧社会ではおよそネガティブな意味しかもち得ない太った身体は、太平洋諸国やアフリカなどの非西欧社会においては、美しさや富、多産、性的シンボルなど、肯定的な意味を持つことが、文化人類学によって明らかにされてきた［e.g. Becker 1995; Brink 1995; de Garine 1995; Pollock 1995; Popenoe 2004; Sobo 1994］。

ド・ガリンとポロックによる『肥満の社会的側面（*Social Aspects of Obesity*）』［de Garine and Pollock 1995］では、太った身体が、コミュニティのなかで繁栄のシンボルとされるナウルの事例［Pollock 1995］、名声につながるとするカメルーンの事例［de Garine 1995］など、肯定的な意味を持つ各地の事例が明らかにされている。例えば、ナイジェリアでは、女性のふくよかさは賞賛の対象であり、家族の社会経済的地位や、女性の労働に頼ることなく家族を養うことができることを意味する。そのため、結婚前の若い女性は 1 年からそれ以上、「太らせ小屋」に隔離されるという［Brink 1995］。こうした研究では、食糧不足の際には、太っているほうが生存に有利であることから、太っていることが社会経済的に高い地位につながり、結果的に、文化的にも肯定的な価値を持つのだと分析する。グレミ

リオンが指摘するように、身体サイズをめぐる文化的意味や実践は、生存や出産という生物学的な機能を果たすためのものとして理解されるのだ［Gremillion 2005: 15–16］。つまり、異文化を説明する際に、生物学は普遍的な理解として適用されるといえる。

身体が、各社会や文化において社会的意味を持つという考え方をさらに押し進め、メタファーとして社会組織や社会構造を表すことを論じたのが、メアリー・ダグラスである。彼女は、身体が社会秩序や社会的カテゴリーとの関係の中で社会的に意味付けられることを示した［ダグラス 1983］。この考え方の重要な点は、身体は、象徴システムを内面化しており、読まれるべきテクストであるという知見をもたらした点だ。このダグラスが示した文化的社会的身体をもとに、文化人類学者は、太った身体がどのような社会構造のもと、どのような意味を持つのかについて各地の事例から明らかにしようとしてきた［e.g. Becker 1995; Popenoe 2004; Sobo 1994］。

身体サイズが、社会秩序を反映するものとして分析したのが、フィジーの村で調査を行ったアン・ベッカーである。彼女は、フィジー社会における身体観と西欧社会における身体観を比較しながら、身体が自己を表す西欧社会の個人主義的身体観とは異なり、フィジーでは身体はコミュニティに埋め込まれていると述べる。フィジーでは、身体を管理することの責任は、個人にではなくコミュニティに課されているという。そして、身体の大きさは、食事を適切に分け合い、お互いに十分なケアを施しあっているか否かの証拠となる。身体は個人のものであるという西欧文化の考え方とは異なり、フィジーでは、身体はコミュニティの社会的な連帯を表すのだ［Becker 1995］。

エリサ・ソボによると、ジャマイカにおいても、身体サイズがコミュニティの中での位置を表し、太っていることは肯定的な特徴を持つことを明らかにしている。例えば、太っている身体は活力がみなぎっているとみなされ、健康の証だとされる。太った身体は多産性を表し、親族の相互扶助のネットワークの繁栄に貢献していることの証しとなるという。そのため、太った人は、親族やコミュニティに対する責任を果たしているとみなされ、社交的で思いやりがあることや幸せを表す。それに対し、痩せていることは死をも表すほどの否定的な意味を持つ［Sobo 1994: 151］。

女性が太っていることは、生存や出産といった、生物学的に実用的機能を果たす事例についてはすでに言及した。それに対し、アメリカ人人類学者のレベッカ・ポプノー［Popenoe 2004］は、ニジェールのアザワグ（Azawagh［a-ZAW-ag］）における女性を太らせる慣習（fattening process）についての調査を通して、女性の太った身体が、機能的な役割だけでなく、より抽象的な美や社会的な価値を表すことを明らかにした。アザワグでは、太った女性は美しく、性的魅力があるとされる。そのため、乳歯が二本取れる 5 歳頃になると、女の子は強制的に食べさせられ太らせられる。女性は、動けなくなるほど太ることによって、男性の欲望の対象としての性的魅力が増すという。セクシュアリティは、快楽のためでもあり、家族を増やす役割も果たす。しかし、過剰なセクシュアリティは、家族の絆や社会的秩序を脅かすものにもなる。そのため、アザワグでは、太らせることが社会化され、

つねに管理されている。

とはいえ、決して男性の性的対象として、女性は主体性を失っているわけではないと、著者は分析する。確かに、アズワグでは、動けないほど太った女性は家の中にいるのに対し、男性は外に出て機敏に働く。この対比は、西欧社会では男女の不平等を表すものとして解釈されがちだが、そうではないという。ポプノーは、それは、分業なのであると主張する［Popenoe 2004: 123］。女性を太らせるという行為の中に、イスラム教における男女の概念、親族規範、健康概念、理想的な美、欲望の創出、セクシュアリティの社会化などのすべてが、含まれているというのだ。こうした文化的な環境において、太ることによって、女性自身も、自分の生をコントロールしているのだとポプノーは分析している［Popenoe 2004: 191］

このように、文化人類学では、痩身を理想とする西欧社会と大きな身体を好む非西欧社会という二項対立的な構図を提示してきたといえる。ここには、痩身を理想とする西欧社会が普遍的ではないことを示す効果があった。例えば、ライテンバウは、肥満の医療化は、西欧社会に特殊な文化依存症候群（Cultural Bound Syndrome）であると論じている。西欧社会では肥満を病気として医療化しているが、非西欧の多くの文化や社会では、太っていることは病気ではなく、むしろ、美や健康の象徴とされている。肥満を病気として分類する生物医学的知識は、普遍的でスタンダードな知識というわけではなく、西欧社会に特殊なものである。肥満の医療化は、痩せていることを良いこととする文化的価値観の影響を強く受けていると考えられるとライテンバウは述べている。文化依存症候群は、通常は、生物医学から見て、非西欧社会のある地域や文化や民族に特殊な精神疾患を指すが、ライテンバウは、反対に、肥満を病気とする生物医学を文化依存症候群として相対化しようとした［Ritenbaugh 1982］。

西欧社会では、美的にも、健康という面からも、否定的な意味を持つ「ファット／肥満」が、非西欧社会に行けば異なった意味を持ちうる。その多様性を明らかにすることによって、西欧社会の「異常」な身体観を逆照射し、西欧社会の「ファット／肥満」概念を相対化する意図があった。しかしながら、ここにはある種の危うさがあることは言うまでもない。すなわち、すでに述べたように、非西欧の「肥満」や「ファット」を文化的多様性として注目し、西欧批判をすることによって、西欧社会と非西欧社会という安易な対立構図が出来上がってしまっているのだ。そして、ここで西欧社会の何が批判されているかというと、過度な痩身願望や無茶なダイエット、摂食障害の増加などである。例えば、前述のベッカーは、フィジー人に摂食障害について話したときに、当時はフィジーには摂食障害という病気は存在しなかったため、フィジー人たちは、摂食障害者の身体や食物に対する虐待的な態度について、当惑し理解に苦しんでいたと述べている。そして、ベッカーは、西欧社会で広がっている摂食障害や身体の軽視や、体重や食欲をコントロールしたいとい

う欲望は、西欧文化に独特のものであると述べる［Becker 1995: 1–2, 30］[5]。ここでは、過度に痩身を偏重する西欧社会に対し、大きな身体を好む非西欧社会という対立が強調されているのだ。それによって、西欧社会を、病理を抱えた「異常な」社会として提示する効果があった［Gremmilion 2005: 14］。そして、医療化されていない、「正常」で「健康」な身体を非西欧社会に見いだしたのだった。このように、文化人類学の肥満やファットを対象とした研究は、非西欧社会に住む他者を、自文化にはなじみのない風変わりでノスタルジックな文化的他者として描くことによって、多様性を提示する題材としてきたのだ。

マリリン・ストラザーンは、「物質の美学（The Aesthetics of Substance）」という論考の中で、この文化的他者を作り出すことを回避しようとする。彼女は、パプア・ニューギニアのハーゲンとエトロという二つの社会を比較分析する際、西欧の概念としての「ファット（fat）」と「痩せ（thin）」をそのまま分析概念として持ち込むのではなく、脂肪という物質に対する意味付けの違いによって、太った新生児にたいする対処の仕方が違うことに注目した［Strathern 1999］。西欧的な認識の拠り所となる、西欧と非西欧、肥満と痩せなどの二項対立を批判的に検討することによって、文化的他者が立ち上がる余地をなくそうとしたのだ［Gremillion 2005: 18］。しかしながら、ストラザーン流の独特な分析は、他に追随するものがいなかった。多くの論者は、非西欧社会の太った身体を多様性として描くことによって、西欧社会ではネガティブなイメージのまとわりつくファット／肥満に対するオルタナティブな像を提示し、相対化してきたのだ。そうすることは、西欧社会が抱える病理に対する処方箋にはなり得ないとしても、多少なりとも気休めにはなってきたのかもしれない。

2.3　社会学からの肥満問題の相対化

もちろん、西欧社会のファット／肥満を相対化しようとする試みがなかったわけではない。例えば、過度な痩身願望や無茶なダイエット、摂食障害の増加などの西欧社会の病理や「異常性」は、美の構築を研究するフェミニズムによって研究されてきたし、肥満の医療化や肥満の社会問題化については、社会学の社会構築主義の中で検討されてきた。ここでは、まずフェミニズムの研究を紹介した後に、肥満の医療化論と社会問題論についての研究に言及しておくことにしよう。

フェミニズムが論じた美の構築

70 年代頃のフェミニズムは、女性は男性支配によって抑圧された犠牲者であるとして、男性社会を告発しようという気運に満ちあふれていた。そのなかで、女性の美の実践も、抑圧という観点から論じられた。

5　ただし、ベッカーは、その後、フィジーでテレビの放送が始まった 1995 年以降、テレビで欧米の映像が流れるようになってから、フィジーに摂食に問題を抱える者たちが出現していると指摘している［Becker 2004］。つまり、西欧化が摂食障害の増加を促したとみている。

例えば、イギリス人フェミニスト心理療法家のスージー・オーバックは、『ファットはフェミニストの問題だ（*Fat is a Feminist Issue*）』［1994（1978）］という本を出版し、当時の女性たちに熱狂的に受け入れられた。この本の中でオーバックは、「女は痩せていなければならない」という西欧社会の女性の美の規範や、ダイエットなどの美の実践は、男性社会による抑圧だと捉えた。それによって、身体管理への強迫観念や、太ることへの恐怖、ゆがんだボディ・イメージ、摂食障害などの病気が引き起こされているのだと断じた［オーバック 1994］[6]。また、ナオミ・ウルフは、女性の美容整形や拒食症が増加しているのは、「男たちの制度や、制度化された権力」［ウルフ 1994: 18］に押し付けられた美の規範を、女性たちが過剰に内面化しようとした結果なのだと論じている［ウルフ 1994］。フェミニズムは、美が抑圧となっているという見方によって、女性の外見や体型をめぐる身体の社会的文化的拘束性や政治性を論じるようになった。

女性の身体管理や美の構築性を論じてきたフェミニズムは、90 年代に入ると、それまでの支配と抑圧というモデルから、フーコーの規律実践の権力モデルを分析の枠組みとして採用するようになる。例えば、フェミニズム研究者のスーザン・ボルドは、著書『耐えがたき体重（*Unbearable Weight*）』［1993］で、アメリカの女性誌や広告などの文化的表象の読解を通して、女性の身体やアイデンティティはアンビバレントな美の実践に埋め込まれていると論じた。すなわち、女性は、自分の身体に対する日常的ストレスや不満を感じながらも、メディアが発する均一化された美のイメージを求めて、美の実践や自己モニタリング、自己統制を自ら主体的に課している。ボルドは、このことについて「主体化＝規律化」というフーコーの概念を利用しながら説明する。つまり、女性はもはや抑圧的な美のシステムの犠牲者ではなく、むしろ、女性自身が身体管理や美の構築に主体的に参与し、美のシステムの存続に加担しているのだと分析する。

規律実践の過程において、身体は、支配的言説の要請に対し正しい態度で振る舞っているか否かを表すものとなる。例えば、スレンダーになるために減量プログラムに通う女性は、欲望を管理しながら「標準」に向かって努力し、筋肉を付けることによって、仕事場で自信を持ち、強い女性として示すことができるだろう。逆に、肥満者は、減量の失敗者として、恥と敗北という位置付けがなされるのだ［Bordo 1993: 203–204］。

まとめよう。70 年代以降の美についてのフェミニズムの議論では、女性を、男性から美の規範を押し付けられている犠牲者として捉え、90 年代になると、自ら美の管理を強化している実践者として捉えた。どちらの立場も、美をめぐるさまざまな現象が、必然性や本質性を持つとは考えず、文化的社会的歴史的に構築されていることを明らかにした。それは同時に、女性の外見や身体が文化的社会的歴史的に強く拘束されており、拘束から解放される術がないことを明らかにすることに等しかった。

6　第 4 章で再び扱うが、オーバックは、痩身が望まれる男性社会で女性が太っていることは、男性社会への抵抗になりうると捉えている［オーバック 1994］。

いわゆるポストモダン・フェミニズムと言われるこうした立場は、言説還元主義に陥ってしまい、女性の身体実践や経験、能動性を捉えられない。こうした反省に対し、近年では、フェミニズムは、人間を、文化社会に拘束された受動的な存在ではなく創造性も兼ね備えた実践する行為主体として捉えようとする。バトラーは、アイデンティティを構築するプロセスの反復による意味づけやカテゴリー化を逸脱し続けていくような実践に、アイデンティティ・カテゴリーの意味を不安定化し、ずらしていく可能性を見出す［バトラー 1999］。この研究の系譜で、「ファット／肥満」について書かれたものとしては、太った身体に、新たな意味を作り出す撹乱の契機を見いだそうとする、キャサリン・ルベスコ［LeBesco 2004］の研究があるが、彼女の研究を除けばまだほとんど手がつけられていない研究分野であるといっていいだろう。

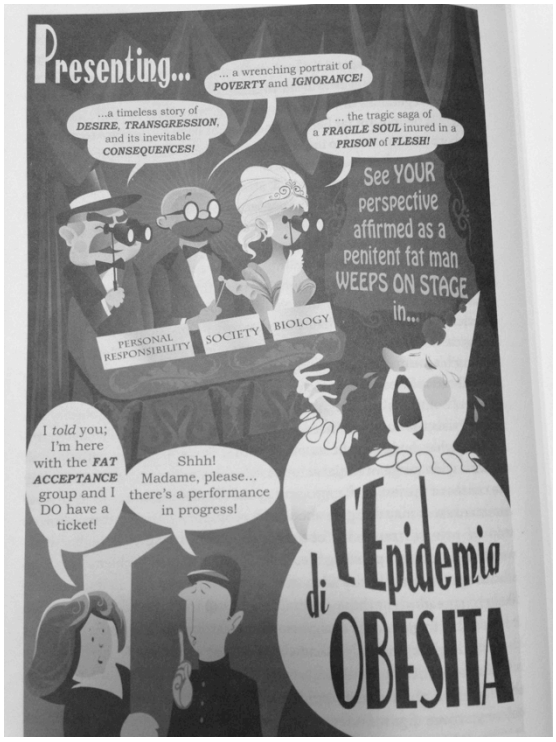
逸脱の医療化、社会問題論から論じられた「ファット／肥満」

1980 年代以降、アメリカで肥満者が急増し社会問題化しはじめると、社会問題の構築主義を研究する社会学者たちは、カテゴリーや意味に対する集合的な闘争が、肥満の社会問題を形成していくプロセスに注目しはじめた。

ハッキングが言うように、こうした社会構築主義と言われる立場の研究は、当たり前で不可避の事柄だと思われているある事象が「社会情勢の偶然的な産物である」ことを明らかにすることを得意とする［ハッキング 2006: 27］。肥満の社会構築主義的な議論は、肥満が病気であるというわれわれの認識や、太った身体を醜いと感じるわれわれの美醜観の自明性を疑い、それらが歴史的、文化的社会的に練り上げられてきたものとして相対化しようとするのだ。

社会学者のジェフリー・ソーバル［Sobal 1995, 1999］は、アメリカにおける肥満の医療化と脱医療化の過程を、「道徳」モデルから「病気」モデル、そして「政治」モデルとしてフレイミングされてきた変遷として描いている。ソーバルによると、アメリカでは、1950 年代に太っていることが道徳的に否定的な価値付けをされるようになる。つまり、太った人びとは意志薄弱であり、非難される対象、スティグマが貼られる対象となる［Sobal 1995: 68–69］。その一方で、1950 年以降、太っている状態は医療介入が必要な状態として医療化されはじめる。メトロポリタン保険会社の肥満チャートをきっかけに、肥満度を測定する方法が議論され始めたのもこの頃である（第 1 章参照）。病気モデルのもとでは、具体的には、減量のための薬物治療や外科的手術、また、肥満と精神障害や人格障害との関連も議論され、治療には行動療法などが適用された［Sobal 1995: 69–81］。そして、1960 年代の公民権運動の流れに乗って、太っていることを政治的問題としてフレームする政治モデルが現れる。政治モデルのもとで、人びとは、太った人びとに対するスティグマや差別、かつ、肥満を病気とみなす病気モデルに対抗する。ソーバルは、これによって、肥満の脱医療化が促されたと分析している。

また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で社会学を教えるアビゲイル・サゲイは、一



【図 0-1：サゲイが提示する「肥満エピデミック」のオペラの図［Saguy 2012a: 12]】

連の著作において、ファット／肥満がどのように問題化されているのかについて注目している［Saguy and Riley 2005; Saguy and Almeling 2008; Saguy and Ward 2011; Saguy 2012a］。サゲイは、ファット／肥満をめぐって社会的意味が集合的に構築されたり、争われたりすることが、社会的不平等にどのような影響をもたらすのかに関心があると述べる［Saguy 2012a: 18］。太っていることをめぐる意味が集合的に構築されるプロセスでは、フレームの争いが行われているという［Saguy 2012a: 10］。例えばある人びとは、ファット／肥満を不道徳フレームで見たり、またある人は、医療フレームや公衆衛生の危機フレーム、美のフレーム、ファット・ライツのフレームで見るだろう。それぞれのフレーム同士が、ファットの意味をめぐって争うなかで、あるフレームは信頼を獲得し、あるフレームは信頼を失墜する。例えば、太っていることが病気としてフレイミングされる傾向が強くなれば、体重コントロールは個人の責任ではなくなるかもしれない。そのようにして、太っていることの意味が構築されていくという。

彼女は、このフレームの争いを、「肥満エピデミック」というオペラが上演されている舞台を、それぞれの立場の人が異なるフレームのオペラグラスで見ているイメージだと述べる（【図 0-1 参照】）。客席には、「自己責任フレーム」グラス、「社会フレーム」グラス、「生物学フレーム」グラスというオペラグラスを持った人たちがいて、それぞれが「肥満エピデミック」というオペラを見ている。そして、絵の端には、入場を許されない「ファット・アクセプタンス」の人が描かれているが、彼女の訴えがこのオペラで聞かれること

はない［Saguy 2012a: 11–12］。

イメージとしては分かりやすいが、彼女の議論にはいくつかの問題点がある。彼女は「同じオペラの舞台」へのフレイミングの仕方の違いが重要なのだと言いながら、「同じオペラの舞台」で上映されているものをその時々によって言い換えているということだ。ある時は、フレイミングの対象が太っていること（fatness）であったり、「肥満エピデミック（obesity epidemic）」であるといったり、言葉が揺らぐため、「同じオペラ」とは一体何を指すのか不明瞭な印象を受けるのだ。我々は一体何を見ているのかをめぐるこの混乱は、これから以下で論じる社会構築主義への有名な批判、「オントロジカル・ゲリマンダリング（Ontological Gerrymandering）」批判を理解すれば、その理由が納得できるだろう。

ソーバルやサゲイは、コンラッドとシュナイダーによる逸脱の医療化研究［コンラッド／シュナイダー2003］やスペクターとキツセの社会問題の社会構築主義［スペクター／キツセ 1990］と同じ理論的パースペクティブを持つ。このパースペクティブでは、ある事象は、客観的な状態として存在するのではなく、それについて定義され、構築される活動として存在するというスタンスをとる。すなわち、「なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動」が、社会問題であるのだ［スペクター／キツセ 1990: 119（強調はスペクター／キツセ）］。

医療化論や社会問題の社会構築主義には、すでに、重大な問題点が指摘されている。それは、社会構築主義者たちは、問題を客観的な状態とみなす見方から決別し、問題をめぐる定義活動を研究対象とするといいながら、実は、問題となる状態を研究者が恣意的に選び出し、特権的な視点から状態は実在するという視点を滑り込ませてしまっているのではないかというものである。これは、いわゆる、研究者が事実と表象の間に恣意的に線引きしていることを指摘した、ウールガートポーラッチによる「オントロジカル・ゲリマンダリング（Ontological Gerrymandering）」批判として名高い［Woolgar and Pawluch 1985］。

肥満の社会構築主義に対し、オントロジカル・ゲリマンダリング批判をするなら、以下のようになるだろう。つまり、社会構築主義では、肥満問題が社会の成員たちによって健康問題や道徳問題、政治問題などとして定義されるという定義上の変化に注目し、その構築性を論じるとしながら、問題とする前提と問題としない前提は、恣意的に区別されているのではないか。しかも、恣意的な線引きにおいて、研究者は外部的な視点をとっているのではないか。こうしたことが批判の的となったのだ。

そして、その恣意的な区別が生じる境界が、「専門的で科学的な世界」と「日常の世界」という区別であると指摘するのが、社会学者の浦野茂である。浦野は、ギルバート・ライルの「中傷効果」を使って社会構築主義の誤りを説明している。ライルの「中傷効果」とは、「スーパーマーケットで彼を見た」というときの「見る」行為が、実は、脳神経系のプロセスであると説明されたときの効果がその例である。すなわち、科学的な概念を使った世界の説明と、われわれが日常的な言葉を使った世界の説明は、前者が正しい世界を表し、われわれが日常的に経験する世界はダミーであると感じられることを指す［ライル 1997:

118］。そして、浦野は、自明性の相対化を目指す社会構築主義は、ライルが指摘した中傷効果をねらっていたのだと看破する［浦野 2008: 49］。つまり、社会構築主義のプログラムでは、われわれの自明なものの見方としての日常的知識を相対化することが目標とされてきたが、相対化のための前提には、リアルで正しい世界とダミーの世界が想定されているのではないかと指摘する。そして、不正確さや誤謬を含んだわれわれの日常的な物の見方は、ダミーであると抹消してしまい、専門家によって説明される世界が正しいとしてしまうことに等しいのだ［浦野 2008: 49–51］。

ライルは、科学的概念とわれわれの日常で使用する日常的概念は、どちらがダミーで、どちらがリアルなのかという、あれかこれかの競合する関係ではないと言う。例えば、風景画家が山並みを描き、地質学者が同じ山の地質について語る。同じ山が対象であっても、画家は地質学を行っているのではないし、地質学者は風景画を描いているのではない［ライル 1997: 130］。つまり、ここでライルと彼を引用する浦野が注意を促すのは、科学的概念を使った世界の説明と日常的な言葉を使った世界の説明は、あれかこれかではなく、共存可能で、手とペンチの関係［ライル 1997: 54］のごとく補完的な概念であるということだ。手を日常的な道具、ペンチを専門的な道具になぞらえるなら、針金を切るためにはどちらも必要である。であれば、われわれの世界を説明するための知識や概念は、自明なものの見方としての日常的知識や概念、そして、専門家が扱う知識や概念、どちらも不可欠であるということだ。

先に引用したサゲイは、オペラの比喩を使って、肥満問題（あるいはファット／肥満）がさまざまな立場からフレイミングし、それらをめぐる言説や意味が構築される様を分析しようとする。しかし、事実と表象の線引きが、ときには「肥満エピデミック」であったり、ときには太った身体であったりと、その使い分けが恣意的で混乱を招く。なぜ彼女は自由に線引きができるのというと、肝心の彼女の位置がオペラの客席に描かれていないことからわかるが、彼女はオペラを見ている人びとを見る、という超越的な視点を確保しているからだ。とはいえ、同時に、彼女の一連の著書から、彼女が肥満差別の廃絶という「ファット・アクセプタンス」の政治的理念に共鳴していることは明白である［Saguy and Riley 2005; Saguy 2012a; Saguy 2012b］。つまり、彼女は、超越的な視点から、ファット・アクセプタンスの立場をサポートしながら、肥満問題の構築を論じることによって、人びとが当たり前に存在すると思っている肥満問題の自明性を相対化しようとするのだ。これは、以下の意味で問題含みである。すなわち、（「ファット・アクセプタンス」のなかにもおそらくいるであろう）太っていることを悩んだりする「普通」の人びとの声を過小評価し、かれらの葛藤や摩擦を無視してしまう嫌いがある。なぜなら、彼女は人びとが「ファット／肥満」の意味の形成に参与する有様には関心あるが、そこで形成された意味が、再び、人びとの考え方や経験の理解に影響を与えていくような契機を分析の対象にすることは、彼女の議論の範疇にないからだ。

2.4　本論の視座：問題としての「ファット／肥満」という概念

既に見てきたように、肥満についての文化人類学的研究では、異文化の太った身体を多様性の一つとして肯定することが、西欧社会の「病理」を見据えるための一つの態度となってきた。しかしながら、自社会に戻り、太った身体は美しいという異文化の信念を忘れ、自身の体重の増減に一喜一憂するなら、それは、二枚舌を使う態度ではないだろうか。社会学的な研究では、人類学者の省察の対象であった「自社会」の肥満問題を、社会構築主義的な立場から相対化しようとする。しかし、既に指摘したように、この議論にも問題があった。われわれの世界を説明するための知識や概念には、日常的知識や概念、そして、専門家が扱う知識や概念のどちらも不可欠であるのにもかかわらず、社会構築主義的な説明では後者によって前者を凌駕することを目指していたからだ。

ここまでに整理してきた先行研究は、一つの共通する問題を抱えている。筆者は、本論全体でその問題を「ファット／肥満」という概念を分析の対象とすることによって問いなおそうと考えている。以下では、本論が目指す概念形成のプロセスを分析していくための見取り図を提示していくことにしよう。

共通する一つの問題とは、すなわち、文化人類学や社会学が、肥満の議論において、文化社会的に構築される領域と文化社会的に作られない自然的で本質的な領域、という二つの対立する領域を措定してきたということである。こうした考え方では、自然と文化社会を対立する二つの領域として捉え、現象の真理探究に努める自然主義的立場に対し、現象の事実や意味は全て構築されていると考える傾向にある。そして、これらの二つの領域は互いに反目し合う、排他的な二つの立場となってきたのだ。このことは、大きな混乱を招いてきた。例えば人種についての議論を考えると明らかだが、人種は実在するのか構築なのかという二つの極端な立場に回収され、人類学や社会学者は構築の立場をとる傾向がある。特に、人種差別という社会的不当性を訴える立場から、反本質主義的で構築主義的な立場をとる人びとは、人種概念は虚構であるという反実在論へと傾倒しがちである［cf. 竹沢（編）2005］。しかしながら、虚構性をことさらに暴くことは、人種概念が現実に人びとの経験に及ぼす影響の大きさを無視してしまうことになりかねない。

ある事象は観念の上だけで構築されるものだ、という反実在論の立場をとることによってこの混乱に応えるのであれば、本来、観察され、記述・分析されるべき人びとの実際の活動や経験は、研究者の視野から除外されてしまう。前述の一部の人類学者による太った身体を解釈する態度にも見られるように、身体が、メッセージを運ぶ媒体にしかならないのであれば、肉体を持つ人びとの経験は分析の対象から外れてしまう。また、ポスト・フェミニズムによる言説に絡みとられた身体のイメージは、実践する行為者の能動性を取り逃がす可能性をはらむ。そして、すでに論じたように、サゲイなどの社会問題論を論じる研究についても、身体経験や実践についての視座が不足しているという点で、同じである。

こうした行き詰まりに対し、筆者が参考にしたい研究者が、科学哲学者のイアン・ハッキングである。ハッキングは、社会構築主義が巻き起こした、実在か構築かということを

めぐる混乱は、ある事象が「観念（ideas）」上構築されているのか、それとも、「対象（objects）」自体が構築されているのかを混同してしまうことから生じると述べる［ハッキング 2006: 66］。ここでハッキングが指摘する対象と観念の対立は、自然と文化社会という二つの対立に相当するだろう。

「対象」とは、常識的な意味で世界の中に存在するものであり、子どもたち、子どもという状態、健康状態、小児自閉症、児童虐待、ハイキング、投球、レイプ等があげられている［ハッキング 2006: 48–49］。「観念」は、「それについて議論されたり、誰かによって受け入れられたり、みなで共有されたり、公に表明されたり、いろいろな人によって練り上げられたり、意味内容が明確にされたり、異を唱えられたりする」もので、分類、分類法、種などがあげられる［ハッキング 2006: 50］。「対象」と「観念」は、根本的に異なったカテゴリーであり、その相互作用に注目すべきだと言う。肥満が社会的に構成されているという場合、社会的に構成されているものは、対象としての太った身体そのものなのか、それとも、肥満というカテゴリー（観念）なのかというとき、しばしばカテゴリー（観念）のみに研究の重点が置かれがちだった。しかし、このハッキングの考えを援用するなら、われわれが注目すべきは、その両方であり、それらの相互作用なのだということになる。なぜなら、人間を分類する方法は、分類される人間と相互作用を及ぼし合うからだ。ハッキングがここで問題にしているのは、産業化社会の官僚主義のもと発展してきた人間の分類方法のことである。「人びとの種類（human kinds）、人びとの行動や状態の種類、行為の種類、気質や素質の種類、情動の種類、経験の種類」によって人を分類する際の、「体系的で総合的な、正確な知識、すなわち、人びとについての一般的な真実を説明する際に使われる分類方法」のことだ［Hacking 1995: 351–352］。彼は以下のように問う。

> 「われわれ人間は自らをさまざまな仕方で分類するが、これまでに無い新しい分類方法の出現は、人間の行為の可能性の幅をどのように広げ、また狭めるのだろうか。人間を分類することは、分類される当の人間の側にどのように作用するのか、つまり、われわれは分類されることによってどのように変化するのだろうか。また逆に、そうしたわれわれの変容の仕方が分類システムそれ自体に対してある種のフィードバック効果をもつとすれば、それはどのようにしてか」［ハッキング 2012: 209］

それに応えるためには、概念とわれわれの経験や行為の関連に注目しなければならないという。ハッキングは、分類対象とされた人の振る舞いに影響を与えるような相互作用が起こるにはいろいろな理由があるとしているが、重要なものとして以下の三つの理由を取り上げている。第一に、分類されることによって、個人的自己意識や集団的な自己意識が形成され、（あるいは、そうした見方を拒否する）それらの人びとの行為にも影響を及ぼす。第二に、われわれが選びうる行為は、行為を記述することが可能な仕方に依存している。つまり、観念に依存せずに、ある行為を選ぶことはない。第三に、分類は、さまざまな制

度、慣習、他の事物や人びとなど、社会的な多くの要素との実質的な相互作用の中で遂行される。女性難民を例にとれば、女性難民は、単に一つの人間の種類であるだけでなく、一つの法的実体であり、各種委員会や学校組織、ソーシャルワーカー、支援活動家などとの現実的な相互作用のなかで、女性難民としての特徴を身につけていく［ハッキング 2012: 72–74］。これらから分かるように、相互作用は、人間の分類にしか起こらない。なぜなら、例えば、クオークや結核菌や山などの自然科学が対象とする分類は、対象の振る舞いに影響を与えないからだ。

ハッキングは、「記述の新しい様式が出現すれば、その結果として行為の新しい可能性も生まれることになる」と述べる［ハッキング 2012: 226］。そして、結果として、ある概念の意味内容の変化を導くこともありうる。例えば、概念が自身に適用されることに対し異議申し立てをする人が出てきたり、それによって、それらの人びとが、概念の意味を変更するように促したり、あるいは、新たな概念を作り出したりすることがありうるだろう。ハッキングは、「医療化され、標準化され、管理されるような種類に属する人びとは、ますます、専門家や制度の支配を取り返そうと試みるようになる。そのために、ときに新しい専門家や新しい制度を作るのだ」と述べる［Hacking 2007: 311］。このことの例として、ハッキングは、同性愛の事例を挙げている。精神医学によって同性愛と分類された人びとは、ゲイ・プライドによって、医学と法学の専門家や制度の支配を奪取した［Hacking 2007: 311］。

人びとを分類するカテゴリー、分類される人びと、分類する制度、専門家、分類カテゴリーに関する知識、これらは、相互作用のなかで作り上げられており、概念の意味自体も動的に変化していく［Hacking 2007: 296–298］。ハッキングはこの一連のプロセスを「ループ効果（looping effect）」と呼ぶ［Hacking 1995］[7]。そして、本論では、このプロセス

7　彼がループ効果と呼ぶ事象は、言語人類学の一分野や、マイケル・リンチに代表される科学と社会の関係を実践を通して明らかにしようとするエスノメソドロジストの問題関心と重なる部分が大きい。マイケル・リンチは、個々の場における、概念の運用方法へ注目するために、実践（特に科学的実践）に注目している［cf. Lynch 1993; リンチ 2001］。浦野らによると、ハッキングは「哲学の訓練を受け、科学哲学と科学史の狭間で、フーコーを踏まえて、日常言語学派的概念分析を駆使して」きた人であるから［酒井 2009: 262］、社会がどのようにして秩序を持ったものとして成り立っているのかを解明する日常言語派のエスノメソドロジストと関心を共有しているのは不思議なことではない。また、言語人類学者の中には、シカゴ大学のマイケル・シルヴァスティンを中心として、言語を、今ここで起こる出来事としてのコミュニケーションを起点に、文化・社会とのつながりで思考する研究者たちがいる［cf. Agha 2007; 小山 2008; シルヴァスティン 2009］。言語人類学では言語への関心に重点が置かれるが、ループや再帰性といった言葉からわかるように、言葉は、使用されるときに具体的な経験の場である「今ここ」と社会的文化的構造が結びつけられることによって意味を持つものであるという見解を共有している。例えば、Agha は、今ここで起こる具体的に経験される「出来事」と社会的文化的カテゴリーなどの「象徴」的なレベルがどのようにつながり、今ここで起こっている出来事の意味づけにどのような効果をもたらすのかという言語の再帰性について論じている［Agha

を概念の「構築」と呼ぶ。

とはいえ、構築されるものは「対象」であり「観念」である、というハッキングの指摘に全面的に同意するとしても、それでもやはり、「構築」という言葉は便利な言葉としてさまざまな使われ方をしてきたため、議論の拡散を招く元凶となってきたのも事実である。その点について、次に指摘しておこう。

2.5　社会構築主義の混同

社会構築主義が議論の拡散を招いた原因は、「社会」という概念と「構築」という概念について一定の見解が得られていないところによるものだと思われる[8]。特に、病気の社会構築についての研究が医療化論や社会問題論として盛んに行われてきた医療社会学では、こうした問題が先鋭化している。この点については、医療社会学者フィル・ブラウンの指摘が参考になるだろう。彼は、医療社会学のなかで病気や診断についての社会構築主義がさまざまな論者によって異なる使われ方をしていることを指摘した上で、医療社会学で扱われてきた社会構築主義を三つのバージョンに分類している。三つのバージョンとして挙げられているのは、社会問題論、フーコー理論、科学社会学である［Brown 1995: 35–36］。

三つのバージョンの一つめは、すでに上記で批判した、スペクターとキツセにより提示された社会問題の社会構築主義的立場である。この立場は、例えば、ピーター・コンラッドらの逸脱の医療化に代表されるように、クレイム申し立てによって病気カテゴリーが作られる過程に注目する［コンラッド／シュナイダー2003］。日常における人びとの相互作用や解釈実践が現実を作り上げるとし、医療社会学においてポピュラーな立場である。ブラウンは、この立場は、現実を作り上げる過程に関与するはずの人種や階級やジェンダーなどの社会構造にかかわる要因や、政治経済的な要因に注意を払わないと批判している［Brown 1995: 35］。

二つめは、言語の恣意性と「真実」を構成する言説や知識の持つ権力性に注目した、フーコーを起源としたヨーロッパのポストモダン理論である［Brown 1995: 36］。フーコーのアプローチは、生物医学が社会にその対象領域を拡大していくことによって、正常／異常、健康／病気という二項対立的な認識構造が生まれることを描き出している点で、逸脱の原因を病者や逸脱者の内在的な属性から病気を説明するのではなく、逸脱という負のラベルを恣意的に貼る人びとに求めた第一の立場と近接している［フーコー1969, 1986］。その一方で、一つめのバージョンであげられた社会構築主義とフーコー派の社会構築主義との違

2007］。これらの研究は、概念と人びとの行為や経験がいかにして結びついていき、反復の中からも変化がもたらされるのかについての関心を共通に持っているのではないかと考えている。

8　例えば、ラトゥールは、『実験室生活』第二版のあとがきで、「社会的」ということばがすべての相互作用を指すような広義のものになっている現状にたいして、社会的に構築されるということばの規定性はほぼ無くなってしまうのではないかと吐露している。［Latour and Woolgar 1986: 273–286］。

いは、権力についての認識の仕方にある。例えば、ピーター・コンラッドらの逸脱の医療化論では、生物医学的知識による一方的な支配という側面が強調されがちなのにたいし［碇2005］、フーコーは、生物医学という一つのまとまりを持った権力により支配されるではなく、知識・言説としての権力は偏在するという立場をとる［フーコー1986］。つまり、一つめのバージョンの社会構築主義では医学的知識の体系を一枚岩的なものとして捉え、その被構築性を不問にしたが、フーコー派の研究では医学的知識や言説の複数性を扱うのだ。そして、大文字の権力ではなく、多くの権力関係が日常生活のあらゆる場面で、局所的に偏在すると考える。例えば、フーコーを継承する社会学者のアラン・ピーターセンとデボラ・ラプトンは、このことを論じるために、近年登場した新しい公衆衛生の政治性に注目する。新しい公衆衛生では、健康増進と病気の予防に関する諸言説が増え、診断スクリーニングの技術が向上することによって、日常生活のなかの医学的関心も増大し、「正常」や「健康」という目標に向かって自己統制する自律的な主体が形成される。その際、問題解決のために医学的、科学的、疫学的、社会科学的な知識が「真実」として動員され、それによって、専門家の特権的地位が確保されたり、また、それらの知識に依拠する「正常」や「健康」という規範から外れる者は、自己制御が欠如しているとして非難の対象となったりするのだ［Petersen and Lupton 1996］。

三つめのバージョンとして挙げられている科学社会学[9]は、科学者たちの科学的事実の生産現場における知識の構築に注目するものである［Brown 1995: 36］。科学的知識の構築を例証したものとしては、例えば、ラトゥールがいる。彼は、ウールガーとともに、実験室における個々の科学者が行う作業を二年間の参与観察に基づいて、きわめてミクロにそして説得的に科学的事実が生み出されていく様子を描いている［Latour and Woolgar 1986］。第一のバージョンの社会構築主義では、クレイム申し立ての過程で病気カテゴリーが構築されるという立場をとりながら、専門家が作り出す医学的知識の構築性については特権化し、ブラックボックス化して取り扱ってこなかった。科学社会学者が科学的事実の産出の過程に注目したことは、ブラックボックスを開こうとした試みであるといえる。オントロ

9　科学社会学は、大別して二つの学派に分かれるとされる。一つは、科学を自律した制度として捉え、科学者集団内部の機能的な様態をめぐる分析を行い、そこで扱われている科学的知識は確証的なものとしてブラックボックスに封じ込めてしまったマートン流の「科学者の社会学」である。もう一つは、科学的知識そのものの生産、加工、流通過程をめぐる問題と科学者集団の構造と機能の問題をダイナミックに分析するクーン流の「科学知識の社会学」である［Hess 1997; 成定 1994］。ブラウンが三つめのバージョンとした科学社会学は、後者の「科学知識の社会学」、すなわち、SSK（Sociology of Scientific Knowledge）のほうである。ただし、金森によると、SSK は相対主義的な立場から科学の独自性や特権性を瓦解させようとしてきたが、それに対する科学者側からの反攻により、1990 年代に入ってから停滞期に入っている。それに代わる新しい散発的で被系統的な流れとして、STS（Science, Technology and Society）という領域が確立されつつあるとしている［金森 2000］。SSK との違いは、科学的知識への関わりかたの違いにあり、実験・観察による経験的結果や論理的推論の結果と利害関心などの社会的要因、どちらか一方を強調しすぎるのではなく、どちらもバランスよく見ていくべきだとするところにあるようだ。

ジカル・ゲリマンダリング批判によって火がついた社会構築主義論争は、この第三のバージョンである科学社会学から第一のバージョンである社会問題の社会構築主義的アプローチに対する批判によって勃発したものだった。すなわち、医療人類学や医療社会学が、これまで超文化的社会的な概念として手を付けなかった科学的概念の客観性を、科学者コミュニティとそれらをとりまく社会環境の構築物であると示したのだ［e.g. Keating and Cambrosio 2000］。

科学社会学と前者二つの社会構築主義の違いは、理論的な背景の違いはもちろんのこと、分析の対象とする事象に違いがある。つまり、社会問題論では、あるカテゴリーは内部の属性からではなく外部から貼り付けられるというラベリング理論がベースにあるので、文化社会的に構築されたとイメージされやすい対象のカテゴリーの恣意性を説明する場合には（例えば、ジェンダー、民族など）、都合がよいように見受けられる。それに対し、文化社会的に構築されたとイメージされにくい対象について（例えば、自然現象、ウイルス、細菌など）、その被構築性やカテゴリーの恣意性を強調するのは不適当であるだろう。このことは、自然科学が対象とする分類は対象の振る舞いに影響を与えないため、相互作用は起こらないと述べるハッキングの指摘を思い出せば、納得のいくものである。

以上、ブラウンの整理を利用しながら、本論が使用する「構築」という言葉の意味を多少明確にしてきた。第一の立場は、前節ですでに、オントロジカル・ゲリマンダリングとしてその批判を整理した。第二のフーコー派の思想や立場は、本論も大いに影響を受けている。しかしながら、留意しておかなければならないのは、フーコーの議論は政治的な思想として一部の人びとによって熱狂的に受け入れられている節がある。そのため、「フーコーの思想」が、経験的な研究の進展を阻害することもありうるかもしれない。第三の立場については、科学の特権性に疑問を付す科学社会学の態度が、文化人類学や社会学に与えた影響は大きく、また、本論も参考にすべき態度であると考える。しかし、本論が対象にする「ファット／肥満」概念をめぐる人びとの分類と相互作用を理解するためには、ハッキングが指摘したように、自然科学と人文社会科学が対象にするものの違いを理解しておく必要があると考える。

2.6　用語の問題

人間が太っている状態について、本論では「ファット」と「肥満」という用語を併記してきたが、その理由を断っておきたい。肥満もファットも太っている状態を指すが、本稿で使用する日本語の「肥満」は、英語の「obesity」の訳であり、これはもっぱら保健医療で使用されることが多い言葉だ。英語で太っている状態を日常的に表す場合は「fat」を使うことが圧倒的に多い。本論は、この違いを示すために、「ファット／肥満」を併記している。そして、訳語の問題として、英語の「fat」は日本語では「デブ」と訳すことも可能だが、「デブ」という言葉は日本では依然として侮蔑的な意味が強いので、「ファット」を訳語として採用し、適宜「太っている」などの訳語も与える。

日常用語としての「ファット」という用語の興味深い点は、アメリカ社会という文脈において、「太っている」人も「痩せている」人も、あるいは「普通」体型の人でも、およそ外見的な体型に関わらず、人びとはその言葉を使って自己を語るということだ。その意味では、「ファット」というカテゴリーは、物理的な体型の差異に基づいて、人びとを分類する類の言葉ではない。

「ファット」という用語のこうした特性を明らかにした興味深い研究として、日常言語のカテゴリーとしての「ファット」の使われ方に注目した人類学者のミミ・ニッチャーの研究を参照しておこう。彼女は、アメリカの女子高生の間の「ファット・トーク」について分析を行っている。ファット・トークとは、「私、すごくファットなの（I'm so fat）」とそれに対する応答「そんなことないよ（No, you're not）」という会話である。ニッチャーは、この会話が、女子高生のグループの紐帯を強化するための儀礼的な会話として機能していると分析している。この場合の「ファット」は、身体に肉や脂肪が付いた太った状態という辞書的な意味ではなく、元気がないことや、調子が良くないことを指示しているという。そして、「私、すごく太っているの」というフレーズが女子高生同士で使われることによって、弱みを吐露し、私たち仲間だよね、と確認し合うものとして機能している。それに対し「そんなことないよ」「大丈夫だよ」と応えることによって、グループの絆が深められるのだと分析する［Nichter 2000: 45–67］。

ここでの「私、すごくファットなの」という発話は、ファット・アイデンティティを表明し、カミングアウトしているわけではない。そうではなく、発話内容に対する否定の応答を当て込んだ発話なのだ。

ニッチャーの分析では、発話が行われる場をルールや規範を持った場として前提にしているため、意味のズレや交渉を通じて、新たな意味が生成したり、新たな経験のあり方を解釈可能にしたりするような契機を見つけることは難しい。しかしながら、彼女のファット・トークに代表されるように、局所的な場面において、実際に、「ファット／肥満」がどのような文脈でどのように使用されるのかに着目することは、「太っていること」をめぐる概念の分析の第一歩であると考える。こうした個別具体的な場での使用が、その後の発話において、参照され、言及される対象となる。その積み重ねによって、本論が問題にする概念と人間の相互作用が起きると考えられる。

例えば、ほんの少し想像するだけでも理解できるように、太って洋服が入らないから減量を試みる人や、体重計の数値を見ては一喜一憂する人がいるように、「肥満」や「太り過ぎ」という概念は、単なる医学的分類を超えて、人びとのものの見方を変え、さらには、実際の人びとの体型にも影響を及ぼすだろう。また、これから見ていくように、肥満差別の廃絶を求めて社会運動を起こす人びとは、「肥満」という言葉を使うことを止め、新たに「ファット」という言葉を使って、集い、自らの経験を読み替え、エンパワメントを得ようする。これらの場を、本論は、つぶさに記述していくことにしたい。

ここまで、本論では、先行研究の整理を通して「ファット／肥満」概念の分析の必要性

を導き出した。本論文の主たる問題関心は、「ファット／肥満」概念と人間存在の相互作用の様態を描くことによって、「新しく」出現しつつある肥満やファットと呼ばれる人びとが、どのように自らの経験や行為を理解していくかについて検討するものであると述べた。次に必要な作業は、「ファット／肥満」概念と人間存在の相互作用が生じている「リスク社会」という社会的背景の説明である。また、ファット・アクセプタンス運動を理解するために、人類学を中心とした社会運動についての先行研究、そして、とりわけ「リスク社会」に出現している社会運動のなかに位置付けて理解することが必要である。それらを通じて、本論の問題関心の文脈付けを行わなければならない。

そのために、3 節では、「リスク」と「社会運動」にかかわる先行研究を、人類学や社会学を中心に整理しておきたい。3.1 では、まず、「リスク社会」がいかなる時代認識であるのかについて整理し、文化人類学を中心としたリスク研究の整理を行う。3.2 では社会運動論（特に新しい社会運動論）についての先行研究と文化人類学における社会運動の先行研究を検討しておく。3.3 では、ファット・アクセプタンス運動を理解するにあたっての本論の視座を提示しておく。

3. 本論の視座 2：リスクと社会運動

3.1 リスクと「リスク社会」についての研究整理：文化人類学を中心に

「リスク社会」の「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」の矛盾

現在から時間軸上の未来を見通したときに、未来についての現在の状況判断についての解釈は、本質的には非決定的で不確実なものである。近年、人類学において、この「当たり前」の事実に注目し、未来の非決定性や不確実性が生み出す不安や希望をめぐる人びとの生き方を描こうとする試みがみられる［e.g. Johnson-Hanks 2005; Miyazaki 2003, 2006; Petryna 2002; 春日 2007］。

現在や未来の非決定性や不確実性へ注目し始めたのは、人類学だけではない。哲学者の一ノ瀬正樹は、物理学、生命科学、統計学、経済学などの諸学問が、とうの昔に不確実性をデフォルトとして捉えてきたのに対し、哲学では、未だに「理想・理念あるいは規範」としての「確実性、必然性、決定性といった、不確実性と対極をなす概念こそが主役の位置を占め、確実な知識、必然的な関係、決定されている世界のあり方」が哲学の本筋として語られていると指摘する。しかしながら、何がどうなってしまうのか確実には分らないこと、そして、それに対して不安感が生じること、つまり、不確実性こそが人間にとっての常態的なリアリティであると述べる。ゆえに不確実性を哲学の主題として取り上げることには大きな意義があると指摘する［一ノ瀬 2011: vi］。

もちろん、人類学では従来より、「科学的」「合理的」な形式的知では説明できない、さまざまな不確実性への制御方法を論じてきた。例えば、不幸や災いの事後的な説明の仕方に注目する災因論［エヴァンズ＝プリチャード 2001］、雨乞い儀礼などの機能主義的儀礼

論についての分析［ダグラス 1985］、狩猟民や漁撈民の生態資源管理についての人類学［秋道 2004］が挙げられるだろう。

こうした人類学における従来の不確実性への関心と、現在の未来の非決定性や不確実性への関心の違いは、後者が「リスク社会」という時代診断を共有しているという点である。「リスク社会」という時代認識を、いち早く普及させたのは、ウルリッヒ・ベック［1998］である。彼は、原子力発電所に代表されるように、科学技術の「進歩」によってわれわれは豊かな生活を享受することが可能になったが、その一方で、対処が極めて困難な未曾有の危険が生じる可能性も抱え込まなければならなくなったと論じた。そして、現代を科学技術の発達や産業化の発展がもたらす、予測不可能で制御困難な新たな危険に満ちた「リスク社会」であると論じた。

また、アンソニー・ギデンズは、前近代では、地震や干ばつなどの不確実性は神の御業として宿命づけられているものと理解されていたが、現代社会では科学的なリスクの計算を通して、未来はコントロール可能な領域であるという認識が生まれてきたと指摘する。そのことを「未来の植民地化」と呼び、個人の未来に対する態度の変容を論じる［ギデンズ 2005: 126］。リスク評価についての科学的な計算や知識の多くは細分化した「専門家システム」に委ねられているため、誰もその全貌を把握することはできない。そのため、人びとは、日常的にリスク計算をしながら生きていかなければならないという不安定な状態に追い込まれるという事態が起きると述べる［ギデンズ 2005］。

さらに、イアン・ハッキングは『偶然を飼いならす』［1999］の中で、19 世紀以前のヨーロッパで広く受け入れられていた、世界は何らかの秩序をもっており、将来何が起こるかは過去において厳密に決定されていると考える決定論が、19 世紀の統計学の発展とともに衰退していく様子を詳細に描いた。社会の統計化によって次第に偶然が管理の対象となっていき、決定論的思考が統計学的規則性に取って代わられたことにより、人びとの認識や行動や社会制度が変容してきたことを示す。

「リスク社会」とは、単に、リスクが増大していることを言い表しているのではない。こうした一連の研究では、従来から存在するリスクや不確実性とは別種のそれが増大しているという認識や、不確実性を回収する認知的な仕掛けが機能しなくなったという認識、そして、科学技術を通して、不確実性を忌避しそれを飼いならそうとする社会的な志向が強まったという認識が共有されているのである。すなわち、一方では、不確実性を排除しリスクを管理し、それらを科学的に飼いならそうとする志向の強まりがある。しかしながら、同時に、他方では、未来は根本的に非決定的で不確実性なので、完全に管理し排除することは不可能だという事実に人びとは直面せねばならない。端的に言うならば、「リスク社会」という時代診断は、「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」という矛盾に、人びとが同時に向き合わざるをえない事態が起きていることに関心が高まっているという時代診断であると指摘できる。

「科学的・合理的」な知識が進歩を導くとする啓蒙主義的合理性のもと、科学的知識の

増大は我々に進歩をもたらしてきた。だがしかし、「リスク社会」と言われる現在、進歩は同時に予測不能な混沌とした状況も導き入れているということが浮かび上がってきたのだ。リスクや不確実性を制御するために、「科学的・合理的」に努力を積み重ねようとすることによって、結果として、ますます「非科学性・非合理性」に直面せざるを得ない状況に追い込まれる。このような、科学技術の進歩がもたらすさまざまな矛盾が、「リスク社会」を特徴づける。そして、「リスク社会」を生きる人びとを新しい主体へと変換していくのだ。では、その新しい主体とはいったいどのような特徴を持つのか。以下では、人類学の文献を中心に、制度や技術を通じた新たな主体形成や連帯について整理していく。

リスク管理の制度・技術と不確実性

人類学においては、メアリー・ダグラスが初めてリスクに注目したといってよいだろう。彼女は、『汚れと忌避』［1995］で描いたタブー認識の文化的な違いについての理解を、リスクの分析にも応用し、何を危険やリスクとみなすかは個々の文化的社会的に規定されると捉えた［Douglas and Wildavsky 1982; Douglas 1992］。しかしながら、奇妙なことに「リスク社会」を論じるベックやギデンズなどが、ダグラスに言及することはなかったし、人類学のなかでも、ダグラスを継承したリスクの研究が展開されることはこれまでなかったといえる［Caplan 2000: 14］。それどころか、もっぱら伝統社会を担当してきた人類学で本格的にリスク研究が展開されるようになるのは、社会学などよりも遅かったといえるだろう。とはいえ、近年になり、人類学においてもリスクをめぐる各地域の事象が報告され、今やリスク（と不確実性）は急速に注目されつつある課題といえよう［e.g. Caplan (ed.) 2000; Lakoff 2008; Livingston 2009; Samimian-Darash 2013; Zaloom 2004; 東／市野澤／木村／飯田（編）2014］。

ここでまず整理しておきたいのは、リスクを管理する制度や技術についての研究群である。これは、大きく分けて二つに分けられる[10]。一つめは、未来の不確実性を管理統制可能なリスクへと評価・算出・変換する技術（保険、統計学など）についての研究である［Samimian-Darash 2013: 4］。この系統にある研究は、ミシェル・フーコーの統治性研究を継承している［フーコー2007］。フーコーは、個々の住民ではなく、集合としての人口を対象に、効率的な管理を実現するための諸技術（統計学など）を通じた権力システムのあり方について論じた。こうしたフーコーの統治性研究を踏まえ、現在は、現代社会の統治やリスク管理の様相を明らかにし、そこに何らかの権力構造を見いだすような研究が進められている［e.g. Castel 1991; Ewald 1991; Hacking 1991; 重田 2003］。

それに対し、最近になり新たに注目されている研究領域は、危機管理（preparedness）

10　サミミアン＝ダラシュは、リスク管理の制度技術についての研究は、統治性研究を継承した研究領域と危機管理技術についての研究領域という二つに加え、インフルエンザの事例分析から、三つめに、未来の不確実性に対する統治技術としての「イベント・テクノロジー」をあげている［Samimian-Darash 2013］。

技術［e.g. Collier, Lakoff, and Rabinow 2004; Lakoff 2008］である。この研究領域では、バイオセキュリティ（生物兵器によるバイオテロなど）や感染症流行など、リスク計算の範疇を超えた事例を対象とし、統治性研究をさらに精錬させた上で統治の仕組みを論じる。例えば、アンドリュー・レイコフは、ニクラス・ルーマン［2003］の、リスクとは現在における未来記述のための形式であるという考えを引きながら、現代の問題は、将来の発生見込みやその帰結がリスク計算の範疇を超えているようなカタストロフィックな出来事を、公衆衛生や国家の安全保障は、知識や介入の対象としてどのように現在に取り込むのかという問いを立てている。そして、アメリカの公衆衛生の感染症対策においては、もはや予防（prevention）よりも、シナリオベースの危機管理が新たな統治の仕組みとして課題となっているのだと論じる［Lakoff 2008］。

このように、昨今の人類学や社会学におけるリスク研究では、確率・統計により数値化することが可能な「リスク」の領域と、リスク計算自体が不可能な「不確実性」の領域という二つの領域に分け、後者の不確実性をめぐる概念的、実践的な議論に特に関心がもたれている［e.g. Lakoff 2008; Samimian-Darash 2013］。確かに、ベックは、高度で複雑な科学技術が新しいリスクや予測不能で高度な危険性を作りだすとして、計算不可能なものとしての不確実性について言及している［ベック 1998］。しかしながら、確率・統計により数値化することが可能な「リスク」の領域と、リスク計算自体が不可能な「不確実性」の領域という二分法が妥当なものであるのかは、検討が必要であろう。なぜなら、個人の目線に立つならば、人が未知の状況に遭遇した場合、それが例え数値化されうるリスクであったとしても、対処する個人にとっては根源的には非決定的で不確実なものであり、そうした二分法は意味をなさないのではないかと考えるからだ。どういう状況において、リスクが不確実性として立ち現れるかについては、詳しく検討する必要がある。これについては第 1 章で検討を行う。

次に、リスクが形成する社会関係についての研究を整理しておきたい。

「リスク社会」の新しい主体と連帯

「リスク社会」では、測定・数値化、図像・映像化などによって可視化されたリスクを、自らが責任を負うべき問題として引き受け、回避・縮減に向けて行動する新しい主体が形成される（「リスクコンシャスな主体」［cf. 市野澤 2014］）。この新たな主体は、リスク回避と自己管理の意識を強く内面化した、ある意味で、自己完結型の主体にも見える。ところが、最近関心が向けられているのは、そうではなく、社会関係の形成や連帯を志向する人びとの存在である。

医療社会学者のアラン・ピーターセンとデボラ・ラプトンは、病気の予防と健康の維持・促進に重点を置く新しい公衆衛生（第 1 章参照）の政策のリスク言説について分析しながら、「リスク社会」に誕生した新しい主体が形成する社会関係に注目している。かれらは、新しい公衆衛生を代表とする新たな統治の形式は、健康を能動的に自己管理することを通

して「より健康的」になることに主体的に「参加」することが求められると述べる。そして、そこでは、新しい社会運動などの新たな参加のあり方が機動力になっていると考える。すなわち「セルフ・ヘルプ」「公平さ」「アクセス」「共同」「コミュニティ・コントロール」といった言葉を軸に、環境保護運動[11]、平和運動、レズビアン運動などのさまざまな集合的な動きを促進したという［Petersen and Lupton 1996: 11］。

ベックも「リスク社会」の連帯について、「リスク社会という社会形態の特徴は不安からの連帯が生じ、それが政治的な力になることにある」と述べ、連帯の根拠を不安にもとめた［ベック 1998: 75–76］。ベックは、不安に怯える人たちがつくる新しい連帯は、それ以前の階級社会の不平等を是正するための連帯とは根本的に異なると論じる。環境汚染や原発事故などのリスクは国境を超えてその影響が及ぶので、不安に怯える人びとの連帯も世界的な広がりを持つだろうというのが、彼の見通しであった。

そして近年、「リスク社会」の生の管理が深化するなかで、連帯という形態で、生の不安に立ち向かう集合的な運動が、人類学や社会学のなかで注目されている［e.g. Rabinow 1996; Rose 2006; Rose and Novas 2005; 田辺 2008; 猪瀬 2013］。ここでとりわけ言及しておきたいのが、ポール・ラビノウやニコラス・ローズらによる、遺伝学や生物学を「本質的」な「生物学的アイデンティティ」の基盤とした新しい集合性への注目である。自らの生物学的事実を積極的に受け入れ、病気の経験を共有するために集い、生命を維持するために必要な情報を集め、さらには、科学的調査研究や立法を促すような集合性のありかたである。

ラビノウは、遺伝子の解明が進めば、例えば、インスリン依存型糖尿病、大腸がん、網膜芽細胞腫など、同じ遺伝疾患に基づく新しい集合性が誕生するだろうと予見し、その現象を「生社会性（biosociality）」と名付けている。すでに、遺伝子疾患である神経線維腫症患者たちのコミュニティは存在しており、かれらは、「集い、病気の経験を共有し、病気のための様々なロビー活動を行い、子どもたちに教育し、環境を作り変える」活動を行っているという［Rabinow 1996: 102］。さらに、ラビノウは、これらの新しい「生物学的アイデンティティ」は、人種、ジェンダー、年齢などの古い「生物学的アイデンティティ」との関わりのなかで、それらを横断したり、部分的に取って代わったり、または再強化しながら、複雑に展開していく可能性を持つと述べる［Rabinow 1996: 103］。

「生物学的アイデンティティ」に基礎付けられた人びとの新たな連帯や運動のあり方は、これから開拓されるべき余地のある研究領域である。例えば、遺伝子疾患などの領域では、能動的に自己管理を行う責任ある個人が病気を予防できるという考えは成り立たなくなりつつある。その個人にとってのリスクの程度は、同じように疾患のリスクを持つ自分の子どもへの影響の考慮や、病気を発症している家族や親族との関係によって変わるからだ

[11] 例えば、環境保護運動は現世代のメンバーが未来の世代に変わって環境の責任を引き受けることを要求する［Petersen and Lupton 1996: 11］。

［Cox 2003］。また、遺伝子疾患以外についても、例えば、イェーツ＝ドーアによるグアテマラの慢性病予防のコミュニティ実践についての報告がある。彼女によると、グアテマラでは体重や身体サイズは自分でコントロールできるものとは考えられていない。食習慣関連の慢性病予防のための体重や栄養管理は、個人の選択や責任に帰されるのではなく、栄養士や家族やコミュニティの人びととのつながりの中で行われる実践であるという［Yates-Doerr 2012］。社会関係によって個人の病気のリスクに対する認知がさまざまな仕方で形成される。あるいは、病気のリスクに対する対応が新たな関係を生み出す。「リスク社会」における、こうした新たな集合性や運動については、社会運動について整理する際に再び言及する。

その一方で、これらの研究はではすくい取れない、リスクの決定主体として主体化しない人びとの様態に注目した研究はあまりない［cf. Cohn 2000; 新ヶ江 2014］。それらの人びとの有り様や態度を非合理なものとして片付けるのではなく、説明理解する必要性が残されているだろう。そのような態度については、貧困者層における肥満問題を論じる第 2 章、および、ファット・アクセプタンス運動の人びとの実践を論じる第 6 章で、詳しく扱う。

さて、ここまで「リスク社会」の特徴と新たな主体と連帯の形成について論じてきた。本論は、これらの文化人類学的社会学的リスク研究を踏まえて、肥満問題や、「ファット／肥満」という新たな主体が立ち上がる社会関係について論じていきたいと考えている。こうした研究領域は、これまで未開拓の領域であり、近年になりやっと着手されつつあると言ってよい［e.g. McCullough and Hardin (eds.) 2013; Lupton 2012; Wright and Harwood (eds.) 2008］。

次節では、ファット・アクセプタンス運動を論じるために、社会運動についての先行研究を人類学と社会学を中心に整理しておこう。

3.2　新しい社会運動／アイデンティティ・ポリティクスについての先行研究

新しい社会運動／アイデンティティ・ポリティクスにおける集合的アイデンティティの議論

社会運動とは、社会的目標の達成のため、社会的制度の変革のために行う集団行為である。なかでも、社会の周辺的存在であった人びとが、自己の生存の意味を問い、承認を求めて、独自の価値観や生活様式を実現するためにオルタナティブなコミュニティの構築などを目指す運動を、産業社会の階級闘争や労働運動などの社会運動と区別して、新しい社会運動と呼ぶ。

代表的な理論家には、フランスのアラン・トゥレーヌ［Touraine 1985］、ドイツのユルゲン・ハーバーマス［Habermas 1981］、クラウス・オッフェ［Offe 1985］、イタリアのアルベルト・メルッチ［メルッチ 1997］などがいる。理論の発展に従い、新しい社会運動論の立場には多様な分岐が出現し、現在、新しい社会運動が何を指すのかは往々にして特定

化が困難であるといわれる［長谷川 1990: 17］。とはいえ、1960 年代以降に生まれた、環境保護・エコロジー運動、フェミニズム、エスニシティをめぐる運動、平和運動、青年の運動、地域分権運動などを代表とする、非労働運動型の運動であるという一定の理解はある［長谷川 1990］。

社会運動論では、後期産業社会に出現してきたこうした新しい社会運動が、いかにして集合性を獲得するのかについて精査してきた［cf. Polletta and Jasper 2001; 川北 2004］。時代的背景も手伝い、集合行為をもたらす「集合的アイデンティティ」という概念にアカデミア内外で関心が高まった。すなわち、アメリカでは、1960 年代以降、公民権運動、フェミニズム、ゲイ／レズビアン解放運動などのアイデンティティ・ポリティクスが次々と興隆し 1980 年代になると、大学カリキュラム、マルチカルチュラリズムやアファーマティブ・アクションが、アイデンティティ・ポリティクスとして登場した。こうした時代状況から、「集合的アイデンティティ」を理解しようとする研究が出されていく［Polletta and Jasper 2001: 283; 川北 2004: 56–57］。

社会運動論の論者の一人であるメルッチは、それまでの社会運動論が、集合的アイデンティティを所与のものとし、それが運動に参加する者の間の相互作用によって形成されていくプロセスを見なかったことを批判する。すなわち「集合的アイデンティティは、相互に交流している諸個人によって生み出される、相互作用的であり共有された定義である。そのような人びとは、自らの行為の方向性に関心を持ち、それと同時に、その行為が起こる機会やその拘束の現場に関心を持っている」と述べる［メルッチ 1997: 29］。そして、集合的アイデンティティが運動の過程でどのように形成・維持されていくのかを説明することが社会運動論の課題であるという視座を提示した。

その後、集合的アイデンティティについて定義がさまざまな論者から提出される。集合的アイデンティティを「メンバーの共通の利害関心、経験、連帯に由来する共有されたグループの定義」とし、運動が出現するために不可欠なものとして論じる者や［Taylor and Whittier 1992: 105］、「個人の、より広いコミュニティ、カテゴリー、実践、制度との、認知的、道徳的、感情的なつながり」というように個人の視点から定義する者もいた［Polletta and Jasper 2001: 285］。

新しい社会運動のなかでも宗教、人種やエスニシティ、ジェンダー、性的志向、障害などに特化して、承認を求める政治について論じてきたのが、多文化主義やアイデンティティ・ポリティクスと呼ばれる分野である。1970 年代から、北米やオセアニア圏で出てきた多文化主義とは、いわゆる民族問題や差別問題との関連で、主としてマイノリティ文化の独自性を主張しつつその立場を擁護する、運動ないし理論とされる。塩原によると、米国では、多文化主義とアイデンティティ・ポリティクスは同一視される傾向がある［塩原

2012: 860］[12]。多文化主義の文脈では、人種的マイノリティ、宗教的マイノリティ、女性、障害者、同性愛者、先住民など、実に様々な対象が取り上げられる。石山によると、多文化主義は、これらの人びとの政治権力の分配から文化の保護・育成にいたるまで、極めて広範囲に属する諸問題を、「法制度・政策やその基本理念において、複数の文化の恒常的公認を許容し擁護する」としている［石山 2004: 176］[13]。

多文化主義的な観点からアイデンティティを論じたカナダの政治哲学者チャールズ・テイラーは、「我々のアイデンティティは一部には、他人による承認、あるいはその不在、さらにはしばしば歪められた承認（*mis*recognition）によって形作られる」（強調原文）とし、承認の不在や歪められた承認は、抑圧の一形態となりうると論じた［テイラー1996: 38］。そのため、制度や政策によってアイデンティティを適切に承認する必要があるとした。

しかし、例えば、K・アンソニー・アッピアは、テイラーが承認の政治として議論の対象にしているのは、集団的アイデンティティと呼ばれうるものであり、それが個人的アイデンティティと全面的に一致するわけではないとし、テイラーのアイデンティティ概念は楽観的であると論破する。承認の政治は、個人的な生のあり方を抑圧するような強制による政治へとなりうると批判している［アッピア 1996］。このように、運動を動員するとされる集合的アイデンティティは、社会運動論の中でも定義に一致を見ない状況で、制度や政策による承認の必要性の是非という、具体的で実践的な側面からも議論が必要な課題となっている。

ところが、集合的アイデンティティについての議論が交わされるにつれて、しばしばそれが過度に物象化されたり、アイデンティティの形成や共有が自明視されたりするように

---

12 塩原によると、「多文化主義は 1960・70 年代の欧米諸国におけるエスニック・マイノリティの地位向上運動を通じて発展してきた。米国の場合、マイノリティの異議申し立てとしての多文化主義は「文化多元主義」を乗り越えようとするものであった。文化多元主義は同化主義を否定し、国民社会内部における文化的多様性を承認したが、社会の公的領域では依然としてマジョリティ国民の文化が暗黙のうちに優先されていた。そうした状況に意義を申し立てたのが多文化主義だったのであり、それゆえ米国では多文化主義はマイノリティによる文化本質主義的な「アイデンティティ・ポリティクス」と同一視される傾向がある。〈中略〉それに対し、カナダやオーストラリアにおける政策では文化多元主義をその前提とし、マイノリティの文化的差異が既存の国民統合に大幅な変更を迫らぬように管理することを目指した」［塩原 2012：860］。

13 多文化主義は、リベラリズムとは両立しないのではないかという問いがある。すなわち、多文化主義はマイノリティの文化的差異に着目した政策や制度を実施するが、それに応じてマイノリティ集団への帰属に応じて、諸個人は権利を付与される。それに対し、リベラリズムは、諸個人の権利と義務は平等でなければならないと考えるため、国家が特定の文化的マイノリティに肩入れすること自体が社会的安定性を喪失するのではないかというものだ［石山 2004: 177–178］。法哲学者の石山文彦は、多文化主義とリベラリズムは相互補完的であると論じる。リベラリズムの中核的理念である個人の自立・平等および集団間の寛容と、多文化主義の根源的認識である「文化形成動物としての人間」、すなわち、人間が文化の中で生きる動物であるという認識は、前者が後者を必要としているし、後者もなんらかの理念が必要であるため、お互いに補完しあうことで、リベラルな多文化主義に到達できるとする［石山 2004］。

なった［川北 2004: 54］。そのことに対する反動からか、集合的アイデンティティという概念自体に批判的な見解も出されるようになる。例えば、マクドナルドは、アメリカとオーストラリアでの反グローバリゼーション運動の調査にもとづき、現在の社会運動で動員されているのは、集合的アイデンティティではないと述べる。彼は、今日の社会運動では、人びとはその時々の目的に応じて運動に参加し、運動の中に自分の居場所を見つけ、運動を通じて「個人的な経験」を得ることを求めているのだと分析する［McDonald 2002: 125］。このように、社会運動論において集合的アイデンティティの議論は混迷を極めつつある。

ここでは、新しい社会運動やアイデンティティ・ポリティクスの理論についての批判を二点挙げておきたい。

（1）「古い」社会運動と新しい社会運動の断絶

まず一つめの批判としては、経済的不平等の是正を目指す階級闘争の社会運動を「古い」社会運動とし、アイデンティティの承認を求める「新しい」社会運動と区別をすることによって、二つが、時代的にも運動としてもまるで断絶しているように扱っているというものである。エデルマンは、現在のアイデンティティに依拠した運動にも歴史性があるということが、「新しさ」によって無視されがちになることや、「古い」社会運動が必ずしも経済的な不平等の是正だけを求めていたわけではなく、アイデンティティに基づいた側面があると指摘している［Edelman 2001: 294–298; e.g. Calhoun 1993］。

（2）単一つのアイデンティティ・カテゴリーの物象化

二つめに、一つのアイデンティティ・カテゴリーを無批判に崇拝することによって、人種や階級による差異がないがしろにされたり、あるいは、複数のアイデンティティが交錯し影響しあって生まれるような人間の経験の複雑さを無視したりしてしまう危険性があるという点である。

これまでアイデンティティ・ポリティクスにおいては、集合的行為のためには、その基盤となる集合的アイデンティティを表すための明確なカテゴリーが必要だとされてきた。しかしながら、アカデミアにおいて構築主義的な傾向を持つフェミニズムやゲイ解放運動では、女やゲイといった解放のためのカテゴリーが固定化してしまうことが危ぶまれてきた。なぜなら、例えば、人種やジェンダーなどのカテゴリーを設定することによって、同質的で統一的なアイデンティティが想定されてしまい、経験の複雑さ、カテゴリー内の多様性や差異を説明できない。また、カテゴリーを設定することによって、他者との差異が強化され、逆にそれが抑圧的に働いてしまうことや、差異が無視され新たな排除をもたらしてしまうことがあったからだ［cf. Narayan 2004; Rich 1980］。すなわち、バウンダリ構築やアイデンティティの交渉を行いながら、グループは、その境界を明示し政治的に結束するが、その結束が抑圧を招くのであれば、アイデンティティは自己破壊的なものにならざるを得ないという疑義が提出されたのだ［Gamson 1995］。

このことと関連して、現実のアイデンティティ・ポリティクスにおいて、この単一つのアイデンティティ・カテゴリーを代表してきたのは、運動の中心にいる「ミドルクラスの白人男性」であるということにも批判的評価が下されつつある。ネオリベラリズムの台頭という時代背景も関係しながら、「ミドルクラスの白人男性」的な価値観によって多様性が代表されていくような傾向は、ますます強まってきているといわれる。アメリカの歴史学者リサ・デュガン［Duggan 2003］は、1990 年代以降のネオリベラリズムの台頭によって、アイデンティティ・ポリティクスは、次第に経済政治から切り離され、脱政治化されつつあると危惧する。すなわち、ネオリベラリズムはもっぱら経済政策との関連で説明されることが多く、個人の自己の責任やプライバシーが守られるべき項目として最重要視される一方で、文化政治についての議論は置き去りにされつつある。そして、公民権運動をはじめとする社会運動やアイデンティティ・ポリティクスが闘ってきた人種、ジェンダー、セクシュアリティの権力構造は巧みに隠され、それらのキー概念であった平等は、政治家や起業家、メディアによって、「多様性」や「多文化主義」という言葉に置き換えられながら脱政治化されつつあるという。その平等は、ミドルクラスの白人男性を代表とするカテゴリーのなかに、様々な差異が吸収される形での「平等」なのだという［Duggan 2003: 44］[14]。このように、「ミドルクラスの白人男性」的価値観が多様性を代弁し、運動内部の差異や運動の周縁に焦点が当てられることはあまりなかったといえる［cf. Valentine 2007］。

社会運動についての文化人類学的研究

さて、ここまで、文化人類学以外での社会運動やアイデンティティ・ポリティクスについての研究の流れと批判点を概観してきた。文化人類学は、長い間、社会運動論に対する貢献はほぼ皆無であったと言われる［Edelman 2001; Escobar 1992］。文化人類学の社会運動の研究対象は、もっぱら農民、（特に第三世界の）都市の貧困、エスニック・マイノリティや千年王国的な宗派による運動が中心であり、その他のタイプの動員や国家レベルの現象については、社会学や政治学、歴史学が担当してきた。特に、1980 年代頃までは、人類学者は、組織化された抵抗運動よりも、フィールドでの日常的な抵抗実践［e.g. Comaroff 1985; Scott 1985］に注目する傾向があった。加えて、人類学者は、理論の一般化には距離を取る傾向があることも要因の一つであったといわれる［Edelman 2001: 285–286］。

最近になり、文化人類学が対象としてきた運動を、社会運動論の中で再文脈化したり、社会運動論との接合を試みようとするとする研究レビューも現れつつある［e.g. Edelman 2001; Escobar 1992］。上述した新しい社会運動やアイデンティティ・ポリティクスの理論に対する二つの批判に対して、文化人類学者からも、各地の運動や研究対象の「クローズ

14　こうした状況になった理由として見逃されてならないのは、ネオリベラリズムが、個人の私的自由と富の最大に国家が介入しないことを前提としつつも、「保守主義」的思想も内包しており、教育や文化への公共支出、福祉改革の道徳的基盤、アファーマティブ・アクションや婚姻制度といった領域においては、反民主主義的で反平等主義的な意図を持つということだ［Duggan 2003: 11–12］。

アップ」［Edelman 2001］の調査をとおした報告が提出されつつある。こうした学問状況の背景として、ラテンアメリカなどの先住民運動で、経済のグローバライゼーションやネオリベラリズムの潮流によって、人が集合行為を行う根拠としての文化やアイデンティティの問題が先鋭化してきたということが理由としてあげられるだろう［c.f. Nash 2001; Nash (ed.) 2005; Starn 1999; Warren 1998］。なかでもアイデンティティはキー概念となっている。1990 年代以降に活発になったグアテマラのマヤ運動（pan-Maya movement）[15]についてのウォーレンによる報告［Warren 1998］では、アイデンティティと階級を分断して捉えることが難しいことが明らかになっている［Edelman 2001: 300］。また、グローバル化や都市化に伴い、先住民アイデンティティと特定の土地や空間との関係はどうなっていくのか、アイデンティティが顕在化するのはいつなのかなど、分析されるべき課題は山積している［e.g. Peters and Lobo (eds.) 2002］。

ところが、ジェームス・クリフォードが指摘するようにアイデンティティ・ポリティクスは、これまで各方面から非難を浴びてきた。右派的な傾向を持つ人びとにとってアイデンティティ・ポリティクスは国家の伝統に対する攻撃であり、左派的な人にとっては、フェミニズムや階級闘争などの抵抗の政治運動が分断化してしまった現在、それはかつての夢となってしまったという。特に、ポスト構造主義の傾向を持つ知識人たちは、民族、ジェンダー、人種、性的指向に基づく運動に対し、排外主義や分離主義を回避するために予防線を張り、アイデンティティの反本質主義的立場を取る。こうした状況を、クリフォードは厳しく批判する。すなわち、現代の社会運動を文化とアイデンティティのみの問題として狭く捉えるならば、社会運動が持つ「複雑な不安定さやアンビバレントな潜在力や歴史的必然性」を見逃してしまうことになりかねないと［Clifford 2000: 94–95］。

こうしたクリフォードらの主張を受け、太田好信は、現在こそ、アイデンティティについて熟考するべき時だと断じる［太田 2012a］。彼は、冷戦構造終焉後のグローバル規模での政治的変化のなかで、先住民による主権運動、民族主義の衝突、エスニシティの高揚など、人びとが集団化する運動が活発化しているのは、アイデンティティが政治化されたためだと述べる。しかしながら、文化人類学では、文化がアイデンティティを自然に導き出すという考えや、アイデンティティが固定的なものであるといった考えが、アイデンティティについての議論の障害になっていると論じる。それに対する打開策として、太田が提案するのは、文化の共有を前提にある集団を政治運動へと動員するというパラダイムを転倒させ、アイデンティティを政治の効果とみなす[16]。そうすれば、例えば、経済的利益の

15　マヤ運動（pan-Maya movement）は、グアテマラという国民国家のなかの文化的多様性の承認、国の文化における原住民の政治の役割、経済的不平等の再検討、教育や原住民の言語の識字率のような文化資源の配分などを求める運動とされる［Warren 1998: 36］。

16　太田は、文化的アイデンティティと政治的アイデンティティを区別し、文化を、政治的アイデンティティになりうる一要因として捉えようとする。つまり国家による排除と抑圧という政治的効果により不利益を受けた人びとが、排除を生み出す徴候をアイデンティティとして再解釈し、集団化すると捉

もとに結集した団体がアイデンティティの政治を行うような事例（例えば、メキシコのサパティスタ運動）を扱う場合、アイデンティティか労働階級運動かという従来の区別は無効になる。つまり、アイデンティティの政治でなかった政治など存在しなかったのではないか、という視点の転換を持ち込むことによって、社会運動やアイデンティティ・ポリティクスを論じる際の障害を取り除くのだ［太田 2012b: 49］。

ここまで概観してきたように、文化人類学は、近代国家の成立とともに排除されてきた人びとが先住民というカテゴリーを通して政治参加の権利の主張やアイデンティティの承認を求める運動、いわゆる先住民運動を対象に、社会運動論やアイデンティティ・ポリティクスの議論に一定のプレゼンスを発揮してきた。次のセクションでは、先住民運動以外の領域での、人類学の社会運動研究の問題意識を大きく二つに分けて紹介しながら、本論の問題設定を絞ることにする。

3.3　ファット・アクセプタンス運動を理解するための本論の視座：「リスク社会」のアイデンティティ・ポリティクス？

1990 年代以降に新しく作られたトランスジェンダーというカテゴリーや、カテゴリーの物象化を逃れるために出現したクイア運動は、アイデンティティやその集合性の基盤となるアイデンティティ・カテゴリーに新たな問いを突きつけている［e.g. Gamson 1995; Halberstam 2005; Valentine 2007］。ここでは、デビッド・バレンタインのトランスジェンダーの民族誌を参照することによって、本論で扱う「ファット／肥満」の概念の分析において、何が問われるべき課題であるかをより明確に設定しておきたい。これが一つめの作業である。

第二に、科学技術社会の分野での市民参加と人びとの動員の新しい形式は、社会運動の新たな領域だと言われている［Robins 2006］。すでに述べたように、「リスク社会」という時代を背景に、ある種の連帯や社会運動、そしてそれらの動機となりうる生物学的アイデンティティや個人的集合的アイデンティティが誕生しつつある。ファット・アクセプタンス運動をそれらの運動と関連付けながら論じるために、この領域における問題意識と本論がとくに批判的に注目するポイントを提示しておく。

デビッド・バレンタインによるトランスジェンダー・カテゴリーの人類学

「リスク社会」の新しい主体（「リスクコンシャスな主体」）が形成する社会関係の性質

えている。国家は、皮膚の色、生物学的差異、文化的実践、財産の有無などによって、人びとの政治的参加や資源の分配へのアクセスを制限してきた。そして、この制限を求める運動は、国家が政治参加や資源分配への排除に利用したカテゴリーを通して形成される。すなわち、それは、通常われわれがアイデンティティというカテゴリーとして想起する、人種、ジェンダー、エスニシティ、階級といったアイデンティティである［太田 2012b: 67］。

やファット・アクセプタンス運動の動態を理解するためには、個人的集合的アイデンティティやその基盤となるカテゴリーを熟考すべきである。しかしながら、太田が提示するような、集団化するパワーを持った政治的アイデンティティという概念は、先住民運動以外の他の種類の社会運動では、当てはまらない場合も多分にある（太田も、それが万能ではないことは認めている）。政治的アイデンティティは運動参加者全員によって共有されているものではないだろうし、集団化の訴求力がそれほど強くない運動もある。研究者が、政治的アイデンティティの存在を前提として運動を見ることは、言語のパワーを無視してしまうことになりかねない場合もある。

ここでは社会運動の周縁に注目することによって、こうした問題についてアプローチしたデビッド・バレンタインの『トランスジェンダーを想像する：カテゴリーの民族誌（*Imagining Transgender: An Ethnography of a Category*）』［Valentine 2007］を参照しておく必要がある。

デビッド・バレンタインは、ニューヨーク州のマンハッタンにおいて、トランスジェンダーのコミュニティ・センターや異装パーティなどで調査を開始してから、以下の重大な事実に気づく。すなわち、コミュニティ・センターなどでは「トランスジェンダー」という言葉が使われ、制度的にも「トランスジェンダー・コミュニティ」が存在するにもかかわらず、「トランスジェンダー」に分類されるはずの当人たちは、「女の子」「女」「ゲイ」「ブッチ・クィーン[17]」など様々なラベルを使って自己を語ったり、さらには、トランスジェンダーという言葉自体を知らなかったりするという事実に直面するのだ。これが彼の問題意識の出発点である。つまり、当事者が「トランスジェンダー」というカテゴリーを使わないのであれば、トランスジェンダー・アイデンティティとは何なのか？トランスジェンダー・コミュニティはあるのか？などの疑問が出てくる。言い換えるならば、彼がフィールドで出会った人びとは、既存の研究枠組みではトランスジェンダーという集合性からこぼれ落ちてしまう者たちであり、かれらの存在や経験をどのように分析の対象に入れるべきなのかという問題が出てくるのだ。さらに問題を複雑にするのは、これまで、ジェンダーとセクシュアリティは二つの個々の領域として分類され、性科学やフェミニズムやゲイ／レズビアン研究などの学問はこの分類に沿って発展してきた。しかし、バレンタインは、この二分法によって、生きた経験の複雑さや、カテゴリー自体が歴史的に構築されてきたという事実や、人種や階級による異なった経験のあり方などが考慮されなくなってしまうのではないだろうかと危惧する。ジェンダーとセクシュアリティという分類によって、自己理解のための手がかりを得ることが可能になる人びとがいる一方で、この二分法では自己を説明できない人びとがいるのだ［Valentine 2007: 62］。ここにおいて、トランスジェンダーという人たちの存在論的な地位が問題となってくる。

17　ブッチ・クイーンとは、「日常生活は異性愛者の男性として「パッシング」しているゲイの男性、あるいは、公共の場では文化的に女性らしいと見なされる振る舞いや仕草をしないゲイ男性」のこと［Valentine 2007: 80］。

そこで、彼は、運動の中心にいる人びとではなく、あえて運動の「周辺」にいるトランスジェンダーの人びとに注目し、彼らがトランスジェンダーという集合性にどのように関わっているかを描いた。ここには、「周辺」にこそ、本人が気づかないうちに集合性の構成要員として取り込まれたり排除されたりする境界の権力プロセスが存在するという問題意識がある。

彼が「周辺」という人びとは、既に述べたように、様々なラベルを使って自己を語ったり、トランスジェンダーという言葉自体を知らなかったりするような者たちである。ここにおいて、トランスジェンダーというカテゴリーは、集合行為の要になるような集合的アイデンティティでも、集合性にアクセスすることを可能にする個人的アイデンティティのためのカテゴリーでもない。それは、コミュニティ・センターなどで使用される、制度化された人工的なアイデンティティ・カテゴリーとして、奇妙に機能していることが明らかにされるのだ［Valentine 2007］。

この民族誌は、トランスジェンダーというカテゴリーが制度的に使われるようになった経緯、カテゴリーをめぐる権力関係、そして、トランスジェンダーというカテゴリーでは説明できない諸々の事象について描かれた「カテゴリーの民族誌」として、本論にとっても重要な文献である。

トランスジェンダーというカテゴリーが指し示す対象がはっきりしていないならば、制度的にいわゆる「トランスジェンダー」である人はどのように自己理解をするのか、トランスジェンダーという個人的集合的アイデンティティとはいったいどういうものであるのか、トランスジェンダー・コミュニティは存在するのか、などの問いが想像される。バレンタインは、結論部分で、結局、それは想像された統一体の産物としてのトランスジェンダー・コミュニティ（“the transgender community”）についての民族誌を書くことはできなかったと吐露している。仮に、トランスジェンダー・コミュニティ（“the transgender community”）の存在を前提として民族誌を描くならば、コミュニティが発展する元となる文化的歴史的社会的な力や、トランスジェンダー・コミュニティという言葉を使うことがもたらす影響をあいまいにしてしまうのではないかという危惧を抱いたからだ、という理由を述べる［2007: 233］。つまり、彼は、トランスジェンダーというカテゴリーを通して対象を見ることが、言語のパワーのもとで行われている行為であることを無視できなかった。

バレンタインの民族誌と本論の違いについては、さらに第 3 章で立ち返って説明したいと考えているが、ここではさしあたって以下のことを言及しておきたい。トランスジェンダーというカテゴリーは、非常に多様なジェンダーのバリエーションを包括するようなカテゴリー（umbrella category）として制度的に使用されながら、そのカテゴリーが指し示す対象が誰なのかは、実ははっきりしていないということにバレンタインは注目した。それに対し、本論で扱う「ファット」は、特にアメリカ社会という文脈においては、太っていてもそうでなくても、多くの人がその言葉を使って自己を語る［cf. Nichter 2000］。ま

た、ダイエットの記事や減量の広告に目をやれば、多くの人が「ファット」であると名指しされているともいえる。すなわち「ファット」というカテゴリーは、物理的な体型の大きさによって、メンバーを峻別する類の言葉ではない。こうした点から、ファットが指し示す対象や意味内容は不明瞭であるといえよう。そのため、ファット・カテゴリーによって、誰が動員されるのか、運動を通して形成されるようなファット・コミュニティとはいかなる特質を持つのか、ファット・アクセプタンス運動における個人的集合的アイデンティティはいかなるものであるのか、などの問いが検討される必要がある。この問題意識に沿って、第 3 章から第 5 章は分析していく。

次に、ファット・アクセプタンス運動をいわゆるアイデンティティ・ポリティクスとして理解することとは別に、「リスク社会」の社会運動という側面から理解することも可能である。肥満や体重は健康の指標ではないというかれらの異議申し立ては、「リスク社会」に対する異議申し立てであるとも考えられるからだ。そこで、次に、ファット・アクセプタンス運動を「リスク社会」の社会運動として位置付ける際の論点を指摘しておこう。

「リスク社会」の新しい主体形成と社会運動

アイデンティティをめぐる社会運動についての研究の必要性は、科学技術の分野でも叫ばれている。スティーブン・ロビンスが指摘するように、人類学や社会学が、近年、バイオテクノロジーや環境や医療などの科学技術社会の分野の市民参加と人びとの動員の新しい形式に注目しはじめたことによって、社会運動論のスコープが広がったといえるだろう［Robins 2006: 319; Epstein 1996; Leach, Scoones, and Wynne (eds.) 2005］。

すでにリスクの先行研究で言及したように、「リスク社会」では、測定・数値化、図像・映像化などを通して可視化されたリスクを、自らが責任を負うべき問題として引き受け、回避・縮減に向けて行動する新しい主体が形成される。特に、遺伝学や生物学を「本質的」な「生物学的アイデンティティ」の基盤とした新しい主体が自らの生命維持の必要性に応じて連帯を形成する事態は、新しい集合性や社会運動として注目されている。例えば、遺伝疾患や放射能、そして、HIV/AIDS をめぐる領域における、市民参加や新しい種類の市民の有り様についての研究も盛んに行われている［e.g. Biehl 2004; Epstein 1996; Nguyen 2005; Petryna 2002; Robins 2006］。新しい種類の市民という概念にたいし、例えば、生命維持の必要性に応じて形成される「生物学的市民権（biological citizenship）」［Petryna 2002; Rose and Novas 2005］、HIV の治療を求めて結びついていく人びとの「治療市民権（therapeutic citizenship）」［Nguyen 2005］、あるいは、遺伝疾患の治療のために結びつく人びとの「遺伝学的市民権（genetic citizenship）」［Heath, Rapp, and Taussig 2004］などのさまざまな呼称が提出されている。

新たに誕生した市民による運動は、自らの生物学的事実を積極的に受け入れ、病気の経験を共有するために集い、治療に必要な情報を集め、さらには、科学コミュニティとも連携しながら科学的調査研究や立法を促す。ロビンスは、こうした状況において動員される、

病気のアイデンティティに基づいたこれらの運動と、ベックやギデンズが論じた「リスク社会」との関連性を指摘している。すなわち、遺伝疾患や放射能や HIV/AIDS（の薬剤）などが健康や環境にもたらす予測不可能な被害や人体への影響が増すにつれ、一般の人びとは、ますます、科学者や専門家や政府が提供する科学的報告に対し不信感をつのらせる。そして、政府や専門家に依存するのではなく、エプステインが「素人の専門化（lay expertification）」［Epstein 1996］と呼ぶように、一般の人びとは専門的知識を自らの手で獲得していこうとする［Robins 2006: 315］。

田辺が指摘するように、こうした人びとによる社会運動や運動を通して形成される集合性は、遺伝疾患、HIV/エイズ、感染症、さまざまな慢性病に罹患した人びとの自助グループとしても拡大している［田辺 2010: 7］。そして、人類学においても、糖尿病や HIV/AIDS、ダウン症など、病気になった人びとやその家族が集い、病いの苦しみを共有したり、病気になった原因の解釈に努めたり、病気をコントロールする有り様はすでにいくつも報告されている［e.g. Rapp 1999, 2000; 田辺 2008; 浮ヶ谷 2004］。

ただし、以下のようなことが疑問として残る。すなわち、病気をめぐって動員される、さまざまな病気のアイデンティティに基づいた運動は、政府や科学から押し付けられる健康規範を受動的に受け入れるのではなく、自らも主体となって、遺伝疾患や HIV/AIDS などの病気の治癒を目指す。そのことが、かえって、健康規範を再生産し、運動参加者はその健康規範に回収されていくということになるのではないだろうか［cf. 田辺 2010］。この疑問をパラフレーズするなら、科学的知識という権力が要請する健康増進の規範に回収されないような運動はありうるのか。あるとするならば、どのような形態やロジックで運動が展開されうるのか、というものである。

本論が第二部以降で対象とする、ファット・アクセプタンス運動の運動参加者は太っているという事実を受け入れているため、確かに生物学的市民権を求める社会運動の要件とも重なる。そのため、この運動を、上述の病気のアイデンティティに基づいた運動として位置付けることも可能であるようにも見える。しかしながら、実はそうではないのではないかということを、「リスク社会」における病気のアイデンティティに基づいた社会運動を種別化したうえで、精査することが本論の目論見の一つである。

結論を多少先取りしながら、本論の見取り図を示すとするならば、ファット・アクセプタンス運動は、（体重管理が健康増進につながることを大前提とした）既存の生物医学的な知識に依拠しながら新しい主体形成を目指すものではない。そのため、病気のアイデンティティに基づいた社会運動としてファット・アクセプタンス運動を論じるには限界があるのだ。かといって、本節で述べてきたように、メンバーを峻別するタイプの運動ではないため、アイデンティティ・ポリティクスとして完全に位置付けることも難しい。そこで、本論では、ファット・アクセプタンス運動を病気のアイデンティティに基づいた社会運動であるとか、あるいは、既存のアイデンティティ・ポリティクスの一つであるとか、あれかこれかの文脈付けから理解するのではなく、「リスク社会」を通してファット・アクセプ

タンス運動という社会運動をみるという視座を提示しながら、運動の特質に即した理解を目指す。

4. フィールドワーク

4.1 本論の舞台：アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリア

さて、以下では、本論の主な民族誌的記述の舞台である、カリフォルニア州北部に位置するサンフランシスコ・ベイエリア地区（【図 0-2】、【図 0-3】参照）の地域的特徴について触れておきたい。

【図 0-3：カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリアの地図】

【図 0-2：カリフォルニア州の地図とサンフランシスコ・ベイエリアの場所】

筆者が調査地域としたカリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリア地区は、9 つ[18]のカウンティ（行政区画）から成るサンフランシスコ市を中心とした湾岸地域を指す。

湾の東側であるイーストベイには、オークランド市やバークレー市などがあり、これら

18 アラメダカウンティ、コントラコスタカウンティ、マリンカウンティ、ナパカウンティ、サンフランシスコカウンティ、サンマテオカウンティ、サンタクララカウンティ、ソラノカウンティ、ソノマカウンティの 9 つである。

の地域はベイブリッジでサンフランシスコ市と結ばれている。さらに、バークレーの丘からトンネルを抜けると、コンコルド市などの郊外の街が広がる。

湾の北側はノースベイと言われ、赤い橋ゴールデンゲイトブリッジによって、サンフランシスコ市とつながっている。高級住宅が並ぶマリン・カウンティやワインで有名なソノマ・カウンティがある。

南側のサウスベイは、全米有数のハイテク産業の街として発展しており、主要都市サンノゼ市やパロアルト市などがある。サンホゼ市の隣のクパチーノ市にはアップルの本社があり、パロアルト市の隣のマウンテンビュー市にはグーグルの本社がある。

気候は、霧が多いサンフランシスコ市内に比べて、ノースベイやイーストベイ、サウスベイは、一年を通して雨はあまり降らず、夏でも暖かく、からっとしていて過ごしやすい。

アメリカ統計局によると、カリフォルニア州の人口は、2010 年の国勢調査では 3700 万人あまりと全米で最大である。州全体の人種構成は、白人が 57.6%、アジア系アメリカ人が 13.0%、アフリカ系アメリカ人が 6.2%、ネイティブ・アメリカン（インディアンおよびエスキモー）が 1.0%、ハワイ諸島および太平洋諸島系先住民族が 0.4%、その他の人種が 17.0%を占める[19]。

2010 年現在、サンフランシスコ・ベイエリア地区の人口は 715 万人である。その人種構成は、白人が 375 万人で 52.5%、ヒスパニック系は 168 万人で 23.5%、アジア系アメリカ人は約 166 万人で 23.3%、アフリカ系アメリカ人は 48 万人で 6.7%を占める[20]。

ベイエリア地区は全米有数の大学が集まっていることで有名である。バークレー市の丘を背にカリフォルニア大学バークレー校があり、また、サンフランシスコ市の街中に位置するカリフォルニア大学サンフランシスコ校とサンフランシスコ州立大学、サウスベイに位置するパロアルト市の隣にはスタンフォード大学の広大なキャンパスが広がる。

大学が多いこともあり、ベイエリア地区はカリフォルニア州の中でも、特に、リベラルで多様性にあふれた地域と言われ、社会運動やアクティビズムも盛んである。サンフランシスコ市のカストロ地区は、1970 年代にハーヴェイ・ミルクがサンフランシスコ市会議員に当選すると、ゲイ・プライド発祥の地となった。今でも、サンフランシスコは LGBT 運動の中心地である。また、1960 年代後半から 1970 年代にかけて、ラディカルな黒人解放運動を展開したブラックパンサー党は、オークランド市にて 1966 年に結成されている。さらに、カリフォルニア大学バークレー校では、1964 年にフリースピーチ運動が起こり、学生の政治活動を制限する大学側に対し、言論の自由を求める学生が反体制運動を繰り広げ、全世界の学生運動を煽動したといわれる。今でも、バークレー市は、反体制的、進歩的な街として知られる。ベトナム反戦運動を発端とした 1960 年代後半のヒッピー文化は、サンフランシスコ市内のヘイト・アシュベリーを発祥とするといわれている。

---

19 アメリカ国税調査局より［http://factfinder2.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?src=bkmk］（2014 年 11 月 1 日閲覧）。

20 Bay Area Census より［http://www.bayareacensus.ca.gov/bayarea.htm］（2014 年 8 月 12 日閲覧）。

このように羅列するだけでも、カリフォルニア州の特異性が分かる。そのため、カリフォルニア州は「本当の」アメリカではないと言う人もいる。ここで言われる「本当の」アメリカとは、保守派の共和党が多く存在し選挙の際に地図が赤色に染まる、東西の海岸を挟んだミッドウェストと言われるアメリカ中西部のあたりを指す。ミッドウェストは、農業・酪農従事者などのブルーカラーワーカーが多く、健康志向もそれほど高くないというステレオタイプ像がある。

それに対し、東西海岸は、大企業や大学も多く、教育水準が高い人や健康志向が強い人が多いといわれる。特に、カリフォルニア州は、全米の中でもトップクラスで健康志向の強い州だといわれる。ヒッピーカルチャーの影響により、ホリスティックな健康へのアプローチとしてのヨガやピラティスなどへの関心も高い。また、健康関連の予防政策においても常に最先端を走っている。1990 年代には、カリフォルニア州が、全米で最初にレストランやバーでの喫煙を禁止した。肥満予防としては、2005 年に、当時の知事アーノルド・シュワルツネッガーが、子どもの肥満予防対策の一環として州立高校での炭酸飲料の販売を禁止する法案に署名している。また、2008 年には、トランス脂肪酸をレストランで使用することを禁止した最初の州でもある。トランス脂肪酸は、悪玉コレステロールを増やし、動脈硬化や心疾患のリスクを高め、肥満になりやすくなるとされ、現在では他の州でも禁止しようとする動きがみられるが、その先頭を切ったのがカリフォルニア州だった。

調査中、「本当」のアメリカの肥満問題を知りたいなら、ミッドウェストに行ったほうがいいと言われたことが幾度かあった。保守的で「不健康」なアメリカが本当のアメリカなのか、健康志向が強い「特異」な街とされるサンフランシスコ近辺は嘘のアメリカなのか。それをここで議論することは、別の議論になってしまうのでしないが、サンフランシスコ・ベイエリア地区は、健康意識や市民権の意識が強く「ファット／肥満」概念が活発に議論される先進的な場であったため、フィールド選定として適切であったと考える。特に、サンフランシスコ・ベイエリア地区をフィールド調査地に選んだからこそ、次で説明するような、ファット・アクセプタンス運動という社会運動の現場に立ち会うことができたと考えている。

4.2　フィールドワーク概要

筆者は、2006 年 6 月から 2009 年 4 月まで、上記のベイエリア地区を中心に、集中的なフィールドワークを行い、その後も 2012 年まで断続的に現地を訪れ、追加調査と資料収集を行ってきた。また、現地にいない間も、インフォーマントとメールのやりとりを続けてきた。本論の記述の元となるデータは、この間に得られたものだ。

本論が対象とする調査の時期と対象は、大まかに二つに分けられる。2006 年 6 月から 2008 年夏までは、「肥満問題」を抱えるアメリカの社会的制度的仕組みを明らかにすることを目的に、カリフォルニア州ベイエリア地区の低所得者層向けの福祉／公衆衛生機関を中心にフィールドワークを行っていた。この時期は、公衆衛生施設での参与観察、および、

公衆衛生の関係者へのインタビュー調査を行った。ところが、ほぼすべての人類学的調査に当てはまると思うが、当初の研究計画は、後半になればなるほど役に立たなくなった。

そして 2008 年 7 月になり、調査は急展開を迎え、ファット・アクセプタンス運動という社会運動に関する調査を開始した。きっかけは、全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance）の年次大会に参加し、運動参加者と出会ったことによる。ファット・アクセプタンス運動とは、身体サイズや体重を市民権として訴え、身体サイズや外見の偏見に対する制度的改変と社会的な意識の変化を目指す社会運動である。調査対象の転換は、当初の計画にはなかったが、社会運動を対象に取り込むことによって、結果的に、ファット／肥満という事象や概念が単なる健康問題にとどまらず、人権、ジェンダー、貧困、人種問題など、さまざまな社会問題が間接的にも直接的にも関与していることが分かり始めた。

2008 年 8 月から現在まで断続的に、ファット・アクセプタンス運動の中心的組織である全米ファット・アクセプタンス協会の年次大会への参加、カリフォルニア州サンフランシスコ市を中心としたベイエリア地区で行われるミーティングやファット・コミュニティ主催のイベントなどでの参与観察、および運動に参加する人びとへの聞き取り調査、歴史資料の調査を行った。調査エリアはマルチサイトのため、赤色の愛車で、ベイエリア地区を飛び回りながら調査を続けた。

5. 本論文の構成

本論文の構成は、第一部「肥満・リスク・制度」と第二部「ファット・社会運動・科学」に分かれる。第 1 章と第 2 章からなる第一部の目的は、アメリカの肥満問題の様相を、リスクという概念や「リスク社会」という時代認識を通じて理解することである。これは、第二部のファット・アクセプタンス運動を論じるための背景的な部ともいえる。

肥満を将来に起こるさまざまな病気に関連づけ、それを予防改善の対象とするためには、リスクという概念の登場が必須であった。第一部では、肥満をリスク化する際の集合的な事象に対する統計的な理解が、個人や特定集団に適用されるプロセスに注目する。具体的には、肥満というカテゴリーが、どのように人びとを分類し、分類カテゴリーが個人に当てはめられていくのかということを、分類カテゴリーを作り使用する保健医療やその他の制度、そして、制度で活動する人びとの相互作用を通して見ていく。

本来、公衆衛生を含む社会保障が依拠する統計的理解を、特定個人の問題として当てはめることや、その個人の過失や責任としてそのまま転嫁することはできない。しかしながら、現実の社会では、肥満や健康の自己責任論という考え方が成立している。そこで、第 1 章では、集合的な事象を捉えるための統計学が、個人の問題や個人の責任として扱われる際に、そこにどのようなロジックが潜んでいるのかという問いを批判的に考察する。この章は、「リスク社会」という文脈からファット・アクセプタンス運動の実践を論じる第 6

章の布石となる。

第 2 章では、肥満のリスクをめぐる統計的理解が、特定集団の人びとに当てはめられる際の様相を解きほぐしていく。肥満が貧困の問題として関連づけられる際に、その経緯や制度的仕組み、そして、プログラムで働く人びとや参加者の実践が、いかにして貧困者層という人びとを作り上げていくのか（あるいは、いかないのか）について多角的に見ていく。ここで使われるデータは、2006 年 11 月から 2007 年 4 月、2007 年 6 月から 8 月の間に行われた、カリフォルニア州 B 市の低所得者層向けの食糧支援プログラムを行う福祉施設での参与観察で得られたものである。

第二部は、第 3 章、第 4 章、第 5 章、第 6 章からなり、肥満差別の廃絶と身体サイズにかかわる市民権の承認を訴える社会運動であるファット・アクセプタンス運動を取り上げる。第二部の目的は、ファット・アクセプタンス運動を、既存のアイデンティティ・ポリティクスや「リスク社会」において興隆している社会運動と比較しながら、その特徴を明らかにしていくことだ。

第 3 章は、主に歴史的な資料を使いながら、ファット・アクセプタンス運動が、1970 年代にフェミニズム運動、そして、1980 年代から 90 年代には障害者運動との連携を求めながらも、太った女性が「女」や「障害」というカテゴリーのなかに組み入れられることはなかった歴史を概観する。その上で、市民権として提起される「ファット」カテゴリーは、「女」や「障害」というカテゴリーが持つ特性と、何が部分的に共通し、何が共通しないのかについて明らかにし、「ファット」カテゴリーの特異性とアメリカ反差別法の陥穽を指摘する。

ファット･アクセプタンス運動はフェミニズムの影響を強く受けているが､第 4 章では､そのことが逆にファット・アクセプタンス運動の桎梏となっている状況を説明し、その理由について分析する。歴史的資料、インタビュー、フィールドワークのデータを使いながら、ファット・アクセプタンス運動の人びとの、現在までの、フェミニズムに対する態度やその関係性を説明しながら、ファットであることと女であることが、どのような葛藤や対立を起こすのか､フェミニズムとの関係においてどのような自己が立ち現れてくるのか、という問題を検討しておく。

社会運動論では、人びとが集う根拠となるものを集合的アイデンティティなどと形容してきた。第 5 章では、集合的なアイデンティティについての研究を踏まえた上で、ファット・アクセプタンス運動の参加者が集い、かれらの共同性の生成を支えるものとしての情動的関係性に注目する。具体的には、運動参加者が、集い、出会い、語り合う場の相互作用に注目し、人びとの両義的な態度や喜怒哀楽の感情によって生起する情動的関係性、その関係性のなかでファット・カテゴリーがどのように概念化され、学ばれるのかを描写する。

ファット・アクセプタンス運動の人びとは、太った身体を健康の形態の一つとして受容できるような新たな健康管理方法を考案し、「標準」体重と健康を同一視する認識を覆そう

としている。そのことを、内部のメンバー同士だけでなく、外部社会とどのように共有していくのかということが問題となる。第 6 章では、その様子を、哲学者ネルソン・グッドマンの世界制作論に依拠しながら、ファット・アクセプタンス運動の人びとの活動を「世界の制作」として描写していく。

終章では、「ファット／肥満」概念と人間存在の相互作用のプロセスのなかで、人間の経験や行為の理解にどのような変化が生まれたかを、各章を振り返りながら整理する。その上で、ファット・アクセプタンス運動の現在とその将来の見通しと、ファット・アクセプタンス運動を通して見える多様性のあり方が現代社会に提示するものを指摘した上で、本稿を終えることにする。

なお、本論分の記述には、個人的な事情に触れることもあるため、インフォーマントの人名は仮名を用いた。ただし、著書や論文を執筆している人物や名前が知られている人物についてはその限りではない。

第一部　肥満・リスク・制度

第１章　集合のリアリティ・個のリアリティ：アメリカの「肥満問題」から考えるリスクと個人

1.　はじめに：集合的事象としてのリスクと個人

現代の公衆衛生は、「新しい公衆衛生」と言われる。旧来の公衆衛生は、人口の健康状態を対象とし、感染拡大を防ぐための隔離政策や衛生検査に焦点を置きながら、個人の行動を制限する方法を用いてその目標を達成してきた。

それに対し、新しい公衆衛生は、単にそれだけにとどまらない。20 世紀後半の感染病から慢性疾患への疾病構造の変化に伴い、新しい公衆衛生は、病気の予防と健康の維持・増進に焦点を置き、自律的な個人の選択とその選択を促す環境の整備を通じてその目標を達成しようとする。喫煙、食習慣、運動不足、性生活などのライフスタイルと呼ばれる個々人の行動様式とそれらを支える社会状況の改善が目指され、生活から病気のリスクファクターを可能な限り排除することで健康は達成しうると理解される。新しい公衆衛生を支える疫学は、大規模集団のサンプルにもとづいた統計的な手法によって、リスクファクターがどのような確率で病気を引き起こすのかを同定する。こうした新しい公衆衛生は、集合体としての人口の健康をターゲットにしながら、個々人の選択行動に介入していくところにその特徴がある。

新しい公衆衛生政策におけるリスク言説について分析する医療社会学者のアラン・ピーターセンとデボラ・ラプトンによると、その政策において、「より健康的」になることへの「参加」が、すべての市民の権利であり義務とされている［Petersen and Lupton 1996: 146］。「参加」は強制的でも拘束的でもないが、自らの健康を能動的に自己管理することへの「参加」の有無が市民であることの形態を決める。そのため、健康に倫理的な価値が付与されたり、公権力が個々人の身体や生に介入することの政治性を問題視する向きもある［cf. Rose 2006］。

ところで、本来ならば、公衆衛生を含む社会保障が依拠する集合的な事象から導き出される統計的な理解を、特定個人の問題として当てはめることや、さらには、その個人の過失や責任としてそのまま転嫁することはできないはずだ。なぜなら、集合的な事象に対する統計的な理解は、個人の経験する因果性の理解とは別物だからだ。前者は、集合に内在するとされる規則性に対する理解であり、後者は、個別の事例に関わる原因と結果の連鎖についての理解である［重田 2003: 67］。

このことについて、「リスクは社会的にしか存在しない」［Ewald 2002: 278］と述べた

フランソワ・エヴァルドを参照したい。エヴァルドによれば、そもそも、社会的リスクという概念が誕生する以前は、個人は自分の過失に責任を担うものと見なされていたという。ところが、19 世紀にフランスで誕生した「職業的リスク」の概念の誕生が、責任の所在を個人に帰するという発想から、集合で分け合うという発想への転換を促した。彼によると、19 世紀にフランスで誕生した労働災害の負担をめぐる立法過程において「職業リスク」という概念が現れ、社会的リスクが認識されるきっかけとなった。すなわち、集合で見た場合、事故自体は統計学的に一定の確率で生起するという考えに基づき、リスクを集合に内在する可能性として捉えるようになる。事故による損害の責任を負担するのは、特定の個人ではなく、集合全体なのである。これが責任の所在を個人に帰するという発想から、集団で分け合うという発想への転換を促したとされる。

リスク概念は、統計学と確率にもとづいた状況分析と関連している。誰かの失敗は、リスクファクターではあるが、企業の統計学的事実には影響を与えない。なぜなら、リスクは、集団に一定の規則性をもって生起するため、個人の意思決定に基づいた行為とは無関係であるからだ。職業リスクだけでなく、疾病や老齢、貧困などの社会的リスクについても、生じた損害を引き受け、補償する責任を社会で分け合うという考え方が福祉国家の成立の鍵となったとエヴァルドは述べている［Ewald 2002］。

再び現代社会に目を転じると、ウルリッヒ・ベックが近代化により個人化が進み、リスクは集団や共同体に配分されるのではなく直接個人に分配されるようになっていると指摘するように［ベック 1998］、特に欧米では、統計学や疫学がはじき出すリスク概念が、個人主義と共鳴しあっているように見える。いったい、なぜ、どのように、集合的な事象を対象としたリスクが、個人の責任の範疇として扱われようとしているのだろうか。そして、そのことによってどのような影響があるのか。

「なぜ」という問いに対しては、すでにさまざまな論者によって分析されているため［e.g. 渋谷 2003; ヤング 2007］簡単に指摘するにとどめるが、特に近年においては「ネオリベラリズム」の進展がその大きな要因であることを意識しておかねばならない。ネオリベラリズムは自由競争を重視する経済システムであるが、それが世界中に行き渡る過程で、公によるリスク管理が弱体化し、その結果、リスクが個人に（不平等に）再分配されつつあるという傾向に向かいつつある。特にアメリカでは、90 年代の福祉改革に顕著に見られるように、ネオリベラリズムの経済政策において、アメリカが社会運動で威信をかけて取り組んできた人種、ジェンダーといったヒエラルキーは曖昧に覆い隠され、「個人の責任」を基本とした政策が推進された。それまで公が担っていた社会的なセーフティネットは私の領域に追いやられ、低所得者層—責任を果たしてないとされる個人—などが犠牲となったことを指摘しておきたい［Duggan 2003: 14–16］。

本章では、集合的な事象としての社会的リスクが、「どのように」個人の問題や個人の責任として現れ出るのかという問いに対し考察を加えていく。次節では、統計学の発達と病因論の変化が、医療現場、特に患者や医師の現実把握の仕方にどのような影響を与えて

いるのかについて、医療人類学の文献を中心に先行研究を概観する。それを踏まえた上で、3 節では、アメリカの「肥満問題」に欠かせない肥満カテゴリーがどのように成立したかを確認し、4 節では、最近起こった小児肥満問題をめぐる事例から、社会的リスクがいかにして責任主体としての個人に転嫁されるのかについて検討していく。

2.　集合のリアリティ・個のリアリティ

2.1　「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」の矛盾：「リスクの医学」の誕生と確率論的病因論

序章で説明したように、昨今、人文社会科学で取り上げられることが多い「リスク社会」という時代診断は、われわれが「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」という矛盾する二つの現実に対峙しなければならない状況が生じつつあることを明るみに出した。本節では、「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」の矛盾を、二つの事例を通じて、リスクの医学という分野によって生じる決定論的思考と不確実性の齟齬として再解釈していく作業を行う。

医学とその関連分野における分野では、20 世紀半ば頃から、医学における確率・統計学的分析手法が発達したといわれる。それによって、病気を引き起こすリスクファクターがいくつも発見された。リスクファクターが直接的にも間接的にも複雑に絡み合いながら病気を引き起こすというイメージは、ピーターセンらが言うように、膨大に広がる「因果関係の網（web of causation）」という形容がふさわしい。網の線には、例えば、「社会経済的地位」などの「あいまいな」要素も含まれる。網というイメージは、因果論的で決定論的な病気の理解は困難になりつつあるということを表しているのだ［Petersen and Lupton 1996: 32］。

中川米造は『医学と不確実性』のなかで、医学が確実性をある程度達成したとしても、それは一般則や統計的な推測にすぎない。ましてや個々の患者にそれを適用して確実な結果を予想することは出来ないはずだと述べる［中川 1996: 221］。にもかかわらず、不確実性は、真理性や確実性の代名詞として使われる科学としての医学の対極にあるべきものであり、非科学的なものとして、医学において曖昧にされてきたと説いている［中川 1996: 10］。

しかしながら、近年、リスクや「リスク社会」という概念が浸透し始めるに従い、不確実性が医学や病気概念に与える影響の考察に関心が向けられている。美馬達哉は、そのことを、従来の臨床医学とは異なる「リスクの医学」の登場として検討している。リスクという概念が浸透するには、保健医療分野に限れば、人口集団特有の疾病の原因を統計学的分析によって解明し、予防や健康増進を目的とする疫学や公衆衛生学の登場が不可欠であった。「リスクの医学」では、「個人としての病人」を対象にするのではなく、「人口集団」の数値的データと、そこから導き出された確率論的な知が対象となる。これが病因に関する理論に大きな変化をもたらした。すなわち、一つの疾病には単一の病因が実在しており、

個人の内部に実在している特定の病原菌が原因で疾病になる特定病因論から、複数の要因が複合的に作用して確率的に疾病を引き起こす確率論的病因論へと病因論が変化したのだ。後者においては、病気になる諸要因としての病因は、心身内部に加え、環境、ライフスタイルのなかにも見いだされる［美馬 2012: 42−45］。

そのため、現代社会で問題化される一部の病気の理解においては、病因が多岐にわたるため、身体の境界と、それを侵す外部からの異物という理解が困難になりつつある。がんや心臓病を引き起こすリスク要因の同定や、免疫やアレルギー、遺伝が、病気を引き起こすメカニズムは徐々に明らかにされつつあるが、それらの知識が増大するにつれ、逆説的ではあるが、われわれになじみの深い生物医学における単線的な病因論の理解は、不確実性によって浸食されつつある。単線的な病因論の理解とは、例えば、英語の用法を見れば顕著だが、「風邪を引く（catching a cold）」や「がんになる（have cancer）」など、自己と病原菌との間に境界線を設定し、自己の肉体の外部から内部への侵害（の影響・帰結）として病気を説明するものである。

確率論的病因論によって、自己の肉体とその外部という明確な境界設定が揺り動かされ始めているという認識は、われわれが病気の原因をさぐって経験を理解する際に、また、その理解に基づいて行動する際に大きな影響を与える。以下で二つの事例を紹介していくことにしよう。

2.2　錯綜する病因論と不確実性との対峙

慢性病についての人類学的調査は、リスクとされてきた不利益が現実に形を現してしまったことについての人びとの困惑やそれへの対処、苦しみの経験を描いている。ロンドン南東部の糖尿病デイ・センターで人類学的調査を行ったサイモン・コーンは、人びとのリスク認知と個々の慢性病患者が経験するコントロール喪失について考察している［Cohn 2000］。彼は、調査中に出会った、片足を失い、もう片方の足も壊死しかかっているにもかかわらず、食習慣、喫煙習慣、飲酒の習慣を変えようとしない糖尿病患者に出会い、このような人たちをどう説明したらよいのかと当惑した思いを抱く。そして、そうした態度は、医学の病因論と、自己の経験についての原因と結果の思考方法が矛盾して現れ出たものではないかと分析する。

彼によると、人は過去に起こったことへの理解から、将来何が起こるのかを類推する。そのため、リスク認知は因果関係論と深く関わる。過去は多くの場合可能な限り単純な原因の構造として理解され、人は、過去と現在を系統だって分類することによって、未来を設定することが可能となる。しかし、慢性病をめぐる錯綜した病因論のもとでは、この分類行為は単純には成り立たなくなる。なぜなら、過去から及ぼされた影響の可能性が多数あるために、未来の可能性も同じくらいに多数想起されるからである。いつの間にか糖尿病になっていた人、なぜ糖尿病になったか分からないという人にとっては、過去に経験されたものとしての原因が見当たらないため、原因を絶つこともできずに、未来の希望など

が消滅してしまう。そのため、困惑やコントロールの喪失を感じるのだとコーンは分析する。ゆえに、患者たちは、生活習慣を変えなさいという医師に対し、自身の経験に基づいて懐疑的な態度をとる。おやつに甘いものを毎日食べ続ける女性は「悪くなるときはその時。普通に生活していたのに糖尿病になったのだから」と病いを宿命論的に解釈する。また、ある患者は「何が原因で糖尿病になったのか医師たちだって分からないのに、なぜ、いつか影響するかもしれないからと、医師の言う通りに食習慣を変えなければいけないのか」と述べる［Cohn 2000: 216–217］。

ある特定の病気を説明する生物医学の病因論モデルの中に、極めて多数の「因果の可能性」が組み込まれることにより、個々人の病の経験は、原因（過去）と結果（現在）を無理なく結びつけようとする際に、矛盾を孕む。この事例は、その矛盾が苦悩やあきらめ、宿命、コントロール喪失感を引き起こしてしまうことを示している。

二つめの事例は、がんの遺伝カウンセリングが普及しているデンマークの事例を報告するメッテ・スベンセン［Svendsen 2006］を取り上げる。彼女によれば、自己と病因の境界線は、自己の肉体とその外部にはなく、今や、自己の身体のなかに、あるいは、自分の遠い過去にあるかもしれない。デンマークでは公的なヘルスケアシステムの中に、がんの遺伝カウンセリングの施設が配置されているという。先祖代々受け継がれてきた、発がんに関わる遺伝的要因―「旅する」遺伝子―を明らかにするために、カウンセリングでは人類学の親族研究ではおなじみの家系図が使用される。家系図から遺伝パターンを割り出し、いくつかのパターンに従って、おおよそのがんの発病確率が数値化される。自己と病原の境界は、限りなく不鮮明で、病原をもたらす可能性は自分が会ったこともない親族にまで広がる。

さらに詳しくがんの発病の可能性を知るには、精密な遺伝子検査を受ける必要があるのだが、乳がんで自分の母親、叔母、さらには姉までを亡くした一人のインフォーマントは、それ以上の明確な数値を突止めることを止める。その代わりに、健康診断をかかさず受け、自己の健康管理に努めることを決意する。がんを患うかもしれないという状態は、健康（生）と病（死）の狭間にいる状態として描かれる。生を自己のコントロールにゆだねることによって、その狭間は生きる可能性の源にもなりうる。遺伝子検査を受けないという決断によって、知ることと知らないことのバランスをとり、曖昧な状態を維持しておくのだ［Sevendsen 2006: 158］。

断っておかねばならないのは、一般的に遺伝子検査は、社会全体の中のリスクではなく、個人や親族、祖先の内部にある疾病のリスクを突き止めるものである。しかしながら、今日のゲノム医学は、人間の本性の多くが遺伝子によって先天的に決定されるとする「遺伝子決定論」と大きく異なり、ライフスタイルなどの環境要因との相互作用によって、後天的に発現が制御されると考える。スベンセンの事例からも分かるように、がん遺伝子とは、がんを確実に引き起こす遺伝子という意味ではない。つまり、自らの制御を超えているように思える遺伝的要因でも、決定論的に病気を引き起こすものではなく、ライフスタイル

などの環境要因と同様、自己のコントロールによって発現を制御できるものとして捉えられている。そのため、美馬は、ゲノム医学は、特定病因論的にもとづいた遺伝子治療から、リスクの医学へとゆるやかに統合されていくだろうと述べる。

以上、確率論的病因論が、医療現場、特に患者の現実把握の仕方にどのような影響を与えているのかについて二つの事例を概観した。確率論的病因論が依拠する統計学的・確率論的知の体系は、個人に起こった出来事の解釈や経験の把握の仕方と異なる。前者は集合や社会のリアリティであり、後者の個のリアリティからは独立した法則性に支配されている。それに対し、後者は、個人が、過去と現在の出来事を選り分け、自分なりの因果関係を設定することによって、経験を理解する手だてをつかんで得られるものだ。それゆえ、これは特定病因論となじみやすかった。

コーンの事例では、医師は、すでに起こってしまった糖尿病の原因を特定することは出来ないとしながらも、患者にはライフスタイルの改変を促す。つまり、過去から見た未来には非決定性を導入しながら、現在から見た未来には操作可能性を持ち込もうとする。それに対し、患者は、原因（過去）と結果（現在）を結びつけることが出来ず、未来に対し、不確実な状況に身を投じようとする。スベンセンの事例では、患者側は、遺伝子検査によって乳がんの発生確率が分かったとしても、完全に予防することはできないという事実を受け止め、曖昧さという不確実な状況をあえて残し、その中での自己コントロールに活路を見いだす。どちらも、患者は、自己のコントロールによる「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」の両方を受け入れ、状況に応じて、そのバランスを調整しながら生きていかねばならない。

以上を踏まえた上で、次節から、「肥満問題」を事例にして、社会的リスクが「どのように」個人の問題や個人の責任として現れ出るのかという本章の問いを検討していくことにする。

３．「肥満問題」とリスクの個人化

3.1　「肥満エピデミック（Obesity Epidemic）」

序章で述べたように、アメリカでは、1980 年代後半から 2000 年代初期にかけて、肥満者の急増が社会的に問題化され始めた。肥満者の急増は、公衆衛生が立ち向かうべきエピデミック（epidemic）であると位置づけられている。

エピデミックという言葉が人口に膾炙し始めたのは、2001 年に出された、アメリカ保健福祉省（United States Department of Health and Human Services）の『公衆衛生局長官による過体重と肥満の予防と減少のための実施要請 2001（*Surgeon General's Call to Action To Prevent and Decrease Overweight and Obesity 2001*）』によるところが大きいだろう。16 代米国公衆衛生局長官 David Satcher は、そのなかで「肥満はエピデミックの域に達した」との声明を出した。そして、年間 30 万人の人が死亡し、医療費は 1170 億ドル

に増大しているため、この新しいエピデミックに立ち向かわなければならないと宣言している［U.S. Department of Health and Human Services 2001］。

2004 年には、政府の医学研究の拠点であるアメリカ国立衛生研究所（National Institutes of Health）が肥満調査のための戦略計画を発表した際、保健福祉省の長官である Tommy G. Thompson は、肥満を保健福祉省の最優先課題と位置づけた。そのときの声明では「肥満が阻止すべきエピデミックであることは疑いのない事実である。本プランは、科学的な調査に基づいたアプローチにより、肥満を克服することに焦点をあてる」と述べている[21]。

国際的には、1996 年に、国際肥満特別専門委員会（International Obesity Task Force：以下 IOTF）が招集された。1997 年 6 月 3 日から 5 日にかけて、世界保健機関（World Health Organization：以下 WHO）は、「肥満についての諮問会議（WHO Consultation on Obesity）」をジェノバで開催し、2000 年には、IOTF のサポートにより『肥満：グローバル・エピデミックの予防と管理（*Obesity: Preventing and Managing the Global Epidemic*）』を発行している［World Health Organization 2000］。非感染性疾患（Noncommunicable Diseases）かつ慢性疾患（Chronic Diseases）としての肥満が世界的に流行している現状とそれに対する対策が報告されている。これは世界的な肥満の流行を喚起するランドマーク的なリポートとなっている。

このように、21 世紀の初めに、「肥満エピデミック」は公式的に社会問題として認識されたといえる。国立衛生研究所の肥満研究資金は、1993 年の 5000 万ドルから、2005 年には 4 億ドルに増えた［Moffat 2010; Spiegel and Nabel 2006］。そして、「エピデミック」という言葉の普及とともに、肥満は、病気を引き起こすリスク要因として公衆衛生の予防介入政策の対象として取り込まれ、体重の自己管理や健康増進が国民の「義務」として位置づけられた。肥満予防や減量への注意を喚起する医療保険会社の広告や公衆衛生の広告は、街のいろいろなところでも見られる（**【図 1-1】【図 1-2】**参照）。

エピデミックは、オックスフォード英語辞書によると「特定の時期におけるコミュニティのなかの感染病の広範囲にわたる発生」と定義されている。エピデミックを対象とする疫学は、急激な変化を伴う現象を扱う。19 世紀頃は、特定の病原菌や微生物による感染を指して使われていたが、20 世紀の後半から、その使用はより広範なものになってきている。新しく出現した HIV/AIDS や鳥インフルエンザのような突発性の感染病をエピデミックとして扱うことは理解できる。しかし、昨今の特徴としては、それに加えて、感染性のない肥満、がん、心疾患、コカイン中毒者などの社会問題にも、比喩的に適用されるようになってきた［Martin and Martin-Granel 2006: 979; Moffat 2010: 4］。

21　［http://www.nih.gov/news/pr/aug2004/niddk-24.htm］より（2014 年 1 月 13 日最終閲覧）。

【図 1-1：医療保険会社カイザー・パーマネンテ（Kaiser Permanente）の広告】セロリを食べて肥満廃絶を呼びかけている（2008 年 10 月ベイエリア地区サンフランシスコ方面のフリーウェイ）。

【図 1-2：アメリカ保健福祉省の広告】お尻の破線部分の文言は、一番端から、「ランチ時に短い散歩をすることにした／テイクアウトをやめて、健康的な食事を料理し始めた／わいせつ法（obscenity laws）に挑むようなビキニを買った」と書いてある（2009 年 4 月 15 日サンフランシスコ市内のバス停にて）。

エピデミックという言葉を使うことによって、その病気には予防介入が可能であるという意味合いが含まれる。肥満は、何らかの予防可能な健康問題を将来引き起こすリスクを増大させる。アメリカ疾病予防管理センター（Centers for Disease Control and Prevention）によると、個人レベルでは、過体重や肥満に関連して、将来、様々な病気に罹患するリスクが増大するとされている（【表 1-1】参照）。

- 冠動脈性心疾患
- 2 型糖尿病
- がん（子宮体がん、乳がん、大腸がん）
- 高血圧症（高血圧）
- 脂質異常症（高コレステロール血症、高トリグリセリド血症）
- 脳卒中
- 肝疾患、胆嚢疾患
- 睡眠時無呼吸、呼吸障害
- 変形性関節症（関節内の軟骨および下層の骨の変性）
- 婦人科系疾患（異常月経、不妊）

【表 1-1：過体重と肥満に関連して増大するリスク】疾病予防管理センターの HP より［http://www.cdc.gov/obesity/adult/causes/index.html］（2014 年 1 月 13 日閲覧）。

また、疾病予防管理センターは、肥満が将来にもたらす個人レベル・社会レベル両方の直接的・間接的な経済的損失もあげている。社会レベルの損害としては、アメリカのヘルスケア制度に深刻な経済的損失を与える。直接的には、肥満に関連する予防、診断、治療サービスための医療費がかかることあげられる。間接的には、疾病率と死亡率にかかわるコスト費用があげられる。疾病率にかかわるコストとは、生産性の低下、活動の制限、仕事の長期欠席、病床によって収入の損失が出ることであり、死亡率にかかわるコストとは、早死によって将来見込まれていた収入に損失が出ることである[22]。

肥満者の増加をエピデミックとして扱うことによって、肥満は病気としてカテゴライズされる。そのため、たとえ「健康」な人であっても、分類上は肥満「患者」として、あるいは、病気になる「潜在的患者」としてカテゴライズされてしまう。そのことに違和感を感じる社会科学者からは、異議申し立てが提出されつつある［e.g. Boero 2007; Gard and Wright 2005; Moffat 2010; Saguy and Riley 2005］。例えば、アビゲイル・サゲイらは、感染病ではない肥満に対しエピデミックという言葉を比喩的に使用することによって、公衆衛生によって肥満が病気として枠付けされ、体重がコントロール可能であり、肥満は予防できるという道徳的規範が設定されてしまうと指摘する。そして、それらが出来ないことによって恥や恐怖の感覚が生み出されることを、保健医療やメディアが正当化してしまっている現状に注意を喚起している［Saguy and Riley 2005］。

しかしながら、その一方で、アメリカで肥満が急増したことは確かである。医療人類学者のティナ・モファットは、保健医療専門家やメディアによって、エピデミックという言葉が過度に強調されすぎているのは確かだが、社会科学者はその被構築性や政治性を批判的に暴くのみにとどまっていると指摘する。特に子どもの肥満問題は、子どもの健康や親

22　［http://www.cdc.gov/obesity/adult/causes/index.html］より（2014 年 1 月 13 日閲覧）。

の責任がかかわる問題であり、中庸で現実的な道を模索すべきだと述べる［Moffat 2010］。

肥満問題に対して対策を講じようとする保健医療に携わる者たちの政策レベルの立場も、肥満を問題化することによって道徳的規範やスティグマが生み出されることを懸念する社会科学者の批判的立場も、そして、肥満は健康問題であり規範やスティグマを生み出さないようなより現実的な道を探るべきとする中庸な立場も、それぞれ一理ある。重要なのは、保健医療やメディアが問題化する「肥満エピデミック」に対するこうした違和感が、何に由来するのかを明らかにすることであろう。そのことを解明していくために、「肥満エピデミック」をめぐる言説や政策を可能にしている、「過体重」や「肥満」というリスク集団のカテゴリーがどのように成立していったのかについて、BMI の小史として概観しておく。

3.2　BMI 小史

19 世紀に統計学的な知が成立し、病人、狂人、非行者、同性愛者などのさまざまな人間集団が、人口を母集団としたリスク集団として発見された。それらに比べると、「過体重」や「肥満」というリスク集団のカテゴリーの歴史は新しいと言える。

ロバート・クツマルスキとキャサリン・フリーガル［Kuczmarski and Flegal 2000］らによると、人間の肥満度を測るアプローチには二つの方法がある。一つめの方法は、あらかじめ身長別に定められた標準体重に当てはめて判断するやり方で、1980 年以前はこの方法が一般的だったようだ。このアプローチとしては、1959 年に発表されたアメリカのメトロポリタン生命保険会社の体重表が有名だ。顧客のデータから体重の増加が寿命の短縮と関連していることを数十万人の保険加入者（ほとんどは上流階級に属する中年の白人男性）から発見し、最も死亡率の低かった体重を、「理想的な（ideal）」や「望ましい（desirable）」体重として、男女別身長別に表化し、広く認知されるようになった[23]。

肥満度を測る二つ目の方法は、身長別体重比の指標に照らし合わせて測定する方法である。体重(kg)／身長(m)2 によって割り出された BMI はこの方法である。アメリカだけでなく、WHO をはじめとする多くの保健機関や保健医療の現場で使用されている。

BMI は、そもそも、19 世紀のベルギーの統計学者アドルフ・ケトレーの「平均的な成人の体重は身長の二乗に比例する」という考察によって生み出されたケトレー指数として知られていたものだった。ケトレーは、正規分布の中央に位置する平均的な人間を表す「平均人」という概念を生み出したことでよく知られる[24]。ケトレーは、ケトレー指数の計算

23　これにより、理想体重より重い体重の人には保健の掛け金を高くする仕組みが作られた。しかしこれは、靴を履いたまま、洋服を着たまま、身長体重は自己申告、喫煙と非喫煙の区別をしていない、被調査者の年齢が 25 歳〜59 歳というように偏りがあること、など統計の出し方に問題があることが明らかにされている［Kuczmarski and Flegal 2000: 1075］。

24　ハッキングは、ケトレーが考えた「平均人」の概念によって、平均身長、平均の目の色などがまるで実体であるかのようなリアリティを作り出してしまったと述べている［ハッキング 1999: 164］。

方法を、病気のリスクや脂肪率を測るために編み出した訳ではなかった［Eknoyan 2008］。それが BMI という名前で普及するきっかけになったのは、生理学者のアンセル・キーズの研究によるところが大きい。キーズらは、5 カ国約 7400 人の成人男性を対象に、いくつかの公式をもとに身長と体重から導きだされる値と実際の体脂肪率との相関性を検証した。それによって、体重を身長の二乗で割る公式、すなわちケトレー指数が、体脂肪率とよく相関することが明らかになり、1972 年に彼らによって BMI と名付けられることになる［Keys et al. 1972］。

注目しておきたいのは、キーズは論文の中で、BMI の数値は人口調査については適用可能だが、個人の診断には適切ではないと示唆していることだ。彼は、病気や死は体重ではなく加齢に関係すると述べた上で、科学的で客観的な体格指数を求めることと、個人の体重を「過体重」や「望ましい」体重など価値判断を含む用語で表現をすることは全く関連性がない。そればかりか、そうした価値判断は科学の客観性を損なうため正当化できるものではない、と強い口調で指摘している［Keys et al. 1972: 341］。

しかし、糖尿病や高血圧、心疾患が、体脂肪率の高さと関係していることが認識されるにつれ［cf. Hubert et al. 1983］、ケトレーの意図やキーズの主張とは無関係に、病気の予防介入のために、「標準」「過体重」「肥満」カテゴリーを定義するカットオフ値の設定をめぐって、論争が繰り広げられた[25]［cf. Andres et al. 1985］。

現在のアメリカの肥満統計学者の権威であるキャサリン・フリーガルも、こうした傾向に注意を促す。彼女は、BMI と死亡率の原因と結果のもつれをほどいて明らかにするのは困難であると述べる。なぜなら、体重と死亡率との関連性は、必ずしも因果関係を伴うようなものではなく、食習慣や運動、身体組成、体脂肪の分布などの複数の要因が関係しており、さらに、BMI は食習慣や運動の指標にはならないからだと指摘する［Flegal 2006: 1171］。

未だ決着しない論争や不正確さ[26]を抱えながらも、数値化によって肥満のリスクが「可視化」されたおかげで、特殊な器具を必要とせず体重と身長のみで計算可能な手軽さから、BMI は多くの保健医療の現場で活用されている。肥満に関連する病気の予防対策としての体重管理や健康増進が、個人の身体を通して行われることが可能になったのだ。

再度確認しておくべきは、肥満予防対策で頻繁に依拠される統計的データは、集合に内在する規則性について語っているのであり、個別事象の原因と因果の関係を示しているの

25　議論の争点は、主に、カットオフ値を決める際に年齢と性別を考慮に入れるか否かに関するものであり、それらについての論議は決着していない。現在、1998 年に国立衛生研究所の一部門である国立心肺血液研究所によって発表されたカットオフ値（「低体重」BMI 18.5 以下、「標準体重」BMI 18.5–24.9、「過体重」BMI 25–29.9、「肥満 1」BMI 30–24.9、「肥満 2」BMI 35–39.9、「極度の肥満」BMI 40 以上）が広く使われている。また、「過体重」と「肥満」は、心疾患、2 型糖尿病、がん、高血圧症などのさまざまなリスクがあるとされている。

26　BMI の不正確さは、筋肉や骨格等の身体組織が考慮されていないことからくる［cf. Romero-Corral et al. 2008］。

ではないということだ。そもそも、個人に関する既に起こった特定の出来事の因果関係を「科学的」に証明することは、原理的には不可能である［Holland 1986］。ある太った人物が、仮に、糖尿病になった場合、その原因を肥満であると同定することは厳密に言えば不可能なのだ。なぜなら、その人が太っている場合と太っていなかった場合という、起きた場合と起きなかった場合の二つの状況を比較観察して、病気の原因を探ることは出来ないからだ。疫学では、これを特定集団として構成することによって、「起きた世界」と「起きなかった世界」の集団の相関から因果的推論を行う。ここにあるのは相関性であって、必然的で確定的な関係ではない。

しかしながら、統計的データを個人に当てはめ因果的に解釈することの問題性についてはほとんど無自覚のまま、「正常」「異常」などを割り当てる根拠として、BMI は利用されている。次節では、小児肥満（childhood obesity）の公衆衛生やメディアの対策・対応を事例に、社会的リスクがいかにして責任主体としての個人を立ち上げるのかについて考察していく。そして、リスクに対する決定と責任がはらむ問題点を指摘することにする。

4.　累積的リスクと「肥満になる」意思決定

4.1　子どもの肥満をめぐる責任ゲーム

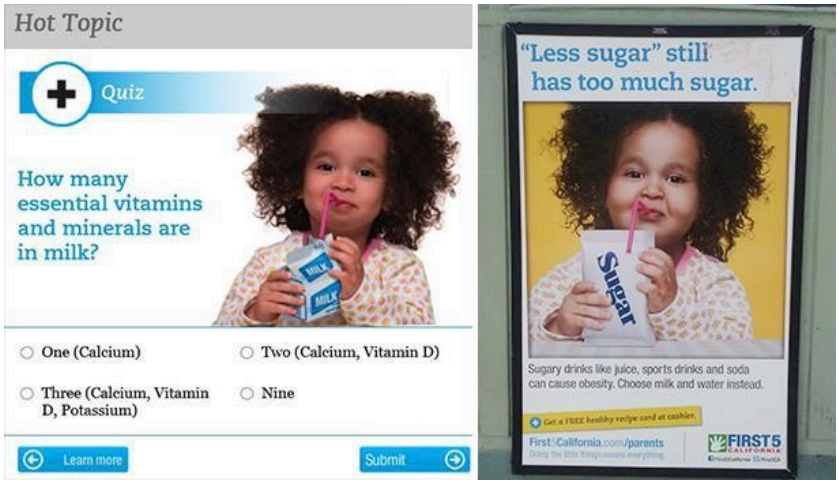
統計学の発展によって、集合の中に見出される規則性から、ある事象のリスクを判断することが可能になった。集合に内在する規則性から見出されたリスク（＝社会的リスク）を、個人が責任を負うべきリスクとして把握させ、個人にリスク回避・予防のための行動形態をとらせる必要がある。このプロセスにおいて、誰がリスクの決定主体となるかということが問題になってくる。

すでに述べたように、新公衆衛生の政策においては、「より健康的」になることへの自らの健康を能動的に自己管理する者は市民としての権利を与えられる。では、子どもの肥満問題についてはどうだろうか。

2010 年の調査では、アメリカでは、16.9%の子ども（2 歳～19 歳）が肥満と言われている［Ogden et al. 2012］。健康リスクとしては、高血圧、高コレステロール、インスリン抵抗性、2 型糖尿病、呼吸疾患、関節障害がある。また、差別を受け、低い自己評価を持つため、心理的な問題を抱えるという点でもリスクにさらされているという。さらに、子どもの頃肥満である場合、成人しても肥満である可能性が高いとされるため、表 2 で掲げた過体重と肥満に関連して増大するいくつもの病気のリスクを、大人になる前にすでに抱えていることになる[27]。そのため、政府は、州ごとのプログラムを通して、小児肥満の予防

[27]　子どもは、大人と違い、年齢や性別で大きな差異があるため、BMI による分類ではなく、年齢性別による BMI パーセンタイルが使われる。過体重は、同性同年齢の子どもなかで、BMI が 85 パーセンタイル以上 95 パーセンタイル未満の場合を指す。肥満は、同性同年齢の子どものなかで、BMI が

【図 1-3：「小児肥満（Childhood Obesity）」予防を警告する広告】カリフォルニア州の子どもの健康のための公衆衛生プログラムであるファースト 5 カリフォルニア（First 5 California）のもの（2007 年 5 月 15 日オークランド市某所）。



【図 1-4：フォトショップされる子どもたち】右側の太った女児の写真の下には、「ジュースやスポーツ飲料、炭酸飲料などの甘い飲み物は、肥満の原因になります。代わりに、牛乳や水を選択しましょう」という文言が書かれている。左の写真がオリジナルの女児だとされる。

対策に力を注ぎ始めているのである（【図 1-3】）。

昨今、この子どもをターゲットにした予防プログラムが何かと世間の耳目を集めている。例えば、2013 年 6 月頃、カリフォルニア州の公衆衛生プログラムであるファースト 5 カリフォルニア（First 5 California）の広告に採用された女児の写真は、フォトショップによって意図的に太った女児に加工されていることが発覚した（【図 1-4】）。子どもの肥満は、親

95 パーセンタイル以上の場合を指す［http://www.cdc.gov/obesity/childhood/basics.html］（2014 年 1 月 13 日最終閲覧）。

の責任であるという見方が支配的である。しかし、最近では、子どもにも責任意識を根付かせようとする目論見を持ったプログラムへと変化しつつあるように思える。そこで、ここでは、2011 年から 2012 年にかけて大きな論争を巻き起こした、ジョージア州の小児肥満対策キャンペーン「Strong4Life」をめぐる論争を事例として取り上げよう。このキャンペーンを分析することを通じて、「リスク社会」の自己責任論からみる、不確実性と決定論的思考の齟齬という問題に焦点を当てていくことにしよう。

事例：ジョージア州の小児肥満対策キャンペーン「Strong4Life」

全米で 2 番目に肥満児の割合が高いと言われるジョージア州アトランタで、2011 年から 2012 年にかけて、公衆衛生の小児肥満対策のためのプログラム「ストロング・フォー・ライフ（Strong4Life）」による、テレビ広告とビルボード広告のキャンペーンが大論争を巻き起こした。「ストロング・フォー・ライフ」とは、アトランタのチルドレン・ヘルスケア（Children’s Healthcare of Atlanta）が始めた「社会変化を起こして、小児の肥満エピデミックと関連する病気の進行を食い止める」ことを目的とした健康プログラムである[28]。

そのビルボード広告には、太った子どもが一人ずつ写ったモノクロ写真と共に、赤字で書かれた警告（Warning）という文字の下に「骨格がいいからこんな風になったわけではない。食べ過ぎたからこうなってしまったんだ。」「太った子どもは太った大人になる。」「太った子どもは親より長生きできないかもしれない。」などの文言が掲げられていた（【図 1-5】）。

また、テレビ広告のバージョンでは、モノクロ映像で、子どもがテレビ画面に向かって、「ママ、僕はなんで太ってるの？（Mom, why am I fat?）」「お医者さんが、私は高血圧症とかいう病気にかかってるって言うの。本当に怖いの（My doctors say I have something called hypertension. I’m really scared.）」「私は学校に行くのが嫌いです。だって、他の子たちが私をいじめるからです。それで私は傷つくのです。（I don’t like going to school because the other kids pick on me. It hurts my feeling.）」など、あくまで広告ではありながらも、まるで自分自身の身に起きていることであるかのように語る。

このセンセーショナルな広告キャンペーンに対し、太った子どもに対するスティグマを増幅させる、いじめに繋がるなど、不快感を抱いた人びとは多かった。ネットでは、ブログなどを通してさまざまな意見が交わされた。

---

[28] ストロング・フォー・ライフの HP より。［http://www.strong4life.com/pages/about/ArticleDetails.aspx?articleid=DefiningWhatItMeans&sectionid=overview］（2014 年 1 月 13 日最終閲覧）。

【図 1-5：ジョージア州の小児肥満対策キャンペーン「Strong4Life」の 2011 年から 2012 年にかけて掲げられた広告】

アトランタ首都圏の新聞アトランタ・ジャーナル・コンスティテューション（The Atlanta Journal-Constitution）の記事「容赦ない小児肥満の広告、批判を呼ぶ（Grim childhood obesity ads stir critics）」によると、アトランタのチルドレン・ヘルスケアがこのような手法をとらざるを得なかったのは、かれらが行った小児肥満の意識調査の結果が散々なものであったからだという。すなわち、調査に協力した人のうち 50%は小児肥満を問題だと認識していなかったこと、過体重や肥満の子どもを持つ親の 75%が自分の子どもに体重の問題があると認識していなかったことが、調査結果として明らかにされた。ジョージア州は、約 100 万人の子どもが過体重か肥満で全米で 2 番目に肥満児の割合が高いといわれている。キャンペーンの責任者は、「私たちには、「ヘイ、ジョージア！目を覚まして！これは問題だよ」といわんばかりの、人の注意を引く、予想外のキャンペーンが必要だったのです」と述べている。このキャンペーンに対する反応として、小児向けの保健医療制度の人びとは、太った子どもをターゲットにした残酷な広告だが、深刻な公衆衛生の問題だと認識させるためには必要だと、このキャンペーンを概ね支持しているという。しかしながら、公衆衛生で働く人のなかには、写真のイメージが、単に肥満者にスティグマを貼り、恥を煽るだけで、親や子どもに不健康な体重を改善する意識が芽生える可能性は低いと不快をあらわにする者もいる［Teegardin 2012］。

肥満者のための治療の情報提供をサポートする 50,000 人のメンバーを持つ NPO 団体の肥満行動連合（Obesity Action Coalition：以下 OAC）が行った世論調査によると、「このキャンペーンは、肥満の子どもにとってプラスになるのか、マイナスになるか？（Does this campaign help or hurt children affected by obesity?）という質問に対し、回答者 1,050 人中、81%が「肥満の子どもを傷つけていると感じる（feel the campaign hurts children affected by obesity）」と回答し、19%が「肥満の子どもの助けとなると感じる（feel the

campaign helps children affected by obesity)」と回答している。また、「この広告やキャンペーンは不快ですか？（Are the billboards or the campaign offensive?)」という質問には、82%が「はい」と、18%が「いいえ」と回答している[29]。ニューヨーク・タイムズ紙の記事によると、OAC は、「キャンペーンのメッセージは、アメリカの肥満の子どもが日常的に直面している、容赦ない、からかいやいじめをさらに激化させる」とプログラムに抗議している［Dell'Antonia 2012］。

筆者がたまたま目にしたニュース番組では、キャンペーン関係者がインタビューに応え、「子どもにも太っていることに対し罪の意識を持たせることが大切だ」と主張していた。これまでは子どもの肥満は親の責任だという認識が強かったが、この広告キャンペーンからは、太った原因は子ども自身にもあり、子ども自身も太らないための意思決定をすべき主体であるという主張が読み取れる。

筆者のインフォーマントである、ファット・アクセプタンス運動のあるアクティビストは、一連の広告に対し憤りをあらわにした。オーディションで選ばれた子どもたちを、広告の写真に一人ずつ掲載することによって、あたかも「その」子が持つ悩みとして、固有性を持たせようとしていると批判した。選択行為や意思決定を十分にできると見なすことのできない子どもまでを、なぜ、決定した主体に仕立てあげ、責任ゲームの中に放り込んでしまうのか、人びとの不快感はおそらくここに起因する。

4.2　責任主体と累積的リスク

ある個人が、決定者として責任主体に仕立てあげられることよって、その個人の生に「未来の操作可能性」が持ち込まれる。しかしながら、その人が、「真の」決定者といえるかどうかは、かなり不明朗といえる。「太ることは、子どもである彼ら自身が選択した結果であり、彼らに責任がある」と言うことは、どこまで妥当なのだろうか。食べ過ぎたから太ったということを、果たして、「肥満になる選択／決定をした」とみなすことは、いかにして可能なのだろうか。以下では、この問題を検討していこう。

選択した行為がある結果を導くという点について考察を加えるために、ここで、選択という行為を大まかに二つに分けて考えたい。一つは、一度あるいは数回の選択によってその後の結果が大きく左右されてしまうタイプの選択である。もう一つは、日常生活を送るなかで行われている無数の選択である。例えば、食べる行為はその代表例で、一口一口の食べる行為はミクロの決断と見なすことが出来る。人はある程度、受け入れてもいいリスクと回避したいリスクを瞬時のうちに峻別しながら生きているが、その大部分は、後者のような、ことさらに選択として意識されることなく無意識のうちに行われている。ここでは、そうした、無意識のうちに行われているミクロな無数の決断の集まりの帰結として引

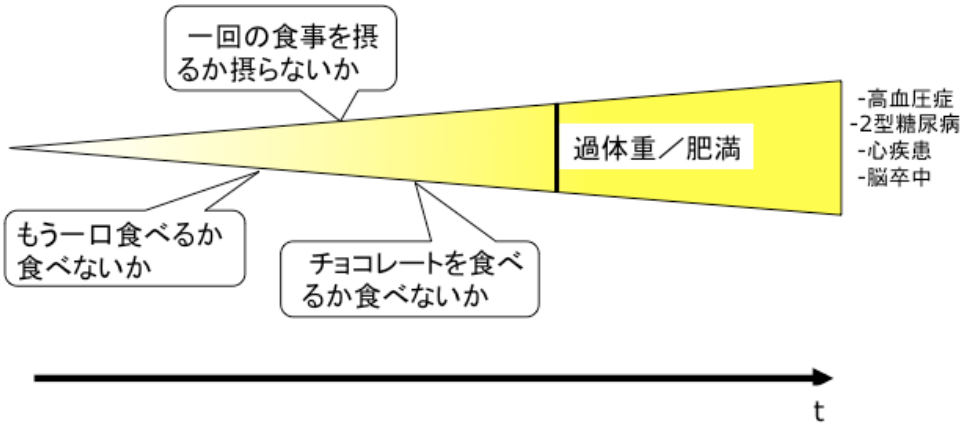
[29] OAC の HP より。［http://www.obesityaction.org/weight-bias-and-stigma/bias-busters/georgia-strong4life-campaign］（2014 年 1 月 13 日最終閲覧）。

き起こされる、未来の不利益の可能性を、リスク認知の第一人者である心理学者ポール・スロビック［Slovic 2000］に倣い、累積的リスク（cumulative risk）と呼ぶことにする[30]。ただし、スロビックは、ある危険に長い間をかけて曝され続ける場合、リスクは累積的な性質を持つとしながらも、そこに質的に異なる累積性が混在することを看過している[31]。

本論が対象とする（肥満の）「累積的リスク」の特徴は、車の運転による交通事故の例と比較すると、分かりやすい。車の運転に長期的・反復的にかかわっている場合、交通事故発生のリスクは、車の運転をやめるたびにリセットされる。そのため、車の運転にかかわることによる「累積的リスク」は、確率論的な意味での未来の不利益の発生の蓋然性が増大することだといえる。他方で、食べる行為に長期的・反復的に携わる場合、体内に取り込んだ食物は蓄積するとみなされる。そのため、食べる行為にかかわることによる「累積的リスク」は、因果論的な意味での肥満や病気の蓋然性が増大することだといえる［cf. Slovic 2000］。注意したいのは、その食べる／食べないという膨大な決断の集まりを、ある特定の状態になることの決定として理解する思考方法が、われわれにはかなり身に付いているということだ。仮に、食べ過ぎが肥満を導き、やがて糖尿病を引き起こすという因果関係を時間の連続性のなかに設定するなら、いつの時点で、どのように人は決定者として割り当てられるのだろうか。チョコレートを食べるか食べないか、といったミクロの決断はあるとしても、肥満や高血圧、糖尿病になるかならないかといった決定は存在しないのではないだろうか（【図 1-6】参照）。つまり、その決定は、意思決定を行う主体の累積的な決定に対してメタレベルである。そして、誤解を恐れずに言うならば、それは、現実には存在しない「決定」なのである。しかし、累積的リスクが、メタレベルの「決定」として存在するものとして作り上げられると、個人はその「決定」の責任者という認識を持つようになるだろう。そのとき、「過体重／肥満」というカテゴリーは、もはや単なる分類記号以上の意味を持ち、「肥満者」という責任主体を作り出す。それはまるで、ジョージア州の小児肥満対策キャンペーンで使われた、一人一人の子どもたちの写真イメージが喚起するような固有性を持つ。

30　ここでの「累積的リスク」についての議論は、2007 年日本文化人類学会「人類学的リスク研究の開拓」分科会においてなされた発表に基づく。議論は、分科会代表者である市野澤潤平の指摘に多くを負っている。

31　リスク認知の第一人者である心理学者ポール・スロビックも、累積的リスクに注目している。彼によれば、ある危険に長い間をかけて曝され続ける場合、リスクは累積性な性質を持つ。しかし、スロビックは、自動車の運転する者にとっての交通事故、喫煙のリスク、地球気候変動、避妊の失敗、HIV 感染などを累積的リスクの例として列挙しており、そこに質的に異なるふたつの累積性が混在することを看過している。車の運転に伴うリスクの累積性、避妊の失敗、HIV 感染などは、主に確率論的な意味での（将来的な不利益が発生する）蓋然性の増大である。それに対し、喫煙リスク、地球気候変動、本章で言及する肥満や生活習慣病に関しては、因果論的な意味での蓋然性の増大が主たる問題となる［cf. 市野澤 2013］。



【図 1-6：累積的リスクの概念図】

すでに BMI の小史で概観したように、どの時点でリスクが増大するかという線引き自体は、統計学に内在しているものではなく、極めて人為的なものである。医学的には、いつから肥満になり、いつから高血圧や糖尿病になるのかという、「正常」と「異常」のカットオフ値などはなく、実際は連続している。科学哲学者カンギレム［1987］が、正常と病理の量的な連続説と質的な同一性を説き、統計的事実から平均を規範として捉え、統計的へだたりを病理的なものとして語ろうとする傾向に疑義を呈したように、ひとたびカットオフの値が決められると、たちまち、人びとの生はそれに基づいて区分され、それに応じた健康の価値規範が生まれる[32]。ジョージア州の広告の事例は、公衆衛生の統計学的知が「正常」「異常」という社会的価値判断として使用されることになってしまったために、問題を巻き起こしたと思われる。

5.　交錯する集合のリアリティと個人のリアリティ：第２章に向けて

統計的なデータによって、大勢の人びとの集合が、社会という名で一定の秩序を持ったものとして構想可能になる。そして、個人は、社会における自分の位置づけを、統計的なデータを通して知ることが出来るようになる。科学哲学者のハッキングによれば、統計法則は、集団主義と全体論的傾向が優勢な東ヨーロッパではなく、「経済的自由主義、個人主義、原子論的な人間および国家概念が優勢な西ヨーロッパの社会データの中で発見された」［ハッキング 1999: 7］。また、アメリカの「統計好き」を論じる歴史学者のブアスティンは、物質的幸福の度合いを測定するのに適している統計学は、消費者民主主義から生み出されたと述べる。「自家用車を二台保有する家庭」と自称するカリフォルニアの郊外居住者

32　カンギレムは、健康がどこで終わり病気がどこから始まるか、つまり、正常と病理の境界を判断するのは、究極的には個人なのだという。そして、生活の中で様々な不測の事態を許容でき、新しい場面で新しい規範を設定できる幅――例えば、いつものパン屋が臨時休業している場合に遠くのパン屋に足を運ぶこと、終電が過ぎている場合に遠くても自分の家まで歩いて帰ることなど――のことを健康と呼ぶ［カンギレム 1987: 160–181］。

は、裕福なアメリカ人と特徴を共有する社会の一員として、既に一つの統計コミュニティの中に身を置いているのだと指摘する［ブアスティン 1990: 35］。

つまり、個人の自由を担保しながら、社会という名で言い表される大勢の人びとの集合全体を構想しようとする場合、統計的な形をとる社会法則は有用な典拠となる。なぜなら、個々の自由と衝突しない限りで、社会（集合）にある一定の秩序を構想することを可能にするからである。そして、そのとき、個人主義と統計学は、個人の自由と衝突しない限りは、非常に親和性が高くなる。

しかしながら、リスクが個人に配分される際には、さまざまなコンフリクトが生じる。本章では、前半部分で、慢性疾患やがん遺伝子などの確率論的病因論のもとで解釈される疾患を事例に、患者は、「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」の釣り合いを取らざるをえない状況のなかで、不確実性を常態的なリアリティとして受け止めつつあることを確認してきた。

後半で分析した肥満問題では、社会的リスクが「個人的リスク」として個人に配分される際に、価値判断を伴う決定論が忍び込む様子をみてきた。ジョージア州のキャンペーンでは、食べ過ぎの結果太ることも、いじめられることも、病気になることも、必然的帰結であるというメッセージが込められていた。そして、それを予防改善するという決定を下すのは、たとえ子どもであっても、個人なのだという決定論的思考に基づいている。そうした考えのもと、「肥満者」というカテゴリーは、責任主体として稼働し始める。

「リスク社会」といわれる現代社会では、リスクに対する決定を責任に引きつけて考えるため、未来に対する不利益はある決定者に帰責される。そのため、現在は、不確実性と決定論のあいだにますます齟齬が生じつつあるのではないだろうか。この齟齬は、序章と本章で提起した「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」を両立することの矛盾に等しい。

しかしながら、われわれがしばしば違和感を抱くように、ある者が意思決定者とされるその根拠は、実はそれほど判然としたものではない。未来の損害を被ると見なされた者を、それを決定した主体として決定論的に設定することによって、不確実性に対抗するための落としどころをみつけようとしているようにも見える。それでも人びとは、集合のリアリティと個のリアリティが交錯する場所で、直面する齟齬を個々人の経験や解釈に基づいて克服しようと努めようとするのではないか。こうした齟齬の克服に努める人びとについての具体的な実践については、改めて第 6 章で論じることにしよう。

本章では、リスクの個人化によって、肥満になるという「意思決定」をくだした責任主体が作られることを説明してきた。ハッキングによると、リスクの引き受け手として分類された人びとは、分類されることによって、個人的自己意識や集団的な自己意識を形成し、それらの人びとの行為にも影響を与えるようになると述べる［ハッキング 2012: 72］。

しかしながら、ハッキングは、個人的集団的な自己意識を形成しない人びとの存在については述べていない。肥満のリスク集団として分類される人びとが、全員、肥満であるこ

とを自己認識し、その予防改善に向けて自己管理に努めるわけではないだろう。実際、現在のアメリカでは、人口の 6 割近くが過体重か肥満のカテゴリーに入ることを考えるなら、リスクコンシャスではない人が多いと言うこともできる。

次章では、この問題について、貧困者層における肥満の問題を題材に、肥満予防介入を行う政府のシステムの歴史的経緯、制度で働く人びとや貧困者層の実践などから、リスクを引き受ける責任主体としての自己認識がどのように立ち現れてくるのか、あるいはこないのか、という問いを検討していこう。

第２章　空転するカテゴリー：福祉・公衆衛生政策からみる「貧困の肥満化」

1.　リスクの犯人探し：貧困の肥満化という問題

第 1 章で見たように、リスクが問題として見いだされるとき、予想される将来の不利益が、誰の決定によって生じる可能性があるのか、そして、その決定の責任を誰に帰すべきなのかを明らかにし、リスクの引き受け手を設定する。市野澤は、その際、確率・統計という道具が駆使されることによって、過去のデータと未来の生起可能性についての「読み替え」が起こることを指摘する。例えば、ある属性を持つ人びとの集合は、そうではない人びとの集合に比べて、犯罪者である割合が高いという統計的事実が出されたとする。仮に、ある個人が「犯罪者が多い」集合に属している場合、その個人は、犯罪者である可能性が高いと推論される。現実の推論は、確率という形をとることで、未来の生起可能性へと読み替えられる。すなわち、統計的データは、集合的事象に潜む危険性を浮かび上がらせるが、それは、確率という形をとることで、未来の生起可能性へと読み替えられる［市野澤 2014: 16］。そして、リスクの引き受け手とされる人びとは、ハッキングが言うように、リスク集団として分類されることによって、個人的自己意識や集団的な自己意識を形成し、それらの人びとの行為にも影響を与えるようになる［ハッキング 2012: 72］。

しかしながら、ハッキングは、個人的集団的な自己意識を形成しない人びとの存在については述べていない。リスク集団として分類される人びとが、皆、そのことを自己認識し、自己管理に努めるわけではない。本章で問題にしたいのは、肥満のリスク集団としてしばしば引き合いに出される貧困者層の人びとが、いかに自己意識を形成する／しないのかということである。

近年、肥満が貧困者層の間で広がっていると指摘されている［e.g. Drewnowski and Spector 2004; Drewnowski 2009］。貧困と肥満を結びつけるそのやり方には、ステレオタイプな言説がある。すなわち、貧困者層が住む地域は、新鮮な野菜や果物を手に入れるための物理的・知的アクセスがなく、公園など外で安全に遊ぶことができる場所がない。特に、貧困者層に多いシングルマザーは、料理の仕方を知らなかったり、料理をするための時間的余裕もなかったりするため、安くて高カロリーなファストフードに頼ってしまう。そのため、貧困者層とその子供たちの間で肥満率が上がっている。従って、こうした貧困が及ぼす健康格差をなくし、かれらの肥満を予防しようというものである。こうした言説は、メディアや筆者が調査していた公衆衛生で働く人びとからもよく聞かれた。

とはいえ、貧困者層の肥満化（以下、「貧困の肥満化」と呼ぶ）をくいとめるための政策やさまざまなプロジェクトが、実際に功を奏しているのかは明らかではない。政府の保健医療政策である、アメリカ国民の健康指針を示した Healthy People 2010 では、2010 年までに、成人の肥満を 15%まで減らすことをゴールとして掲げていたが、2014 年現在も国民の 35%近くが肥満者といわれ、15%という数値にはほど遠い。肥満者数は、80 年代から 90 年代のように激増はしていないものの、ほぼ横ばいで、著しく減少はしていない。

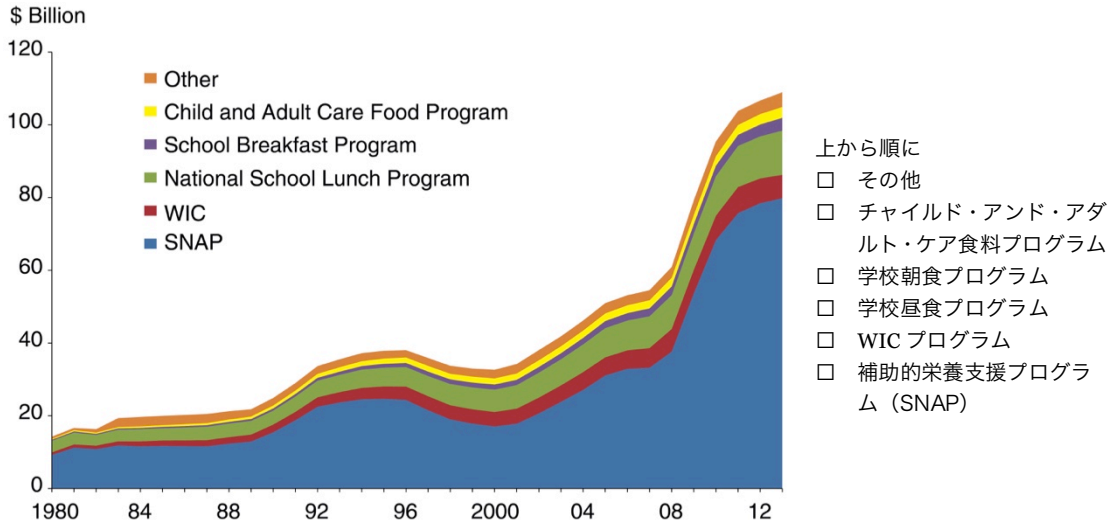
後で詳述するが、データを詳細に見るなら、貧困者層に肥満が多いという場合の「貧困者層」というカテゴリーは、大掴みなカテゴリーであることが分かる。なぜなら、性別やエスニシティ、年齢などを考慮するなら、一概に、貧困者層のみが太っているとはいえないからだ［cf. Ogden et al. 2010］。ラプトンが指摘するように、歴史的にさまざまな非白人のエスニック・マイノリティを抱えるアメリカでは、「優れた」「文明化された」ミドルクラス以上の白人に比べ、「劣った」非白人の移民者やエスニック・マイノリティや労働者階級の貧困者層は、身体管理や体重管理ができない人びととしてステレオタイプ化される傾向がある［Lupton 2012: 47］。また、経済的自立ができず福祉に依存せざるを得ない人は、しばしば、ネガティブなイメージで表象される。特に、生活保護を受けた母親（welfare mother）、すなわち、未婚で、性行動をコントロールできない「黒人女性」は、福祉依存の典型として批判される傾向があるが［Fraser and Gordon 1994: 311］、それは低所得者層非難としてお決まりのものである。そのため、貧困者層に対するこうしたネガティブな固定観念が、肥満が貧困者層に広がっているという言説や研究結果の出現に貢献していると考えることは可能であろう。

こうした実情を踏まえるならば、貧困の肥満化という課題を鵜呑みにするのではなく、制度がどのように成り立っているのか、肥満問題が貧困者層の問題として語られるときの貧困者層とはいかなる人びとなのか、などを精査する必要があると考える。本稿では、貧困の肥満化が叫ばれるようになった歴史的経緯、そして、肥満予防政策の介入の起点の一つとなっている貧困者層向けの食糧支援プログラムの現場を記述することで、貧困の肥満化という現象を多角的に分析していく。その上で、貧困者層の人びとが、肥満のリスクを引き受ける主体として、いかに自己意識を形成するのか／しないのかということを考察していこう。

次節では、アメリカの貧困対策の歴史を、栄養保障という観点から概観しておこう。貧困と肥満という正反対に見える事象が、どのような過程を経てどちらも貧困者層の問題として把握され、介入の対象になったのかを理解するために、飢えや貧困が定義される仕方の変遷を見ていくことにする。

２．貧困の肥満化

2.1　貧困対策におけるアメリカ農務省による公的扶助の役割



【表 2-1：アメリカ農務省食料支援プログラム支出 1980–2013】
アメリカ農務省食品栄養局より。[http://www.ers.usda.gov/data-products/chart-gallery/detail.aspx?chartId=40105#.UwnZz17lrsk]（2014 年 2 月 18 日最終閲覧）。

貧困の肥満化について論じるためには、貧困対策におけるアメリカ農務省（United States Department of Agriculture）の役割を知る必要がある。アメリカでは、国民に最低限度の栄養を保障することは、公的扶助の対象となっている。公的扶助としての食料支援プログラムは、アメリカ農務省の機関の一つ、食品栄養局（Food and Nutrition Service）が管轄している。食品栄養局は、「飢えと肥満をなくす」ための取り組みを行う機関である。具体的には、「アメリカの農業を支援し、国民に信頼を与えるような方法で、子どもと低所得者層に、食べ物と健康に良い食事へのアクセスと栄養教育を提供することによって、食料安全保障を増進し、飢えを減らす」ことを目標とする[33]。フードスタンプ・プログラム（Food Stamp Program）[34]や学校給食の支援、そして本章で取り扱う乳児と妊婦に対する食料支援プログラムなど、低所得者層を対象とした 15 の食料支援プログラム管理を担っている。表 2–1 は、1980 年から 2013 年までの、アメリカ農務省の食料支援プログラムの支出を表しているが、その支出は右肩上がりに伸びていることがわかる。また、2013 年の支出の 73％は「補助的栄養支援プログラム（Supplemental Nutrition Assistance Program : SNAP）」（前フードスタンプ・プログラム）が占めている。

こうした食料支援プログラムの起源は、1930 年代の大恐慌時代にまでさかのぼることができる。当時、貧しい人びとのための飢え（hunger）対策として、アメリカ農務省による食料支援プログラムの仕組みができた。しかし、それらは、飢えの対策よりも、農業政策の一つとしての機能が強かった。つまり、主要作物と腐敗しやすい余剰作物を慈善施設や

33　アメリカ農務省［http://www.fns.usda.gov/about-fns］（2014 年 2 月 18 日最終閲覧）。

34　フードスタンプ・プログラム（Food Stamp Program）は、2008 年に名称を変更しており、現在は、「補助的栄養支援プログラム（Supplemental Nutrition Assistance Program: SNAP）」が正式名称となっている。本稿では、フードスタンプ・プログラムという名称を採用する。

福祉プログラムに提供することによって、それらの価格安定をはかっていたのだ［Kerr 1990: 159; Poppendieck 1995: 13–17］。

とはいえ、食料支援プログラムの多くが設立されたのは、1960 年代になってからであった。この時期、貧困による飢えが、政府の貧困対策の失敗としてアメリカで本格的に問題化されたのだ［Poppendieck 1995: 18–23］。以下、その時の歴史的状況に言及しておこう。

本格的な飢えの問題化は、1967 年、ロバート・ケネディとジョセフ・クラーク（貧困絶滅委員会メンバー）による南部の状況の視察がきかっけとなった［Poppendieck 1995: 19］。かれらは、南部の貧困状況を知るために、ミシシッピを訪問し、南部の貧困による栄養不良の悲惨な状況に衝撃を受けた。この時期、特に南部では、農業の機械化により労働力が余るようになってきていた。特に、地主からの借金により土地に縛り付けられ、都市に出ることも出来ない多くの南部の田舎の黒人たちの間の貧困は深刻であった。こうした状況の中で、既存の食料支援のための配給は、全国区のプログラムではなかったため、カウンティや州のためにうまいように利用されていた。貧しい人びとをカウンティから追い出す手段として利用されたり（食料配給を行っているエリアに行かせる）、あるいは、労働力が足りないときは食料配給を実施せずに、働かざるを得ない状況を作り出し、貧困層に低賃金で労働させることもあった［DeVault and Pitts 1984: 549–551］。

1968 年にドキュメンタリー「アメリカの飢え」がテレビ放映され、こうした状況が白日のもとにさらされることになる。多くのアメリカ人は、アメリカ国内に依然として飢えが存在するという事実に衝撃を受けた。そして、この時期の公民権運動の影響を受けながら、飢えと貧困の撲滅は国民の関心事となった［Poppendieck 1995: 19］。

これ以降、アメリカ農務省管轄の食料支援プログラムの設立が相次いだ。メジャーな 5 つの食料支援プログラムの設立時期を簡単に説明すると、規模が一番大きいフードスタンプ・プログラムは 1964 年に確立された。本章で後述する、低所得者層の女性と乳児、子ども向けの WIC プログラム（Special Supplemental Nutrition Program for Women, Infants, and Children）は 1974 年に設立された。学校昼食プログラム（National School Lunch Program）は一番古く 1935 年には始まっている。学校朝食プログラム（School Breakfast Program）は、1966 年に実験的プログラムとして認可され、1975 年には常設プログラムとなった。二つのプログラムは、どちらも低所得者の家庭の子どもに対し小学校と中学校での昼食と朝食を低価格あるいは無料で提供するための補助金を出している。さらに、チャイルド・アンド・アダルト・ケア食料プログラム（Child and Adult Care Food Program）は、1968 年に開始されている。当初はチャイルド・ケア・センターを対象として低所得者層の家族のための食事に対する補助金を交付していたが、1978 年には家族のホーム・デイ・ケアにまでその対象を拡大した。このように、1960 年代、貧困による食や栄養不足の問題への対策を、アメリカ農務省が、公的扶助として主導してきたのだ。

ところが、貧困対策としての食糧援助プログラムについて、しばしば議論になるのが、アメリカの農業政策と福祉政策の一環としての食料支援のいびつな構造である。アメリカ

の農業補助金は、トウモロコシや大豆などのアメリカの主要農作物に大量につぎ込まれている[35]。農業補助金の額が群を抜いて多いトウモロコシは、家畜の飼料や甘味料の原料として使われる。安価に売られている炭酸飲料は、甘味料としてコーンシロップが使用されている。そのため、多額の農業補助金が、肥満を生み出す元凶になっているのではないかと指摘する人は多い［e.g. DeBono, Ross, and Berrang-Ford 2012; Gibson 2003］。

また、アメリカの農業政策と福祉政策の関係を揶揄した言葉として、ガバメント・チーズ（Government Cheese）という言葉がある。これは、アメリカ農務省による食料支援プログラムで 1990 年代まで配られていた、種々のチーズが混ぜられたプロセスチーズの名称でもある。乳製品の価格を安定させるために、政府がチーズの余剰生産分を備蓄しており、それらがフードスタンプなどの食料支援プログラムで配られていたのだ。そのため、この言葉は、政府による福祉事業が、医療や年金を手厚くするわけではなく、安価なチーズをただでばらまくという畜産業界を支援する形態になっていることを揶揄している。

このように、農業政策と福祉制度としての食料支援プログラムには構造的な問題がつきまとうことは記しておかねばならないだろう。

2.2　貧困の肥満化

飢えの定義と測定方法については長らく統一見解がなかったため、飢えを定義する際にしばしば混乱を招いたが[36]、1990 年代になって、合意見解が形成される。実験生物学会連合（Federation of American Societies for Experimental Biology）の生命科学研究所（Life Sciences Research Office）によって、標本抽出しがたい集団の栄養状態に関する核心指標（Core Indicators of Nutritional State for Difficult-to-Sample Populations）についての報告書が提出された。そのなかで、①食料安全（food security）、②食料不安（food insecurity）、③飢え（hunger）という概念が提出され、それぞれが定義された［Wunderlich and Norwood (eds.) 2006: 26］。

①食料安全とは、「全ての人が、活動的で健康的な生活のために、常に十分な食物にア

35　1995 年から 2012 年の間で、農業補助金がつぎ込まれた作物のトップ 5 は、トウモロコシ、麦、綿花、大豆、米の順である。なかでもトウモロコシは群を抜いて補助金が投入されている。Environmental Working Group の HP より［http://farm.ewg.org/region.php?fips=00000］（2014 年 8 月 21 日最終閲覧）。

36　それまでは、1960 年代以降に飢えが社会問題となって以降、政府関係者、研究者、NPO、飢えの撲滅を訴える権利団体などが、それぞれ、アメリカ社会における飢えの定義や飢えを測定する方法についての研究を進めたが、それらについてのコンセンサスに至ることはなかったという。「飢え」「貧困」「無職」という言葉が、別々の事象をさすにもかかわらず、互換可能な事象として扱われることが多くあった。また、測定方法としても、例えば、「飢え」は、栄養不足と互換可能な事象として扱われることが多く、医学的データや食料摂取データが、飢えを測るために使われることがあった。別の研究では、食料支援を求める人びとの貧困データや動向を、飢えの指標として使用することもあった［Wunderlich and Norwood (eds.) 2006: 24］。

クセスができることで、最低限以下のことを含む。すなわち（a）十分な栄養がある、安全な食物を入手できること、（b）社会的に容認された方法で、容認された食物を手に入れるための確実な能力があること（例えば、非常食を食べたり、ごみあさりをしたり、盗みなどの方法をせずに）」。そして、②食料不安とは、「十分な栄養と安全な食の安定供給が限られているか、不安定であること。あるいは、社会的に容認された方法で、容認された食品を手に入れる能力が限られているか、不安定であること」を意味する。③飢えは「食料不足によって引き起こされる不安で辛い感覚」として定義され、「必ずではないが、食料不安をもたらす可能性がある」とされた［Anderson 1990: 1560］。

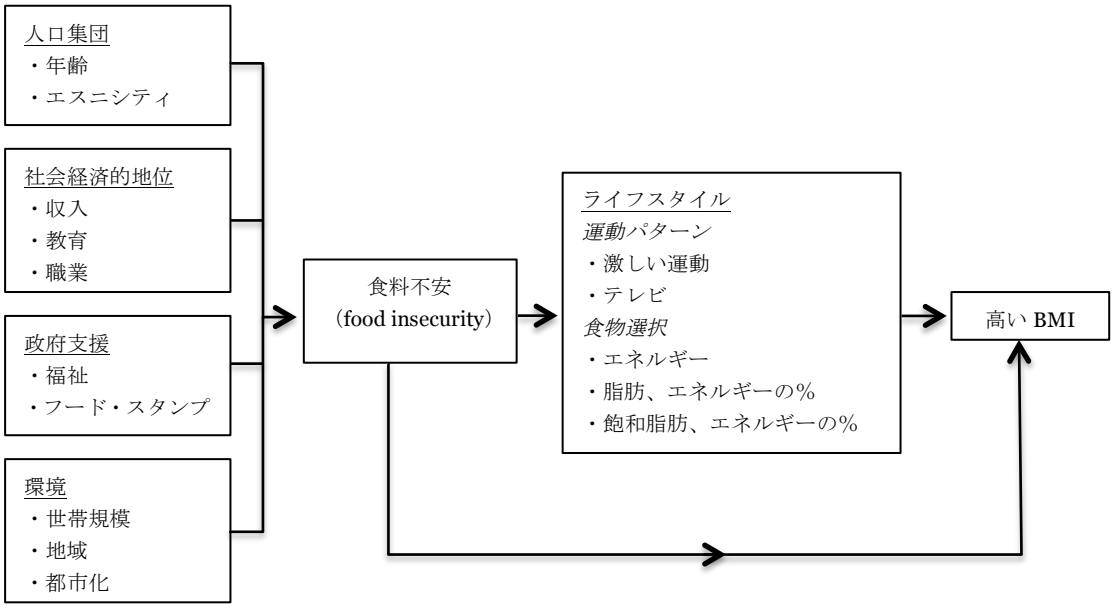
1960 年代以降問題化されてきた飢えだったが、「食料安全」「食料不安」の定義の登場によって、それらが、飢えや肥満を説明する際の包括的な概念となっていく。そして、この定義は、アメリカ農務省やアメリカ保健福祉省による人口調査でも使用されるようになっていった［Wunderlich and Norwood (eds.) 2006: 27］[37]。食料安全についての定義や測定方法が議論されていくなかで、貧困と肥満の関係についての研究も提出されるようになる。

おそらく誰もが疑問に思うことだが、貧困者層は食物を買うお金がなく、飢えていると考えられるのに対し、なぜ太るのかということだ。通常、飢えは不十分な食料供給と栄養不足によって引き起こされる。それに対し、太るのは、食物の過剰摂取によって引き起こされると考えられてきた。そのため、当初は、食物が十分に確保できないはずの貧しい家庭の人びとに太った人が多い理由がはっきりせず、実は、かれらは飢えてないのではないかと疑問視されることもあった［Townsend et al. 2001: 1738］。

こうした見方に対し、肥満と社会経済的地位（socioeconomic status）の関係を指摘した初期の研究や［Sobal and Stunkard 1989］、エスニック・マイノリティの低所得者層に肥満率が高いことを指摘する研究［Kumanyika and Grier 2006］、低所得と教育水準の低さが、肥満に関係することを指摘する研究［Drewnowski and Specter 2004］など、貧困と肥満が関連づけられる研究が提出されていく。また、飢えと肥満は、一見、矛盾しているように見える現象であるため、これを「飢えと肥満のパラドクス（Hunger-obesity paradox）」「食料不安と肥満のパラドクス（Food insecurity-obesity paradox）」と呼ぶこともある［Dinour, Bergen, and Yeh 2007; Dolnick 2010; Scheier 2005］。

貧困が肥満を招く理由の説明には、さまざまな見方がある。一つは、貧困による飢えが肥満を招くという解釈がある。すなわち、貧困者層の人びとは飢えを凌ぐために、値段が安くて、カロリーが高く、結果的に栄養価の低い食品を買う傾向があり、飢餓の状態でそ

37　アメリカ農務省は、2006 年に、「飢え」という言葉を、「食料不安」という言葉と明確に区別した。食料不安は、世帯レベルで十分な食料へのアクセスが制限されている不安定な経済的社会的状況であり、飢えは食料不安によって引き起こされる個人レベルの生理的な現象（例えば、不快感、疾患、衰弱、苦痛など）であるため、この二つは異なる状態として区別すべきだとしている。
［http://www.ers.usda.gov/topics/food-nutrition-assistance/food-security-in-the-us/measurement.aspx#hunger］（2014 年 2 月 18 日最終閲覧）。



【図 2-1：食料不安とそれに関連する過体重についての概念モデル［Townsend et al. 2001: 1739］（筆者改変）】

うした食品を食べることによって、逆に太るのだという。この解釈は、一時的な食不足による飢餓状態のときに食物を摂取すると、身体が、生理的な適応として体脂肪を溜め込むという考えに依拠している。

それに対し、ドレウノウスキらは、貧困者層における肥満は、貧困による飢えの問題というより、貧困による食料不安の問題であると論じる。かれらは、低所得で教育水準の低い貧困者層で、肥満率が高い理由として以下のような説明をしている。すなわち、精製された穀物、糖分、脂肪などのエネルギー密度の高い食品は安価で、味がおいしい。そして、貧困者層の世帯では、家計の食費の中で果物と野菜の消費の割合が低く、脂肪や糖分をたっぷり含んだ食物を摂取することが多い。そのため、これらが太る原因になるのだと指摘している［Drewnowski and Specter 2004］。

タウンセンドらは、貧困が肥満を引き起こす際のいくつかの要因を考慮し概念モデルを作成している【図 2–1】。それによれば、年齢やエスニシティ、社会経済的地位を表す教育、収入、職業、政府からの支援、世帯サイズや住居地域や都市化を表す環境などの要因が食料不安を招き、それが、生活スタイルの要因とも組み合わさって、直接的間接的に体重増加を引き起こすことが示されている［Townsend et al. 2001］。

まとめるならば、貧困者層の肥満率が高い理由として、以下のような要因が考えられているといえよう。低所得者層が多く住む場所では、健康的で手頃な値段の健康的な食品へのアクセスが限られていること、また、公園などの運動ができる場所が少ないこと。また、貧困によって飢餓状態と過食が繰り返されること。さらには、生活上の経済的なストレスがあり、肥満を誘引する食品のマーケティング戦略のターゲットとなりやすいこと、満足

な医療を受けることができないため、慢性病の診断治療が放置されてしまうことなどだ[38]。以上のような要因の影響を受けやすいため、貧困者層は肥満になりやすいという見方が、今では広く支持されている。

それに対し、貧困と肥満の関連性を指摘するこうした研究に矛盾する研究や批判的な研究も存在する［e.g. Chang and Lauderdale 2005; Ogden et al. 2010; Zhang and Wang 2004］。例えば、アメリカ疾病予防管理センターの調査では、1988 年から 1994 年の間のデータと 2005 年から 2008 年の間の国民健康栄養調査（NHANES）のデータを比較すると、収入と教育によって決められる社会経済的地位と肥満の関係は「性別や人種、エスニシティによって異なる」[39]としながらも、男女とも、所得、学歴、人種に関係なく、全人口において肥満率の増加が見られると報告されている。現在 7200 万人以上の成人（20 歳以上）が肥満であるが、そのうち 41%（約 3000 万人）が「高所得」（貧困水準 350%以上[40]）に分類される人びとで、39%（約 2800 万人）が「中所得」（貧困水準 130%から 350%の間）、20%（約 1500 万人）が「低所得」（貧困水準 130%以下）に分類される人びとであると指摘しており、高所得に分類される人びとの間で肥満率が高いことが明らかにされている［Ogden et al. 2010: 3］[41]。

この研究結果からは、肥満と貧困の関係は複雑であり、貧困層のみにおいて肥満が増加しているとは一般化出来ないことが分かる。しかし、アメリカでは、貧困が肥満を引き起こすという解釈が大勢である。公衆衛生の肥満予防対策も健康格差を克服すべき課題として乗り出している。

38　Food Research and Action Center より［http://frac.org/initiatives/hunger-and-obesity/why-are-low-income-and-food-insecure-people-vulnerable-to-obesity/］（2014 年 2 月 18 日最終閲覧）。

39　さらに、この調査によって明らかになったことは「非ヒスパニック系の黒人とメキシコ系アメリカ人の男性については、高所得者のほうが、低所得者よりも肥満の傾向がある。高所得者の女性は、低所得者の女性よりも、肥満ではない傾向がある。男性については、肥満と教育の間に有意な関係は見られないが、女性については、大卒者の方がそうでない者と比べると、肥満ではない傾向がある」とされている［Ogden et al. 2010: 6］。

40　2008 年、貧困水準（貧困基準収入：Poverty Income Ratio）350%とは 4 人家族で世帯の年間所得が 7 万 7000 ドル、貧困水準 130%とは 4 人家族で世帯の年間所得が 2 万 9000 ドルにあたる［Ogden et al. 2010: 6］。

41　他にも、Zhang と Wang［2004］は、国民健康栄養調査（NHANES）のデータを分析した結果、1971 年から 2000 年の 30 年のあいだで、肥満者の数は増加しているが、社会経済的地位（学歴に基づく）と肥満の関係は弱くなっていると報告している［Zhang and Wang 2004］。また、Chang と Lauderdale［2005］も、これまでの調査では貧困と肥満が関連づけられていたが、肥満の流行は、貧困者層に限られるわけではないと指摘している。例えば、ここ 30 年間は、貧困者層においてのみ肥満者が増加したわけではなく、全ての収入レベルで増加している。増加率で見ると、黒人の女性は、中間所得者層の間で肥満が 27.0%増加しているが、低所得者層の間では 14.5%の増加であった。また、黒人男性で見ると、高所得者層の間で 21%増加していたが、貧困に近い層では 4.5%、貧困者層では 5.4%の増加であった。つまり、社会経済的地位という曖昧なカテゴリーで、性別や人種、経時的な変化が関係していることを見逃していると述べる［Chang and Lauderdale 2005: 2127］。

3.　公的扶助としての食料支援プログラムと肥満対策

3.1　カリフォルニア州の「肥満の原因となる環境」への取り組み

サンフランシスコから北東へ車で 2 時間程の場所にある州都サクラメントに、カリフォルニア州公衆衛生省がある。ここには疾病予防管理センターの資金援助を受けた「カリフォルニア肥満予防プログラム（The California Obesity Prevention Program）」があり、さまざまなプログラムの運営管理を行っている。筆者が調査を行った、食料支援プログラムの一つである WIC プログラム（Special Supplemental Nutrition Program for Women, Infants, and Children）も、このプログラムのパートナー機関の 1 つである。

新しい肥満予防プロジェクトは、数年単位のファンディングによって成り立つため、既にある制度の仕組みのなかで連携を図ることが、継続的な予防政策の実施のためには大切である。カリフォルニア州公衆衛生省を中心とするパートナー機関や大学などの研究機関は、各カウンティ（行政区画）の公衆衛生と協力しながら、長期的短期的なものを含め多くのプロジェクトが進められている。カリフォルニア州の 58 あるカウンティの一つ、オークランドを郡庁所在地とするアラメダ・カウンティ公衆衛生部のスタッフによると、プログラムの情報は、学校や医師によって親に情報提供されたり、あるいは、教会やコミュニティ組織、プレスクールなどが情報を伝える媒介機関として機能したりしているという[42]。

また、「カリフォルニア肥満予防プログラム」の研究機関である、カリフォルニア大学バークレー校にある「体重と健康のためのセンター（The Center for Weight and Health）」のディレクターは、カリフォルニア州はアメリカにおける肥満研究のリーダー的存在なのだと自負した。なぜなら、ひとつには、カリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学サンフランシスコ校、スタンフォード大学などの研究機関があること。そして、二つめには、学校でのソーダ販売禁止に見られるように（2007 年当時、シュワルツネッガー知事は小学校と中学校からソーダ販売を禁止する法案を通そうとしていた）、十分の一のアメリカ人が住むカリフォルニア州が何かをやれば、食品業界などはそれを無視できないのだと言う[43]。

カリフォルニア州公衆衛生部局が発行した『2010 年カリフォルニア肥満予防プラン：明日への展望、今日の戦略（*2010 California Obesity Prevention Plan: A Vision for Tomorrow, Strategic Actions for Today*）』では、低所得者層における肥満率が高いことが指摘され、かれらが住む環境の改善の必要性が説かれている。その理由は以下のように書かれている。「低所得者層の多くの子どもたちが（子どもの人口の 40%以上）、不均衡に、

42　2008 年 2 月 13 日に行った、アラメダ・カウンティ公衆衛生部の疫学を専門にコミュニティ・アセスメントを行うスタッフとのインタビューから。

43　2007 年 12 月 19 日に、バークレー大学の彼女のオフィスで行ったインタビューより。

肥満のリスクにさらされている。有色人種、低所得者、低学歴の人びとの間で肥満率が高いのは、健康的な食品を手に入れることなど、安全で健康的な環境へのアクセスにおいて格差があるためだ」［California Department of Public Health, California Obesity Prevention Program 2010: 5］。このプランの中では、肥満増加の要因となる環境、すなわち、安くてカロリーの高い食物が手に入りやすい環境、運動不足にならざるをえない環境が、貧困者層に肥満が増加する要因だとされている。この肥満増加を誘引する環境のことを、近年出てきた呼称であるが、「肥満の原因となる環境（obesogenic environment）」[44]と呼ぶ。これは、貧困者層に肥満が増加している要因を、生物学的に説明するのではなく、環境の変化の結果として理解し、環境改善によって肥満を予防するべきだという考えにもとづく［French, Story, and Jeffery 2001; Hill et al. 2003］。

低所得者層や人種／エスニック・マイノリティの人びとは、運動や食物選択のリソースという点において、不均衡に不健康な環境にさらされている。テイラーらは、公平な扱いのために、健康的なコミュニティ作りをはじめとした健康格差の是正が必要であり、そのための環境改善は環境正義（environmental justice）であるとする［Taylor et al. 2006］。

その一方で、環境に介入するのは、成人の個人に介入しづらいためだという事情があることも付け加えておかねばならない。低所得者層の青少年向けのコミュニティプログラムを組織する第三セクターのスタッフは、肥満を減らすための政策は、個人への介入と環境への介入の二種類があるが、環境への介入がメインに行われていると語る。さらに、「子どもの肥満は公衆衛生で介入できるが、大人の肥満は差別の問題やボディ・イメージの問題もある。〔アメリカは〕医療システムが混乱していることに加えて、文化的な問題もあるので介入できない」と述べる[45]。成人の食生活や生活改善に介入することは困難であるが、子どもを対象にすることは、差別などの問題を回避できるという。そして、子どもへの介入は、必然的に、親（特に母親）がセットとして対象となる。こうした点から、母親とその子どもをターゲットにする食糧支援プログラムである WIC プログラムは期待されているのである。

次節では、WIC プログラムを中心とした、貧困者層の食料支援と肥満予防の取り組みを、フィールドワークのデータから描写していくことにしよう。

44　「肥満の原因となる環境」とは、具体的に、以下のような特徴が挙げられるとされている。まず、健康的な食品（新鮮な野菜とフルーツ）の値段は比較的高く、低所得者層が手の届く値段の新鮮な食品が売っていない。特に地方の低所得者層でマイノリティ・コミュニティに住む人びとは、近隣にスーパーマーケットがなく、新鮮な食物へのアクセスが困難な環境であること。炭酸飲料などの砂糖入り飲料が他の飲料に比べて非常に安価で手に入りやすい環境であること。公園、歩道や自転車用道路がなく、特に低所得者層やマイノリティ・コミュニティは治安の悪さや交通の危険によって子どもの安全な遊び場がない環境であること。不健康な食品や飲料の広告が多い環境であること［California Department of Public Health, California Obesity Prevention Program 2010: 2–4］。

45　2007 年 12 月 20 日バークレー市内にあるプログラムオフィスで行われたインタビュー。

3.2　WIC プログラムの概要

筆者は、B 市の WIC 施設にて、2006 年の 11 月から 2007 年の 4 月、2007 年の 6 月から 8 月までの調査を行った。インフォーマントの栄養士レイチェル（仮名）のカウンセリングルームで参与観察を行った。調査を始めて最初の 1 ヶ月近くは、誰も使っていない部屋で、WIC 施設のスタッフ用のマニュアル本を読んで問題に答えるという作業をひとりで行った。そのうち、施設内である程度の信頼を得られたところで、カウンセリングルームに入れてもらうことが可能になった。その後は、週に 2 回～4 回、午後に足を運びインフォーマントである栄養士レイチェルにつきっきりで調査観察をしていた。午後は、多くて約 5 人から 6 人、少ない日であれば 1 人のクライアントのカウンセリングを行う。総計約 130 人のカウンセリングを見てきた（カウンセリングをせず、フードチェックの受け取りのみのクライアントもいる）。クライアントがいるときに筆者から口を挟むことはまれであるが（クライアントから話しかけられることはたまにある）、クライアントがカウンセリング部屋にいないあいだ、レイチェルとは、日常的な会話のやり取りや、筆者の投げかけた質問をきっかけにした会話を何度も行った。本章は、その中から得られたデータを使っている。

WIC プログラムとは

まず、WIC プログラムの概要について説明しておきたい。前節までに説明したように、アメリカの貧困者層の食の問題は、アメリカ農務省が管轄する数々の食料支援プログラムによる公的扶助の対象となっている。その一つである WIC プログラムは、その正式名称（Special Supplemental Nutrition Program for Women, Infants, and Children）が表す通り、低所得者の妊婦、授乳中の女性、乳児、5 歳以下の乳児／幼児を対象とした、栄養補助プログラムである。このプログラムは、「低所得の妊婦や乳幼児やその母親を対象として、栄養価の高い食料の支給、栄養教育の提供、その他の保健医療サービスや社会サービスの紹介を行う制度であり、人の成長や発達における重要な時期に初期介入を行えば、将来、発達面や健康上の問題の発生を妨げる」という考えに基づいて実施されている［橋都 2010: 194］。

カリフォルニア州では、公衆衛生部局が実際の運営管理を行っている。WIC プログラムの大きな特徴として、受給資格がしぼられていること、栄養カウンセリングが義務づけられていること、支給される食品があらかじめ定められていることがあげられる。これらは、フードスタンプと比較する上での大きな違いだ。現在、アメリカで生まれた乳児のうちの 53%は、WIC のサポートを受けているとされ、プログラム規模の大きさが伺える[46]。また、表 2–2 から分かるように、WIC 受給者数とプログラム・コストの推移は、2013 年に減少が見られるものの、ほぼ毎年増加している。

46　［http://www.fns.usda.gov/wic/aboutwic/wicataglance.htm］より（2014 年 2 月 18 日最終閲覧）。

年度	受給者数（千人）	プログラム・コスト（百万ドル）			一人当たりの月平均食品コスト（ドル）
		食糧パッケージ	栄養教育／行政コスト	合計	
1974	88	8.2	15.68	10.4	15.68
1980	1,914	584.1	18.58	727.7	25.43
1985	3,138	1,193.2	31.69	1,489.3	31.69
1990	4,517	1,636.8	30.20	2,122.4	30.20
1995	6,894	2,511.6	30.36	3,436.2	30.36
2000	7,192	2,853.1	33.06	3,982.1	33.06
2005	8,023	3,602.8	37.42	4,992.6	37.42
2010	9,175	4,562.8	39.15	6,683.4	41.44
2013	8,663	4,522.2	1,928.8	6,514.0	43.50

【表 2-2：WIC 受給者数とプログラム・コストの推移（2014 年２月７日現在)】
（プログラム・コスト合計には、プログラム評価、ファーマーズマーケット栄養プログラム、特別プログラム、インフラ整備も含む。）
（アメリカ農務省［http://www.fns.usda.gov/pd/wisummary.htm］より筆者修正）（2014 年２月７日最終閲覧）

WIC 受給の条件

WIC を受給するためには、以下の 4 つの要件を満たしていなければならない。第一に、受給カテゴリーの、妊婦と産後 6 ヶ月の女性、産後 1 年までの授乳中の女性、1 歳未満の乳児、5 歳以下の幼児であること。第二に、所得が、連邦政府の決める貧困ラインの 185% 以下でなければならないこと（【表 2–3】参照)。第三に、給付を受ける州に居住していなければならないこと。第四に、栄養上のリスクがあると認定されなければならないこと。調査当時、栄養リスクとは「1. 貧血や低体重、過体重、妊娠合併症などの医療をベースとしたリスクがあること、2. 食生活ガイドラインを満たさない、あるいは、栄養摂取が不十分な生活上のリスクがあること」とされていた。とはいえ、筆者が見た限り、栄養リスクが低いため WIC のサービスを受ける資格がないと追い返される人はいなかった。

WIC オフィスでの検査とカウンセリング

WIC プログラムのオフィスでは、一回のアポイントメントで、体重・身長・血液検査を行い、食習慣のアンケートに答え、栄養カウンセリングを受ける。そして、次回のカウンセリングのアポイントメントを 3 ヵ月後にとる。通常のアポイントメントとは別に、授乳のためのレクチャーも開かれる。レクチャーを受けた人には、授乳パッドや搾乳機の入った授乳キットが配られる。スタッフには、カウンセリングを受け持つ女性の栄養士が二人、

世帯の人員数	年収	月収
1	$18,130	$1,511
2	$24,420	$2,035
3	$30,710	$2,560
4	$37,700	$3,084
5	$43,290	$3,608
6	$49,580	$4,132
7	$55,870	$4,656
8	$62,160	$5,180
8+	$6,290（一人増加するごとに）	$525（一人増加するごとに）

【表 2-3：WIC の所得ガイドライン（2006 年 7 月 1 日から 2007 年 6 月 30 日まで有効)】（フィールドワークの記録より）

受付（フードチェックの発券などを行う）の女性が二人、マネージャークラスの栄養士が一人いて、母乳のレクチャーを行う人が週に 3 日程度オフィスに来ていた。英語が話せないクライアントも多いため、カウンセリングを行う栄養士や受付スタッフは英語とスペイン語を両方とも話す。

食品受給の仕組み

クライアントはカウンセリングが終わったあと、フードチェックを発行してもらう。フードチェックで手に入れることが出来るものは、乳児用ミルク、牛乳、チーズ、卵、シリアル、豆、ピーナッツバター、にんじん、ツナ缶、ジュースなどである[47]。そして、WIC のフードチェックで買える食品のなかでも、例えば、シリアルやジュースなどは交換できるブランドが指定されている[48]。フードチェックには、どの種類の品物をどれくらい受給できるかが記されている。例えば、牛乳とチーズと卵を例にとってみると、牛乳の場合、「乳牛、液体、低温殺菌されたもの（ガロンのみ）（Milk-cow, Fluid, Pasteurized (Gallons only)）のものを 2 ガロンまで」、チーズは「チェダー、ジャック、アメリカン、モツァレ

47　ただし、これらの食糧品目は、2007 年に改訂され、2009 年 10 月から新制度に移行したこともあり、食品の種類も拡大している。従来の食品に加え、豆腐やトルティーヤ、ブラウンライスも含まれるようになった。

48　調査当時、シリアルは「General Mills」「Kellogg's」「Malt-o-meal」、ジュースの場合、ボトルのアップルジュースは「Hansen's」、冷凍の濃縮アップルジュースは「Langers」など、というようにブランドが指定されていた。

ラを 0.75 パウンド（12 オンス）以上（Cheddar, Jack, American, Mozzarella in 0.75 lb (12 oz) or Larger）」を 2 パウンドまで、卵は「AA[49]白色、スモール、ミディアム、ラージ（AA White, SM, MED, LG）」を 2 ダース（ダース売りのみ）まで買え、この三つは 20.97 ドルを超えてはいけないと記載されている。オーガニックのものや、卵だとブラウンエッグやケージフリーのもの、ビタミン強化卵などは買えない。このフードチェックが使える店は、WIC ストアと、その他、数種の大手スーパーマーケットである。フードチェック以外に、ファーマーズマーケットで野菜と果物を 20 ドル分購入できるチェックが配られることもあった。

WIC が提供している食品の中にはジュースがあり、フードチェックのなかに必ず含まれる。筆者はそのジュースの一つを飲んだことがあるが、糖分が多く甘い。インフォーマントのレイチェルは、「私はジュースを配りたくない」と口癖のように言っていた。彼女に、なぜジュースを配るのかという質問したことがあるが、分からないけど、いろんなポリティクスが絡んでいるのでしょうとあきらめ気味に語った。もちろん、フードチェックをジュースに交換しなければいいのだが、少なくともカウンセリングにおいては、ジュースがいるかいらないかという選択肢はない。

とはいえ、レイチェルは、WIC の良いところは、フードスタンプと違い、食品の選択肢が少なく決まったものしか手に入れられないことだという。選択肢がある場合、「彼らはもし今 5 ドルあれば、ファストフード店に行く。今は 1 ドルでカリフラワーが買えるのに。」とレイチェルは言う。なぜなら、「自分の食事が悪いと気付いていても、作り方を知らないから」だと言う。彼女はそのような人のためにレシピブックを配ったり、簡単な調理法を教えるようにしている。

3.3　栄養カウンセリングの現場を中心に

クライアントは、あらかじめ受付で受け取った健康状態や食事についてのアンケートに回答する。それを見ながらレイチェルは、カウンセリングをしていく。カウンセリング中の雰囲気や、クライアントの関心のありなしによって、カウンセリングは進められる。以下、カウンセリングの事例をいくつか紹介する形で、どのような栄養指導が行われているのかについて、また、カウンセリングを通して知りうる WIC を訪れる人びとの生活の状況などを説明していく。

食習慣の多様性と「典型的なアメリカ人」像

カウンセリングの際、必要に応じて、デイリーフードガイド（1–3 歳までの子ども、4 歳と 5 歳の子ども、妊娠・授乳中の女性用の 3 種類がある）のリーフレットを使う。デイリーフードガイドとは、1 日の推奨食物摂取量が表化されており、摂取すべきフードグル

49　AA は卵の鮮度のグレードを表す。AA はグレードが一番良く、続いて A、B となる。

ープと摂取量に分かれる。フードグループは、「果物と野菜」グループ、「パン、穀物、シリアル」グループ、「乳製品」グループ、「たんぱく質を含む食物」グループの 4 つに分けられている。それぞれのグループにはそのグループの食べ物の絵、一日に必要とされるサービング[50]数と、各フードグループの食べ物、サービングサイズの 4 つのコラムに分けられている。こうした分け方は、1992 年に農務省が提示したフードガイドピラミッドに従ったものである。

一口に栄養指導といっても、これを食べなさい、これは食べてはダメ、というものではない。筆者が観察した限りでは、そういう指導の仕方はほとんどなされていなかった。あるとき、妊娠中の高校生の女性が来訪した時、レイチェルは、デイリーフードガイドのリーフレットをテーブルの上に置いて、この中でよく食べるものや好きな食べ物は何かと聞き、彼女が言った食べ物に丸印をつけながら「いいね、ちゃんと摂っているね」とほめた。パスタが好きだと言った時には「パスタのソースからもたくさんの野菜が摂れるものね」と応え、どんなものからも野菜は摂れるということを教えようとする。

アンケート用紙、デイリーフードガイドのリーフレットなどは、すべて英語版とスペイン語版がある。また、「穀物」グループの中には、パンやご飯、トルティーヤなどが例示され、エスニシティが多様で、食文化も多様なことを示している。2004 年のデータでは、WIC の参加者は、ヒスパニック系が 39%、白人系が 35%、黒人系の人びとが 20%を占めており、エスニシティや人種の多様性がある[51]。そのため、食文化も多様であり、栄養の摂り方も多様性があるため、カウンセリングでは、ある食べ物を推奨したり、何を食べなければならないとアドバイスすることには注意深かった。エスニシティや人種の多様性は、食習慣の多様性にもつながるが、議論を引き起こすこともあるからだ。

例えば、離乳食の指導については、しばしば議論になった。「6 ヶ月から 12 ヶ月の乳児へのシリアルの与え方」という紙が筆者の調査施設に回ってきたことがあった。レイチェルと他のスタッフは、多くの文化にはそれぞれの習慣があり、シリアルを潰して乳幼児に与えるというように、形式的に統一することに対して否定的に捉えていた。ある日、8 ヶ月の息子を抱えた母親がカウンセリングにやってきた時、母親は、粉ミルクと潰したシリアルを半分半分にして入れて飲ませていると言った。レイチェルは、彼女が帰った後、子どもにとっては消化しにくくあんまりいいことではない、と語った。しかし、医師がシリアルとミルクを混ぜて与えるよう指導しているようで、WIC のカウンセリングに来なくなるといけないから強く言えないとのことだった。

レイチェルだけでなく、WIC などの公衆衛生関係で働く人びとは、エスニシティと食の多様性への配慮とともに、「典型的なアメリカ人」像というものも持っているようだった。

50　一般の人が、家庭などで一回に食べる量のこと。サービングは、重さや体積の単位ではなく、牛乳コップ何杯、卵何個などという表示の仕方をする。

51　アメリカ農務省の HP より［http://www.fns.usda.gov/wic/wic-racial-ethnic-group-enrollment-data-2004］（2015 年 3 月 14 日最終閲覧）。

そして、その「典型的なアメリカ人」像を批判的に捉えていることが理解できた。

レイチェルは、18 歳の時にスウェーデンから来て以来、アメリカ人と結婚し、ずっとアメリカに住んでいるため、特にそのような像を強く持っているようだった。筆者との会話でたびたび、彼女がスウェーデンにいた時と比較しながら「典型的なアメリカ人」について話してくれた。スウェーデンでは、彼女は、自転車などを使って買い物に頻繁に行っていたという。それに対し、彼女が象徴的に思い描く「典型的なアメリカ人」は、週に一度、広い駐車場を持つ大型スーパーマーケットに車で行き、一週間の分の保存が利く冷凍食品、缶詰食品やハイカロリーでお腹にたまる食料を買うのだ。そのため、新鮮な野菜や果物を食べる機会が少ない。それが、彼女の考える「典型的なアメリカ人」だった。また、前述の「体重と健康のためのセンター」のディレクターは、最近、アメリカでは、料理をしない人が増えていると話す。保存がきく冷凍食品や缶詰食品などを買う人が多いため、調理器具を持たない家庭もある。缶切りが不要なプルタブ式の缶詰が売り出されるようになったのもその証だと述べた。

低所得者層に限らないだろうが、仕事や育児に忙しい人にとっては、毎日スーパーに行けるわけではないだろう。確かにクライアントのなかにも、1 ヶ月に一度しか買い物に行かないという女性もいた。この「典型的なアメリカ人」は、ある種、アメリカの食習慣や肥満を問題化するときに定型的に語られる仮想敵でもあるのだ。

ある日の午後のカウンセリング

では、さらに具体的なカウンセリングを描写していくことにしよう。ある時、12 ヶ月と 4 歳の息子二人を連れた黒人女性がカウンセリングルームに入ってきた。レイチェルが別室で長男の身長と体重を測る。その後カウンセリングルームに戻ってきてから、BMI のチャートを母親に見せて、「少しだけ過体重ね。でもダイエットはさせたくないの。増えないようにするといいわ。そのうち身長も伸びるから」と言う。彼女は母親が応えたアンケート用紙の「一日に何時間テレビ（ビデオゲーム、映画、ゲームボーイを含めて）を付けていますか？」という項目を見ながら、「テレビを付けっぱなしにするのは止めた方がいいですよ。お腹が空いたと思わせるようなトリガーがたくさんあるでしょう。シリアルの CM とかね」と助言した。母親は、「ふーん」とそれほど関心なさそうに返答する。

その後、母親が、子供にバニラヨーグルトやフルーツヨーグルトを与えているのよという話をする。レイチェルが「ヨーグルトだからって健康に良いわけではなくて、バニラヨーグルトなんかは砂糖がたくさん入っているから、無糖ヨーグルトと半々に混ぜて食べると良いわよ」と助言する。アメリカのヨーグルトはたいてい甘く味付けされているが、母親は、ヨーグルトが必ずしも健康に良いわけではないと言われ、この話には関心を示し、たいそう驚いていた。

また別の日、黒人の夫婦が子供を連れてやってきた。カウンセリング中に子どもにソーダを飲ませてもいいかと聞いてきた。レイチェルは、ソーダには砂糖がたくさん入ってい

て虫歯が出来るから、子どもにはあまり良よくないと応える。ソーダに歯を 24 時間つけておいたら溶けるのよ。母親は、「本当に？」とびっくりした様子でおいしいけど飲むのを控えようと一旦は言った。その後、彼女は、ダイエットソーダならいいか、と聞いてきた。レイチェルは、ダイエットソーダもあまり良くないと応え、子どもが見えるところにソーダは置かずに、親がソーダを飲むときには、コーヒーカップで飲む（コーヒーを飲んでいるように見せる）といいよと笑いながら助言する。クライアントは、それはいい考えだと納得していた。

以上の描写から分かるように、多くのクライアントは、個々人それぞれ、食や栄養に関する「健康的なもの」についての知識を持っている。ヨーグルトであれば砂糖の含有量は無関係に健康的である、レギュラーのソーダではなくダイエットソーダを飲むほうがいいなどがそれである。レイチェルによるアドバイスに対し、同じ人でも、ある部分には無関心だったり、またある部分にはたいそう驚きを示したりする。当然ではあるが、人によって、食や栄養についての知識はまだらである。

乳幼児検診としての役割

調査中の悩みで多かったのが､子どもの体重に関する悩みや母乳についての悩みである。その意味で、WIC は、育児中の母親に対する、乳幼児検診のような役割も果たしている。

ある日の午後、ラティーノの母親が 2 歳の子供を連れて入ってきた。体重は 36 パウンド（約 16 キロ）あった。母親は「この子はちゃんと食べないから痩せているんじゃないかと心配している」と告げたが、レイチェルは問題ないと答えた。後に、その体重は 3 歳児の平均体重だとレイチェルは筆者に教えてくれた。

別の日には、東南アジア系らしき女性が 2 歳の息子を連れてカウンセリングルームに入ってきた。その母親はパートタイムの仕事で月 400 ドルぐらいを稼いでいると言う。母親が一番心配しているのは、子供が痩せ過ぎなのではないかということであった。だから、毎日夕食後にアイスクリームは食べさていると付け加える。

子どもが痩せ過ぎなのではないかという相談は、しばしば聞いた。特に、母乳で育児する親は、母乳が上手く出ていないかもしれないという母乳不足感から、子どもが痩せているという思い込みを持ちがちである。それだけでなく、母乳に関してはさまざまな習慣があり、どれが正しいのかが分からず、迷う親も多い。それに対し、母乳は習慣の問題だと助言する。とはいえ、母乳育児を強いるわけではなく、クライアントの生活体系に合わせて、搾乳機や粉ミルクを配る。

また、子育てをする上で、子どもに食事の時間を決め生活のリズムをつけさせることの必要性を何度も繰り返して助言していた。こうした習慣を身につけるためには、自分自身を頼るのではなく、時計に従って行動しなさいと指導する。例えば、赤ん坊が夜寝ないからといってミルクをあげるのではなく、泣いても我慢してあげないという習慣を作る。また、子どもがある程度の歳になったら、食事のときはテーブルと椅子につかせること。コ

ップから飲み物を飲ませることによって、口の周りの筋肉を鍛えると同時に、容器から物を口に含むということを覚えさせるといい、と助言する。こうしたアドバイスに対し、クライアントは聞き入る。以上の簡単な描写からわかるように、WIC は、子育てに悩む母親たちの相談の場にもなっていた。その理由としては、次に説明するように、家庭が孤立しがちで、相談する場がないということも一つの要因であると考えられる。

孤立した家庭：「まるでバブルよ」

一般的に、WIC に来るクライアントは、家庭環境や生活環境も複雑な傾向にある。そのため、カウンセリングでは、栄養教育だけでなく、クライアントの家庭環境や生活環境についての悩みに耳を傾け、できる限りアドバイスをする。英語がまだうまく話せない移民の人には、英語を無料で学ぶことができる施設を教えたり、妊娠している女性には妊婦のためのコミュニティを紹介したりする。また、高校生の妊婦が来ることもあり、彼女らには子育てと勉学の両立について促す。

相談したり頼ったりできる人がおらず、孤独に育児をしている人は、カウンセリングルームに来ると堰を切ったように話す。ある日、父親が子ども二人を連れてきたときのことがあった。母親が妊娠中に軽いドラッグ中毒になり、3 歳の子どももその影響を受けているようだった。その子の様子からそれが分かった。父親には新しい婚約者がおり、親権についてもめているのだと話した。子どもと母親、父親の婚約者との関係を考えると、子どもの家庭環境はあまりいい状態ではない様子だった。父親はカウンセリングに来るなり、そうした状況をいっきに話し始めた。レイチェルはそれを親身になって聞く。彼女は、聞く以外のことはできない。しかし、彼女が親身に話を聞くことによって、父親は少し安心した様子で帰っていった。

産後鬱の問題も、WIC に来る女性が抱える大きな問題の一つだった。産後に、何のやる気もおきず、子どもの相手をすることもきつく、理由も分からず慢性的な疲れを感じる女性たちが一定数存在する。ある日の午後、痩せた黒人女性がカウンセリングルームに来た。彼女は、レイチェルが話しかけても、心ここに在らずという感じだった。何のやる気も起きないと述べたきり、ときおり、クスッと笑って返すのみだった。レイチェルは、その女性に対して、カウンセリング翌日には、「調子はどう？」と電話を入れ、「あなたの力になりたいのよ」と伝え、元気づけた。

両親やコミュニティのサポートは子育て中の親の大きな助けになるが、WIC に来る多くの人は、子育てをする上での悩みを打ち明ける場がないようだった。レイチェルは、彼らにはコミュニティも無くかわいそうだと述べ、「まるでバブル（bubble：泡）よ」と言い表した。つまり、WIC に来る人たちは、さまざまなサポートや地縁、血縁などの関係が希薄化しており、まるで、泡のなかにいるようにそれぞれが孤立しているという意味である。泡という言葉には、いつはじけるとも分からない不安定な立場にいる、という意味も込められていたのかもしれない。

クライアントが WIC に来る一番の動機は、フードクーポンをもらうことであろうが、それでもやはり、上記に示したような人びとにたいして、WIC はそれ以上のさまざまな機能を果たしているように推察された。

経済的に困難な状況

経済的な問題が、生活上のストレスになっているケースも少なくない。ある日、東欧から移民してきた夫婦が子供 4 人を抱えてやってきた。部屋に入るなり、両親は、一番下の子供は 16 ヶ月だが発達が遅く、耳も聞こえていないかもしれないと、心配そうに告げる。体重も低いし、貧血気味で、カロリーが足りなさそうね、とレイチェルが言う。WIC で配る食べ物を、すり潰すか裏ごしによって子供に与える方法を手短に教える。かれらは医療保険に入っていなかったため、レイチェルは、カリフォルニア州の低所得者層向けの医療保険であるメディカルの人とすぐにコンタクトを取り、かれらが病院に行けるよう手はずを整える。「他にもいろんな問題がくっついている可能性があるから、すべての対応を素早くやらなければいけないの」とレイチェルは機敏に動き回っていた。

WIC で緊急を要するこうした例はそれほど多くはないが、WIC プログラムがなければ、この子どもの問題は放置されていたかもしれない。移民であるがゆえに、言葉の問題などによって情報を得ることが難しいこともあるだろうが、かれらは WIC の情報を得て、WIC 施設まで来て助けを求めることができた。以上からわかるのは、医療保険に加入しておらず、子どもを病院に連れて行かない理由が、経済的な問題によって引き起こされているだろうということだった。

調査中に見た限りでは、月収が 1000 ドルぐらい、あるいは、それ以下のクライアントも少なくなかった。一番低くて世帯の月収が 500 ドルという人もいた。シングルマザーで、母親の手を借りながら育児と仕事をする女性もいた。WIC はフードスタンプに比べ、参加するための所得基準は高めであるが、それでもやはり子育てをしながらさまざまな状況を抱えた家庭にとっては、かなり厳しい生活を強いられているであろうことは想像に難くない。

アンケート用紙には、「食べ物を買うためのお金やフードスタンプを使い果たすことはありますか？（Do you ever run out of money or food stamps to buy food?）」という質問項目があるが、ほぼ全員が「はい（Yes）」にまるをつけていた。そういう人びとにとっては、WIC でもらうフードチェックが、家計の一助となっているだろう。

カリフォルニア州アラメダ・カウンティの公衆衛生部局が主催する「ソーダ・フリー・サマー」（2008 年 6 月 14 日）

「カリフォルニア肥満予防プログラム」のパートナー機関の一つで、カリフォルニア州公衆衛生省と同じビル内にある、カリフォルニア・プロジェクト・リーン（California Project LEAN）は「肥満とそれに関係する慢性病を予防するための、学校とコミュニティの栄養

【図 2-2：炭酸飲料とその砂糖含有量】

と運動についての政策向上させる」ことに取り組むジョイント・プログラムである。そこで働くペギーは、栄養士の資格を生かしながら、法案の中の栄養摂取量のチェックを行ったりしているという。彼女は、アメリカの学校はコストを削減するために食品産業と手を組むケースが多いため、学校にソーダやジャンクフードがあたりまえのようにある状態なっていると語る。子どもがマーケティングの対象となっていることを、うんざりした様子で話した。ジャンクフードやソーダなどの食品にあふれた状況をどのように変えていくかが、肥満予防政策の鍵となると、政策に関わる人びとは口を揃えて言う。なかでもアラメダ・カウンティ公衆衛生部局の炭酸飲料に対する取り組みは、注目を集めている。

2008 年 6 月 14 日、筆者は、WIC のスタッフが教えてくれた、アラメダ・カウンティの公衆衛生部局が 2007 年から主催している、子どもをターゲットとした、「炭酸飲料を飲まない夏」という意味の「ソーダ・フリー・サマー・キャンペーン」のイベントに参加した。

イベントは、オークランド市から少し南へ下ったヘイワード市の低所得者層向けの団地の中庭で行われた。団地に住む子どもたちが約 30 人参加していた。大人も含めると、イベントには 100 人近くが参加していたのではないだろうか。このイベントは肥満予防を目的としていて、「炭酸飲料の中にどれほどの砂糖の量が含まれていて、それがいかに不健康であるかに人びとの注意を向けさせ」、炭酸飲料を飲まない日を作るように促すことだとイベントを主催するスタッフが説明してくれた。キャンペーンで配られるパンフレットには、そのパンフレットの左側には 10 週間分の表があり、ソーダを飲まなかった日を記入する。

中庭には、炭酸飲料の弊害を示すパネルが並べられている。なかでも各ブランドのソーダの横にそれが含有する分量の砂糖が並べられたパネルは目を引いた（【図 2-2】参照）。イベント担当者によると、アラメダ・カウンティはペプシコーラの会社からファンディングをもらっているため、会社は自社のジュースの砂糖含有量を示すことについて、反対しているのだという。

【図 2-3：炭酸飲料を巨大な缶に流し込んで捨てた後、レモン水を飲む子どもたち】

この日のイベントの最大の目玉は、家にあるソーダを持って来て、それをみんなで捨てるのだ。捨てるソーダを持ってくれば、「Soda Free Summer」というロゴの T シャツが一枚もらえる。子どもたちは、全員その T シャツを着ていた。イベントが始まると、子どもたちからは「わーい」というような感嘆の声があがった。「ソーダフリー！ソーダフリー！ソーダフリー！ソーダフリー！（Soda Free! Soda Free! Soda Free! Soda Free!）」という掛け声とともに、子供たちは「Toxic Waste」赤字で書かれた巨大な青色の缶に、自宅から持ち寄ったソーダを次々と流し捨てていく。ソーダの水しぶきが上がり、子どもたちは興奮する。そして、その後、レモン水が配られる（【図 2-3】参照）。このやや演劇がかった催しの後、ビンゴゲームが用意されていて、勝った人には景品が配られる。チャリティ福引き（ラッフル）では、スケボー、ミキサー、キックスクーター、フォンデュセット、コーヒー豆、料理用温度計、アメフトのボール、フラフープ、縄跳びなど、様々なおもちゃや健康グッズが景品として配られた。子どもの母親が景品を両手に抱え、自宅に戻る様子が印象的だった。近くにいた子供に、これからはもうソーダ飲まないの？と聞いたら、うつむいて「ノー（飲まない）」と小さな声で応えた。

このイベントは、キャンペーンを周知するために低所得者層の子どもたちをターゲットにして開催されたものだったが、ソーダ・フリー・サマーのキャンペーン自体は広い層をターゲットにしている。そして、2014 年現在もなお継続しており、今や、ニューヨークなど他の州にも波及しつつある[52]。

4.　引き受け手のないリスク

4.1　貧困者層の肥満対策の複雑な構図

本章の企図は、冒頭で述べたように、貧困の肥満化をめぐる状況を、貧困層に対する政府の支援システムの仕組みや現場の実践から多角的に捉え、貧困者層の肥満問題がどのよ

[52]　Soda Free Summer の HP より［http://www.sodafreesummer.org/］（2015 年 3 月 14 日最終閲覧）。

うに構成されているのかを知ること。そして、その上で、貧困者層の人びとが、肥満のリスクを引き受ける主体として、いかに自己意識を形成するのかということを考察することだった。描写から分かったいくつかの事柄を指摘しておこう。

政策レベルのリスク管理

第 2 節では、貧困者層の食と栄養不足解消に尽力してきたアメリカ農務省が、肥満問題にも深く関わっていることを確認してきた。貧困者層への食料支援プログラムをアメリカ農務省が担っているために、農務省による農業補助金などをめぐり、さまざまな利害関係の対立がある。そのため、既に述べたように、貧困者支援であるはずの食料支援プログラムが、逆に、貧困者層の肥満や健康問題を作り出しているのではないかという懐疑的な意見も存在する。カリフォルニア州の公衆衛生部局で働く栄養士が語ったように、企業から州へのファンディングが、政策の弊害となることもある。そうした複雑な利害関係のバランスの中で、肥満政策が成り立っているといえよう。

1980 年代以降、肥満が急激に増加したのは、貧困者層だけではなく、全人口においてであるという意見もある。とはいえ、女性（特に白人女性）の貧困層において肥満率が高いのも確かである［Ogden et al. 2010］。肥満予防介入施策は、しばしば差別の問題にもつながるが、「肥満の原因となる環境」の改善や子どもの肥満予防対策という形をとれば、それらの問題を回避しながら、予防施策を行うことができる。そこでターゲットにされるのが低所得者層の人びとが住む地域であり、低所得者層、特に、エスニック・マイノリティの人びとやその子どもとその親、とりわけ母親である女性なのである。第 3 節で描写した食料支援プログラムの一つである WIC は、その意味で、肥満エピデミックの歯止めをかけるために最適なプログラムとして期待されている。

カウンセリングに来る人びとの実践レベルのリスク管理

WIC のカウンセリングの現場に目を移すと、クライアントとして来訪する人たちには、経済的な困難を抱えている人たちが多い。食品にかけるお金をやりくりし、とりあえず当分の食べ物を確保しなければならない。貧困は食料不足や栄養不足としてのみ顕在化するわけではない。食料や栄養は生きていくために必須であるが、かれらが直面しなければならない問題は、それに付随して、子育てや家族関係、学業、仕事、健康など、所得の低さに起因した複数の問題が絡み合いながら、広範囲に渡る。もちろん、それらの問題は、貧困者層に限らず全ての収入レベルの人びとが生きていく上で抱える問題かもしれず、低所得者層のみに特徴的な事象を抽出することは困難なようにも思われる。それでもやはり、かれらに特有だと思われることを指摘するなら、移民者などがそうであるように、他の集団と比べて、地縁や血縁のつながりが希薄で、さまざまなセーフティネットが少ない状況で生きていく人が多いのではないかということだ。

科学ジャーナリストとして、ニューヨーク・タイムズ紙などにも記事を寄稿するグレッ

グ・クライツァーは、肥満増加の政治的、文化的、経済的要因について分析した自著のなかで、貧困者層の肥満について以下のように述べる。「貧困層の生活は、富裕層よりも、いろいろな要因に左右されることが多い。健康管理が行き届かないこともあれば、収入がとぎれることもある。食物や、食料品の購買力も、同じようにいいときと悪いときがある―気前よく買ってしまうときもあれば貯蔵庫が空っぽになりそうなときもあるのだ。明日はどうなるのか分からないのだから、今食べておかないと、と彼らは思う」［クライツァー 2003: 158］。「明日はどうなるか分からないのだから、今食べておかないと」という状況では、将来に起こるかもしれない病気を回避するために、今、減量することや肥満予防のために健康管理に励むことは、生活のなかの優先順位としては低いのではないだろうか。

公衆衛生や女性学の研究者の中には、貧困者層の女性や有色人種の女性の肥満率が高い現状を受け、肥満問題の解決にとって貧困者層の女性のサポートが不可欠であるとして、「肥満はフェミニストの問題である」と捉える研究者もいる［e.g. Probyn 2008; Yancey, Leslie, and Abel 2006］。例えば、カリフォルニア大学ロサンゼルス校公衆衛生学科に所属するヤンシーらは、アメリカでは、食料品の購入や食事の準備、子育てなどのジェンダー役割、新鮮な食物の入手や公園へのアクセスの地域による格差などの要因によって、貧困層や有色人種の女性が、肥満の原因となる環境の犠牲になっていると指摘する［Yancey, Leslie, and Abel 2006: 432］。

これに反対する逆の意見もある。つまり、肥満問題を貧困者層のなかに見いだし、その層に対し肥満予防介入を施し救済することが、人種差別や女性差別につながると危惧する見方である。歴史的にさまざまな非白人のエスニック・マイノリティを抱えるアメリカでは、「優れた」「文明化された」ミドルクラス以上の白人に比べ、「劣った」非白人の移民者、エスニック・マイノリティや労働者階級の貧困層は、身体や体重管理ができない人びととして結びつけられる傾向がある［Lupton 2012: 47］。このような画一的な表象に基づいて、肥満研究や貧困者層への肥満予防介入政策が進められている状況に対し、一部の研究者は、人種差別を助長し、エリート主義の押しつけによって、白人性の身体へと同質化していくことに危機感を示す［e.g. Azzarito 2008; Kirkland 2011］。例えば、アザリトは、肥満研究や肥満予防介入政策が、非白人のエスニック・マイノリティの人びとの身体を、白人的規範的身体への同化を推し進めている可能性を懸念する。健康格差の是正のために非白人のエスニック・マイノリティの人びとをターゲットにすることによって、逆に、人種化されたカテゴリーが再強化されるため、人種差別の危険性があると述べる［Azzarito 2008］。また、カークランドは、肥満問題を貧困層の女性の問題として定義しようとする態度に反論する。貧しい女性の生活状況を改善しようとする善意の努力は、結局は、かれらの人生にエリートの規範や道徳を押しつけることになり、それに反する人に対しては懲罰的なものとなってしまうと述べる［Kirkland 2011: 464］。さらには、貧困が原因で肥満を引き起こすのではなく、その逆で、太っていることが結果的に貧困を招くのではないかと指摘する論者もいる。つまり、肥満者に対する差別やスティグマを受けることによって、失業や低賃金の

仕事にしかつけない状況や結婚できない状況を招くため、貧困者層の女性に太っている人が多いのだと論じる［Ernsberger 2009: 26; Fikkan and Rothblum 2012］。

このように、貧困が肥満を誘引するという考えを持つ人びとも、それに批判的である論者たちも、「白人エリート（による権力）」と「マイノリティや女性などの貧しい人びと」という構図を想定しがちである。確かに、このような構図はあるだろうが、本章で描いたように、現場ではこうした対立があからさまに立ち現れるわけではない。対立の構図をイメージさせるこうした議論は、当の貧しい人びとの生活の実情を置き去りにしている嫌いがある。

肥満予防プロジェクトは、WIC などの既にある制度や枠組みを利用しながら、継続的な予防政策の実施が目指される。食料支援を運営する農務省にとっては、食料支援制度は歴史的にも農業政策としての役割も果たしてきた。現場の栄養士は、クライアントの食習慣や生活状況を包括的に判断しながら、栄養だけではなく生活のアドバイスを行う。一方、クライアントである貧困者層にとっては、支援を受ける目的は肥満予防ではなく食料を得ることである。本章で明らかにした「貧困者層の肥満問題」は、それぞれが各々の目的を達成するために組織され、動くなかで、輻輳的に構成されているといえるのではないだろうか。

4.2　引き受け手のないリスク

冒頭で述べたように、リスクが問題化されるプロセスでは、確率統計の技術が駆使されながら、未来の不利益が誰の決定によって生じる可能性があるのか、そして、その責任は誰に帰すべきなのかをめぐり、利害関係者の駆け引きや論争が繰り広げられる。そのとき、ある集合の統計的データは、確率という形をとることで、未来の生起可能性へと読み替えられる［市野澤 2014: 16］。貧困者層と肥満の関係で説明してみよう。低所得であるという属性を持つ集合が、肥満者を含む割合が高いという統計的なデータがあるとする。その統計的なデータは、その集合に属するある個人が、例え、現時点では肥満ではなくても、将来において肥満やそれに関連する病気になる可能性が高い、という未来の生起可能性へと読み替えられる。そして、低所得者の集合に属している個人は、自身の将来において、肥満や病気になる確率が高いと読み替えることによって、リスクを引き受ける責任者となるはずだ。かれらを責任主体とするために、さまざまなリスク言説や予防言説によって、かれら自身にそのことを認識させる必要がある。

しかしながら、ここでは、貧困者層の肥満問題においては、リスクの引き受け手はいないのではないか、ということを論じて本章を終えたいと考えている。その理由を（1）環境管理と個人の意思決定、（2）貧困者救済という考え方、という点から説明していこう。

まず、「肥満の原因となる環境」の改善という介入方法によって、肥満のリスク集団の一員であるという個人的集合的な意識の形成は、不要なプロセスとなってしまうということだ。「肥満の原因となる環境」の改善は、東浩紀が、ジル・ドゥルーズの管理社会論を継

承し、新しい秩序維持の方法と呼ぶような管理方法といえる。すなわち、東は、ひとりひとりの内面に規範＝規律を植え付ける「規律訓練型権力」に対し、人の行動を物理的に制限する権力として「環境管理型権力」が台頭しつつあると述べる。例えば、ビッグ・ブラザーが「食事は 30 分で終えろ」と命令する社会と、椅子が硬くて何となく 30 分で食事を終えてしまう社会は、どちらも食事を 30 分で済ませるという同じ効果が得られる。しかも、「環境管理型権力」では、規則を個々に内面化せずとも管理が可能なのだ［東／大澤 2003: 32−34］。「肥満の原因となる環境」の改善は、これと同じ原理に基づいている。貧困者層が住む区域に多い「肥満の原因となる環境」を整備することによって、貧困者層に健康的な生活の「自然な」選択を促すことが試みられている。いわば、貧困者層の無意識の選択を促すのだ。この方法のもとでは、かれらは、第 1 章で論じたような、意思決定主体としての集団的個人的な意識を形成する必要はなくなる。

そして、このような環境管理が公衆衛生施策に取り入れられた背景には、貧困者層に対する以下のような了解があるのではないだろうか。すなわち、かれらは、なんらかの助けを必要とした救済されるべき人びとであるため、かれら個人を決定者として責任を押し付けるわけにはいかないというものである。アメリカの福祉研究者渋谷博史によれば、アメリカの経済社会構造は、自由な市場経済における厳しい競争と、透明性の高い民主主義的な秩序で構成される「社会的階段」軸とする構造である。アメリカ社会では、人びとはその社会的階段を前提に、つねに「上を向いて闘う」ことによって、個人の自由と自立を獲得していくことが至上の価値と位置付けられている。そして、その社会的階段に登ることができない自助や自立が困難な「アメリカの経済社会の外部にいる人びとの内部化を促進する」ために、次善の策として福祉のメカニズムが登場する。それが、アメリカ型福祉である［渋谷 2010: 6］。社会的階段にたどり着けなかったり、登れない人びと、すなわち、老齢や疾病などに加え、資本主義経済の犠牲となった貧困者層の人びとは、救済されなければならないのだ[53]。福祉政策である WIC も、こうした典型的なアメリカ型福祉制度のもとに成り立っているのだ。つまり、「単なる栄養補給や母子の健康維持という目的だけでなく、それらを主たる内容とする福祉パッケージの実施を通して、母子が「健全なアメリカ・モデルの生活や人生」に入門できるように指導する意図」があるのだ［渋谷 2010: 14］。その意図のもとでは、福祉に依存する間は、彼らは、自らの意思決定の責任を引き受ける主体としての位置にいることは求められていない。

これらのことを考慮するならば、貧困者層の人びとは、リスクの意志決定主体にはなりえない。さらに既に述べたように、本章で扱った貧困者層に対する肥満予防の政策は、そ

53　もちろん、その一方で、アメリカ社会では「福祉依存」は、経済的自立ができていない人びとを指し、ネガティブなイメージを喚起する。フレイザーとゴードン［Fraser and Gordon 1994］は、「依存」の系譜学をたどり、所得を得ることができない意味で依存状態にある「子育てに集中する母親」は、1900 年代中頃までは認められていたが、現代は、それらの人びとの福祉への依存も承認されなくなりつつあると述べている。

れぞれのアクターは、各々制度の目的を達成するために組織されていた。その目的とは、厳密に言えば、「肥満を予防する」ことではない。以上の理由から、貧困者層に対する肥満予防対策という枠組みにおいては、リスクの引き受け手は不在である。そのため、帰責先のないリスクが浮遊しているといえるのではないか。

5. おわりに：第二部に向けて

アメリカでは、この 30 年の間に「肥満」や「過体重」者が人口に占める割合が、人口の 6 割以上を占めるようになった。マスメディア、保健医療、ダイエット産業は、懸命に減量を働きかけているが、その取り組みに反して、「過体重／肥満」者数が減少する兆しはない。ラプトンはこの状況について、面白い問題提起をしている。これまで、フーコー派の生権力論や統治性研究においては、健康は規範として人びとに内面化されることが指摘されてきた。すなわち、現代社会では、人びとにとっての健康とは、どのように生きるべきかという道徳的命令を含み、自発的に自己の健康管理に励む、従順で責任ある主体が構成されるとされる［Lupton 1995; Petersen and Lupton 1996］。しかしながら、こうした「義務としての健康」というこれまでの解釈は、現在の肥満者数の急増を前に、全く説明がつかないとラプトンは指摘する。肥満に関わるリスクについての情報は広く知られているにも関わらず、なぜ、人びとは、ライフスタイルの改善や体重管理を提唱する保健医療に従わないのかと問う［Lupton 2012: 96–97］。ラプトンは、その理由として、人びとは痩せることに抵抗しているのではないかという考えを提示している。

筆者は、貧困者層に対する肥満予防政策については、「痩せることに抵抗している」というようには考えない。むしろ、自らが肥満のリスク集団に含まれているという認識もないままに、貧困者層の肥満予防政策に組み入れられているのが現状ではないだろうか。

実際は、貧困者層だけでなく、すべての層において肥満は増加しているといわれている。にもかかわらず、貧困者層と肥満とが強く関連づけられている。その仕業の背後には、「白人エリート」たちの欺瞞が隠れていると、カークランドは糾弾する。「エリートは、自分たちのライフスタイルのおかげで健康に生きているが、貧しい人びとは太っているから悲惨だという口実をつけて、エリートたちは、がんばれば身体をコントロールできるというふりをしているだけなのだ」と［Kirkland 2011: 480］。そうであるならば、規範的身体という考えに縛られ、リスクコンシャスになっているのは、貧困の肥満化を作り上げているいわゆる「白人エリート」と言われる人びとなのかもしれない。

第二部から対象にするのは、1969 年にアメリカで誕生した、太った人びとの市民権の承認を求める社会運動であるファット・アクセプタンス運動と運動に参加する人びとである。かれらは、肥満として「医療化され、標準化され、管理されるような種類に属する人びと」［Hacking 2007: 311］であり、それを正当化する医学的知式や法制度に抗する人びとである。かれらの運動の動向や仕方に注目することによって、肥満やファットというカテゴリ

ーがどのように意味づけられてきたのか、また、運動にどのような変化をもたらしているのかを探っていくことにしよう。

第二部　ファット・社会運動・科学

第 3 章　ファット・アクセプタンス運動の展開にみる「ファット」カテゴリーの特殊性

1.　はじめに

本章以降の章では、1969 年にアメリカ合衆国で誕生したファット・アクセプタンス運動[54]という社会運動を扱うことによって、「ファット」概念の構築を吟味することに焦点を移していく。本章では、ファット・アクセプタンス運動の現在までの展開を追うことによって、「ファット」というカテゴリーが、これまで社会運動で論じられてきた「人種」「女性」「エスニシティ」「障害」などのマイノリティ・カテゴリーとは異なる特徴を持つことを明らかにする。ファット・アクセプタンス運動とは、肥満差別の廃絶を訴えながら、身体サイズと外見に対する制度的改変と社会的な意識の変化を促すことを目的としている。

アメリカでは、1960 年のキング牧師を中心とする公民権運動の隆盛を皮切りに、それらに触発されて様々な社会運動が展開した。エスニック・マイノリティの運動や第二波フェミニズム運動、障害者運動、さらに 1969 年のストーンウォール暴動[55]は同性愛解放運動の起爆剤となった。これらの運動の参加者たちは、人種や性、身体の差異によって機会や権利が剥奪されてはならないと訴え、アメリカ社会の市民として受け入れられることを目指してきた。差別廃絶や政治的権利の獲得を求めるこれらの運動は、やがて独自のコミュニティや文化の確立、肯定的なアイデンティティの構築を促した［ギトリン 2001］。

こうした一連の社会運動のなかに、本論で扱うファット・アクセプタンス運動も位置づけられる［Sobal 1999: 234］。肥満差別は、見かけによるステレオタイプの付与が差別に結びつくという点で、人種差別、性差別、障害者差別などと類似する点が多くある。しかしながら、公民権運動やフェミニズム、障害者運動などがある程度の成功を収めてきたのに比べ、ファット・アクセプタンス運動は遅れを取っているといわれる。社会学者のアナ・カークランドは、ファット・アクセプタンス運動は人種差別や女性差別の廃絶を訴える社会運動に倣って、身体サイズや体重を市民権として認知させることを目的として運動を展

54　ファット・アクセプタンス運動という呼称の他にも、サイズ・アクセプタンス運動、ファット・リベレーション運動、ファット・ライツ運動、ボディ・リベレーション運動など様々な呼称が共存している。

55　1969 年、ニューヨークの「ストーンウォール・イン」というゲイバーに立ち入り捜査に入った警察に対し、バーに居合わせた同性愛者らが、初めて警官に立ち向かって抵抗をしたと言われる。

開しようとしてきたが、ほとんど成果を出していないと指摘する［Kirkland 2003: 27］[56]。また、社会学者のアビゲイル・サゲイらは、運動に関わる人びとが「ファット」という言葉の持つネガティブな意味を否定するにとどまり、マイノリティ集団として独自の肯定的なカウンター・カルチャーを展開させるには至っていないと述べる［Saguy and Ward 2011: 69］。

こうした運動の遅れが指摘される背景には、これまで、アメリカでは肥満差別が問題として見なされてこなかったという事情がある。ところが、1990 年代から肥満者の人口に占める割合が急増し、最近になってやっと、それが最後の差別として問題化され始めた［Puhl and Brownell 2001］。そして、それが減量で解決できるようなものではないことを、人びとは徐々に認識しつつある。

運動がなぜうまく展開してこなかったのかを理解するには、ファット・カテゴリーの特殊性に注目する必要がある。マリリン・ワンは、筆者がフィールドワーク中に最も親交を重ねてきたインフォーマントであり、運動を代表するアクティビストでもある。筆者との会話の中で、彼女は、1990 年代初期に運動に参加し始めた頃、他のマイノリティ・カテゴリーとの類似性の指摘、例えば人種差別と太った人に対する差別の類似性を指摘し、だから太った人びとの権利も認めるべきだという論理で活動をしていたと回顧する。しかし、「現在は、それは違うのではないかという気がしている」と述べた。そして、「太った人に対する差別は、例えば、フェミニズムの問題でもあるけれど」、そのとき座っていたコーヒーショップの肘掛け椅子を指して、「この椅子はフェミニズムの問題ではなくて、建築の問題」だと説明した。椅子に肘掛けが付いていることによって、椅子にフィットできない人が出てくるからだ[57]。彼女の発言は、他のマイノリティ・カテゴリーとの類似点の指摘にとどまることが、ファット・カテゴリーの輪郭を逆に不鮮明にしていることを示唆している。他のマイノリティ集団の特性と部分的に共通することはあるが、むしろ共通しないところにファットの特徴があり、そこに運動を進めていく上での困難があるのだ。

こうした状況を踏まえ、本論では、ファット・カテゴリーを、他の社会運動で論じられてきたマイノリティ・カテゴリーとの関係において精査することを通じて、それがいかなる特徴を持つのかについて検討する。特に、1970 年代の第二波フェミニズムとの共鳴、そして 1980 年代以降の法的カテゴリーとしての「障害」の適用を通して[58]、ファット・アクセプタンス運動が女や障害というカテゴリーとの接続を求めたことに注目する。そして、

56　現在に至るまで、肥満差別に対し、連邦政府での保護方針がないのはもちろんのこと、ほとんどの州でも法制化の動きはない。唯一ミシガン州だけが、宗教、人種、肌の色、国籍、年齢、性、身長、婚姻関係とともに、体重に基づいた差別の禁止を法律で定めている（Elliott-Larsen Civil Rights Act）。その他に、ワシントン D.C.が外見による差別を、カリフォルニア州サンフランシスコ、カリフォルニア州サンタクルーズ、ニューヨーク州ビンガムトン、イリノイ州アーバナ、ウィスコンシン州マディソンの五つの都市が体重による差別を禁じているのみである。

57　2012 年 2 月 2 日、サンフランシスコ市内のコーヒーショップでの会話。

58　ただし、この年代区分は便宜的なものであり、緩やかな時代的つながりがあることは断っておきたい。

ファットというカテゴリーのバウンダリをどこに求め、運動を展開させようと格闘してきたのかを明らかにしていく。次節では、社会運動におけるアイデンティティ・カテゴリーについて、デビッド・バレンタインの議論を再び振り返りながら、本章の問題意識を明確にしておく。続く第 3 節では、ファット・アクセプタンス運動の歴史を概観し、第 4 節では「ファット」カテゴリーの特殊性について考察を加える。

2.　本章の問題意識：カテゴリー・アイデンティティ・差異

2.1　デビッド・バレンタインによるカテゴリーの議論を振り返って

一般的に、社会運動におけるアイデンティティのカテゴリー設定は、どのような言葉を使って、「かれら」が名乗るかということと、どのような言葉を使って「かれら」は名指しされるかという二つが交錯する地点において、重層的な問題を内包するといえる。つまり、個人的集合的アイデンティティの基盤となるカテゴリーが誰を指し示しているのか、それがどのような意味内容を持つものとして使用されているのか、その動態に焦点を合わせる必要がある。

こうした問題が人類学者にとって無関心でいられなくなった背景としては、80 年代以降、人類学者が研究対象を特定の地理的な場所に住む人びととその文化として措定し、明確な境界と集合性を持つ対象として描いていいのかという疑念が提出され始めたことと関係している［Clifford 1988; Gupta and Ferguson 1992］。そして、人類学の対象が、民族誌の記述以前に既に存在するのではなく、カテゴリーを通して存在しうることについて内省的に強く意識されるようになってきた［Boellstorff 2007; 森山 1996］。こういった集合性やカテゴリーについての議論の背後には、「かれら」とは誰のことなのか、という研究対象の名指しをめぐる問題として焦点化される。そして、人類学は、カテゴリーが問題になる場面の重層性に注目しながら、対象を描く必要性に向き合わなければならなくなったのだ。そこで、本章では、ファットを事例に、ファットというカテゴリーが誰を指し、どのような意味内容を持つものとして用いられているかについて歴史的に検証していきたいと考えている。

歴史的な検証に入る前に、ここで、すでに序章で紹介した人類学者デビッド・バレンタインによるトランスジェンダーの研究に注目することで、カテゴリーが指し示す人びととカテゴリーが構成する集合性の関係性を考察するための要点を理解しておく必要がある。民族誌の内容については序論でまとめたので、ここでは軽く触れる。トランスジェンダーというカテゴリーは、既存のジェンダー区分に当てはまらない多様な人びとを組み込むためのアイデンティティの包括的なカテゴリーとして 1990 年代に造られた用語である。包括的なカテゴリーであるため、そのカテゴリーが誰を指し示すのかは明確ではない。それでも、トランスジェンダーというカテゴリーを通して、規範から逸脱するようなジェンダーのあり方が説明可能になっただけでなく、そのように呼ばれる人びとの経験の理解の仕

方にも影響を及ぼしている。そして、バレンタインは、その社会的政治的な複雑なプロセスに注目している。彼はそのプロセスを、民族誌のタイトルでもある「トランスジェンダーを想像する（imagining transgender）」プロセスだと名付けている［Valentine 2007: 15］。

「トランスジェンダーを想像する」社会的政治的なプロセスでは、アイデンティティ・ポリティクスが往々にしてそうであるように、カテゴリーの意味内容やカテゴリーが指し示す人びとが誰なのかは、他の差異を消し去ることによって同定されていく。そして、トランスジェンダーにおいては、ゲイ／レズビアンというフレームのなかで、グループとしてのまとまりを持つことが可能になったということを、バレンタインは明らかにした。性的指向としての同性愛と、生得的な身体の性と性自認が一致せず身体的な性とは逆の社会的性を生きるトランスジェンダーは異なる。にもかかわらず、知識のある「ミドルクラスの白人男性」トランスジェンダーのアクティビストたちは、ゲイ／レズビアンというカテゴリーの枠組みを新たに拡大するのではなく、LGBT コミュニティのなかの一つのグループとして包摂されることで制度的な立ち位置を確保しようとした［Valentine 2007: 180, 187］。この包摂は、人種の不公平や階級差やジェンダーのポリティクスが、主流のゲイ／レズビアンのアクティビズムのなかに取り入れられることによって達成されたものであった。つまり、有色人種や非アメリカ人や労働者階級のゲイやレズビアンの人びと、あるいは、トランスジェンダーだと自認する人でも、「ミドルクラスの白人男性」のゲイというロールモデルを前提にすることによって、運動を代表することが可能なのである。それこそが、まさに多様性のモデルのなかに定着した、包摂なのだとバレンタインはいう［Valentine 2007: 201］。

バレンタインが描くトランスジェンダーというカテゴリーとアイデンティティや集合性の複雑な関係を理解すれば、カテゴリーが作られ、人びとの経験や行為の理解の枠組みが作られるという相互作用のプロセスが、単純なプロセスではないことがわかる。すなわち、それは、カテゴリー内の差異を消し去ることや、他のカテゴリーに所属するグループとの同盟関係によって成り立つ政治的社会的なプロセスなのだ。

2.2　マイノリティ・カテゴリーとしてのファット

本章が対象にするファットは、ファット・アクセプタンス運動においては、ジェンダーや人種、エスニシティ、性的指向などと同様、痩せていることが理想とされる社会において社会的抑圧を受けるマイノリティ・カテゴリーとして位置づけられている。運動の中心的な団体である全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance: 以下 NAAFA と記述）の規約序文には、「何百万もの太ったアメリカ人（中略）は、（中略）他のマイノリティ集団の特性を同じように持つマイノリティ集団である。その特性とは、例えば、低い自己像、罪悪感、雇用差別、商業的利益の犠牲者、嘲笑の対象な

どである」とある[59]。フェミニズムの立場から体重と身体について研究するロスブラムは、医療用語としてのホモ・セクシャルが、ゲイやクイアという言葉に取って代わられたゲイ・プライドの歴史に倣い、理想的な体重があることを示唆する「肥満（obese）」や「過体重（overweight）」という医療的な用語ではなく、「ファット」を記述的な用語として用いることを目指すと述べている［Rothblum 2012: 4］[60]。

また、ファット・アクティビストのマリリン・ワンは、大きい（large）、肉感的な（voluptuous）などの「婉曲表現」は、太っている状態に対する否定的な見方を無理に肯定的に評価しようとする姿勢が見られるため使用しないとし、「ファット」こそ政治的なアイデンティティを表す用語として有効であると述べる［Wann 2009: xii］。

しかしながら、同時に、マリリンは、「ファットを嫌悪する社会では、皆がファットなのだ。ファットは、身体の大きさに関わらず、権力関係に沿って、浮遊するシニフィアンとして個人に取り付きながら機能する。どんな体重の人でも、ファット・オプレッションを感じることがあるだろう」とも述べる［Wann 2009: xv］。つまり、「ファット」は、マイノリティ・カテゴリーでもありながら、同時に、誰もがそこに入ることが可能な包括的で汎用性のあるカテゴリーでもあるのだ。

ここで、バレンタインの議論とマリリン・ワンの言葉を参照することによって引き出される二つの課題を確認しておきたい。まず一つめに、ファット・カテゴリーの包括性・汎用性を考慮すれば、トランスジェンダー・カテゴリーと同様、それが誰を指し示すか、そして、カテゴリーの意味内容がいかなるものであるのかをめぐって、さまざまな困難があったであろうことは想像に難くない。そこで、運動が展開する上でどのような困難があったのかについて、ファット・アクセプタンス運動の歴史的展開を検証していく。

二点めに、カテゴリーをめぐるさまざまな困難を経て、ファットという差異カテゴリーは、どのように提示されようとしているのかという問いである。アイデンティティ・ポリティクスや社会運動では、一つのアイデンティティ・カテゴリーを称揚することによって、内部の差異を消し去ってしまうことが問題となってきた。それは、トランスジェンダーのアクティビズムにおいても例外ではなかった。ところが、マリリン・ワンが認めているように、ファットはマイノリティ・カテゴリーでありながらも、オプレッションを感じてい

59　NAAFA の HP の「Constitution for the National Association to Advance Fat Acceptance, Inc.」より［http://www. naafaonline.com/dev2/about/byLaws/Constitution-VER09.pdf］（2013 年 8 月 21 日最終閲覧）。規約によると「ファットとは、医学的な基準を当てはめた場合にその基準を超える者、あるいは、一般的に体重過多と見なされる者」とされる。「Constitution for the National Association to Advance Fat Acceptance, Inc.」より［http://www.naafaonline.com/dev2/about/byLaws/Constitution-VER09.pdf］（2013 年 8 月 21 日最終閲覧）。

60　「肥満」というカテゴリーの科学的根拠に疑義を呈しているファット・アクセプタンス運動の人びとは、文章において「肥満」について言及する際には括弧を付ける。また、口頭で言及する場合は、かぎ括弧を意味するフィンガー・クォートを使う。

ればどんな体重の人でもそのカテゴリーに当てはまる（つまり、「ファット」になりうる）のであれば、カテゴリー内は多様な身体サイズを抱えることになる。つまりファットであることが、身体サイズに規定されないのであれば、ファット・アクセプタンス運動は、差異を示すためのファットというアイデンティティ・カテゴリーを、いかなる根拠や布置において設定しようとしてきたのかということが問われなければならない。

これらの問題に意識を配りながら、本章の大きな問いである、ファットというカテゴリーが、これまで社会運動で論じられてきた人種、女性、エスニシティ、障害などのマイノリティ・カテゴリーとは異なる特徴を持つということを明らかにしていくことにしよう。

3.　ファット・アクセプタンス運動の歴史

3.1　ファット・アクセプタンス運動の誕生：1969 年

1969 年に、ビル・ファブレイという男性によって、全米ファット・アメリカン援護協会（National Association to Aid Fat Americans）という名の組織が設立された。それがファット・アクセプタンス運動の始まりだと見なされている。後述するように、現在の組織名は全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance）に変更されているが、旧組織名も現在の組織名も、略称は NAAFA（「ナファ」と発音する）である。創設者のファブレイは、白人男性で、性的に太った女性を好むファット・アドマイヤラー（Fat Admirer）であると自認している。彼は設立の動機を、太っている自分の妻が日々の生活の中で受ける差別にとても怒りを感じていたためだと語っている［Fabrey 2001］。

1970 年 8 月 18 日付けのニューヨーク・タイムズ紙の記事によると、当時の NAAFA の性別の割合、身体サイズ、ダイエットに対する考え方は、現在とは異なっていたことが分かる。現在の NAAFA のメンバーはほぼ太った女性が占めるが、当時はメンバー百人のうち、半数が男性で半数は女性であること、そして、半数は太っていて半数は痩せていることが記されている。あるメンバーは、NAAFA は「NAACP（全米有色人地位向上協会）みたいなもの。参加するために黒人である必要はないのと同じ」だと語っている。また、メンバーは減量することや太ったままでいることを強要されるわけではなく、それらは彼らの判断に任されていると記事の中でファブレイは語っている。記事の中で、メンバーの一人は「我々が変えたいことはただ一つ、太った人びとに往々にして見られる自尊心の低さなのです」と述べている。当時 29 歳のファブレイも、「もし誰かが言ってくれさえすれば、太っていることは美しい（fat is beautiful）と信じたいと思っている人はたくさんいるのです」と語っている［Klemesrud 1970］。

妻のため、太った女性のために、彼は、社会的に排除された太った人びとのための社交の場として NAAFA を設立し、プラスサイズのファッション・ショーを企画したり、太った者同士の出会いの場を提供していった［Fabrey 2001］。ファット・アドマイヤラーとし

て太った女性に性的魅力を感じるファブレイは、同時期の他の運動が持つマイノリティ運動の意識を共有していたわけではなかっただろうが、先行研究では、NAAFA の設立を持ってファット・アクセプタンス運動の誕生と見ている［Rothblum 2012: 3］[61]。

3.2　第二波フェミニズムの中の「ファット」：1970 年代

他方で、ファット・アクセプタンス運動には、NAAFA とは異なる意識を持っていた人びとによる異なる流れがあった。それは、フェミニズムとの密接な関係によって生み出された、ファット・フェミニズムと呼ばれる活動である［Cooper 1998, Stimson 1994a］。ファット・フェミニズムは、ラディカル・フェミニズムのなかで起こったラディカル・セラピーのなかで展開された活動だった［Mayer 1983a: x］。

こうしたファットとフェミニズムの出会いは、1960 年代から 70 年代にかけて高まりを見せたアメリカの女性解放運動（第二波フェミニズム）がその背景にある。第二波フェミニズムは、よく知られているように、保守的なリベラル・フェミニズムと急進的なラディカル・フェミニズムという二つの勢力を持った運動であった。中絶やセクシュアリティに対し保守的な考えを持つ前者は、第一波フェミニズムの流れを受け継ぎ、ベティ・フリーダンを中心に全米女性機構を結成し、大きな影響力を持った。後者のラディカル・フェミニズムは、レイプやポルノグラフィーなどを女性に対する暴力だと抗議し、男性による搾取を可能にする資本主義、性差別に異議を申し立てた。この頃、コンシャスネス・レイジングと呼ばれる活動が、フェミニズムの草の根運動として各地で行われ、女性たちが集まり、互いに経験を語りあう中で意識を変革していくという試みが盛んに行われた。ラディカル・フェミニズムの中で展開されたコンシャスネス・レイジングの活動であるラディカル・セラピーでは、「個人的なことは政治的である」というフェミニズムのスローガンに共鳴しながら、不安、内気などの個人的な問題を、より政治的な公正と結びつける治療方法がとられた。

後にファット・フェミニストとして活動を展開し始める者たちは、ロサンゼルスの女性解放センターで開かれていたラディカル・セラピーを通して出会っている。当時は、女性である上に太っている場合、二重の意味で社会的地位を貶められた。彼女らには人格やセクシュアリティに問題があるとされ、減量とともにそれらの問題を治すことが求められた。太った女性たちが受ける抑圧を政治的な問題に転換するためには、ラディカル・セラピーが必要だった、とファット・フェミニストのヴィヴィアン・メイヤー（別名サラ・アルデバラン、サラ・フィッシュマン）は述べる。しかし、ラディカル・セラピーにおいてすら「1972 年当時、太った者に対する抑圧はまだ問題として認識されていなかった」という

[61] 1967 年、ニューヨークのセントラルパークにて行われた「ファット・イン（Fat-In）」をファット・アクセプタンス運動の始まりだと見る研究者もいる。ラジオ・パーソナリティの呼びかけにより 500 人が集まり抗議活動を行ったとされる［Cooper 2008］。

［Mayer 1983a: x–xi］[62]。そこで、メイヤー（当時の名前はアルデバラン）らは、太った女性の新しい肯定的な自己像の確立のために、減量という方法ではなく、ファット・リベレーションというアイデアを、ラディカル・セラピーのなかで展開していった。そして、1972 年には、ファット・フェミニストらは既にあった NAAFA のロサンゼルス支部に加わった。そのことによって、社交の場としての傾向が強かった NAAFA は次第に政治性を強めた運動グループとしての活動を展開していった。新たに NAAFA に参加したファット・フェミニストたちは、太るのは食習慣のせいではなく、遺伝的素因が関係していると主張した。そして、太っていることを「解決」するためのダイエットは、心臓病や摂食障害など様々な病気を引き起こすとし、減量を推奨する保健医療やダイエット産業を糾弾し対立的態度を示した［Mayer 1983a: xii–xiii］。しかし、そのラディカルさゆえに、ファット・フェミニストたちは間もなく NAAFA から分離することになる。

分離後の 1973 年、ファット・フェミニストのジュディ・フリースピリットとサラ・アルデバランらは、ロサンゼルスに「ファット・アンダーグラウンド（Fat Underground）」を設立し、当時、ロサンゼルスで活発だったラディカル・フェミニズムの一部として活動を開始した（【図 3-1】【図 3-2】参照）［Mayer 1983a: xiii; Stimson 1994a］。同年、「ファット・リベレーション・マニフェスト」を起案し、太った女性に対する抑圧は性差別であり、資本主義による搾取であると位置づけた［Freespirit and Aldebaran 1983 (1973)］。この運動は法の整備や改正を要求するようなものではなく、ワークショップや抗議活動などを通じて、太った女性にたいする価値観の変革を求めるような運動であった。この意識変化こそが、結果的に法律の制定にもつながり、人びとの日常的なコミュニケーションのなかにも影響を与え、さらには、劣等感を持つ自己イメージを克服し、ダイエットなどの自己破壊的な行為を無くすことに繋がるという信念があったという［Fishman 1998］。

1970 年代半ばになると、ファット・アンダーグラウンドの女性たちは、当時女性解放の求心力になっていたレズビアン・フェミニズムに強い影響を受けるようになる［Fishman 1998］。当時のレズビアン・フェミニズムは、性差別と対峙するというより、フェミニストの女性同士の愛情に満ちた深い絆に基づいたコミュニティを創出しようとしていた。彼女たちは女性のパートナーを求め、男性社会から押し付けられる美と健康の規範を拒否し性差別を超えようとした。普通の基準では、醜いとされる太った彼女たちも、レズビアン・フェミニズムのコミュニティのなかでは、外見ではなくその知性や性格を愛されるような環境がそこにはあった。太った女性が自らの女性性を肯定し、ときには自分が太っていることを忘れてしまうような、そんな安息の空間をレズビアン・フェミニズムのコミュニティは提供してくれるはずだった。

62　メイヤーは、「過体重（overweight）はラディカル・セラピーのトレーナーが少し触れるぐらいであった。トレーナーは、抑圧への反動として過食を導き太るのだと言う。私は、そのことが馬鹿げていると思ったし、傷ついたことを覚えている。〈中略〉当時は、太った人びとはその問題を「ラディカル」な方法–例えば断食–で解決するように勧めていた」と記している［Mayer 1983a: xi］。

Photos by Shirl Buss

L.A. WOMEN'S SWITCHBOARD

The L.A. Women's Switchboard is a feminist information and referral service. It provides phone numbers of non-sexist physicians, attorneys, tradeswomen, therapy groups, etc., informs women on how to join consciousness raising groups and tells what events are taking place in the Women's Community.

ALTERNATIVE INSTITUTE

Alternative Institute is an information and skills sharing program for women on subjects which are not generally available in establishment schools. It also offers a chance for women who wish to teach but do not necessarily have the validation of the establishment to teach and to earn some money with their skills and knowledge.

ORIENTATION

As part of its commitment to the study and teaching of radical feminism, the Women's Center staff has created a bi-weekly program of discussions on basic feminist issues to be led by women having specialized knowledge in these areas. The discussions scheduled at this time include:

- –Feminism Old and New
- –They Call It Assault Against Women
- –Politics of Women's Health Care
- –Women and Psychiatry
- –Witchhunt: 1675-1975
- –The Politics of Figure Control
- –Is Lesbianism Political
- –Women's Culture
- –New Women's Communications

For more information, call 223-1549.

The Women's Center
P.O. Box 597
Venice, CA 90291

THE WOMEN'S CENTER

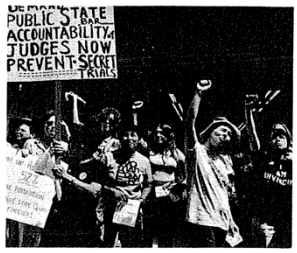


Photo by E.K. Waller

237 Hill Street
Santa Monica

The Women's Center is both a meeting place and a legal entity which was created to serve the needs of the radical feminist community in Los Angeles. "Radical Feminist" implies to us the assumption that women's liberation will be achieved through basic structural change in our society. The building and the non-profit tax exempt status are available to women's groups whose politics are in harmony with this assumption. Currently, the following groups are members of the Women's Center:

CONSCIOUSNESS RAISING

C-R is the exploration of women's oppression through examination of our personal, social, and sexual roles. Each week a topic concerning women is discussed first from a personal, experiential viewpoint, then the topic is submitted to a political analysis in an attempt to understand the conditions which cause and perpetuate our oppression.

FEMINIST HISTORY RESEARCH PROJECT

Because we have been denied our past, and even the records from which we can fully reconstruct it, the FHRP has begun the work of collecting oral history interviews from women about their lives and experiences in the early part of the 20th Century.

L.A. RADICAL FEMINIST THERAPY COLLECTIVE

We see women's emotional problems as due to oppression rather than to "personal inadequacies" or "sickness". Through contact raps (drop-in groups) and ongoing problem-solving groups, we offer help and support for women who are struggling to re-define themselves and to take personal and political action against their oppression.

SISTER

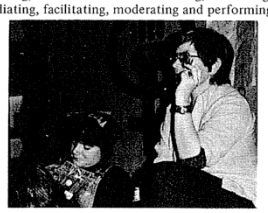
Sister, the widest read feminist newspaper on the West Coast covers local, national and international news of interest to women which is not available in the male-dominated press. We are also a forum for the exchange of ideas and information within and about the women's movement, and we encourage women to submit articles.

LESBIAN RAPS AND SOCIALS

We are a diverse group of lesbians coming together out of a desire to share with others the energy and power of women working for and with women. We provide, through our raps and socials and in our collective, a forum for all members of the Lesbian Community to exchange ideas on various topics in order for us all to expand our lesbian/feminist consciousness and awareness.

ASPASIA, WEST COAST FEMINIST SPEAKERS BUREAU

Continuing the tradition of women's oratory, we speak of women; individual women, women in groups, all women. We speak of our hopes, our achievements, our interests, our joys and our struggle. In addition to speaking, our services include teaching, consulting, mediating, facilitating, moderating and performing.



THE FEMINIST VIDEO OUTLET

The Feminist Video Outlet provides public access to videotape equipment for the Los Angeles women's community. We are implementing video services to the community including: documentation of women's events, video skills workshops, media coordination and a videotape library.

L.A. COMMISSION ON ASSAULTS AGAINST WOMEN

The Los Angeles Commission on Assaults Against Women is a group of feminist women from all over the greater Los Angeles area, with different backgrounds, who share a common commitment – TO STOP RAPE, and to stop the humiliation which rape victims meet at the hands of the police, hospitals, courts and society at large.

LESBIAN FEMINISTS

We see our Lesbianism as inherently political in this oppressive, sexist society. We meet weekly to do consciousness raising, have political discussions, and socialize.

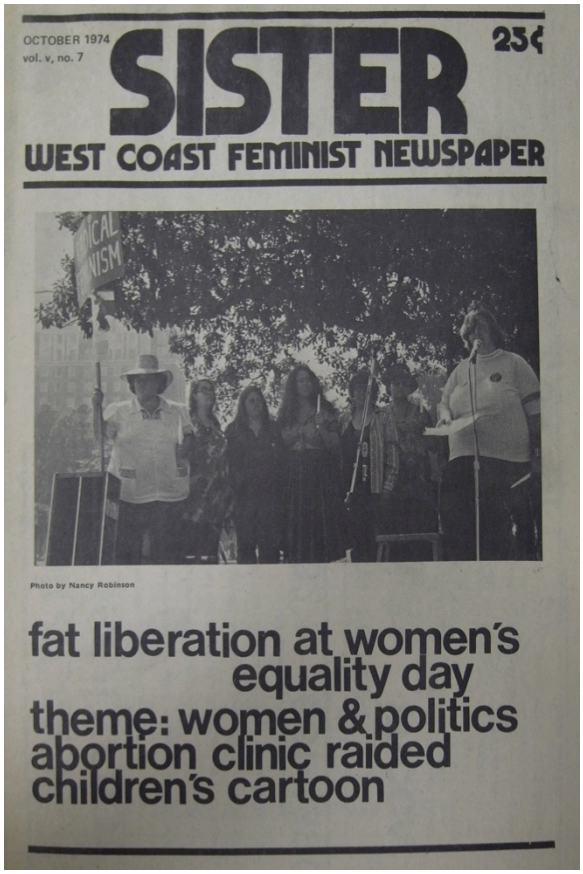
THE LESBIAN TIDE

The Lesbian Tide is a feminist lesbian magazine with the news features, reviews and poetry of Lesbian Nation. The magazine is maintained by the pride, time and efforts of a working staff of lesbians. Subscriptions are $7.50 per year.

FAT UNDERGROUND

The Fat Underground confronts the double oppression of fat women in society through our nutritional, psychological and politically radical analyses of our condition which disputes all present myths about fat. Through media appearances, consciousness raising and informative written materials we provide a support group for fat women who are *not* dieting and we provide outreach to those who wish to politically align themselves with their fat sisters.

【図 3-1：ロサンゼルスのラディカル・フェミニスト・コミュニティの活動内容を紹介するパンフレット】右下に、ファット・アンダーグランドの活動について言及がある（GLBT 歴史協会（GLBT Historical Society）のジュディ・フリースピリット（Judy Freespirit）アーカイブ・コレクション所蔵）。



【図 3-2：ファット・リベレーションの活動を報じるロサンゼルスのラディカル・フェミニストのニュースペーパー*Sister*（1974 年 10 月号)】（サンフランシスコ市内にある GLBT 歴史協会（GLBT Historical Society）のジュディ・フリースピリット（Judy Freespirit）アーカイブ・コレクション所蔵)。

しかし、「現実は違った」とメイヤーは語る。ファット・フェミニストたちは、次第に、痩せているレズビアン・フェミニストたちからの理解を得られていないことが明らかになってきたのだ［Mayer 1983a: xiv］。あるレズビアン・ファット・フェミニストは、サンフランシスコの女性解放新聞のなかで、レズビアン・コミュニティの中で太った女性に対する理解と支持が得られないことについて訴えている。彼女は、自分が最も愛するレズビアンの友人に、自分が太っているために差別されていることを告げたときに、その友人が発した、「（痩せるという）選択肢があるんじゃないの？」という言葉にひどく心を痛めた。彼女にとっては、レズビアンであることも、太っていることも、どちらも彼女に抑圧をもたらすものでありながらも、自身の本質に関わることだった。友人の言葉は、彼女にとっては、人種差別を避けるために、皮膚の色を白色に漂白するという選択肢を迫っているに等しかった。「私を愛してくれる人に自分をさらけ出すことが、こんな気持ちにさせるのであれば、私を好きではない人に対しては、いったいどう立ち向かえばよいのだろうか？〈中略〉レズビアンのサポートを失うのなら、私には何も残らない」と訴えている［Lepoff 1975］。太った女性が外見の差別を受けているということの問題性について表面上は理解があった

ようだが、ラディカル・フェミニストたちは、基本的には太っていることは個人的な病理だと捉えていたようだ［Mayer 1983b: 3–4］。そのような状況の中で、ファット・フェミニストたちは、「依然として『性的魅力のないファット・ガール』というステレオタイプの位置にいた。つまり、みんなの親友で、誰の恋人でもないという位置」である［Fishman 1998］。

1976 年の夏に、活動の内部で争いが起こり、ファット・アンダーグラウンドの活動は次第に衰えた。ファット・アンダーグラウンドを引っ張ってきたメイヤーは、当時、どの程度の数のファット・フェミニズムが全米で起こっていたのか、誰も把握していないと述べる。ボルティモア、フィラデルフィアなどで太った女性のグループがあったという噂はあったが、本当に存在しているのか確かな証拠もないまま、忘れ去られるのが常であった。「太った者に対する抑圧の三重苦、すなわち、孤独、無関心、そして敵対視」によって、ファット・アクティビストたちは、お互いに不満をぶつけ合い、活動が根付く前に関係をぶちこわし、お互いを理解し合う術もなかったと語っている［Mayer 1983a: xv–xvii］。

ラディカル・フェミニズムだけでなく、リベラル・フェミニズムにとっても、太った女性は積極的に受け入れられる存在ではなかった。ファット・アクティビストたちの働きかけの末、全米女性機構で「サイズによる差別」についての反差別決議案が通ったのは、1990 年になってからのことだった［Stimson 1994a］。フェミニズムの中の同性愛嫌悪については女性学のなかで言及がある［cf. Rich 1980］。しかし、当時のフェミニズムの中で太った女性に対する偏見や差別が存在していることについては、ほぼ論じられてこなかったとロスブラムは指摘している［Rothblum 1994］。女性の外見や体型をめぐる女性の身体の社会的文化的拘束性、すなわち、女性たちが太ることを避けようとする事態はフェミニズムにとっての一つの問題ではあった。1970 年代以降、摂食障害を患う女性が急増していたという背景も手伝って、フェミニズムはそのことに目を向け始めていた［cf. オーバック 1994］。しかし、その問題とは、誰が女性の身体をコントロールしているのかということに焦点が当てられたものだった。すなわち、女性が太るか痩せるかは男性によって決められるべきものではなく、女性自身が選択し決めるべきだという信念に基づいていたのである。その中で、太った女性は「食べ過ぎる女」として病理化され、積極的に救済される対象ではなかった。むしろ、「女」「フェミニスト」「レズビアン」という複数のカテゴリーにうまくフィットしない残余のカテゴリーとして置き去りにされてきたのである。

かたや白人男性の支援のもとに集う NAAFA の女性たちと、かたや自分たち自身で声を上げようとしたファット・フェミニストたち。どちらも、当時の女性の外見や身体サイズに対する社会的な抑圧を感じ、ファットというカテゴリーのもとに集ったことに変わりはない。この両者が出会い交錯していくなかで、80 年代、NAAFA は略称をそのままに、組織名を全米ファット・アメリカン援護協会（National Association to Aid Fat Americans）から、全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance）に変えている。この改名の背景には白人男性が太った女性を「助ける」という態度から、

女性たち自身が声を上げるという態度へのシフトが見て取れる［Farrell 2011: 148–149］。

3.3　「障害」との連携：1980 年—1990 年代

ファット・アクセプタンス運動の障害者運動との連携は、フェミニズムとの連携の時と異なり、法的主体としての立場を確保することを企図した、より戦略的なものである。しかしながら、他方で、障害カテゴリーを用いることに賛同しないメンバーたちからは、多くの反感を買うことにもなった。

アメリカでは、文化的多様性や差異は 1964 年に制定された「公民権法（Civil Rights Act of 1964）」や 1990 年に制定された「障害をもつアメリカ人法（Americans with Disabilities Act of 1990：以下 ADA）」など、一連の反差別法で保障されている。前者は、雇用、公共施設、教育における、人種、皮膚の色、宗教、性別または出身国に基づく差別を禁止している。他方、ADA は公民権法には規定がなかった障害を持つ人を保護対象に、雇用、公共サービス、公共施設、通信における差別を禁止している。

ADA が制定される以前の 1973 年に、障害による差別を禁止したリハビリテーション法 504 条が施行された。これによって、リハビリテーション施策に利用者の主権を認め、障害者に実質的な権利性が付与された。杉野によると、この法律が障害者運動を公民権運動の一環として捉えることを可能にし、障害学のなかでは障害者権利獲得の成果の転換点として見なされるようになったという［杉野 2007: 162–163, 188］。

このリハビリテーション法 504 条がきっかけとなり、1980 年代初頭、サイズや体重が法律で保護されるべき差異として公民権法に定められていないことに問題意識を持ったファット・アクティビストらが、障害者運動と連携しようとする動きを西海岸で展開し始めた。彼女らが求めていたのは、太った身体を法的に保護されるカテゴリーとして認めさせることであった。ファット・アンダーグラウンドのメンバーの一人であるスティムソンは、太った人びとと障害を持つと見なされる者が経験する差別は、問題の本質を共有していると述べる。どちらも身体的、精神的に不健康で無能な集団といったステレオタイプによるスティグマを付与される。また、身体サイズがある程度大きくなると、車いすの人が直面するのと同じ物理的な障壁に直面する。よって、太った人びとも法的な便宜を主張する権利があるという理屈に基づく［Stimson 1994b: 1］。

障害者運動との連携を強く望んだアクティビストの一人に、ファット・アンダーグランドの創始者の一人であるジュディ・フリースピリットがいる。フリースピリットは、バークレーの自立生活支援センターに勤めながら、障害者運動との連携に従事した［Love 2006: 160］[63]。

しかしながら、障害者運動と連携を図るというフリースピリットらの活動は多くの批判

63　物書きでもあるフリースピリットは、「ファット」と「障害」というカテゴリーを横断するような登場人物を描写するショートストーリーをいくつか執筆している［e.g. Freespirit 2003］。

にあった。NAAFA のあるメンバーは、当時、フリースピリットやファット・アンダーグラウンドによってエンパワーされた NAAFA の若手のメンバーたちが、フリースピリットが提案する障害者運動との同盟に関しては参加を渋っていた様子を回顧している［White 2010］。かれらは障害とフレイミングすることによって、太っていることは不健康な状態であるというステレオタイプな見方が助長されることを危惧したのだ。

1993 年 11 月 22 日に、ファット・アクセプタンス運動にとって歴史的な判決が下された。ボニー・クックというロードアイランド州立の知的障害者のための病院で働く、身長 5 フィート 2 インチ（約 157 センチ）、320 パウンド（約 145 キロ）の体重の女性が、病院側が彼女を障害者と見なし再雇用を拒否したとして病院側を提訴した事案に判決が下され、女性が勝訴したのだ。彼女はその病院で過去二度の雇用の更新を経ており、仕事ぶりも問題無かったとされる。それにもかかわらず、病院側は彼女が「病的肥満」であるために、緊急時に患者の対応ができないだろうと見なし再雇用を拒否した。

この「見なし障害（Perceived Disability）」が、裁判のなかでどのように扱われるかが、ファット・アクセプタンス運動の中で注目されていた。ADA の障害の定義には、主要な生活における活動を実質的に制限するインペアメント、あるいは、そのようなインペアメントを持つと見なされる場合が含まれる。「見なし障害」とは後者の定義によるもので、実際には仕事上の能力において問題がないのにも関わらず、間違ったステレオタイプや偏見によって障害があると見なされることを指す［Kirkland 2008a: 33; 杉野 2007: 200–201］。これが、肥満差別にも適用可能ではないかということが注目されていた。その際に、インペアメントをどう見なすかが争点となった。

病院側は、病的肥満は変化可能な状態であり、クックが減量すれば障害も取り除くことが出来るため、彼女は法的には障害者ではないと主張した。しかし、判決では、「病的肥満」という生理的な状態は代謝不全によって引き起こされ、断食や食事の量を減らしたとしても、代謝不全というインペアメントは永続的なものであり、またそれはクックのコントロールを超えたものであるとされた[64]。

彼女が勝訴したという事実は、長い間太った者の権利を主張してきたアクティビストにとっては画期的な出来事であり、サイズの権利を主張する上で歴史的に重要な前進であると受け止められた。しかし、「ファット」と障害が同一視されることによって、「ファット」が病理化されることを恐れる者にとっては、この判決は、受け容れがたいものであった。スティムソンは、障害との同一視を拒絶する者たちは、その拒絶が、自分を「ファット」だと認識することを恐れる多くの太った人の内面の葛藤と同じ構造を持つことに気づかなければならないと述べている［Stimson 1994b: 3］。

しかしながら、多くのファット・アクセプタンス運動の参加者は、太っていることが障害として定義されることを望まない。例えば、NAAFA は、ADA の適用について、「多くの

64　*Cook v. State of Rhode Island, Department of Mental Health, Retardation, and Hospitals, 10 F.3 d 17* (United States Court of Appeals, First Circuit. 1993)より。

太った人たちは、自分に障害があるという見方を嫌うので、彼らに対して ADA を適用することは、被害者を糾弾することになってしまう。また、体重だけに基づいて ADA を適用することは、法の現場ではめったに成功しない」としている[65]。

かれらは、障害ではなく「ファット」という差異を求めるのだ。イギリス人ファット・アクティビストのシャーロット・クーパーは、「太った女性は自分自身を障害者と呼べるか」というセンセーショナルなタイトルの論文のなかで、太った女性の微妙な立ち位置について、真正面から論じている。彼女は、論文のなかで、障害をもつ人びとは自分にとっては「他者」であったと切り出す［Cooper 1997: 33］。クーパーは、確かに自分の身体には欠陥がありそれは変えられないものであるという。また、障害を個人に降り掛かった悲劇として捉え、障害が障害者の身体の欠陥や欠損にあるとする障害の個人モデルから、障害者を貶める社会的抑圧に焦点化した社会モデルへとシフトしていった障害者運動や障害学の流れは、そのままファット・アクセプタンス運動の展開にも適用できると説明する。しかし、ファットと障害を同一視することは、障害をもつ人びとから強い反発が起こるだろうと予想する。そしてやはり、障害は自分が属することができるグループではないと明かす。なぜなら、障害学とは正常性（normality）に対する態度が違うからだ。「私は、太っていることは正常な状態だと思う。他の身体の形やサイズに比べて健康的だとか不健康だとかいうことではなく、驚くほどの多様性を持った身体として、そう思うのだ」と説明している［Cooper 1997: 35］[66]。

次節では、これまで概観してきた運動の歴史を踏まえ、本章の目的であるファット・カテゴリーの特異性について考察を加えていく。

4.　考察：ファット・アクセプタンス運動のジレンマ

4.1　名乗りにおける齟齬

ここまで、ファット・アクセプタンス運動による、肯定的なアイデンティティ構築のための「女」、法的主体としての「障害」という二つのカテゴリーとの接続の歴史を概観することによって、以下のことが明らかになった。

まず、太った女性たちは、連帯を組む仲間としても性的対象としても、第二波フェミニズムのなかで差異化され排除されてきた。なぜなら、太っていることに対する自己肯定感の乏しさに加え、フェミニズム内部の理解とサポートが欠如していたために、個人的集合

65　NAAFA の HP より［http://www.naafaonline.com/dev2/education/faq.html］（2013 年 8 月 21 日最終閲覧）。

66　障害学の杉野は、カークランドやクーパーの論文を取り上げ、「肥満の障害学」を紹介している。障害の定義をさまざまなマイノリティにまで広げていくことも、障害文化運動の一つであり、現在の障害者運動が必要としている社会教育活動であると述べている［杉野 2007: 204］。こうした障害学からのアプローチは、今後注目すべきものであろう。

的アイデンティティとしての「ファット」を名乗るための土壌が育ちにくかったからである。

次に、「障害」との連携は、法的主体として「ファット」を擁護する必要性から出てきたものであったが、仮に ADA が適用された場合、本人たちの意に反して、太った身体は医療化された身体として吟味されることになる。それを嫌がる者たちの間では、ファット・カテゴリーと障害カテゴリーとの間に齟齬が生じ、その二つのカテゴリーの差異化をはかるような立場が表出した。そのため、フェミニズムや障害者運動との連帯や、それらの運動の一つのサブ・カテゴリーとして包摂される動きも起こりづらかったといえる。このことは、先行研究で説明したトランスジェンダーの事例とは対照的である。トランスジェンダーのアクティビストたちは、運動を成功させるために、カテゴリーを制度化し LGBT コミュニティのなかでポジションを確立しようとした。それに対し、ファット・アクセプタンス運動においては、活動の枠組みを他の運動と共有することが出来なかったといえる。

さらに、ファット・アクセプタンス運動を既存の社会運動のなかに位置づける際に、その特異性を際立たせている点を二つ指摘しておきたい。第一に、カテゴリーの本質性をめぐる見解である。つまり、性別、人種、国籍のカテゴリーなどと違い、一般的に、体重はコントロール可能で、可変的であると見なされている[67]。ところが、ファット・アクセプタンス運動では、体重は遺伝的素因が関係し、個人の意志でコントロール可能なものではないという立場をとる。こうした体重についての生物学的事実の認識の違いゆえに、人びとからの理解が得にくい。

そして二点目に、このことは、「名乗り」の代表的な行為としてのカミングアウトをめぐるファットの特異性と関係してくる。ファット・アクティビストは、ゲイやレズビアンが自らの性的指向をカミングアウトするように、「ファット」であることをカミングアウトする［Saguy and Ward 2011］。一般的に、人は、太っている人を、減量に失敗している状態、あるいは、ダイエットをしている最中にある状態だと見なす。ゆえに、ファット・アクティビストがカミングアウトするということは、ダイエット中だと自認しているそぶりをやめること、すなわち、「ダイエット中だと言ってパッシングするのをやめる」ことなのだ［LeBesco 2004: 95］。しかし、このことが、ゲイやレズビアンのカミングアウトと根本的に異なるのは、太っている事実は隠されていることではなく、外見として誰の目にも明らかだということだ［LeBesco 2004: 95; Saguy and Ward 2011: 54］。鶴田は、外見を捉える仕方には、（皮膚の色やユニークフェイスなど）本人にとって非のない「状態としての外見」と、本人に説明責任を課すような「行為としての外見」という二種類があると言う［鶴田 2009: 68–69］。この見方に従えば、「体重はコントロール可能」だという認識が根強いアメリカ社会で太っていることは、「なぜそのような外見をしているのか？」という説明責

67　体重はコントロールが可能であると考えられていること、身体サイズが可視的であること、この二点によって太っている者に対する差別は強化されると言われている［Puhl and Brownell 2003; Wang Wang, Brownell, and Wadden 2004］。

任が課されるような行為と見なされる。ファット・アクティビストによるカミングアウトは「行為としての外見」を「状態としての外見」へと切り換える意図を持つが、「体重はコントロール可能」だという「われわれ」の認識に基づけば、「ファット」は依然として、道徳的な非難の対象となる行為なのだ。

こうした「われわれ」の認識と「かれら」の認識の違いが、「ファット」カテゴリーの特殊性を成り立たせる。フェミニズムとの関係においてそうであったように、太っていることをわざわざ「名乗る」という点で無理解や齟齬を引き起こすのだ。こうした齟齬を、次に述べる反差別法という文脈のなかで考察すると、公民権法が想定する個人観と ADA が想定する個人観の違いという形で問題を抽出することができる。

4.2　公民権法が想定する個人観と ADA が想定する個人観とその両立：「集合としての差異」と「集合の中の差異」

アメリカの反差別法には、前述したように、人種、皮膚の色、宗教、性または出身国に基づく雇用差別を禁止する公民権法と、障害をもつ人びとに対する差別を禁じた ADA がある。保護されるべき対象のカテゴリーが反差別法のなかに列挙されることによって、差異は制度化され、それらの差異を理解するための仕組みが提供される。カークランドによると、この二種類の法には注目すべき違いが二点ある。

一点目の違いとは、二つの法で想定されている人間像が根本的に異なるということだ。カークランドによると、公民権法のなかで想定されている個人観は、機能的個人（functional individual）に基づいている。公民権法では、皮膚の色、性別、目の色などの外見は人間の能力に関係ないとされる。個人は、その人の仕事や役割における能力によって評価されなければならず、集団のステレオタイプを当てはめず、個別性が重視される。他方で、ADA では、障害は、生活における主たる活動を妨げるような医学的な定義による肉体的精神的なインペアメントと定義される。障害をもつ人の身体、例えば車いすを使う人の足に問題があるのではなく、車いすの利用を阻む階段に問題があるとされる。そこで、公共施設や職場で障害をもつ人に対し合理的な便宜を図ることが法で定められている。機能的個人とは異なり、障害をもつ人の外見を能力とは無関係だと無視することはできない［Kirkland 2008b: 401–402］。すなわち、公民権法が想定している機能的個人主義観と、障害法が想定している個人観は両立し得ない。

二点目に、誰がどのような障害を持っているかということは、雇用の現場においては、雇用者と被雇用者のあいだの非公式的で対話的な交渉プロセスによって決められる。法的な訴訟になった場合、障害という法的なカテゴリーは、既知の事実として当該人物に当てはめられるわけではなく、そのことを証明する必要がある。雇用均等委員会（Equal Employment Opportunity Commission）は、1990 年の ADA の施行に応じて、ADA についての解釈ガイドラインを公布した。そのなかで、仕事場の妥当な施設環境を望む障害を持つ被雇用者の要望に応じて、雇用者は適切な便宜を図る努力をする必要があり、双方が

参与する柔軟で対話的なプロセスを通じて、適切な便宜を図るための最適な方法を探ることと規定されている[68]。注目すべきは、障害法が保護している差異カテゴリーは、集合的なカテゴリーというより、交渉を通じて特定されていく個別的で非本質的なカテゴリーだということだ。それに対し、公民権法が列挙している差異カテゴリーは、最初に述べた「集団のステレオタイプではなく個別性を重視する個人観」に矛盾するようにも思えるが、個人的な偏差よりも集合的なカテゴリーとしての一枚岩的な説明を好む［Kirkland 2008a: 141］。

以上の二点を踏まえ、二つの法律をそれぞれファットに適用した場合、どのような問題が浮かび上がってくるのかについて、二点に絞って考察していく。第一に、前節で述べたように、一般的には「体重はコントロール可能」なものという事実認識が根強いため、人は、太った人を見る時に、自己管理能力の欠如を自動的に読み取ってしまう。その点で、皮膚の色や性別などの外見が個人の能力に関係しないという公民権法の前提にはなじまない。さらに、「体重はコントロール可能」だという認識からすれば、太ったことは個人に降りかかった不幸ではなく、食べ過ぎがもたらした自業自得の結果となり、障害法の個人観にもなじみにくい[69]。

第二に、仮に、「体重はコントロール可能」というフレームを外して、機能的個人主義観を前提とする公民権法で保護しようとするなら、今度は、太った身体が、物理的な意味で人間の所作や作業のやり方を大きく左右するという事実に向き合わざるを得なくなる。腕を伸ばせる範囲、持久力、歩くスピード、どのくらいのスペースに入れるかなどの適応能力は、仕事の効率や成果にも関わってくる［Kirkland 2008b: 402］。例えば、ジムのインストラクター[70]やキャビン・アテンダントなどのように俊敏な身動きや限られたスペースでの作業が要求される仕事の場合、身体の大きさによって動きや作業が妨げられる可能性もある。そのせいで仕事の効率や成果が出せないとしても、公民権法の個人観のもとでは能力不足と見なされる。

しかし、このことを身体的な差異を前提とする障害法の個人観のもとで読み直せば、何

68　「Interpretive Guidance on Title I of the Americans with Disabilities Act, 29 C.F.R. 1630 (1990). Appendix to Part 1630」p. 402 より。

69　ヴェイドらは、同じように自業自得だと思われがちな酔っ払い運転による事故の場合、事故を起こした運転手が車いすの利用者になった場合には障害法が適用されるのに対し、太った人が障害法で守られないのは矛盾していると指摘する。すなわち、どちらも自業自得の結果として見なすとしても、「ファット」に対しては自己コントロールが出来たはずという認識が根強い［Vade and Solovay 2009: 170］。

70　身長 5 フィート 8 インチ（約 173 センチ）、体重 240 パウンド（約 109 キロ）のジェニファー・ポートニックは、太っているという理由で、ジャザサイズというフィットネス・プログラムを提供している会社のインストラクターとしての雇用を拒否された。彼女は、サンフランシスコの体重と身長の反差別条例に基づいて訴訟を起こし、2002 年に勝訴した。サンフランシスコの体重と身長の反差別条例については、注 73 を参照。

が出来て何が出来ないかなどの適応能力は個人によって異なるということになる。障害という差異が対話的なプロセスで決められるのと同じように、身体サイズについても、太っている／太っていないという二項対立の間には、実際には、クーパーが言うように「驚くほどの多様性がある」。そのため、身体サイズの多様性に応じて、個人の適応能力の多様性の幅も広がる。しかしながら、この多様性は、太った身体が医療化された上での、かれらが望まない形での多様性として保障される。

このように、「ファット」をどちらかの法律で保護しようとしても、そこに回収できない特異性が出てくるのである。このことは、どちらか一つの法律の適用によってマイノリティが保護されることを想定している、アメリカの反差別法の落とし穴とも言える。

こうした公民権法と ADA が想定する個人観の違いは、三節で描いた、アイデンティティ・カテゴリーとしての「ファット」と、法的主体としての「ファット」の違いとして理解できる。そして、このように見ていくと、ファット・アクセプタンス運動は、この二つの個人観を同時達成しようとする運動であると理解できる。現在の NAAFA が掲げる運動の理念「多様性と包摂（diversity and inclusion）」では、「すべての形態の多様性と連帯することによって、あらゆる差異を表現しながら、メンバーと NAAFA を支持する人びととの一致団結を図る。我々は、あらゆるサイズのスペクトラムの人びとが評価され、尊重されるように、サイズの多様性を差異の概念として付け加えることに尽力する」[71]と記されている。

ここで使われている多様性には、二つの意味が読み取れる。一つは（1）差異集団としての多様性であり、もう一つは（2）個々人の身体のサイズの多様性である。つまり、（1）の多様性のもとで、ゲイやレズビアンなどと同様、「ファット」というカテゴリーのもとに一つの集団として一致団結していく。そして、（2）の多様性は、集団内外における個人のサイズの多様性を認めるためのものである。ここには、クーパーが太った身体を「驚くほどの多様性を持った身体」と形容したように、物理的な意味で人間の所作や作業のやり方を左右するような、多様性を持った身体が含まれるのではないだろうか。

この NAAFA が掲げている二重の意味での多様性と、前述した公民権法が想定する個人観と ADA が想定する個人観という二つの違いは、類似のものだ。すなわち、差異を持つ各々の集団としての多様性（集合としての差異）、そして、個々人の身体のサイズの多様性（集合の中の差異）という関係で表される。そして、その二つの差異を架橋することは、既に見てきたように、運動の上でも法律上でも大きな困難を抱えてきた[72]。

71　「Diversity and Inclusion, Our Goal」より［http://www.naafaonline.com/dev2/about/diversity.html］（2013 年 8 月 21 日最終閲覧）。

72　「サンフランシスコが 2001 年に発布した体重と身長の反差別条例（San Francisco Human Rights Commission. Compliance Guidelines to Prohibit Weight and Height Discrimination）」は、反差別法と障害法の合理的便宜が融合しており、ファット・アクセプタンス運動の人びとによって注目されて

ファット・カテゴリーが、これまで社会運動で論じられてきた人種、女性、エスニシティ、障害などのマイノリティ・カテゴリーと異なるのは、ファット・カテゴリーには以上のような特異性があったためだと指摘できる。ファット・カテゴリーが、アメリカの反差別法によって保護されるためには、公民権法が想定する個人観と ADA が想定する個人観を両立させなければならない。こうしたことを踏まえると、ファットには複数の差異カテゴリー（女や障害）が貫通しているから、他のマイノリティの差異カテゴリーとは異なるという結論を導き出すことが可能ではないだろうか。

5.　おわりに：第４章に向けて

次章で説明するように、1990 年代以降、フェミニズムの影響を受けたさまざまなファット・アクティビストが全米で活躍し始めた。そして、2000 年代には「身体のサイズと外見に対する社会的な意識の批判的検討を行う」［Rothblum 2012: 3］ために、ファット・スタディーズという学問分野が誕生し[73]、『ファット・スタディーズ』ジャーナルが 2012 年からようやく刊行されはじめた。また、新公衆衛生的な日常生活の微細な生の管理のあり方に対する警戒感から、「肥満」をめぐる科学的知識にも批判的な検討が行われ始めている［e.g. Gard and Wright 2005; Wright and Harwood 2008］。『ファット・スタディーズ』ジャーナル編集者のロスブラムは、ジャーナル刊行にあたり、体重はジェンダー、人種、エスニシティ、社会経済、性的指向といったコンテクストの中で吟味されるべきだと述べている［Rothblum 2012: 4］。こうした問題意識は、フェミニズムのバックグラウンドを持つ研究者たちによって共有され、現在、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、人種などのインターセクショナリティが先鋭化する事象として精査され始めている［e.g. Fikkan and Rothblum 2012; Saguy 2012］。

他方で、法的な権利を確立するための動きとして、ファブレイは、1991 年にファット・アンダーグラウンドや NAAFA の一部のメンバーらとサイズと体重差別についての審議会（The Council on Size & Weight Discrimination）という非営利の委員会を立ち上げ、医療、雇用、メディア・イメージにおけるサイズと体重差別の廃絶に向け本格的に取り組んでいる。2009 年 8 月 3 日には、NAAFA のメンバーたちは、ワシントン DC の連邦議会議事堂を訪問し陳情活動を行い、ヘルスケア改革法案に医療制度の成功や健康の尺度のために「減量」を使用しないこと、そして、身体サイズによる差別に終止符を打つよう嘆願した。この陳情活動は、NAAFA 設立 40 年を記念して行われ、NAAFA の歴史において初の政府へ

いる。この条例のもとでは、障害法のようにインペアメントを医学的な証拠として申し立てをする必要はなく、個人に対応した施設のアクセスや平等な待遇を主張する権利がある［Kirkland 2008a: 144］。

73　ニューヨーク・タイムズの記事では、ファット・スタディーズは未だ周辺的ではあるが勢いを増しつつある分野と評されている［Ellin 2006］。

のロビー活動だった。こうした現在の動向を見ると、差別の廃絶に向けた法的制度的なカテゴリーには「体重（weight）」を使用し、アイデンティティ・カテゴリーとしての「ファット」と使い分けようとしているように見える。

本章では、ファット・カテゴリーが、これまで社会運動、特にアイデンティティ・ポリティクスで論じられてきた人種、女性、エスニシティ、障害などの、既存のマイノリティ・カテゴリーと異なることを明らかにしてきた。では、ファット・アクセプタンス運動のアイデンティティ・ポリティクスのなかでの特異性は、運動参加者が、ファットは誰のことであり、ファットとは何であるかについて理解する際に、いったいどのような影響を及ぼしているのだろうか。言い換えるならば、運動参加者は、どのような他者との関係で自己を語るのか。あるいは、実践を通して、どのような自己が立ち上がってくるのだろうか。これらの問いを、第 4 章と第 5 章を通して明らかにする。

まず、第 4 章では、ファット・アクセプタンス運動の人びとの、フェミニズムに対する態度やその関係性を説明しながら、ファットであることと女であることが、どのような葛藤や対立を起こすのか、そして、フェミニズムとの関係において、ファット・カテゴリーのもとでどのような自己が立ち現れてくるのかを検討しておく。

第４章　ファット・アクセプタンス運動とフェミニズムの「ぎこちない」関係：ファットである自己、女である自己、その自己規定の困難

1.　本章の目的

すでに何度も述べたように、アメリカ社会では、太った人に対する差別や偏見が、現在、容認されている差別として深刻な問題となりつつある［Puhl and Bwornell 2001; Puhl Puhl, Andreyeva, and Brownell 2008］。そして、肥満差別や偏見を経験するのは、圧倒的に女性が多いにもかかわらず、そのことにはあまり関心が払われていないと言われる［Fikkan and Rothblum 2012］。ファット・アクセプタンス運動の参加者には女性が圧倒的に多いことからも、端的に言って、女であるからファットなのだということも可能であろう。

では、ファットとは何なのか、ファットとは誰のことを指すのだろうか。ファット・アクティビストのシャーロット・クーパーは、ファットとは誰か、ファットとは何かという定義について、BMI や服のサイズで定義できることもあるだろうし、ファット・オプレッションを感じた経験があるかないかで定義できるかもしれないとしながらも、決定的な定義はないことを認めている［Cooper 1998: 10］。また、すでに引用したように、マリリン・ワンは「ファットを嫌悪する社会では、皆がファットなのだ。ファットは、身体の大きさに関わらず、権力関係に沿って、浮遊するシニフィアンとして個人に取り付きながら機能する。どんな体重の人でも、ファット・オプレッションを感じることがあるだろう」と述べる［Wann 2009: xv］。両者が述べるファット・オプレッションとは、「太っている」者に対する抑圧のことである。社会文化的に、痩せていることが達成不可能な理想として受け入れられているために、その理想を達成できないことによって、自己の身体に劣等感やコンプレックスを抱き、「太っている」と感じる。そのことをファット・オプレッションという。BMI の数値が標準以下であっても、XXXL サイズの洋服を着る者であっても、ファット・オプレッションを感じる人であれば、ファットであるということになる。

ファット・オプレッションを感じるのは、圧倒的に女性が多い。クリスラーは、身体サイズについて、男性なら許されることでも女性には許されないことや（例えば、男性であれば、どんな身体サイズでも、成功したり人を惹きつけたりすることがある）、男性にとっては必要がないことでも女性には義務づけられていることがある（例えば、女性は、減量によって身体を細くするなど、非現実的な美の基準に合わせる努力をしなければならない）

からだ。こうした問題を、フェミニズムは扱わなければならない。つまり、「ファットはフェミニストの問題であるべきだ」と述べる［Chrisler 2012: 613］。

ファットがフェミニストの問題であるということを、おそらく初めて世の中に問うたのは、1978 年に出版された、イギリス人フェミニスト心理療法家のスージー・オーバックによる『ファットはフェミニズムの問題だ（*Fat is a Feminist Issue*）』という本である。詳しい本の内容は後述するが、しかしながら、この本は、逆にファット・アクセプタンス運動とフェミニズムとの間に不穏な関係を生み出すきっかけになったと言っても過言ではないかもしれない。前章で述べたように、フェミニズムが太った女性に対する偏見や差別に無関心であることが明らかになるにつれ、そのことがファット・アクセプタンス運動の人びとの間に失望をもたらした。当時の、そして、おそらく現在でも、フェミニズムが扱ってきた「女」とは、摂食障害を患い病的に痩せてしまった女性か、あるいは、平均的サイズの女性であったのだ。そのため、「極度に」太った女性は「食べ過ぎる女」として病理化され、フェミニズムが扱う対象ではなかったのだ［Cooper 1998; Rothblum 1994］。サゲイは、「XXXL サイズの服を着る女性や臨床的に肥満とされる女性」に対しては、フェミニズムは減量をすることを暗に容認してしまっていたのだと指摘する［Saguy 2012: 601］。

ところが、近年、オーバックの本のタイトルを捩って「ファットはフェミニズムの問題か？」という問いを、再び、精査していこうとする傾向が出始めている［e.g. Chrisler 2012; Fikkan and Rothblum 2012; Hartley 2001; Saguy 2012］。フィッカンとロスブラムは、「ファットはフェミニストの問題である」のであれば、細い女性や平均的サイズの女性だけではなく、実際に太っている女性が受ける、さまざまな体重差別にも目を向けるべきだと論じる［Fikkan and Rothblum 2012］[74]。

とはいえ、第 3 章で述べたように、ファット・アクセプタンス運動をアイデンティティ・ポリティクスに依拠した社会運動としては理解しづらい面を持っている。なぜなら、ファットは複数の差異カテゴリーを内包するために、ファットは誰のことであり、ファットとは何であるかについて理解するための運動プロセスで、どのような「他者」を措定し、その「他者」に対しどのように自己を構築していくかが難しいからである。

こうした事柄を踏まえて本章で問いたいのは、以下のことである。すなわち、ファットであることは同時に女でもある、という事実が、ファット・アクセプタンス運動の参加者に、具体的にどのような軋轢をもたらすのか。ファットとしての自らの経験や行為を、フェミニズムの枠組みの中で理解することが、ファット・アクセプタンス運動に参加する人びとに、どのような葛藤や対立を起こすのか。そして、その軋轢によってどのような自己が立ち現れてくるのか。こうした問題について、70 年代から今に至るまで、時代横断的に検討していくことにしたい。

74　ジェンダーの議論において、太った男性の存在については、女性以上に無視されている現状があることも付け加えておかなければならないだろう［cf. Bell and McNaughton 2007］。

本章の構成を説明しよう。1970 年代のファット・アクセプタンス運動とフェミニズムが連携しようとした経緯について説明した第 3 章に続く形で、2 節ではフェミニズムからの影響を受けた人たちが、フェミニズムと出会い、1970 年代以降美的性的対象としての太った身体に注目することによって、それを乗り越えようとした様子を、資料とインタビューデータなどから明らかにする。3 節と 4 節では、フィールドワーク中に起こった二つの出来事を紹介し、ファット・アクセプタンス運動にフェミニズム的思考を介入させることによって、どのような問題が生じたのかを説明分析する。

2.　フェミニズムを乗り越えようとする人びと

2.1　なぜフェミニズムは太った女性が受ける差別や抑圧に無関心なのか

女性の身体を理論化しようとするフェミニズムで、痩身を良いものとする社会的文化的価値観がいかに女性の身体を蝕んでいるかについて取り上げる研究は多い［e.g. Bartky 1990; Bordo 1993; オーバック 1994; ウルフ 1994］。しかしその一方で、太った身体は理論化の流れから、ほぼ無視されてきた［Hartley 2001; Rothblum 1994］。ファット・アクセプタンス運動はフェミニズムから影響を受けている。また、体重差別は女性をめぐる事象として問題化されることが多い。それにもかかわらず、フェミニズムはなぜ太った女性が受ける差別や抑圧に無関心であり続けてきたのか。これは、ファットについて研究する多くの（女性）研究者がぶつかる問いである［e.g. Chrisler 2012; Fikkan and Rothblum 2012; Hartley 2001; Saguy 2012b］。

クリスラーは、なぜフェミニズムは太った女性が受ける差別や抑圧に無関心なのかという問いに対し以下のように応える。自己コントロールに価値をおくアメリカでは、太った女性とフェミニストのあいだには以下の類似性がある。すなわち、どちらも男性から見れば、感情をコントロール出来ずに怒っていて、魅力的ではなく、自分の外見にこだわっていないなどの、ネガティブなステレオタイプが付与される。フェミニストたちは、付与されたそのようなステレオタイプを拭い取るために、太った女性と距離を取ろうとするのではないかと論じる［Chrisler 2012: 612］。

また、ロエリングは、フェミニズムは太った女性が受ける差別や抑圧に無関心である理由について、フェミニズムの歴史と絡めて、興味深い視点を提示している［Roehling 2012］。フェミニズムは、3 つの時代区分に分けられるとされる。ロエリングによると、19 世紀後半から 20 世紀にかけて起こった第一波は、参政権や就労権などの獲得をめぐり闘争が起こったと言われる。1960 年代に始まり約 20 年間続いた第二波は、ベティ・フリーダンを中心に結成された全米女性機構に代表されるように、女性であるがゆえにキャリアを諦めざるを得なかった、白人のミドルクラスの女性たちによって構成され、就労や賃金の男女平等を求めた。しかし、レズビアニズムやラディカル・フェミニズムの登場によって、第二波フェミニズムは、分断を深めていく。また、内外から、白人ミドルクラス以外の女性

の経験を無視しているという批判も大きくなっていく。そして、男女平等憲法修正条項が1982 年に不成立になると、第二波フェミニズムは急激に終息した。1990 年代から現在まで続く第三波フェミニズムは、白人ミドルクラスの女性たちによって構成された第二波を否定し、乗り越える形で、人種や階級、性的指向、エスニシティなどの多様性を包摂することを志向する。白人ミドルクラスの女性は、白人男性に比べ、さらに、黒人やヒスパニックの女性に比べ、体重による差別を受けやすいという報告がある［Fikkan and Rothblum 2012］。そして、ファット・アクセプタンス運動を牽引してきた人たちの多くが、第二波フェミニズムを引っ張ってきた、体重差別や偏見を受けやすいとされる白人女性である。ロエリングは、こうした事実を踏まえ、女性に対する体重差別の問題は、白人ミドルクラスの女性による第二波フェミニズムが対象にする問題の範囲内に入ると指摘する。つまり、体重差別などの問題は、白人ミドルクラスの女性が格闘している問題であるという。現在のフェミニズムは、アメリカ国内の白人女性の問題をフェミニズムの問題として扱っていた時代と異なり、例えば、移民女性の問題、トランスジェンダーの問題など、これまでの第二波フェミニズムが対象にしてこなかったより多様な問題を課題にしている。そのため、フェミニズムはファットにもはや関心がないのではないかと述べる［Roehling 2012: 597–598］。

確かに、このロエリングの主張は、第二波と第三波の間の違いと、その間のファット・アクセプタンス運動の位置を説明していて、一理あるように思える。しかし、フェミニズムを教科書的な運動として単純化しすぎており、なにより、第 3 章で結論付けたように、フェミニズムに沿ってファット・アクセプタンス運動を説明することで、その独自性を無視している。ファット・アクセプタンス運動はフェミニズムにインスパイアされたとはいえ、二つの運動の政治的目的や理念は同じではない。むしろ、本論がこれから説明したいのは、ファット・アクセプタンス運動の人びとの自己理解が、フェミニズム的思考の介入によって阻まれているのではないだろうかということだ。

2.2　美的性的な身体としてのファット：1970 年代から 1990 年代前半におけるフェミニズムからの影響、そして、フェミニズムとの距離

フェミニズムに影響を受けた人びとは、何に惹かれ、そして、何を理由に距離を取ろうとしたのか。以下では、60 年代から 70 年代のフェミニズムに強い影響を受けたファット・アクセプタンス運動の参加者の、フェミニズムとの関係、その影響、そこからの距離などを読み解いていこう。

フェミニズムからの強い影響：バーガードの場合

臨床心理士のデブ・バーガードは、現在、ファット・アクセプタンス運動に関わりながら、カリフォルニア州サンノゼ市に近いロス・アルトスで摂食障害者のセラピーを行う。彼女は、NAAFA にも所属するファット・アクティビストであるが、他のメンバーと比べ

るならば、それほど太っているとはいえない体型だ。彼女は、筆者とのインタビューのなかで、どのようにしてファット・アクティビズムに関わるようになったのかという筆者の質問に対し、フェミニズムの話をし始めた。

> 私は 60 年代に大人への階段を上り、アメリカの黒人運動（Black America）で何が起こったかを見たのよ。70 年代の女性たちの生に起こった、とてつもない変化を経験してきたの。自分の人生の中で、ドレスコードの変化も経験した。パンツをはいちゃダメという女子のドレスコードから、パンツははいてもいいけどジーンズはダメっていう中学時代も経験した。男子ははいてよかったんだけどね。大学に行く時までに「男女共用のトイレ」があった。ハーバード大学に入学した時は、男女比を考慮に入れない、つまり、性差別をしない入学試験を合格した初のクラスだったのよ。だから、人生の中で非常に大きな変化をいくつも経験した。70 年代のゲイ・ライツ運動もたくさん見てきたし、ディスアビリティ運動もね。〈中略〉「公民権運動は人びとの意識を高めていったの。身体のサイズに性格を読み込んだり、身体のサイズからその人の実践を読み取ると言うことの政治的社会的問題に若い頃から敏感だった。学術書からも学んだし、ハーバードで心理学を学んでいたときはフェミニストの文献をたくさん読んだ。（2009 年 9 月 10 日彼女のオフィスにて行われたインタビューより）

上記のように語る彼女も、10 代の頃はダイエットに励んでおり、19 歳の頃は 30 パウンド（14 キロ近く）の体重の増減を 3 回繰り返したこともあったと言う。そして、自身はかろうじて摂食障害にはならなかったが、摂食障害に苦しむ母親とダイエットをする父親の姿を見ながら育ったという。

インタビューから分かるように、1970 年代の女性のライフスタイルにもたらされた劇的な変化のなかで生き、公民権運動、フェミニズム運動、ゲイ・ライツ運動など時代の様々な変動を見てきた彼女は、当時のフェミニズムが身体をめぐるポリティクスや、外見の差別と戦うためのエンパワメントとなっていたと肯定的に評価している。彼女がインタビュー中に自認していたことだが、彼女は、ファット・アクセプタンス運動では、相対的に痩せている部類に入るだろう。また、インタビュー中で何度か言及されているように「ハーバード大学」出身である彼女は、学歴のある「特権的」地位にいたと考えられる。

デブのように、フェミニズムにインスパイアされて、ファット・アクセプタンス運動に入った人は多い。しかしながら、当時の資料やインタビュー調査から分かるのは、当時、多くのファット・アクティビストたちは、フェミニズムとの距離の取り方に苦心していたということだ。フェミニズムとの関わりでやはり言及しておかねばならないのは、第 3 章で取り上げたファット・アンダーグラウンドを代表とするラディカル・フェミニズムの流れをくんだ人たちの存在である。以下で紹介しておこう。

「フェミニストになりたい」：リンの場合

【図 4-1：ビデオで語るリン・メイベル＝ルイス】

ファット・アンダーグラウンドが作成したビデオが、サンフランシスコにある GLBT 歴史協会（GLBT Historical Society）に残されている。30 分弱のその VHS ビデオは、短いものではあるが、当時のメンバーの声が収められた貴重な資料である[75]。ビデオの冒頭で、「このビデオテープは 1975 年に撮影され、ファット・アンダーグラウンドの活動においてプレゼンテーションを行う際に、人びとの意識改革を促すために使用された」というテロップが流れる。そのなかに、ファット・アンダーグラウンドのメンバーの一人であるリン・メイベル＝ルイス（Lynn Mabel-Lois、現在の名前は Lynn McAfee）による 10 分近くにわたる独白が収められている（【図 4-1】参照）。本論にかかわる重要だと思われる独白の冒頭部分を、少し長いが引用してみたい。

> 私は、ファット・アンダーグラウンドのリン・メイベル＝ルイスです。自分の苦悩と自分の名前の中に、過去を刻んで生きています。メイベルは、私の祖母の名前です。彼女は婦人参政権の運動家でしたが、失望を抱えたまま亡くなってしまいました。ルイスは私の母の名前で、彼女は太った女性で、ダイエットが原因で亡くなってしまいました。私はフェミニストです。フェミニストとしての歴史があります。そして、苦悩の歴史を経験してきました。私が母の名前を引き継いだのは、私の苦悩の大部分は、太っていることからくるものだったからです。〔このビデオを見ている〕ニューヨークにいる人やその他の都市の人が、今、どんな風に反応しているかは分かっているのです。本当に興奮して気が狂いそうなのですが、おそらく皆さんの中には、私の腕を、あざ笑うかのようにくすくす笑いながら見て、私自身を見

75　サンフランシスコ市内にある GLBT 歴史協会（GLBT Historical Society）のジュディ・フリースピリット（Judy Freespirit）アーカイブ・コレクションのなかに所蔵されている。

ないようにしている人もいるでしょう。私は、私の腕を見て欲しいのです。私があなたがたの仲間（sister）であると、あなたがた自身が自分自身に語りかけて欲しいのです。そして、そのことを信じて欲しいのです。私が望むのはこれだけです。
これから私が言うことの中には、聞きたくないと思うこともあるでしょう。なぜなら私に目を向けることが出来ないから、私が太っているからかもしれません。しかし、そのことで私は怒りを覚え、悲しい気持ちになります。どうか私の話を聞いて欲しいのです。〈中略〉初期のフェミニズムは、自分自身のために闘うのだと言っています。もうこれ以上、男性のために[76]闘わない〔と言っている〕のです。私は自分のために闘うから、あなた方にも私と一緒に闘って欲しい。私のために闘うなら、あなた方のためにも闘います。この 10 年近くの間、私は男性が大嫌いだと言い回ってきました。彼らには耐えられないのです。男が嫌いです。女性と一緒にいるほうがいい。そしてこの 10 年の間、ほとんどの場合言う機会もなかったのですが、誰も私に「あなた、レズビアン？」と言ってきた人はいませんでした。誰も聞いてこなかったのです。かれらには思いもつかなかったことでしょうし、私も自分がレズビアンかもしれないとは思いもしませんでした。選択肢としてもなかったのです。なぜなら、もし男性が私のことを嫌うなら、もし男性にとって私が魅力的にうつらないなら、もし男性が私に嫌悪感を持つなら、女性も同じように思うでしょう。女性は男性より品位に厳しいですから。〈中略〉女性は、それはもう、男性の倍は私に嫌悪感を抱くでしょう。だから、私は自分の人生において、ここまで独身（celibate）を貫いてきたのだと思います。そして、それは私が選択したことではないのです。私には選択肢はありません。もし私に恋人が見つかれば、それは例外に過ぎないのです。例外として生きていくことは、もうこれ以上出来ません。これ以上、誰かのために取り繕うことはやめます。私が望むことを、すべての太った女性のためにも望みます。道で出会うすべての女性、その人がフェミニストであろうとなかろうと、太った女性のために。誰かの太った友達としてしかあり続けられないことに、うんざりしているのです。私は女性になりたい。コミュニティの一員として、フェミニストになりたい。皆さんに、ダイエットソーダを飲む女性に対し「それが私の仲間たちを苦しめるのだ」と声を上げて欲しい。その声を聞きたい。皆さんに、ダイエット話をしている人から立ち去り、「それが私の太った仲間（fat sisters）たちを苦しめるのだ」と声を上げて欲しい。そして、そういう姿をこの目で見たい。皆さんが、ファットについての情報を集め、それに耳を傾け聞いて理解する姿を見たいのです。（括弧内補足と下線部筆者強調）

76　この部分は、「Early feminism says we fight for ourselves. We don’t fight for men anymore.」の訳である。「男性のために」という部分は、「男性の希望に従って」という意味を含むと思われる。

『Radiance』という太った女性のためのフェミニズム系の雑誌の 1999 年冬号のインタビュー記事によると、彼女の両親は、赤ん坊の時から太っていた彼女に対し、減量のためにあらゆる手を尽くしたという。彼女の小児科医はアンフェタミンなどのいくつかの危険な薬を処方し、彼女は、それらを飲み合わせて、「気が変になる」ことでいっときは痩せることができたという。しかし、数ヶ月経つと薬に耐性ができ、リバウンドを繰り返し、彼女はどんどん太っていった。15 歳の頃には、彼女は、「生きているものの中で、一番太っていて、一番醜い」と思っていたという［Sherwood 1999］。リバウンドを繰り返し、減量は実現可能なものではないと気づいた末、1973 年にファット・アンダーグラウンドに加入した。

ビデオの中で「レズビアン」としての自己認識はこれまでなかったとしながらも、激しく男性を嫌悪するその様子から、当時のラディカル・フェミニズムの影響を強く受けていることが分かる。しかしながら、同時に、リンの独白から分かるのは、ファット・アンダーグラウンドが、当時のフェミニズムから協力関係を得られていない当時の状況である。彼女は、自身に向けられる「あざ笑うかのよう」な視線、あるいは、目を向けないようにしている視線は、男性以上に女性が厳しいと述べる。そして、彼女は、ビデオの前にいるフェミニストたちに、脂肪の塊がつく自分の腕を見て欲しいと訴える。ここから推察できるのは、彼女が闘おうとする相手には、ラディカル・フェミニズムの嫌悪の対象である男性だけではなく、自己の身体を嫌悪する女性も含まれているのだ。

現在もファット・アクティビストとして活躍しているリンは、この当時のことを以下のように振り返っている。「私がファット・アンダーグラウンドにいるとき、私が世界に対し間違いを伝え、その間違いがわれわれを傷つけていることを示せば、世界は変わると思っていた。そうではなかった。〈中略〉世界が素早く動いてくれるだろうと私が期待しすぎていたことに気づいたのです。A から Z へと、1〜2 歩の跳躍でね。〈中略〉人を A から B へと動かすことに専念しようと決めたのです」と語っている［Shanewood 1999］。彼女は、続けて、自身の他者とのコミュニケーションの姿勢について以下のように続けている。

> 私は、常に、人びとはまともである（People aren’t crazy）という原理に基づいて動いています。医師や肥満研究者、FDA でさえも。かれらには、何をやり、何を信じるかについてのかれらの道理がある。かれらは、その道理が良いものであり、論理的であるから信じている。その道理は、我々にとって、常に分かりやすいものではないけれど、人の言動には内部の論理があるのです。<u>われわれは、皆、コミュニケーションをするものとしての責任があって、他者が根底にもつ論理を見つけ、それを理解し、尊敬しなければならないのです。</u>そのロジックを理解した上で、それを批判できるのです。何をリアリティとして理解するかについて、怒鳴り合ったり、お互いに頭がおかしいなど決め付けたりせず、<u>われわれは対話することができる</u>のですから」［Shanewood 1999］。（括弧内筆者補足、下線部筆者強調）

彼女は 1991 年に「サイズと体重差別についての審議会（The Council on Size & Weight Discrimination）」という非営利の委員会を、NAAFA の一部のメンバーらと立ち上げ、現在も、医療、雇用、メディア・イメージにおけるサイズと体重差別の廃絶に取り組んでいる。

フェミニズムと距離を置き始めた人たち：リンダ、シャーリー、キャロルの場合

次に見ておきたいのは、現在ファット・アクセプタンス運動にかかわる人で、当時、フェミニズムと徐々に距離を置き始めたと語る人たちが、フェミニズムとの関係や太った身体についての捉え方についてどのように語るかについてである。

NAAFA メンバーの栄養士のリンダ・ベーコンは以下のように述べる。1980 年代に彼女自身が摂食障害で苦しんでいたときにフェミニズムと出会い、「女性の身体を不安定にする性差別的な文化のなかで、いかに自分の身体と折り合いを付けるかを学び、私たちは一人じゃないのだということを気付かせてくれた」という。しかし、フェミニズムのアプローチで彼女自身が摂食障害のセラピーを行ったときに、このアプローチでは逆に「悪影響を与える」ことに気付いたという。なぜなら、フェミニズムは食物と身体の健康的な関係を持てば、結果として痩せることが出来るという合意のもと、結局は太った身体を病気のように扱ってしまったからだ。多くの患者は、摂食に関わる感情面での問題にうまく取り組むことは出来たが、減量が付いてこなかった。逆に、自分の身体を受け入れる能力を狭め、太っている他者に対する偏見を生み出したという［Bacon 2009］。

ファット・アクティビストのシャーリーは、60 年代に経験したフェミニズムをきっかけに、ファット・アクセプタンス運動に関わるようになったと語る。太った女性で構成されたシンクロナイズド・スイミングのグループ、「パデット・リリーズ（Padded Lilies）」を作った第一人者である。彼女は、太った身体に対する抑圧は、フェミニズムでは解決し得ないということに早くから気づいていた。

> 私にとっては、〔ファット・アクセプタンス運動は〕フェミニズムから枝分かれしたのです。私は、60 年代に大人になって、そのときちょうどフェミニズムがまさに起こりつつあったのです。そして、フェミニストたちは、そのことを、つまり、ファットはフェミニストの問題であるってことを、理解していないってことが分かったのです。そういう題名の本があるけどね。でも、彼女たちは分かっていなかったのですよ。それは、明らかに彼女たちが取り上げるような問題ではなかった。彼女たちは、自分たちの身体やイメージをとても貶めていたのです。身体サイズとかの問題ですらなくて、ただ単に、女性は自分たちの身体を好きじゃなかった。だから、私はある意味、これはフェミニズムを超えなければ行けない、もっと他のことを含む何かなんだと言って、反抗したのよ。だって、人が身体のサイズや外見によって、

> 自由を制限されたり、抑圧されたりするべきではないでしょう。〈中略〉寛容であること、自由であること、差異を受け入れること、いや、受け入れるというより大切にすること、そういうことに向かって進んでいく必要があると思うのです。（2009年10月20日にオークランド市のカフェで行われたインタビュー）（括弧内筆者捕捉、下線部筆者強調）

ここで彼女は、当時のフェミニズムは、「ファットはフェミニストの問題（fat is a feminist issue）」であるということを、真に理解していなかったと説明する。フェミニストたちは「自分たちの身体やイメージをとても貶めていた」「自分たちの身体を好きじゃなかった」と語る。だから彼女は、ファット・アクティビズムは、「フェミニズムを超えなければいけない、もっと他のことを含む何かなんだ」とファット・アクティビズムを始めたと語る。

彼女の話によると、当時カリフォルニア州バークレーには「イマジズム（Imagism）」というグループがあり、そのグループは、サイズ、見た目、年齢などによる差別に反対していた。彼女はそのグループに参加したり、「ファット・リップ・リーダーズ・シアター（Fat Lip Readers Theatre）」という太った女性で構成される劇団に入って、演劇の脚本を書いたり、パフォーマンスをしていたという。「ファット・リップ・リーダーズ・シアター」の演劇は、彼女にとって、「セクシーで面白くて、解放的」で、「本当にわくわく」するような、「とても自由な気持ちになった」経験だったという。セクシーな服に身を包んだ太った女性たちが、ステージに上って、猥談（dirty talk）したりセックスのことを話したりしていたのだという[77]。

同じく「ファット・リップ・リーダーズ・シアター」で活躍したキャロルは、自己の身体を「美しい」と感じた時のことを以下のように語る。彼女は、1980年代初期、身体の大きな人のためのダンスのクラスに通い始め、「一日1000キロカロリーの食事と水」という、「完璧なダイエット」をスタートさせた。「ダンスをする自分たちの前には鏡が並べられていて、自分たちがよく見えるようになっていた。もちろん、私は鏡に映る自分をきちんと見たことはなかったけどね。常にだぶだぶの服を着ていたし」と述べる。一人のダンスが上手なクラスメイトが踊るのを見ながら、彼女も次第に踊ることを楽しみ始めていた。そして、ある時、クラスを見回した際に「彼女たちの動きの美しさに気づいた。もちろん昔は、自分を見ると、そこには醜いデブ（ugly fat）しか見えなかったんだけど、徐々に、自分の動きも美しいんじゃないかと思って見始めるようになった。あまり揺れない硬い身体とは違って、私たちがダンスをすると、身体の一部の動きを止めてもなお揺れ続ける、お

77　ファット・リップ・リーダーズ・シアターは、1980年代初期にベイエリア地区で作られた演劇グループで、当時のアメリカの太った人びとに対する抑圧について、ユーモラスなセリフとともに演じた。例えば、「私のおばあちゃんが85歳で死んだ。みんなは、「肥満」が死亡原因だという。太った人は、何歳になれば、老衰で死ねるの？」［Lyons 2009: 83］。

腹や胸、二の腕がある。これは思いがけない事実だった」[78]と回顧した。

性的魅力がないと言われる太った女性が、性的な欲望や性に関することがらを話すこと、大きな身体でダンスを楽しむことは、不適切だとされていたのだろう。ダンスの最中に「身体の一部の動きを止めてもなお揺れ続ける、お腹や胸、二の腕」といった肉としての個々の身体の「美しさ」への気づきは、シャーリーが言うような「フェミニズムを超えなければ行けない、もっと他のことを含む何か」だったのかもしれない。すなわち、それは、既存のフェミニズムが語ることができなかった、女性の性的対象、女性の個別の身体など、セクシュアリティに関わるようなことがらであったのではないだろうか。

このことについて、レズビアン・フェミニストのゲイル・ルービンは、ある問題がジェンダーだけではなくセクシュアリティにも関わるものとなれば、フェミニストの分析は誤った解釈を生じやすいと述べている。そのため、ジェンダー研究とセクシュアリティ研究は、フェミニズムとゲイ／レズビアン研究の分離に沿うように、別々の分野として分けられて研究されてきた［ルービン 1997］。フェミニズム研究では、従来、性差を相対化するために、身体を規定する言説について分析が主流であり、肉や物としての個別で私的な身体について語ることには禁欲的な態度を取ってきたのだ。

ここで取り上げた人びとは、デブ以外は、フェミニズムとの関係に苦心している人びとであった。腕の肉を見て欲しいと訴え「レズビアンかもしれない」自己を承認して欲しいというリンの願い、フェミニズムを超えたもっと他のことを含む何かがファット・アクティビズムにはあるはずだと気付づいたシャーリー、さらに、ダンスの最中の個々の身体の動きを「美しい」と形容したキャロル。この三者の試みや気づきは、女性の太った身体を見られる身体として捉え直そうとする、ファット・アクティビストたちの第一歩だったのかもしれない[79]。

この後、いわゆる第三波フェミニズムの影響を受けているといわれるファット・アクティビズムたちが活躍し始める。サンフランシスコを中心として、フェミニスト・レズビアン、バイセクシュアル、クイアと自称する太った女性たちが、演劇などを通じて、太った身体の美的・性的な対象として評価しようとする人たちのグループが現れた［Saguy 2012: 55］[80]。また、1994 年から 1997 年にかけて刊行された、ファット・レズビアン向けの雑誌 *FaT GiRL: a Zine for Fat Dykes and the Women Who Want Them* は、今でもアクティビストたちにとって伝説的な雑誌となっている。

78　2009 年 10 月 9 日オークランド市にある彼女の自宅にて行われたインタビューから。彼女は、後に、太った人たちを被写体としたヌード写真集『*Women en Large*』（1994）に、自身もモデルとして参加している。

79　ファット・アクティビストたちが乗り越えようとした、「フェミニズムを超えた何か」が、セクシュアリティに関わる何かだったのかについては、更なる慎重な議論が必要とされるため、ここでは暫定的な考察にとどめておく。

80　例えば、Fat Lip Readers Theatre 以外にも、Big Burlesque、Bod Squad、Big Moves、Phat Fly Girls などのグループが出現し、そのいくつかは、今でも活動している。

筆者のインフォーマントであるサンフランシスコを中心に活動するファット・アクティビストのマリリン・ワン（以下マリリン）は、かつて筆者に、ファット・アクティビズムは「怒れるフェミニズム（angry feminism）」（第二波フェミニズムを指すと思われる）の影響を受けていると言う人がいるが、それは違うと語った。ファット・アクティビズムは、第三波フェミニズムに関係のあるパンクロックに影響を受けたライオット・ガール（Riot Grrrl）ムーブメントに影響を受けているのだと言った[81]。

しかし、筆者が見たところ、いわゆる第二波フェミニズム的な「怒れるフェミニズム」の影響がなくなったわけではないようだった。むしろ、「怒れるフェミニズム」と第三波フェミニズムが、「フェミニズム的」なものとして混在し、それが、ファット・アクセプタンス運動の中にうごめいている。その混在が出来事として発現した事例を、3 節と 4 節で取り上げ、「フェミニズム」との関係に苦心する、現在のファット・アクセプタンス運動人びとの様子を説明しておきたい。

3.　スージー・オーバックとの同盟をめぐる出来事

3.1　フェミニズムとの同盟が招いた騒動

2009 年 4 月から 8 月にかけて、全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance：以下 NAAFA と記述）で起こったある出来事を契機に、ファット・アクセプタンス運動に参加する人びとの間のフェミニズムに対する立場やファットの捉え方の違いが明らかになった。その出来事とは、イギリス人フェミニスト心理療法家で、摂食障害などの治療に取り組んできた、スージー・オーバックとファット・アクセプタンス運動の同盟関係をめぐって起こった出来事だ。

彼女が 1978 年に書いた『ファットはフェミニストの問題だ（*Fat is a Feminist Issue*）』という本は、「ダイエットをやめよう」というスローガンを掲げ、女性たちから熱狂的な支持を受けた。1970 年代当時、若い女性のあいだで増加していた摂食障害は個人的病理とみなされる傾向が強かった。それに対し、彼女は、社会文化的な文脈から説明しようとした点で画期的であった。

以下、本を少し要約してみよう。彼女は、強迫的摂食が女性に多いという事実があるが、強迫的摂食によって太るのは自制心が欠けているとか、意志が弱いとかいうことではないと述べる。男性中心の社会で常に「他者」である女性は、たくさん食べることによって自分の空間を物理的にも精神的にも満たし、女性という性別による社会的ステレオタイプから自由になろうと試みているのだと述べる。つまり、太っている人びとは、「女は痩せていなければならない」という西欧社会の女性の美の規範をめぐる社会的要請に対し、肥満

[81] 2012 年 2 月 2 日に行われたインタビューから。マリリンは、ライオット・ガール（Rior Grrl）ムーブメントに影響を受けたファット・アクセプタンス運動は、ノミ・ラム（Nomy Lamm）が先導していると述べた。

という形で抵抗しているというのである。ゆえに、太っていることは女性が声を発するための抵抗のための手段になりうると述べるのだ。しかし、同時に、強迫的摂食は、心に問題を抱えていることのシグナルでもある。そして、彼女は、女性に押し付けられる美の規範や社会的役割に、太るという形で抵抗するのではなく、自己を見つめ直し再評価することを勧める。そうすれば、健康的自然的な体重になると述べる［オーバック 1994］。

肥満は抵抗であるという分析や、ダイエットをやめようという提案は、当時は斬新なものであった。しかしながら、ファット・アクセプタンス運動の人びとからすれば、彼女の議論は問題含みである。なぜなら、第一に、太ることを強迫性摂食という病理的なものとして見なしているという点。第二に、太ることと食べることを過度に関連づけているということ。第三に、太ることによって女性的な美のイメージや魅力に抵抗できるということは、暗に、太っていることが魅力的ではないと意味しているという点があげられる［Cooper 1998; Gard and Wright 2005］。また、「正常」な摂食をすれば自然に痩せるのだという彼女の論理は、太っているのは「異常」な摂食をしているからだということと同義である。そして、その論理こそが、「女は痩せていなければならない」という社会的要請を暗に強化してしまうものであった。こうした批判的な意見は、既にファット・アクティビストのなかでもある程度知られていた。

にもかかわらず、NAAFA の年次大会とサイズ・ダイバーシティと健康協会（Association of Size Diversity and Health : 以下 ASDAH）[82]の年次大会が、2009 年 8 月に合同で開催され、その際のキーノート・スピーカーとして、スージー・オーバックを招聘する計画案があがったのだ。オーバックの招聘が決定したという情報は、2009 年 4 月 23 日が、NAAFA のメンバーやファット・アクティビストたちが参加する「fatstudies」というメーリングリストで流された。オーバックの招聘は、フェミニズムと同盟関係を結ぶことによって、今後のファット・アクセプタンス運動の活動を大きく展開していくための一つの戦略であると述べられた。

それから 2 ヶ月近くにわたり、オーバック招聘に対する議論が交わされ、嫌悪感や困惑、怒りがメーリングリストに続々と投稿された。その多くは、太っていることを病理であるとみなす人物をなぜ招聘するのか理解できない、というコメントだった。オーバックの招聘に対する反発は、ファット・アクセプタンス運動の組織の分断やファット・アクティビストと専門家の分断をも引き起こしかねなかった。マリリンは筆者との会話の中で「ASDAH は減量をしないアプローチを推進する専門家の集まりであったはず。だからこそ、NAAFA のメンバーは、年に一度の ASDAH の大会を楽しみにしている。肥満を嫌悪している人のスピーチなんて聞きに行きたくない」「オーバックは、基本的には肥満者を

82　第 6 章で詳しく説明するように、NAAFA は、アクティビストが中心となって、「ファット」の市民権を訴える社会運動の要素が強い。それに対し、ASDAH は、研究者や専門家が中心となって、身体サイズに関係ない健康のあり方についての情報・意見を交わす組織である。二つの組織のメンバーはオーバーラップしている。

病理的な人びととして見ている。なぜ彼女を招聘するのか分からない」と招聘の決定を強く批判した。そして、招聘に対する抗議として、マリリンは 5 月始めに ASDAH を退会した。

他方で、招聘に賛成する人びともいた。かれらは、世界的に著名なオーバックと同盟を組むことは、自分たちの活動を知ってもらうために極めて重要なことであると賛同した。彼女にファット・アクセプタンスの考え方を教える良い機会だと述べる者もいた。

招聘は予定どおり行われる運びとなったが、彼女はキーノート・スピーカーとしてではなく、ゲスト・スピーカーとして招聘されることになった。

2009 年 8 月 1 日当日、筆者が会場に着くと、オーバックは白いタイトなワンピースを着て、ステージの上段に足を組んで座り、やや緊張しているように見えた。彼女の赤いマニキュアは白いワンピースをひときわ際だたせていた。会場には、ASDAH の専門家やファット・アクティビストたち 100 人弱が聴衆として集まっていた。フェミニズムに影響を与え、同時に、太っていることを病理的なものとして扱った人物を前に、場内は少し興奮状態にあったように感じた。

彼女のスピーチは、新しく出版される彼女の本の内容が中心だった。そのスピーチが終わり、司会者のエラ（仮名）が、皆が聞きたがっている質問を投げかけた。「現代社会の身体にたいする脅迫観念を批判したり、BMI を批判したり、身体の多様性が大事と良いながら、あなたは著書の中で肥満は問題であるとして、太っていることを病理的なものとして扱っている。二つには矛盾があるのではないでしょうか」と問う。それに対し、オーバックは「ファンディングをもらうためにやった」と応えた。そして、「私の唯一の望みは、女性に幸せに食べて欲しいということ」であり、それを不可能にしているのが今の食品産業だと言った。そして、「食べ過ぎたり、摂食のコントロールができない肥満者もいるけれど、そうではない人もいる」。むしろ、「摂食に問題を抱えている多くの人は、太ってはいない」と応えた。メンバーたちの質問の意図は微妙にずらされながら、彼女は一貫して、肥満が問題であるか否かは重要ではなく、幸せに食べることを困難にしている食品産業が問題なのだという応えに終始した。会場は、不満が立ちこめていたようにも感じたが、筆者が思っていたよりも穏やかに終わった。

後日、筆者は、司会を担当したエラにインタビューを行い、スージー・オーバックの招聘について、彼女の意見を聞いた。彼女は、確かに彼女は過去の著作でも最新の著作でも、肥満を一種の病理として扱い、肥満問題に取り組まなければいけないと公言している。しかし、他方で、摂食障害を個人的な病理としてではなく、文化的な問題として取り上げた人物として、30 年以上もこの問題に関わっていることは評価すべきだと述べた。オーバックの問題は「摂食障害の研究のファンディングをもらうために、「肥満は問題だ」と言うことによって、問題の一部に彼女が入り込んでしまっている」ことだと指摘した。つまり、太った身体を身体の多様性から排除することによって、彼女自身が肥満の問題化を推し進めてしまっている。摂食障害者を助けるために身体の多様性が大事だというならば、太っ

た身体も多様性として包含すべきであるという。エラは、アクティビストの中には彼女の話など聞きたくもないという態度を取る人もいるが、ここでダイアローグを絶つのではなく、同盟を組むことの方が大事だと思うと語った[83]。

3.2　フェミニストの「特権」

スージー・オーバックをめぐる一連の出来事について、ファット・アクセプタンス運動を支える栄養士のリンダ･ベーコンは、同年の NAAFA の年次大会で、「特権から学んだ教訓（Lessons Learned from Privilege）」と題するスピーチのなかで言及した。彼女のスピーチは、オーバックの講演の直前に行われ、ベーコンはオーバックという名前を出さなかったものの、それは明らかに今回の論争で起こったことを念頭に置いたものだった。長いスピーチだったが、スピーチのあと会場は大きな拍手に包まれた。少し引用したい[84]。

> 特権というのはしばしば吟味されることがないものです。私は、HAES（Health at Every Size という体重管理をしない健康プローチのこと：第 6 章参照）の専門家が参加する ASDAH 内での最近の論争について、このことを思いつきました。あるスピーカーが招聘されました。彼女の仕事は、多くの面で HAES と調和する部分もありますが、彼女の最近の著書や執筆物を読むと、彼女は我々の考えと違ったものであることが分かります。彼女は、ファットを病理化し、太った身体を摂食の問題の証左として、太った身体は文化が誤った方向に進んでいることを示すものとして捉えています。あるメンバーは、彼女がスピーカーに選ばれたことを受けて ASDAH のメンバーを辞め、他のメンバーたちも―痩せている人も太っている人も―懸念を表明しました。この論争の根底にある真の問題は、特権です。説明しましょう。何人かの ASDAH メンバーは彼女の講演を聞き、そこから何を学び、何を切り捨てるかについて判断することが出来るでしょう。他の特権―例えば痩せている、あるいは、学歴がある、立派な社会経済的な階級にいるなど―があるから、そのようなことが出来るのでしょう。他方で、ASDAH のメーリングリストに投稿した、とても太っているある人物の経験を考えてみましょう。彼女は、本屋、映画館、レストラン、どこへ行っても、じろじろと見られ、嘲笑や冷笑を受け、まるで心を攻撃されているかのように感じると言います。彼女がこうした世界に直面するときの精神的エネルギーを考えれば、肥満に嫌悪を表す人の発表にたいし、彼女がそれを聞かぬふりをしたり、傷つけられたと感じないようにやり過ごしたりすることがどれだけ困難なことか理解できるかもしれません。〈中略〉このスピーカーが歓迎されてい

83　2009 年 9 月 30 日彼女の仕事場のオフィスにてインタビュー。

84　このスピーチの原稿は、「Reflections on Fat Acceptance: Lessons Learned from Privilege」として、彼女のホームページで公開されている［http://www.lindabacon.org/Bacon_ThinPrivilege080109.pdf］（2011 年 3 月 30 日最終閲覧）。

ることは、あるメンバーにとっては、信頼の裏切りにも、かれらがほっとできる安息の地を失うことにもなるのです。〈中略〉ASDAH のメンバーの中には、特権によって、他の人の意見を聞くことの価値を合理化することが出来るでしょうし、苦痛を感じている個々の人びとが問題だと決め付けるかもしれません。彼らは、自らの行動を容易にするような特権の役割に気付いていないかもしれません。特権が理解されるならば、今こそ、問わなければならない重要な問題があります。その特権は適切な使い方をされているのか？対話することはそれがもたらす犠牲に見合うのか？〈中略〉これらの問いは些細なことではありません。太った人びとに対する闘いは、善意の専門家によって引き起こされているからです。特権がきちんと吟味されないことによって、その善意は間違った方向へ向かってしまうのだと、私は思います。（括弧内筆者補足と下線部筆者強調）

彼女は、自分がこの運動に関わり、太った人びとの権利を主張するということが、どれほど信頼性を獲得するメッセージになりうるかを、その事実に恐れや不安を持ちながらも自覚していると述べスピーチを終えた。

このスピーチのなかでとりわけ印象的だった箇所が、こうした特権を持たない太った人が「どこへ行っても、じろじろと見られ、嘲笑や冷笑を受け、まるで心を攻撃されているかのように感じる」と吐露したという部分だ。「痩せている、あるいは、学歴がある、立派な社会経済的な階級にいる」といった特権は、他者からの冷酷なまなざしを回避する力となる。そして、この出来事でスージー・オーバックとの同盟を画策しようとしたメンバーたちも、こうした特権を持つ人びとなのだ、とリンダは暗に指摘していた。フェミニズムなどとは無関係に、メンバーとの交流を楽しむためにファット・アクセプタンス運動に参加するメンバーたちにとっては、他者からのこうしたまなざしが、かれらの心を傷つけ、生きる意思を挫くのだ。

スージー・オーバックとの同盟関係を結ぼうとした出来事で露呈した問題は、フェミニズムの枠組みで問題を理解することが、ファット・アクセプタンス運動に参加する人に困難をもたらすことがありうるということだ。フェミニズムを振りかざすことが、太った女性たちの真の苦しみを理解することにはならず、むしろ傷つけることにもなりうるのだ。

3.3　小括：フェミニズムとファット・アクセプタンス運動の「ぎこちない関係」

フェミニズムとファット・アクセプタンス運動の関係を論じる上で、ここで、人類学者とフェミニストの関係を対象との関係の取り方の相違から論じたマリリン・ストラザーンの議論［Strathern 1987］を参考にすることは、あながち間違いではないだろう。すなわち、ここでは、ファット・アクセプタンス運動とフェミニズムの差異に対する関係の取り方の相違を問題にしたい。ストラザーンは、人類学者とフェミニストの関係を、どちらも差異に対して敏感であるという学問的な近接性がありながらも、互いの影響関係が見いだ

しにくいのは、その二つの学問の間に「ぎこちない関係（awkward relationship）」にあるからだと論じた［Strathern 1987］。ぎこちなさは、フェミニズム（特に、ラディカル・フェミニズム）の実践と人類学の実践の、対象に対する関係の取り方が異なることから来るのではないかと述べる［Strathern 1987: 284］。人類学にとって、差異は解明すべきものであり、つぶすものではない［Strathern 1987: 286］。人類学にとっての「他者」は攻撃をしてくる相手ではなく、むしろ、人類学は「他者」との関係のなかで自己を構築していくことが目指される。そのためには、対象の文化や社会と適度な距離を保ちながら向き合い、対話を通して関係を築くのだ。それに対し、フェミニズムは、「他者」からの抑圧を自覚することによって、自己を発見する［Strathern 1987: 289］。この場合の「他者」とは、女性である「自己」を抑圧する存在＝男性である。フェミニズムが問題にしたのは「自己」の身体が「他者」＝男性のまなざしを経由した身体としてしか成立し得ない事態であった。そのため、男性のまなざしを経由した、女性の身体は嫌悪の対象となっていた。「自己」は、「他者」としての男性の視線にどう対峙し、それにどう打ち勝つかということが課題となる。このように、人類学者でありながら、フェミニストでもあるとき、そこには克服し難い分裂がある。ストラザーンは、そのことを「ぎこちない関係」と言ったのだ。

他方で、ファット・アクセプタンス運動にとっての他者は、敵対すべき大文字の「他者＝男性」ではない。他者は、リンダ・ベーコンの特権についてのスピーチで出てきた、「嘲笑や冷笑を受け、まるで心を攻撃されている」かのようなじろじろと見る視線を投げかける現実の他者である。そうしたまなざしを投げかける他者は、敵対すべき相手というより、自己を抑圧する存在でありながらも、対話を通して関係を築く対象である。このことは、第 2 節で取り上げた、ラディカル・フェミニストだったリンの言葉からも理解できる。彼女が後に、「われわれは、皆、コミュニケーションをするものとしての責任があって、他者が根底にもつ論理を見つけ、それを理解し、尊敬しなければならないのです。〈中略〉われわれは対話することができるのですから」と思い直したように、他者は敵ではなく、対話をする相手として想定されている。つまり、ファット・アクティビストとフェミニズムという二者間に「ぎこちない関係」をもたらしてきたのは、対象の違いと対象に対する関係の取り方の違いだと言える。

ただし、ストラザーンの議論には、まだ考察の余地がある。例えば、人類学者のリラ・アブ＝ルゴッドは、ストラザーンの議論を「自己」と「他者」を所与のものとして無批判に捉えていると批判する［Abu-Lughod 1991］。アブ＝ルゴッドによれば、「他者」は本質的で自律的に存在しているのではなく、「自己」と「他者」の間の不均衡な力関係のなかで作られる。ストラザーンは、人類学にとっての「他者」は「自己」と対立的ではないと言ったが、非西欧の「他者」は、西欧による支配によって作られたものであり、その意味で対立的である。アブ＝ルゴッドは、ストラザーンが他者という対象を自然で本質的なものとしてア・プリオリに措定し、西欧的自己によって作られた「西欧＝自己」と「非西欧＝他者」という差異を所与のものとみなしてしまっていると批判する。人類学は他者支配に

よって自己を構築したのに対し、フェミニズムは他者からの支配に対抗することによって自己構築を目指す。すなわち、ストラザーンが感じたフェミニズムと人類学の間のぎこちなさは、この完全に正反対のプロセスに対して感じるものだとして理解したほうがよいのではないかと指摘する［Abu-Lughod 1991: 139］。「ハーフィー」[85]やフェミニストという立場から文化人類学を研究する者は、自己と他者の境界はさらに不安定なものになりうる。なぜなら、人類学の研究対象である「他者」は、同時に、部分的に「自己」として構築される。すなわち、「他者」は同時に「自己」でもあるからだ、とアブ＝ルゴッドは述べる［Abu-Lughod 1991: 140–141］。本論は議論の対象にしないが、ここから、自己と他者の区別を作り出すツールとしての文化概念を排斥すべきである、という彼女の主張が出てくるのだ。

アブ＝ルゴッドのこの指摘は、もっともなものである。人類学は、他者との対話を通して自己を構築してきたとはいえ、それは圧倒的な支配と被支配の権力関係に成り立った上での自己構築であった。対して、フェミニズムは、他者との不平等な権力関係による抑圧や支配に抵抗することを通して自己構築を目指す。では、ファット・アクセプタンス運動はどうだろうか。かれらは、他者からの抑圧に対し、対話で応じることによって自己を構築しようとするのだ。これは、人類学ともフェミニズムとも異なる、他者との関係の取り方であるといってよい。

アブ＝ルゴッドは、人類学がフェミニズムから学ぶべきこととして、第一に、自己とは所与のものではなく常に構築されるものであるということ、そして、第二に、他者に抵抗することを通じて自己を構築する過程においては、他の形態の差異を抑圧したり無視したりすることがありうるという二点をあげている［Abu-Lughod 1991: 140］。また、チャールズ・テイラーは、アイデンティティは、自己の内面から一人で獲得できるものではなく、他者との対話を通じて、そして、他者からの承認を通じて獲得されるものであると言った［テイラー1996: 37–38］。つまり、自己であるというアイデンティティの獲得の根本には、他者（からの承認）が必要だということである。

まさにそのことが、ファット・アクセプタンス運動に参加するものの自己規定を揺るがしてきたのだ。フェミニストという立場からファット・アクセプタンス運動のアクティビストになった人たちにとっては、太った身体という差異の形態を認めないフェミニズムにその一員として留まり続けることは、自己の一部から承認を得ることができないために、自己構築が阻まれる。第 2 節で扱ったリンやリンダ、シャーリーがそうであったように。体重に苦しみフェミニズムに助けを求めた女性たちにとって、フェミニズムは救いにはなったかもしれないが、フェミニズムは太った女性たちの真の苦しみに気づくことはなかった。

85　移民経験や、海外で教育を受けた経験や、生まれなどから、複数のナショナル・アイデンティティや文化的アイデンティティを持つ人びとのこと［Abu-Lughod 1991: 137］。

さらに、ファット・アクセプタンス運動の自己規定の困難は、運動のなかに男性のメンバーがほとんど存在しないことにも関係しているかもしれない。例えば、ベルらは、フェミニズムが、女性の体重への関心と家父長制の関係を過度に喧伝してきたのではないかとみている。つまり、フェミニズム自身は、女性のみが受ける体型やサイズをめぐる抑圧の経験を可視化し、女性のみが太ることへの嫌悪に苛まれているという考え方を再生産してきたのではないかというのだ［Bell and McNaughton 2007: 118］。

しかし、女性だけではなく、男性も身体や体重への不満、太った身体に対する恥ずかしさや嫌悪などを抱えることは、いくつかの文献によって指摘されている［e.g. Lupton 2012: 62; Monaghan and Hardey 2009］。にもかかわらず、男性が減量行為にかかわることについてあまり明らかにされてこなかったのは、減量グループなどは女性の参加者が多いため男性は居心地が悪く感じ、そうした活動には参加しないから［Bell and McNaughton 2007: 116; Stinson 2001］、あるいは、ダイエットは女性の行為とみなされ、体重や外見を過度に気にするのは男性らしくないと考えられる傾向があるから［Lupton 2012: 64］などの理由が考えられる。

以上を考慮に入れると、フェミニズムとファット・アクセプタンス運動の「ぎこちない関係」は、ストラザーンが考えるより、さらに重層的な関係から生み出されるといえる。まとめてみると以下のようになるだろう。太った女性も太った男性も恥ずかしさや嫌悪の対象であった。太った女性はフェミニズムに助けを求めたのに対し、男性のファットはあまり問題化されることはなかった。しかしどちらも、承認を得づらいという点で同じ位置にいる。女性は痩身が理想とされるため、太った女性は女性性がない（unfeminine）とされる位置にいる。それに対し、筋肉で引き締まった身体が理想とされる男性にとって、太った男性は丸みを帯びた女性らしい体つきであるため、男らしさ（masculinity）が欠如していることになる［Bell and McNaughton 2007; Lupton 2012: 63］。つまり、太った女性としての自己は、太った男性、すなわち、フェミニズムにとっての「他者＝男性」と苦しみを共有している。この地平においては、ファット・アクセプタンス運動の自己は他者でもありうるのだ。そのような事態は、ファット・アクセプタンス運動がフェミニズムと連携する上で、「ぎこちなさ」、そして、自己規定の不安定さを生み出すのではないだろうか。

では次に、「文化的他者」との出会いによって、ファットであるということは女である、ということが再び意識化される契機となった出来事を説明する。その契機は、日本で 2008 年 4 月に導入されたメタボリック・シンドロームの検診基準をめぐるアクティビズムによって起こった。

4.　ファットのなかの「多様性」:「ファット鶴プロジェクト（1000 Fat Cranes Project）」をめぐる人種差別批判

4.1　「ファット鶴プロジェクト（1000 Fat Cranes Project）」

【図 4-2　マリリンが作成したイェイ！スケール（Yay! Scale）の日本語版】

【図 4-3 マリリンが考案したファット鶴】

2008 年 4 月から、日本の特定健康診査・特定保健指導として、メタボリック・シンドローム[86]という言葉が提唱され、新しい検診基準が設定された。いわゆるメタボ検診といわれるこの検診では、健康保険組合加入者に、腹囲、血圧、血糖値、コレステロール値の 4 項目を検査することが義務づけられた。このニュースは、瞬く間にアメリカのファット・アクティビストたちの耳にも入った。

マリリンはアクティビストとして何か抗議行動を起こさなければいけないと考え、筆者に彼女が考案する抗議プロジェクトの内容について相談してきた。それは、「千羽のファット鶴プロジェクト（1000 Fat Crane Project）」と名付けられたプロジェクトだった。千羽鶴ならぬ、千羽のファット鶴を作り、日本政府に送り、彼女自身が東京を含む日本の各都市をまわり、彼女が開発したイェイ！スケール（Yay! Scale）を使ってデモンストレーションをするというものだった。私は、彼女のこうしたアイデアに「できる限り協力する」と伝えた。

イェイ！スケールとは、彼女が考案作成した体重計のことで、普通なら体重の数値が出てくる窓の部分に、「Fabulous」「Beautiful」「Cute」「Perfect」などの褒め言葉が出てくるのだ。筆者が日本語訳を教え、彼女はその日本語版を作った（【図 4-2】参照）。イェイ！スケールのデモンストレーションとは、街の道行く人びとにイェイ！スケールに乗ってもらうことによって、体重の数値から解放するという彼女の街頭パフォーマンスの一つだ。

86　メタボリックシンドロームとは、内臓脂肪型肥満（内臓肥満・腹部肥満）に高血糖・高血圧・高脂血症のうち 2 つ以上を合併した状態をいう。特定健康診査、いわゆる、メタボ健診といわれるこの健診では、40～74 歳の公的医療保険加入者が健診対象となる。そのうち、ウェストが男性 85cm 以上、女性が 90ｃｍ以上の人で、血糖値 100mg/dl 以上、最高血圧 130mmHg または最低血圧 85mmHg 以上、中性脂肪 150mg/di 以上または善玉コレステロール（HDL）40mg/dl 以下のうち、１つ該当する者をメタボリックシンドローム予備軍、２つ以上該当する者をメタボリックシンドロームと呼ぶ。

【図 4-4 ファット鶴を折るイベント】プロジェクト参加者のサンフランシスコの自宅にて（2008 年 8 月 31 日）。

2008 年 8 月 6 日[87]から、プロジェクトはスタートし、彼女のソーシャル・ネットワーキング・サイトを使って参加を呼びかけた。プロジェクトのメッセージは、「千羽のファット鶴は、国民の腹囲測定を決定した日本政府対する反対の表明です。千羽のファット鶴で、日本政府に以下のことをお願いします。ウエスト周りの戦争（war on waistlines）を終わらせてください。全てのサイズの人に平和を」というものであった。

ファット鶴は、彼女が自身で折り方を開発し、彼女のソーシャル・ネットワーキング・サイトに公開された。プロジェクト参加者は折り紙だけでなく雑誌記事、新聞、さまざまな素材を使って折った（【図 4-3】参照）。プロジェクト参加者の家で、ファット鶴を折るためのイベントが開かれることもあった（【図 4-4】参照）。

また、マリリンは、抗議活動を日本人に知ってもらうためには、mixi という日本のソーシャル・ネットワーキング・サイトを使うといいという助言を友人からもらったといい、筆者に mixi にプロジェクトのサイトを作りたいという相談を持ちかけてきた。当時は、mixi では、日本の電話番号を持っていないとコミュニティサイトを設立することができなかったため、2008 年 10 月に、筆者が協力して、プロジェクトのコミュニティサイトを作った。その間にも、マリリンの他に二人のアクティビストが日本に一緒に行く意志を表明していること、その時のファッションや活動内容などについて、プロジェクトのアイデアが出るたびにメールでやりとりをしたり、会って相談を聞いたりした。

87　プロジェクトスタート日は、当初 8 月 6 日に設定されたが、すぐに彼女はその日が広島に原爆が落とされた日であることに気づき、失礼なことをしてしまったと反省していた。

PRESS RELEASE

Fat Activists Donate 1,000 Fat Origami Cranes!
FAT!SO? Author & Friends Visit Japanese Ministry of Health

FOR IMMEDIATE RELEASE

TOKYO: In early March, a small group of fat civil rights activists from the United States will give the Japanese health minister a gift of 1,000 fat origami cranes, along with the message that good health comes in all weights and shapes.

The 1,000 fat origami cranes were folded by dozens of people in the United States after they learned of a Japanese government policy to measure the waistline of everyone in Japan who is over age 40, with advice to lose weight for people whose waists measure more than 85 centimeters (for men) or 90 centimeters (for women).

The American group will also bring a Yay! Scale and a Yay! Measuring Tape, both of which give compliments for a person's appearance instead of numbers about weight or waistline measurement. A person using these devices learns they are セクシー ("sexy") or 美しい ("gorgeous"), among other read-outs.

Leading fat activist and author Marilyn Wann, whose book *FAT!SO?* has been a popular title on body image for a decade, was inspired to invite people of all sizes in the United States to fold fat origami cranes when she learned about the waist-measuring policy in Japan. Historically, efforts by state and national governments to make citizens lose weight have not resulted in weight loss. But these weight-loss programs have contributed significantly to levels of eating disorders and weight-based discrimination in the workplace.

For example, in the United States, public health officials routinely criticize Americans for being fat. Many cities and states and even the U.S. government, have created projects to make citizens lose weight. Yet the population continues to gain weight! These weight-loss projects do not make citizens weigh less nor do they make citizens healthier. Meanwhile, rates of eating disorders continue to increase, both in the U.S. and globally. Workplace discrimination based on weight is now as prevalent in the U.S. as discrimination based on race, according to a recent Yale University study.

Wann and her fat activist friends hope to warn Japanese officials against making the same mistakes that other health officials have made. Instead of declaring war on waistlines, the activists urge Japanese health officials to help people of all sizes make peace with their bodies, so they can feel happy about taking good care of their nutrition and their fitness throughout their lives, whatever they weigh. This weight-neutral approach is called Health At Every Size (HAES); a HAES approach has been shown in scientific research to improve health and health habits among fat people, compared to the traditional weight-loss advice, which fails to improve health or health habits.

Wann will be joined by fat activist and certified fitness instructor Sandy Schaffer of New York City and by members of the Phat Fly Girls hip hop dance troupe for fat women, a project of Big Moves, the world's leading project promoting size diversity in dance. The Phat Fly Girls will be group leader and choreographer Matilda St. John and dancer Cindy Cutts.

The date of the group's visit will be announced soon.

CONTACT:
Marilyn Wann
(415) 516-1474
marilyn@fatso.com

【図 4-5：マリリン・ワンが書いた日本のプレスリリース用の文章】

また、彼女は、知り合いのロサンゼルス在住の日本人ジャーナリストAさんを通して、日本のメディアに注目してもらうことを画策した。A さんは、日本の有名な某雑誌にプロジェクトについての記事を掲載してもらえるよう打診すると言った。雑誌掲載のやりとりについては、マリリンと私と A さんがコンタクトをとり合った。A さんからは、A さん自身はある運動の立場を代表することは出来ないから、プレスリリースの時は筆者が日本語翻訳を担当し、筆者の名前を表に出してくれと頼まれ、このことにも了承した（プレスリリースの文面は【図 4-5】参照）。彼女の周りの友人知人たちは、このプロジェクトの効果や展開を楽観視する人もいれば、半信半疑の人もいたが、彼女のプロジェクトに巻き込まれていった。

しかし、775 羽のファット鶴が出来上がったところで、このプロジェクトは頓挫してしまう。まず、mixi には全く人が集まらなかった。さらには、2009 年 2 月には、A さんから、彼女が交渉していた雑誌が、プロジェクトについての記事には興味がないと回答したという連絡がきた。こうしたことが明らかになってくるにつれて、マリリンは、「メタボ健診」をめぐる日本との温度差を若干感じ始めたようだった。そして、この頃から、アメリカでやるようなデモンストレーションを日本で行ったら、日本人からどんなふうに思われるだろうか、変な人だと思われないだろうか、ということを少し気にかけ始めていたようにも見えた。

そして 2009 年 2 月後半、ついに、彼女から「ファット千羽鶴を持って、日本政府を訪問する」というプロジェクトをやめにしたという連絡が来た。プロジェクトの中止は、A さんからの助言も影響したようだ。A さんからの助言とは、腹囲を測るのは大企業にしか適用されず、多くの人は測定の対象にならないから、日本の出版社からいい反応が得られなかったのではないかということ。そして、マリリンが日本を訪問して公共の場でイェイ！スケールのデモンストレーションをするとしても、多くの日本人は恥ずかしがって興味を持たないふりをするかもしれないこと。さらには、現実問題として、日本語を喋る人がマリリンに付き添いしないければ、日本でのマリリンらの活動は困難ではないかというというものであった。マリリンは、「A の言っていることは正しいと思うし、私が考えていたアプローチは日本に適していなかったんだと思う」と語った。

4.2　「ファット鶴プロジェクト」に対する人種差別批判と文化的他者

ずいぶん後になって分かったことだが、当時、このプロジェクトはファット・アクセプタンス運動に関わる人びとから「人種差別的」であるとして非難されていた。しかし、マリリンの耳に入ったのは、4 年も経ってからだった。ある人は、「ファット・アクティビズムの英雄（fat s/heroes）」であるマリリン・ワンに、プロジェクトの問題点を進言できる

人はいなかったのではないかと述べている[88]。

2012 年 8 月 16 日に筆者がマリリンと会ったとき、彼女はひどく真剣な様子で話があると言い始めた。その話とは、「千羽のファット鶴プロジェクト」がとても悪いアイデアだったことに気付いたという内容だった。3～4 年も前のことをなぜ今持ち出すのか不思議だったが、彼女の話を聞いた。鶴をファットにして折ったことは、文化的に不適切なことだったと思うと述べた。そして、彼女は、ファット・アクティビストたちのブログなどで、あのプロジェクトが人種差別的だと批判されていたことを、最近になって知ったのだと打ち明けた。彼女は、筆者に、「差別的なプロジェクトに参加させてしまってごめん」「嫌わないでくれてありがとう」と何度も言った。

筆者がインターネットで確認したところ、確かに、彼女のプロジェクトに対する批判は、オンラインのファット・コミュニティやブログを通じて、2008 年の 9 月の時点で交わされていた。2008 年 9 月 5 日にあるブログに匿名のライターによって投稿された「千羽のファット鶴を再考する（Rethinking 1000 Fat Cranes）」と題する記事[89]によると、アメリカ中心ですすめられてきたファット・アクセプタンス運動を、アメリカの国外にまで広げていき、サイズによる差別を無くそうというマリリンの努力は称賛に値するとしながらも、以下の点で批判しなければならないと述べてあった。

> 私は、ファット鶴プロジェクトについて、ある意味で、人種差別主義的であり、自民族中心主義であり、文化の流用や文化帝国主義という苦い伝統と切り離せないものであるなど、あらゆる面で衝撃を受けました。がっかりしたのは、私が知る多くの白人のファット・アクティビストたちが、このプロジェクトを、よく考えもせず（あるいは、少なくとも声をあげることをせず）、画期的で重要だと称賛したことです。〈中略〉このプロジェクトでは、日本に鶴を送る（大部分を白人が占める）アメリカ人アクティビストの役割として何が前提となっているのでしょうか？少なくとも私としては、白人アメリカ人の方があなたたちより知っていますから、あなた方の文化的な象徴を使用して（人種差別／自民族中心主義のつもりは全くありませんから）、ゴタゴタを解決するお手伝いをしましょうというメッセージがひしひしと伝わってくるのです。〈中略〉このプロジェクトが、いったいどういう意味を持つのか。なぜ白人中流階級のアメリカ人女性が、日本の重要な文化的象徴である鶴を選び、日本を教育しようと決意したのか。私は、これらについて、もっと議論されるべきだと思います。〈中略〉サイズの差別は、どこかでなら許されるのでしょうか？いいえ、それは違います。でも、アメリカ人アクティビストのグループが、

88　［http://blog.twowholecakes.com/2008/09/where-are-all-the-allies-and-where-do-we-go-from-here/］より（2014 年 3 月 3 日最終閲覧）。

89　［http://blog.twowholecakes.com/2008/09/rethinking-1000-fat-cranes/］より（2014 年 3 月 3 日最終閲覧）。

非西欧世界の偉大な白人救世主となることでもないのです。（下線部筆者強調、※〈中略〉以外は、括弧内原文より）

この匿名の批判者は、ファット・アクティビストたちが、アメリカのポリティクスを、日本の文化や日本の政治を十分に顧慮せずに、そっくりそのまま持ち出すことの是非を議論するべきだと述べた。

この記事に触発された別のファット・アクティビストは、2008 年 9 月 9 日に自身のブログ[90]でこの問題を取り上げた。コメント欄では、人種差別か否かという問題に対し議論が繰り広げられていた。全く人種差別だとは思わないという意見や、白人アメリカ人がファット鶴を日本に送ることによって、ファット嫌悪（fat hatred）への抗議メッセージが日本人にどのように受け取られるかを考えていなくてはダメだという意見、また、プロジェクトは「非西欧の間違いを正そうとする西欧」という文化帝国主義的な考え方であるという批判などが、繰り広げられていた。

それから 3 年半経った 2012 年 3 月 24 日になって、マリリンは、同ブログサイトの 2012 年 3 月 21 日の「親愛なる白人のファットたちへ（Dear White Fat People）」という記事のコメント欄に謝罪メッセージを投稿している。彼女のコメントは、「千羽のファット鶴プロジェクトは間違っていました。人種差別的で、攻撃的で、文化的な流用を行う悪いアイデアでした。最初からやるべきではなかった。プロジェクトを考え、それに着手し、主張しようとしたことは、恐ろしいほどに偏見と憎しみに満ちていたと思います。プロジェクトをスタートしたとき、シャーロット・クーパー[91]から連絡がきたのですが、彼女が親切にもくれた価値のある批判を受け容れることが出来なかった。〈中略〉自分がやった間違いの責任は負います。個々の人たちやコミュニティに与えてしまった悪影響を心から後悔しています。このプロジェクトに参加した人たちが、私に従って（手伝って）いたことを申し訳なく思っています。自分が望むリーダーシップはこういうものではありません。これから、自分を教育し、向上していくために一生懸命努力します」[92]と結ばれていた。

2012 年 1 月には、NOLOSE[93]というファット・クイア・アクティビズムの団体が、現在のファット・アクティビズムにおける多様性の欠如について声明を出している。現在のファット・アクティビズムには白人が大多数を占めていて、有色人種（People of Color）の人びとがほとんど参加していないという事態に誰も疑義を呈していない状況は問題である、

90　［http://www.therotund.com/?p=468］より（2014 年 3 月 3 日最終閲覧）。

91　イギリス人ファット・アクティビスト。第 3 章参照。

92　［http://www.therotund.com/?p=1242］より（2014 年 3 月 3 日最終閲覧）（〈中略〉以外は、括弧原文より）。

93　NOLOSE は、太った人びとへの抑圧を廃絶するために、カリフォルニア州オークランドにレズビアンのための団体（National Organization for Lesbians of SizE）として設立された。しかし、今は、ジェンダー、セクシュアリティなどのアイデンティティに基づかないファット・クイアの団体であると表明している。

という内容の声明であった[94]。その中には、マリリンの別の抗議活動プロジェクト[95]が、白人中心主義的であることに無自覚であるという批判も書かれていた。この声明は、NAAFA メンバーの間でも、今後考えていくべき課題だとして話題になった。

マリリンは、こうした一連の出来事から、ファット・コミュニティに白人女性が占めている事実や、白人女性である自分自身の立場について、改めて考え始めたと筆者に述べた。

> 〔これらの出来事をきっかけに〕自分の立場を考え始めた。ファット・コミュニティは白人の女性ばっかりでしょう。そのことを意識し始めた。確かに、白人女性は歴史的に身体や女性性に意識的にならざるを得ないポジションにいたのだから、そういう意味では、〔ファット・アクティビズムに〕白人女性ばかりだというのはある意味で当然だと思う。自分がもしフルタイムで働くキャリアウーマンであったり、ゲイ／レズビアンであったり、有色人種だったりしたら、ファット・アクティビストをやる時間はなかったかもしれない。そういう意味では、自分にはファット・アクティビストとしての特権があると思う。白人で、女性で、貧しさにあえいでいるわけでもないから。だから、〔ファット・アクティビズムには〕白人女性がたくさんいるのかもね。〔ファット・アクティビズムは〕フェミニズムにルーツがあるというのも、白人女性が多い理由の一つかもしれないね。（2012 年 8 月 16 日のバークレー市のコーヒーショップでの会話）（括弧内筆者補足、下線部筆者強調）

彼女の言葉からは、ファット鶴プロジェクトをめぐる出来事をきっかけに、彼女がファット・アクティビズムと白人女性の関係について、強く意識するようになったことが読み取れる。フルタイムではたらくキャリアウーマンや、ゲイやレズビアン、あるいは、非白人のマイノリティであったなら、ファット・アクセプタンス運動は二の次になったかもしれない。とはいえ、筆者は、白人女性とファット・アクティビズムとの関係性を、最近になって意識するようになったという彼女の発言に対して、ある意味で驚いた。思いつくままに話し続ける彼女の発言には、しかしながら、フェミニストでもなく、LGBT のアクティビストでもなく、人種差別に反対するアクティビストでもなく、他でもない「ファット・アクティビスト」としての特権があるのだ、という確信めいたものを感じた。

94　「A response to white fat activism from People of Color in the fat justice movement」［http://www.nolose.org/activism/POC.php］より（2014 年 3 月 3 日最終閲覧）。

95　マリリンは、第 1 章で取り上げた、ジョージア州アトランタの公衆衛生の子ども肥満予防キャンペーン「ストロング・フォー・ライフ（Strong4Life）」への抗議として、体重いじめに立ち向かおうというスローガンを掲げた「スタンド・フォー・キッズ（Stand4Kids）」キャンペーンを立ち上げた。しかし、ジョージア州のキャンペーンが、貧困地域の有色人種の子ども肥満をターゲットにしていることが明らかであるのに対し、マリリンのプロジェクトの参加者の大多数は白人であったことから、貧困地域の有色人種のコミュニティの人びとの経験をプロジェクトが果たして共有しているのかという点で批判されている［http://www.nolose.org/activism/POC.php］（2014 年 3 月 3 日最終閲覧）。

4.3　普遍主義と文化相対主義、ポジショナリティをめぐる問題

この「千羽のファット鶴プロジェクト」をめぐる一連の出来事で露呈した問題は、人権をめぐる論争の起点となった、人類学でもなじみの普遍主義的立場と文化相対主義的立場の争いとして理解することが出来るだろう［松田 2009: 127］。すなわち、身体サイズの権利という概念を、アメリカ固有の歴史、社会、文化を超越して、異なる価値観をもつ文化や社会に普遍的に適用可能か否かという論争として理解出来る。日本の政府による「差別的」な政策に、マリリンは、身体サイズは普遍主義的に尊重されるべきとして抗議した。それに対し、マリリンの抗議の仕方は人種差別的な態度につながりかねない、として文化相対主義的立場からの批判が噴出したのだ。

「太っている」人の数も、「太る」程度も、日本とアメリカでは状況が異なる。アメリカと比べるなら、日本には、アメリカの肥満者やファット・アクティビストたちのように「極度に」太った人は少ない。また、アメリカのような公民権運動の歴史を経験していない日本は、外見の差別に対し、アメリカほど敏感ではないかもしれない。そうした日本の状況に、アメリカ人アクティビストが、アメリカのアクティビズムの方法や多様性概念、権利の概念をそのまま持ち込んできても、それは的外れと言えるだろう。実際、mixi や某雑誌の編集者の反応から察すると、「千羽のファット鶴プロジェクト」は、日本では人びとに理解や関心をもたらすものではなかった。日本国内において、メタボリック・シンドロームの診断基準が統計学的に見て問題をはらんでいるという議論はあったが［坂本 2008; 美馬 2012］、腹囲測定が差別につながる可能性を持つという議論は、筆者が知りうる限り、見られなかった[96]。もちろん、日本にもダイエットや摂食障害で悩む多くの女性（や男性）は、アメリカ同様存在するし、例え体重計の数値では太っていないとしても、減量のプレッシャーを感じたり、体型や外見に基づいて不快な扱いを受けたりする人も多数いるだろう。しかし、いくつかの研究が示すように、日本の女性達たちが経験する抑圧は、日本の文化社会的文脈に埋め込まれており、アメリカの白人女性が経験するそれとは異なったものであるだろう［cf. 浅野 1996; Spielvogel 2003］。

マリリンと彼女のプロジェクト賛同者は、腹囲測定を行い、数値に応じて減量を強制することは、文化に関係なく太った人に対する差別を増長するため、普遍主義的な立場からはあってはならないと主張できると考えた。国籍、性別、人種にかかわらず、誰かが体重、体型、外見に基づいて不当な扱いを受けるようなことがあれば、そうした状況に介入していくべきであるというマリリンの普遍主義的な態度は、彼女が人種差別に無自覚であったと即座に糾弾できるものではないだろう。

それに対し、相対主義的立場から文化的差異を尊重するべきであり、アメリカの社会的

96　むしろ、メタボリックシンドローム対策グッズとして、バスソルトや「メタブー」というマスコットが生まれたりしている。

背景の中で政治的に正しいことであっても、多文化でそれが適応できるかは分からない。鶴という日本の文化的なイメージを都合よく流用し、帝国主義的に介入することは人種差別である。マリリンのプロジェクトの批判者たちは、ファット・アクティビズムのなかの人種的差異や文化的差異に目を向けるように注意を促す。そして、これは「白人中流階級のアメリカ人女性」が、異文化だけでなく、さまざまな階級にある人や白人以外の人びとの経験をどれほど代弁することができるのか、という自己批判でもあった。

マリリンの立場と批判者の主張の違いは、どちらが正しく、どちらが正しくないのかという評価が可能な問題ではない。むしろ、筆者は、かれらの主張の違いは、他者との関係によって自己がどのようなものとして構成されるのかという、ポジショナリティにかかわる問題だと考える。千田有紀によると、ポジショナリティとは「他者との関係で自分がどのようなものとして立ち表れてくるのか、その位置性」である［千田 2005: 270］[97]。私が何ものであるかという感覚、すなわち、アイデンティティは他者との関係のなかで育まれていく。

プロジェクト批判者たちは、日本という異文化に対峙しようとしたときに、「白人中流階級のアメリカ人女性」という、いわゆるアメリカのフェミニスト的立場を表明することによって自己を構築した。90 年代に入り、フェミニズムでは「女」として一つに括られたカテゴリー内に、黒人女性、第三世界の女性、レズビアンなどの、差異＝他者が次々に発見されていったように［cf. Collins 1990; Mohanty 1991］、プロジェクト批判者たちは、自己を「白人中流階級のアメリカ人女性」と認め、異文化の「他者」や人種的「他者」をファットのなかの多様性として尊重すべきだと注意を促した。

それに対し、マリリンは、白人女性が身体や女性性に意識的にならざるを得なかった歴史的事実に理解を示し、プロジェクト批判者の文化相対主義的態度に敬意を表しつつも、普遍主義的立場をとる。しかしながら、マリリンの普遍主義的立場は、フェミニズム的立場のそれではないことに注意しなければならない。フェミニズムの立場に立てば、ウマ・ナラヤンが指摘したように、普遍主義と文化相対主義という対立はどちらも本質主義的思考に陥ってしまう点で類似している。つまり、普遍主義は男性と女性を二項対立として捉え、文化相対主義は西欧文化と非西欧文化、西欧文化と特定の「他者」を二項対立として捉える。ナラヤンは、どちらも、その境界を不変で静態的なものとして扱っているという点で、本質化された表象を再生産しているに過ぎないと批判する［Narayan 1998: 88］。ところが、マリリンの立場は、男性と女性を二項対立として捉えているわけでも、西欧文化と非西欧文化を二項対立に捉えているわけでもない。そもそも、メタボリック・シンドローム測定診断は、男性と女性どちらも関わる診断なので、フェミニズム的な観点からのプ

97　千田有紀は、「アイデンティティとポジショナリティ」という論文［千田 2005］の中で、しばしば、アイデンティティは主観的なものとして、ポジショナリティは客観的な属性として捉えられるが、別々にとらえることは大きな間違いであって、主観的なアイデンティティは客観的な属性によっても構築されていると考える方がよいと論じている。筆者も基本的にはこの考え方に賛成する。

ロジェクトに対する批判の表明は、厳密に言うと、かみ合っていないのだ。

だからこそ、マリリンは、筆者との対話で、自身の白人女性であるという立場のインパクトに気づきながらも（筆者にとっては、今、気づいたのかという驚きであったのだが）、自分は、フェミニストではなく「ファット・アクティビスト」としての特権があると表明したのではないだろうか。「ファット・アクティビスト」であることとは、彼女にとっての他者が、男女や文化的他者などのような自己と非対称的な関係にあるのではなく、コミュニケーションを通して関係を作っていく対象なのだといえよう。つまり、女であり、男であり、太った身体を嫌悪する現実の他者、すなわち、ファットを苦しめる相手でありながら、関係を築いていくべき相手なのである。

5. ファットであること、女であること、その自己規定の困難：第 5 章に向けて

本章では、女というカテゴリーのもとでファットを理解しようとすることが、ファットである経験の理解を阻害する事例を説明してきた。ファット・アクセプタンス運動の参加者の多くが白人女性であり、そのことが運動を特徴づけているのは確かである。ファット・オプレッションを感じるのは女性が多いということを考慮に入れるならば、本章で見てきたように、運動参加者が、女というカテゴリーやフェミニズムという枠組みで自己理解を模索しようとしてきたことは、理解可能なものである。しかしながら、太った身体を女というカテゴリーのもとで理解することは、ファットである経験やファットであることで受ける差別や偏見の経験についての理解を阻害しうることがある。さらには、「特権的」な立場にいる人びとが、フェミニズムという枠組みからかれらを理解することが、彼らについての理解を狭め、彼らの声をかき消しうることがありうる。

本章で扱った事例から明らかなのは、ファット・アクセプタンス運動の参加者は、他者との関係の取り方に苦心していたということだ。（ラディカル）フェミニズムが男という大文字の他者を措定することによって自己理解を得ようとしたのに対し、ファット・アクセプタンス運動の参加者たちにかけられていたのは、太った身体を嫌悪する現実の他者とどのような関係を築きながら、自己を構築していくかということだったのだ。

だからこそ、ファットとしての自己は、決して固定的なものではなく、関係論的に立ち上がる不安定なものであるのだ。そして、それゆえに、ファット・カテゴリーは、誰を指し、何を意味するのか、その外延ははっきりしないものとしてある。つまり、「ファットである」ということが、自己規定の困難をもたらすのだ。

では、続く第 5 章で明らかにすべきは、外延が不明瞭なものとしてのファットを、運動参加者によってどのように概念化し、学び、理解するのか、そして、それが行われる場ではどのような共同性が生成しているのだろうかということである。第 5 章では、積極的に主体化してフェミニズムやファット･アクティビズムへと積極的に参与する人びとよりも、

ファットをどのように概念化し、ファットである行為の経験をどのように理解すれば良いのかが分からずに苦しむ多くの「普通」のファット・アクセプタンス運動の参加者を対象にする。かれらにとってファットであるとは何であり、どういうものとして経験されるのだろうか。これらについて考察するために、運動参加者によるミクロなインタラクションを描き出していこう。

第５章　「ファット」であることを学ぶ：ファット・アクセプタンス運動において情動的関係から生まれる共同性

1.　本章の目的

第3章と第4章で見てきたように、ファット・アクセプタンス運動とその運動参加者は、ファットという自己規定のしづらさを抱えていた。本章では、ファット・アクセプタンス運動の場において生成する共同性に注目し、そこで行われる言語使用実践や身体実践をとおして、運動に参加する者たちがファットであることについての考え方や価値観をどのように作り変え、どのように学んでいくのかを描いていく。特に、社会運動論や人類学においても、これまであまり論じられてこなかった、笑いやユーモア、他者への関心や配慮などの情動的なつながりが、共同性の生成にどのような役割を果たすのかに注目したい。本章では、具体的な個人と個人が出会い、共同的な活動を行う場に内在する性質を、さしあたって、共同性と呼ぶことにする。

第3章と第4章で明らかにしてきたように、ファット・アクセプタンス運動の展開はいくつかの要因によって阻まれてきた。まず挙げられるのは、ファットが、他のマイノリティのカテゴリーと異なり、「本質的」なカテゴリーではないとみなされてきた点だ。つまり、体重はコントロール可能であり、肥満差別は減量によって回避可能だと考えられてきたため、ジェンダー差別や障害者差別などとは根本的に異なるものだと考えられてきた。もう一点が、第4章で述べたように、ファット・アクセプタンス運動が、常にフェミニズムの桎梏から逃れられないという事実である。つまり、女というカテゴリーのもとでファットを理解しようとすることが、ファットである経験の理解を阻害するのだ。そのため、ファットであることの自己規定には困難が伴う。そして、なにより、アメリカ社会では太った身体が不健康でコントロールされていない醜い身体の象徴として嫌悪されているため、ファット・アクセプタンス運動に参加する当事者たちですら、自己肯定感の欠如を拭うことが難しいという点も運動の展開を遅らせてきた。

その一方で、ファット・アクセプタンス運動は誕生から40年を経た現在、運動の政治的目的が達成されうる状況にはないとしても、それでもなお人びとはファットというカテゴリーのもとに集い、運動は持続している。このことを考慮するならば、ファット・アクセプタンス運動の人びとが集い、出会い、語り合う場で、どのような相互作用が行われているのかを丁寧に理解することが必要であると考える。集団化の根拠に、集合的アイデンティティや政治的アイデンティティを措定するのではなく、運動を通してどのような関係

性が生まれ、その関係性のなかで「ファット」カテゴリーがどのように概念化され、それによってどのような共同性が生成しているのかということが論じられなければならないと考える。そこで、アクティビストだけでなく、ファットである行為の経験をどのように理解すれば良いのかが分からずに悩み苦しむ、多くの「普通」の運動参加者も分析の対象に積極的に取り入れながら、以上の問いに応えていこう。

本章では、全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance：以下 NAAFA）のメンバー同士の、言語使用実践や身体実践をめぐる、より詳細なインタラクションへと記述の焦点を移していく。本章で扱うインタラクションの場は、主に、年に一度行われる NAAFA の年次大会である。筆者は、ロサンゼルスで行われた 2008 年の年次大会（8 月 8 日～8 月 13 日）、ワシントン DC で行われた 2009 年の年次大会（7 月 30 日～8 月 3 日）、サンフランシスコで行われた 2010 年（8 月 5 日～8 月 8 日、8 月 9 日に健康についてのワークショップ）と 2012 年（8 月 2 日～8 月 6 日）の年次大会の計 4 回参加した。年次大会では、全米からメンバーが集い、企画されたさまざまなイベントを通して、メンバー同士が交流を深めることの出来る唯一の機会である。また、ファット・アクセプタンス運動を牽引する NAAFA という組織の指針を、公式的に確認する場でもある。あるメンバーが私のインタビューに語ったことだが、年次大会は社交の場であると同時に、政治的に決起する場でもあるのだ。

本章では、これらの場での、メンバー同士（ときにはメンバーと筆者との）のミクロなインタラクション、なかでも彼らの言語使用実践や身体実践に注目することによって、「ファット」が、どのように概念化され、その意味の生成や交渉が行われているのかを明らかにしていく。

2.　先行研究の整理

2.1　社会運動の場において形成される共同性

序章で整理したように、社会の周辺的存在であった人びとが、自己の生存の意味を問い、独自の価値観や生活様式を実現するためにオルタナティブなコミュニティの構築などを目指す運動を、産業社会の階級闘争や労働運動などの社会運動と区別して、新しい社会運動と呼ぶ。こうした特色から、ファット・アクセプタンス運動も新しい社会運動として捉えることができる。

社会運動論では、人びとが集う根拠となるものを集合的アイデンティティなどと形容してきた。しかし、序章で整理したように、集合的アイデンティティの要件や個人的アイデンティティとの関係における定義付けは、意見が一致していない状況にある。社会運動の「場」に立ち会うことが可能な文化人類学の立場からは、そこで生成する共同性を成り立たせているものが何なのかをつかむことが可能であろう。そこで、以下では文化人類学で特にこの問題を論じてきた、自己の生存における苦悩や困難の経験を共有し、相互に助け

合う自助グループについての議論を整理しておきたい。もちろん、自助グループを社会運動の一つとして捉えることが可能か否かについては、一定の留保がつくだろう［cf. Katz 1981, 1993］。例えば、社会学者の石川准は、自助グループが社会運動であるか否かは、自分たちのあり方を変更するために、他者を巻き込むことを実現しているか否かにかかわるとみている［石川 1990］[98]。確かにこうした意見があるのも確かだが、ここでは、以下で見ていくように、人が集まるときに、その共同性を成り立たせているものが何なのかという問いに焦点を絞って検討するために、自助グループを取り上げておきたい。近年の文化人類学における自助グループについての研究では、自助グループ内にあらかじめ秩序や画一的な信念や価値観、集合的なアイデンティティがあるとする見方を批判し、むしろ、内部にある差異や変化や創造性が、いかに共同性を成り立たせているかに注目して展開してきたといえる［e.g. Mathews 2000; 田辺 2008; 佐藤 2008］。

ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーは、共同的な活動に従事し、知識や技能やアイデンティティを習得する動態的な過程そのものを「実践共同体」という概念で定式化して、学習論を展開した［レイヴ／ウェンガー1993］。かれらは、アルコール依存症者の自助集団であるアルコホリック・アノニマス（以下 AA）を実践共同体の例として扱っている。そこでは、断酒を望む AA 参加者たちが、「12 ステップ」という教義に則った上で、ライフヒストリーを語り合いながら、アルコール依存症についての理解を深め、自己の生き方を再解釈していく。参加者は、十全的な参加を通して、やがて、アルコール依存症患者というアイデンティティを獲得していくという。この平坦な学習の過程、すなわち、実践共同体は、画一的な規範や信念、価値観が既にあり、内部の差異や変化、創造性を論じることができないのではないかという批判を受けることになった［田辺 2002; 田中 2002］[99]。

それに対し、実践共同体論的な見方を踏襲しながらも、レイヴらが見なかった共同体内部の差異や変化や創造性に注目しながら、自助グループを論じる研究が提出されている。例えば、医療人類学者のホリー・マシューズは、乳がん患者たちの自助グループを対象にしている。そこでは、乳がん患者たちの個々人の不満や不安が共同的な活動を通して露呈

98　石川は、例えば、アルコール依存症の自助グループであるアルコホリック・アノニマスは、アルコール中毒者以外の人たちの巻き込みがアルコール中毒者たちの行動変容の必要条件ではないため、社会運動とは言い難いといいう立場を取っている［石川 1990］。それに対し、アルコホリック・アノニマスのアメリカ全土での広がりと浸透から、社会運動と捉える研究者もいる［cf. Room 1993］。

99　田中雅一は、レイヴらが描く実践共同体が、学習者が中心にいくにつれ模範的アイデンティティを獲得（主体化）する平坦なものであり、その共同体には、権力への感受性が欠如しており、変革や創造性の契機が見いだせないと述べる［田中 2002: 352］。また、田辺繁治は、アイデンティティは、アイデンティティ化の過程で発生するさまざまな意味をめぐる折衝によって折り合いをつけて形成されるとする。しかし、「実践共同体」では、そうして形成されたアイデンティティは、自律的で西欧近代的な主体として描かれてしまい、コミュニティに参加することを躊躇する人びとや、アイデンティティ化することが不可能な人びとの経験の存在を無視してしまうと指摘する［田辺 2002: 17–18］。

され、参加者が対立する意味や矛盾を交渉し、意見を一致させていく中で、新しく共有された文化的意味が作り上げられていくのだと論じた［Mathews 2000］。また、田辺は、HIV感染やエイズ発症という生の困難をかかえ、差別や排除を経験してきた人びとによって作られた北タイのエイズ自助グループの事例から、自助グループの参加者たちが理解を協働的に構築していく様子を描いている。かれらは、慣習的な知や実践に立ち返りながら、「共有されるべき生命や生活の意味を問い、あるいはそのための新しい秩序を作り上げようとする」という［田辺 2008: 149］。

それとは別の自助グループの有り様を提示しているのが、アメリカのニューヨークのHIV感染者の自助グループを描いた佐藤知久である。自助グループというものは、通常「共同体的な信念や共有された規範、イデオロギーを持つ」と考えられているが、佐藤が観察したHIVの自助グループでは、HIV感染そのものの意味に関する、共有されたあらたな規範や信念モデルの形成は見られなかったと述べる［佐藤 2008: 34］。彼が観察した自助グループの参加者たちは、HIV感染についての意味は参加者ごとに異なり、解釈し続けながらも、現在の境遇を理解するための解釈枠組みとなりうる規範や見方が調停されることはなく、違いは違いのまま認められるという。この集まりにおける共同性の核心は、「その共同的な活動に参加すること」［佐藤 2008: 35］のみにある。逆に言えば、それ以外においては、HIV感染についての共有された意味やアイデンティティへの志向はほとんど見られない。佐藤は、そのような共同性のあり方を、大杉高司の言葉を借りながら、「非同一性の共同性」［大杉 2001］だと指摘する。それは、「自らが何者であるのかについて定まった一定の解釈に安住しえない人びとが、そのことを契機として一時的にある空間に集まり、自分たちが何者であるのかを解釈し続けるときに生まれるような、局所的・限定的な共同性」だという［佐藤 2008: 35］。

これらの研究が示唆するのは、平井が述べるように、「集合的なアイデンティティないし共同性の生成は、コミュニティの成員になるための要件なのではなく、むしろ結果であると考えたほうがよい」ということだ［平井 2012: 29］。

2.2　社会運動の場において生成する情動的関係性

集合的アイデンティティや共同性が、具体的な個人が交流することによって生まれてくるものであるとすれば、本章が注目したいのは、そうした場で生じる情動的関係性や親密な関係、冗談や笑いを喚起するような前論理的な関係の存在である。人が出会い、交流するということは、そこに何らかの関係性が生まれてくるはずだからだ。そのことに注目するために、ここでは社会運動論における情動の役割についての研究を整理しておくことにしよう。

これまで、社会運動論では、行為の動機となったり、事態を動かす役割も果たしうる情動や感情は、観察しづらく、非合理なものとして考察の対象にされることはなかった［Jasper 1998］。

ファット・アクセプタンス運動についての研究も、これを論じる研究者は、運動を明確な目的志向を持つものとして描くきらいがある。この運動について、多くの著作がある社会学者のサゲイは、ファット・アクセプタンス運動の人びとがアメリカの肥満問題に対し、どのような目的意識を持って運動を進めているのかに注目している［Saguy and Riley 2005; Saguy and Ward 2011; Saguy 2012］。例えば、サゲイとライリー［Saguy and Riley 2005］では、社会問題のプロセスにおいて、「過体重」や「肥満」がクレイムメイカーによってどのように定義されるかに注目している。かれらによれば、現在の「肥満問題」は、（1）反肥満研究者、（2）反肥満アクティビスト、（3）ファット・アクセプタンス研究者、（4）ファット・アクセプタンス・アクティビストの四者の間で繰り広げられるクレイム申し立てと論争として描かれる。彼らは、この四者が肥満（obesity/fatness）と健康をどのようにフレイムし、論争を行っているかを整理した上で、反肥満研究者たちは肥満を「流行病（epidemic）」や「リスキーな行為」としてフレイミングするのに対し、ファット・アクセプタンス運動のメンバーは「身体の多様性」をもたらすものとしてフレイムしていると論じる。しかしながら、彼女の研究に見られるように、こうした「ファット・アクセプタンス」な研究は、研究者自身が肥満差別の廃絶という政治的理念に共鳴し、追求するあまり、社会運動を図式化しすぎてしまい、具体的な人びとの出会いがどのような関係性を生み出し、それが運動をどのように導くのかという点には関心を払わない。

ところが、昨今、身体の感覚や感情と理性との関係に関心が高まるにつれ［cf. ダマシオ 1994］、情動や感情の役割が社会学や人類学の領域でも注目されるようになってきた。社会運動論のジャスパーは、情動や感情は、人びとを結びつけ連帯させたり、対立を起こしたりするものであり、認知的な意味づけや道徳的価値観と同じように社会生活の一部を構成すると述べる。従って、情動や感情を分析の対象から無視するわけにはいかないと主張する［Jasper 1998: 399, 402］。また、レイヴとウェンガーに影響を受けた実践共同体論は、平井が指摘するように、具体的な他者への生への配慮／関心や共感が生み出す他者との情動的関係が「新たな関係性を形作ったり、知や実践の様式の想像を促進したり、外部社会に働きかける自信を与えたりする過程が検討されることはなかった」ため、情動が社会運動のコミュニティ形成にいかなる役割を果たすかを考察することは重要な研究課題である［平井 2012: 14］。このように、社会運動を合理化して理解しようとしてきたこれまでの議論への反省から、近年、集合行為が行われる社会運動の場での情動や感情の重要性について論じる研究が提出されつつある［e.g. Gould 2009; 佐藤 2011; 田辺 2012］。本論もこの流れを重要なものだと捉える。

情動や感情が何を指すのかについては、それを使用する論者によって若干の広がりがある。例えば、田辺は、北タイのエイズ自助グループを事例に、「個体（身体）と他の個体、あるいは外的な力との出会いで注目すべきことは、互いに触発、感応し、互いの身体や精神に変様が現れ、その効果として喜びや愛、あるいは逆に悲しみや憎悪などの「情動（感情）affectus, affect」が生じること」だとし、そこに共同性の地平を見出す［田辺 2012: 248］。

また、佐藤は、アメリカで 1980 年代に展開されたアクトアップというエイズ・アクティビズムにおける情動の役割について分析している。アクトアップが、80 年代後半から一定の期間であっても持続したのは、その活動の場が、ユーモアや笑い、快楽と喜びなどの多種多様な感情に満ちあふれた出会いの場であったからだという理解を提示する。実際、エイズ危機を終結させるという政治的理念の追求とともに、多様な情動が削ぎ落とされていくなかで、アクトアップは衰退したのだと指摘する［佐藤 2011］。

さらに、佐藤が情動の議論の根拠とする社会学者のデボラ・グールドの研究にも言及しておく必要がある。彼女は、社会運動のなかに混在する相矛盾する感情に焦点を当てている［Gould 2001, 2009］。彼女は、アクトアップについてのモノグラフの中で、情動（affect）と感情（emotion）を区別している。情動は、身体の強度の潜在的な力であり、無意識で言語化される以前のものであり、感情とは、それが例えば、怒りや恥、誇りなどとして顕在化・具体化し言語化されたものだと論じる。すなわち、情動は不安定で、構造化しておらず、また、首尾一貫しておらず、言語化されていない。それに対し、感情とは、人がある時に感じたことを個人的に表現したものであり、その表現は社会的慣習や文化的に構造化されたものなのだと論じる［Gould 2009: 20］。無意識で、非言語的、混乱状態で、不透明なものとしての情動的な感覚を前に、人は、自分が今感じているものが何なのかを言語化できないという不穏な状況に直面する。そして、そうした情動的な感覚は、それを理解するように駆り立てる力となる。意味が生成される場としての社会運動は、「情動的な状態を「意味あるものにする（”make sense”）」」［Gould 2009: 28］場ともいえるのだ。

グールドのこの指摘は、本論にとって非常に重要である。なぜなら、これから見ていく事例は、自己をファットとして規定しながらも、そのことに困難や違和感を抱えた人びとが、直接に出会い交流することによって、ファットであることの意味や矛盾を行為遂行的に理解していくプロセスであるからだ。そのプロセスを、グールドがいうような情動に意味を与えていく創発的なプロセスとして捉えることができると考える。そこで、本論は、グールドの情動理解に倣い、情動を怒りや悲しみ、楽しさ、配慮などのさまざまな感情へと転化していく可能性をはらんだものとして理解したい。そして、情動的な関係とは、そこから生まれる具体的な個人同士の関係を指すものとしておく。

上記で紹介した三者の研究に共通するのは、感情や情動を具体的な人間同士の直接的な関係によって生み出されるものとして焦点化している点である。西井涼子が述べるように、情動への注目によって、人間が「身体を持つ」存在であること、そして、身体を持つ人間が行為を行い、人間同士の直接的な関係が生み出される場、すなわち、本論が共同性と呼ぶような場が形成されていくことを生き生きと描きだすことが可能になるだろう［西井 2011: 17］。フィールドワークは、場に生成する出来事を捉えようとする営みであり、フィールドの現場に立ち会う人類学者もまた身体を持つ人間である。人類学者は、これまでの社会運動論では言及されてこなかった、しかしながら、人間が行為する上で見逃す事のできない、「身体を持つ」人間による情動的関係性が、不満や不安、笑いやユーモア、他者へ

の配慮を生み出していくような場に立ち会うことができる。そうした人類学の特性を活かしながら、グールドが十分に描写しきれているとは言い難い感情が表出するミクロな相互行為の場面を通して、運動が生み出す共同性の様態を描写していくことにしよう。

3.1　「ファット」であることを学ぶ

3.1　「ファット」から連想されるもの

事例に入る前に、アメリカでは一般的に、「ファット」がどのような意味内容を持つものとして連想されるのかを確認しておきたい。

サンフランシスコを中心に活動するファット・アクティビストのマリリン・ワンは、NAAFA の大会のワークショップをはじめとして、小学校、コミュニティ・カレッジや大学などの教育現場で、「ファット・スタディーズ」の出張講義を行っている。彼女の講義では、「三分間象徴人類学」と題し、「ファット（fat）」と「痩せ（thin）」という言葉から関連づけて想起される言葉を受講者に考えてもらい、発表してもらうようにしている。表 1 から 4 は、筆者が参加したクラスの受講者から出された言葉をリストアップしたものだ。

Fat	Thin
lazy, fast eating, unhealthy, uninsured, afraid of sex, no sex, muumuu, chocolate cake, PB/C.C., smelly, stupid, Lay-z-boy, couch potato, ugly, poor, unemployed, traitor, disgusting, pig, whale, elephant, bear, tent, sloppy, slovenly, glutton, live to eat	rich, athletic, healthy, high fashion, fashionable, model, celery stick, cottage cheese, tap water, weak, puny, fragile, beanpole, toothpick, eat to live, disciplined, finicky, slow eating, bikini

【表 5-1：NAAFA の大会のワークショップにて（2008 年 8 月 9 日）】

Fat	Thin
unhealthy, disabled, turn-off, EAT!, ugly, lazy, stupid, romantically-challenged, teased, no feelings, contagious, scary, monster, fear, disease, not athletic, not TV star, cow, pig, junk food	healthy, does not eat, beautiful, fragile, delicate, turn-on, sexual attraction, high society, SES, dumb blond, Barbie, Olympic, skirts, shorts, skinny jeans, bathing suits, bikini, skim milk, soy milk, salad, anorexic, bulimic

【表 5-2：エル・セリート市近郊の小学校高学年のクラスにて（2008 年 12 月 18 日）】

Fat	Thin
lazy, stupid, slovenly, unhealthy, Midwest, Omaha, less intellectual, disease, substandard, fear, romantically-challenged, scary, friend, depressed, Walmart, sweaty, smelly, bad, bed, couch, OK to discriminate, PC to mock, McDonald, whale, elephant, hippo, cow, pig	beautiful, energetic, athletic, healthy-unhealthy, skinny-jeans, Hollywood, streetwalker, discipline, uptight, tall, $$$, lovers, high-fashion, bikini, anorexic, stick, twig, pencil, beanpole, Subway, bony, salad, starving, skim milk, soy milk

【表 5-3：サンフランシスコのコミュニティ・カレッジの「摂食障害と心理学」の授業にて（2009 年 3 月 15 日)】

Fat	Thin
sloppy, lazy, unattractive, unhealthy, unmotivated, depressed, weed, soul food, American, insecure, jolly, Twinkies, fast cheap food, tired, brownies, bitch, muumuu, donuts	athletic, Barbie, attractive, stuck-up, healthy, bulimic, self-control, lucky, depressed, confident, superior, rich, celery, carrot, raisin, diet coke, pea, Tic Tac, water, shit≠stink, stripper, model, dopefiend（麻薬中毒者）, insecure, neronichic（暴君的な）, bitch, bikini, cold, protein, 00size, geek, protein, energetic

【表 5-4：サンフランシスコのコミュニティ・カレッジの「摂食障害と心理学」の授業にて（2011 年 3 月 12 日)】

辞書的な意味としての「ファット」は、脂肪細胞のことであり、身体にそれが付いて太った状態のことであるが、ここで、「ファット（fat)」とそれと対立する「痩せ（thin)」が、人びとにとって連想される意味内容には、以下で述べるような特徴があった。

表 5-1 から表 5-4 を見ると、表 5-4 の「陽気な（jollly)」以外、「ファット」は、ほぼすべてネガティブなものと関連づけられていることが分かる。「lazy（怠惰な)」、「unhealthy（不健康な)」は全てのクラスであげられた。また、表 5-1 から表 5-3 にあるように、「stupid（馬鹿)」も 3 クラスであげられた。さらに、注目すべき特徴としては、食べ物と関連づけられることが多いということだ。例えば、「chocolate cake（チョコレートケーキ)」（表 1)、「junk food（ジャンクフード)」（表 5-2)、「Omaha（オマハ）[100]」「McDonald（マクドナルド)」（表 5-3)、「soul food（ソウル・フード）[101]」「Twinkies（ツインキー）[102]」「fast

[100] アメリカ合衆国ネブラスカ州の都市で、牛肉の産地として有名である。

[101] 奴隷制が盛んだったアメリカの南部で生まれた、アフリカ系アメリカ人の伝統料理のことを指す。一般的に、高カロリーでボリュームのある料理が多く、不健康なイメージがある。

cheap food（ファスト・チープ・フード）」「brownies（ブラウニー）」「donuts（ドーナツ）」（表 5-4）などがあげられている。これらの食品（食品を提供する店や土地も含む）には、脂肪分や糖分が多く、高カロリーというイメージがある。

それに対し、「痩せ」では、全てのクラスで、「bikini（ビキニ）」があげられていることは注目に値する。また食べ物との関連では、「cottage cheese（カッテージチーズ）」（表 5-1）、「celery（セロリ）」（表 5-1、表 5-4）、「salad（サラダ）」「skim milk（スキムミルク）」「soy milk（豆乳）」（表 5-2、表 5-3）、「carrot（にんじん）」「raisin（レーズン）」「diet coke（ダイエットコーラ）」「pea（豆）」「Tic Tac（ティック・タック）[103]」（表 5-4）などの脂肪分や糖分の少ない「健康的」な食物と関連づけられている。

もちろん、「痩せ」に対するネガティブなイメージが無いわけではない。「finicky（気難しい）」（表 5-1）、「anorexic（拒食症的な）」（表 5-2、表 5-3）、「bulimic（過食症的な）」（表 5-3）、「uptight（神経質な）」（表 5-3）、「dopefiend（麻薬中毒者）」「insecure（不安定な）」「neronichic（暴君的な）」（表 5-4）などは、ガリガリに痩せた人のイメージとしてあげられたものであろう。

まとめるならば、大まかにいって、「ファット」にはネガティブな含意があり、太っていることは嫌悪の対象として連想され、「痩せ」にはポジティブな含意があり、痩身は好まれる対象として連想されることが分かる。ファット・アクセプタンス運動では、こうした否定的な特性を持ったものとして想起される「ファット」概念を、再意味付けしていこうとするのだ。

次に年次大会の概要を説明した上で、事例を描写していこう。

3.2　年次大会の概要

筆者が参加した 4 つの年次大会は、ホテルの大広間をいくつか貸し切って行われた。期間中、参加者の多くは大会が開催されるホテルに宿泊し、広間やプールで開かれるイベントやワークショップや総会などのプログラムに参加する。参加者は、毎年おおよそ 100 名から 300 名程度いる。年々参加者は少なくなりつつあると言われている。特に、リーマンショック後の 2009 年の年次大会は参加者が著しく減り、大会は前年よりも小規模なものであった。大会の参加費は、すべてのプログラムに参加するとおよそ 200 ドル～300 ドル近くかかり、それにホテル代や飛行機代を加えると、人によってはかなりの出費になる。役員の 1 人が「最近の経済状況のせいで、今年はお金が集まらなかった」と言うように、

102　クリーム入りスポンジでできたお菓子で、アメリカの大手チェーンのスーパーでは、必ず売っている。いわゆるジャンクフードと見なされる。

103　ミント味のキャンディー。

参加者の減少は組織にとっての死活問題である[104]。

参加者は全プログラムに参加しなければならないのではなく、自分が興味のあるプログラムに参加し、それ以外の時間はホスピタリティ部屋やホテル内のカフェで、メンバー同士で雑談をしたり、プールに入ったり、ホテルの自室に戻ってゆっくりして時間を過ごす。

表 5-5 は、年次大会のプログラムの一例であるが、ここから伺えるのは、いかに楽しく運動するかに力点が置かれたワークショップをはじめとして、メンバーたちが太った身体と共に生きていくために実際に有益になるようなワークショップや、ファット・アクセプタンス運動を推進していく上での情報交換のためのワークショップなどがプログラムとして組まれているということだ。また、夜のプログラムでは、ファッション・ショーやプール・パーティ、ダンス・パーティなど、社交をメインとしたスケジュールで埋まっている。筆者が参加した年の大会は、ほぼすべてこうした特色を持っていた。

時間	プログラム	内容
08:00–09:00am	水中エアロビクス	
08:00–09:00	ベリーダンスを学ぼう	
09:00–10:00	登録受け付け	
11:00–12:30	NAAFA2010 年次総会	昨年の NAAFA の活動報告
01:00–04:30pm	ホスピタリティ部屋オープン	メンバー同士での談話や、トランプや UNO などのゲームをする多目的部屋
01:00–02:30	オリエンテーション	新メンバー向けのオリエンテーション
01:00–02:30	ワークショップ : NAAFA の戦略についての Q&A	
02:45–04:15	ワークショップ：境界をひくこと	NAAFA の年次大会、仕事場、病院、家族でのインタラクションにおいて、相手との間にきちんと境界を引くことの大切さを学ぶ。
02:45–04:15	ワークショップ：スーパーサイズな人生を活動的に生きる	座って行うヨガ、電動車いすの実演。
02:45–04:15	ワークショップ：太った男と	女性の運動と思われがちなファット・アクセプタン

104　年々参加者が減りつつある理由について、かつて NAAFA の役員も務めた経歴を持つマリリン・ワンは、オンラインの「ファット・コミュニティ」が活性化しつつあることや、特にサンフランシスコなどの大都市では、さまざまな「ファット・コミュニティ」が起ち上げられ始めているため、わざわざ大会に来なくても、それらの場で交流ができるようになってきたのではないかと分析している。つまり、必ずしも、ファット・アクセプタンス運動に関わる人の数が減少しているというわけではないようだ。実際、ファット・アクティビストたちは、各自で BBW（Big Beautiful Woman）のクラブイベント、ハロウィーン・パーティ、洋服のスワッピング大会など、さまざまな集まりの場を企画している。

	しての人生（男性のみ）	ス運動に、男性として何が出来るか、男性にとってのファット・ライツとは何か、などについて話し合う。
04:30–06:30	ファット・アドボカシーの訓練	ファットの権利を、国やメディアにどう訴えていくかについてのワークショップ。
07:00–10:30	2010 ファッション・ショーとオークション・ディナー	プラスサイズのデザイナーが作った洋服でファッション・ショーを行う。
10:00–02:00am	ホスピタリティ部屋オープン	
11:00–01:00am	プライベート・プール・パーティ	

【表 5-5：2010 年 8 月 6 日の NAAFA 年次大会スケジュール】

1973 年に NAAFA のメンバーになった 71 歳（2010 年当時）のヘレン（仮名）によると、彼女が初めて行った年次大会では、現在のような楽しいイベントなどはなく、「政治的な活動やアクティビズムに取り組んでいた」という。そして、徐々に政治的な活動だけでなく、メンバー同士の交流を深めるようなイベントが考案され開催されるようになっていったという。

次から、いよいよ事例へと入っていくことにしよう。まず、「ファット」であること、「ファット」として生きることを、参加者がどのように語り合うかに焦点を当てていく。

3.3　転倒する「ファット」と「痩せ」の意味

メンバーたちは、「ファット」と「痩せ」という対立する言葉の意味や身体をどのように位置づけているのだろうか。二つの意味付けを逆転させ、太っているほうが幸せだったと語るキャサリンの事例を見てみよう。

【事例 1:太っていたときのほうが幸せだ:（2010 年 8 月 7 日フィールドノートのまとめ）】

NAAFA のメンバーになって 29 年目（2010 年当時〕のキャサリン（仮名）は、大会会場のホテルのロビーに座っていた私に「ここ寒いわね」と話しかけてきた。彼女はファット・アクティビストとして、80 年代､90 年代に活動し、現在もニューヨークでファット・アクティビズムのためのグループを作っていると言った。それから彼女は自分の身体が寒い理由を話し始めた。彼女は、8 年前まで体重 470 パウンド（213 キロ）あったと言う。今は、290 パウンド（131 キロ〕である。足の関節を痛めたため減量したのだと言う。その時、立ち上がることも、車いすに乗ることもできなくなり、寝室からバスルームにも移動できなくなってしまったと言う。友人から、減量手術を受けるように強く言われ、彼女は「それだけは嫌だ」と言った。

しかし、バスルームに自分で行けないのなら手術を受けて減量する以外にないと説得され、「本当に仕方なく手術を受けた」のだと語る。彼女は、手術台の上でも泣いたのだという。そして、「213 キロあったときのほうがずっと、ずっと幸せだった。ありのままの自分（the way I am）が大好きだった」と嘆いた。手術を受けてから、今も、食欲や身体のコントロールが自分でうまくできないと語る。
そこに、彼女の友達二人が通りかかり彼女に勢いよく挨拶する。彼女は友達に対しても再び、「スパッツをはいてるんだけど、寒いの」と切り出した。そこから、どこの店のスパッツがいいかの話で盛り上がる。友達が去り彼女はこう言った。「ファット・コミュニティでは、本当にパワーをもらうし、居心地が良い。でも、ここを出ると差別されるのよ。」（括弧内筆者捕捉）

この事例は、太っていたときのほうが幸せだったということについて語ったものである。131 キロよりも 213 キロだった時の方が幸せだったということは、自力歩行の可能性を考慮するなら、筆者から見れば非合理に思える。しかし、会話の最中に何度も「寒い」と語ることからも、肥満手術のせいでよほど身体のコントロールが上手くいかなくなっていると予想された。NAAFA は、肥満手術を受けることについて反対しているため、手術をしたと公言する人はほとんどいない。彼女は、会話の途中に何度も「手術には本当に反対しているの（I am against, against surgery）」言っていたように、手術を受けた彼女自身ですら、その事実に反発している。そして、もう元には戻れないという事実から、太っていた時のほうが幸せであったという思いを強くしているのだろう。

しかしながら、本節で紹介したキャサリンのように、「ファット」の意味づけを完全に転倒させてしまう例は珍しい。次節で紹介するように、むしろ多くの場合において、「ファット」のネガティブな意味づけを否定する際には、戸惑いや躊躇を伴うことが多いのだ。

3.4　「ファット」として生きることを語り合う

【事例 2 : ワークショップでのディスカッション : NAAFA の外の世界との折り合いの付け方（2009 年 7 月 31 日フィールドノート）】

「境界線を引くこと」というタイトルのワークショップが開かれ、太っている人が他人との関係をどう取るかについての討論が行われた。ホテルの宴会場の一室を会場に、30 人ほどの参加者は椅子を円にして向かい合って座っていた。オーガナイザーのリサは参加者に対し、ダンスに誘われたらどう答えるべきか、家族から減量するように言われたらどうするか、医師に肥満手術をすすめられたらどう答えるか、などの具体的な議題を投げかける。それについて参加者は各々に意見を出す。「家族が減量しなさいと言ったらどうする？」というリサの問いかけに、参加者からは、「放っておく」「家を出る」など、家族との関係をどう取るかという観点からさまざまな意見が出された。リサはそれをホワイトボードに書き留めた。最終的に参加

者全員で、①「分かった。」②「（でも）もう既に自分の健康には十分気を使っている。」③「このことについてあなたがコメントするのは良くない。」④「だから口出ししないで。」という筋書きを作り上げた。（括弧内筆者捕捉、下線部筆者強調）

このワークショップでは、自他のバウンダリをどのように引いていくのかについて、ディスカッションで意見が対立するというよりも、皆で一緒に解決策を考えていることが伺える。参加者には、アクティビストもいれば、新メンバーや次の事例で紹介するような久しぶりに参加するメンバーなどさまざまな人がいる。長年の参加者であっても、ひとたび NAAFA を離れると自信を無くすこともある。そのため、ワークショップでは、皆が各々に自分の経験を語り、知恵を出し合い、体重や外見に対して否定的なことを言われた時に言い返すことができるように、テクニカルな意見も出されるのだと推察される。

【事例 3：大会への参加目的を語る（2009 年 7 月 31 日フィールドノート）】

ある女性が、レストランでデザートを食べているときに、知らない人から、「デザートを食べなければ痩せるよ」と言われたから「けんかしたいの？（Would you like to wrestle?）」と言い返してやった、というエピソードを話し始めた。それを皮切りに、皆が各々の経験を話し始め、ワークショップはどんどん白熱し始めた。そのとき、大きな中年の白人女性が、戸惑った様子でしゃべり始めた。彼女は 10 年前にメンバーになり、断続的に年次大会に参加していたが、最近は参加していなかったという。そのためか、NAAFA に知り合いがあまりいなく緊張した面持ちだった。なぜ今年参加しているかというと、最近また太り始め、自分の身体に心地の悪さを感じてきたからだと語った。NAAFA の年次大会への参加を決めたときに、そのことを友人に話したら、「そういう集まりに行くんじゃなくて、どうやったら痩せるかということを考えなきゃだめじゃない」と言われたと言う。そういうとき、何と答えればいいのか分からなかったと彼女は困惑気味に話した。その話を聞いて、参加メンバーたちが再び、私ならこう答えるというようにコメントし始める。「私は太っていることが好きなの。みんな黙れってのよ。（I like being fat. Shut people up.）」「失礼なのはあなたよ。それは身体のサイズに対する偏見よ。（Excuse you, that’s size prejudice.）」と言うべきだなど、様々なコメントが出された。（括弧内筆者捕捉、下線部筆者強調）

事例 3 では、「最近また太り始め、自分の身体に心地の悪さを感じてきた」と語る彼女の参加目的から、彼女が自己の身体との折り合いのつけ方に苦労していることが分かる。自己の身体といかに折り合いをつけるかということだけでなく、家族や友人から自分の態度を受け入れてもらえるかどうかということは、とても難しい問題である。

「ファット」に対する意味付けや太った身体をどのように受け入れているか、極端に言うなら太ったままが嫌なのか、痩せたいか否かによって、参加の目的や参加態度も異なってくる。例えば、あるワークショップの時、筆者の隣に座った NAAFA の中では比較的痩せている中年男性が、小声で筆者に話しかけてきた。「君、なんでここに来たの？細い（skinny）じゃない。」筆者は、自分が調査者であると答えようとしたが、返答する隙もなく彼はこう続けた。「あと 4 パウンドがなかなか痩せられなくてさ。」この男性は、ワークショップの途中で退席しその後も会場で見かけることはなかったため、なぜ参加しているのかを聞くことはできなかった。

マリリンによると、NAAFA の大会に来ているにもかかわらず、ダイエットの方法などについて雑談している人たちは毎年いるという。こうした参加者がいることについて彼女はとても残念だと語る。太った人びとの市民権の獲得を願う人と、痩せるためのダイエット話をする人は、参加に対する動機や目的意識が異なるだろう。さらに、一人の人間のなかにも、太っていることを受け入れたいという思いと、しかしながら同時に、痩せることを完全に諦めた訳ではないという、矛盾した姿勢が垣間見える。そして、このことが、運動を不安定なものにしているといえる。

3.5　配慮の空間：身体実践から立ち現れてくる「ファット」

身体を介したメンバー同士の相互作用の事例を確認していこう。

【事例 4：バランスを崩して倒れる：介入の境界（2010 年 8 月 9 日フィールドノート）】

2010 年の NAAFA の年次大会のミーティング中に、何かが落ちたような大きな音がした。一番後ろの席に座っていたメンバーの中でもとりわけ身体の大きなエレン（仮名）が、座席から突然横転したようだ。あまりに大きな音だったので、皆が振り返った。意識を失ったりしていたわけではなかったので、おそらくバランスを崩したのだと思われた。彼女は 2 分ぐらい起き上がることが出来なかった。手を出そうとした隣の人に「大丈夫だから、大丈夫だから」と何度か言ってやっと自分で立ち上がり、誰も付き添うことはなく一人でスクーターに乗って部屋を出ていった。ミーティング後に何人かのメンバーの「エレン、大丈夫かしら」「本当ね」という会話が聞かれたが、積極的に誰かがエレンを探して介助しようとするわけでもなかったことに驚いた。

あまりに大きな音だったので、筆者は、大変なことが起こったのではないかと思った。しかし、メンバーの何人かは手を出しながら助けようとしたが、彼女が断ると、それ以上は介入しようとしなかった。しかし、筆者はこの事例あたりから、「介入しない領域」と「介入し手助けをする領域」が、メンバー間のインタラクションで決められていき、その中で「ファット」の意味についての輪郭が描かれていくのではないかと考え始めた。

【事例 5：椅子の譲り合い（2010 年 8 月 7 日）】

ディナー・パーティでの光景だった。ホテルの宴会場が会場となり、円卓が 20 以上も並べられた大きなホールで行われる。昼の服装とはうってかわって、パーティ用の服に身を包んだメンバーたちが続々と入ってくる。スクーターに乗っている人や杖をついている人もいる。ある女性が、会場に入ってくる知り合いと思われる女性に向かって「こっちにおいで、席あるわよ」と言って手招きした。確かに椅子は一つ空いていたのだが、手招きした女性は隣の円卓から椅子をもう一つ持ってきて、友人に二つの椅子を用意した。既に座席は一つ空いているのにもう一つ椅子を持ってきてあげるのか、と私は何気なくその光景を見ていた。友人は「ありがとう」と感謝しながら、用意された二つの椅子にお尻を置いて腰掛けた。椅子二つはちょうど彼女のお尻の幅と同じだった。

椅子の譲り合いをしている人たちは、相手の身体の幅を暗黙のうちに察していた。この出来事以降、大会での風景をよく見回してみると、椅子の譲り合いの光景がよく見られることに気づいた。足を曲げるのに困難がある人に対しては、足を伸ばして座ることができるように椅子を三つ用意してあげる。また、スクーターに乗っている人がテーブルにつくのを見たメンバーは、椅子を別の場所へよけてスクーターが入る空間を確保してあげる。円卓と椅子がびっしり並び、身動きが取りづらく目的地へたどり着けなくて困っているメンバーに対して、椅子を立ち通路を空ける、椅子をよける、などの行為が頻繁に行われていた。こうした他者への配慮は、お互いが知り合いかどうかに関わらず自然に行われているようだった。

この二つの事例から分かるのは、太った身体の輪郭は、身体を介したメンバー同士の相互作用の中で、徐々に立ち現れていく。そして、それは、他者への関心と配慮によって成り立っているのである。

3.6　ユーモラスな空間

70 年代から毎年欠かさず大会に参加している 71 歳（2010 年当時）のヘレンは、ロサンゼルス近郊の街で小学校の教員をしていた。彼女は、自分が太っているために、結婚生活も破綻してしまい、恋愛も上手くいかず、「世界最大級の劣等感を持っていた」と言う。そんな彼女は、毎年大会に来るのを楽しみにしている。「大会では、隣に誰が座っていようとも誰もがフレンドリーで優しい」のだと言う。以下は、彼女が筆者に話した、彼女が大好きなプログラムの思い出についての記述である。

【事例 6：デザート・パーティでの驚き（2010 年 8 月 8 日のインタビュー録音データのまとめ）】

アトランタで行われたある年の大会で、デザートのみを大量に食べるパーティに参加したときのことだと言う。太っていることに悩み続けてきた彼女は、デザートだけを食べることは「とても勇気のいることだった」と語る。パーティでは、たくさんの種類の美味しそうなケーキやデザートがテーブルに並んでいた。見回せばその周りのメンバーたちも各々が好きな種類を好きな量だけとってお皿に盛って食べていたという。彼女は全部食べたかったので、少しずつ切り取って全てのデザートをサーブしてもらい、少しずつ全てのデザートを味わったのだという。大会を終えて帰宅するときには、「絶対に、確実に 100 パウンドぐらい（約 45 キロ）は太っているだろうと思っていたの。家に帰ったら、10 パウンド（約 4.5 キロ）減っていた」のだ。そのときに通っていた精神科医にこのことを話したとき、医師から「なぜだか分からないの？」と聞かれたが、彼女は分からなかったと言う。医師は「君が楽しんでいたからだよ。愛に満ちあふれた雰囲気の中でリラックスしていたからだよ」と言ったのだという。そして、彼女は「それは本当なのよ」とうれしそうに筆者に語った。

このエピソードからは、彼女が一番の思い出だと言うケーキの食べ放題は、「フレンドリーで優しい」仲間と一緒の楽しい状況においては、たくさん食べたにも関わらず太らなかったという、具体的で身体的な楽しかった経験として記憶に刻印されているということが分かる。彼女によると、過去には、現在にはないようなユーモアに満ちたプログラムが他にもたくさんあり、その年ごとの特色もあったようだ。

このインタビューの際に、彼女は、他にもいろいろな楽しい思い出を話してくれた。自分が参加していないイベントで、人から聞いたのだが、面白いことがあったのだとやや興奮気味に話してくれたのは、サンディエゴでの大会でのことだ。メンバーたちが、ホット・タブに隙間がなくなるまで次々と入り、その後、みんながタブから出たときには「水がこんなに少なくなっちゃったらしい」と、大笑いしながら話した。

しかしながら、NAAFA の大会でどれほど楽しい経験をし、自分に自信が持てるようになったとしても、ひとたび NAAFA の外に出ると、太っている者に対する世間の偏見や風当たりは強く、生きてくのは辛い。インタビューのなかで、彼女は、NAAFA のおかげで太っている自分にも自信が持てるようになった、ということを何度も繰り返して語った。だから、毎年、ユーモアに満ちたイベントに参加して楽しむことを心待ちにいるのだ。

【事例 7: ファッション・ショー（2010 年 8 月 8 日のインタビュー録音データのまとめ）】

ヘレンは、NAAFA で行われるファッション・ショーについて、痩せたモデルのファッション・ショーとの違いを語った。NAAFA のファッション・ショーが、パリのファッション・ショーにも勝るのは、「モデルたちの目つき」だという。とても幸せそうで、本当にモデルになりきっていると分かると述べる。

> 痩せこけた（skinny）〔モデルの〕ファッション・ショーを知っているでしょう？モデルが寒そうに見える。なんで、みんなが、かれらの着ている服を買いたいと思うのか分からない。私は、とてもそんな気にはならない（it turns me off）。多くの人たちが、うんざりしてるんじゃない。〈中略〉だれも NAAFA のリアルなショーを知らないからね。みんなも見るべきよ。（括弧内筆者捕捉）

ここで彼女は、痩せこけたモデルは寒そうに見え、モデルが来ている服も買いたいと思えないのに対し、NAAFA のファッション・ショーこそがリアルなショーであり、本当のモデルたちだと述べている。

実際に筆者が見たファッション・ショーでも、水着を着たモデルや、バニーガールのような格好をしたモデル、タイトなドレスを身にまとったモデルたちが、ステージ裏からファッションモデルのように腰をくねらせながら歩いて出てくる。そして、舞台の中央にくると、観衆に向かって投げキッスをしたり、聴衆に向かって話しかけたりする。聴衆からは、笑いやかけ声が起こるのだ。筆者は、モデルの一人に用事があり、ファッション・ショーのバックステージに入ったことがあった。バックステージのドアを開けたとき筆者の目に入ったのは、舞台上での笑いに溢れた様子とは打って変わって、モデルたちが真剣な様子で、熱心にメイクし、鏡の前で洋服のフィッティングをしている様子だった。そこは汗ばんだ顔の目の上のアイライナーがよれるほど、熱気に満ちあふれた空間だった。

真剣なモデルたちの様子、そして、笑いに満ちあふれたショーの空間から、ファッション・ショーというイベントをどう解釈すればよいだろうか。ジュディス・バトラーによる、異装によるジェンダー規範のパロディ化の議論［バトラー1999: 241–244］を援用するなら、かれらは、痩せているモデルたちのファッション・ショーを模倣し、身体規範のメカニズムをパロディ化することによって、その規範を揺さぶろうとしていると見ることも可能かもしれない。確かに、そのような側面はあるだろうが、ファッション・ショーが外部に開かれた場ではないことを考えると、規範の揺さぶりという効果は、誰に向けられたものなのかという疑問が出てくる。筆者は、むしろ、ヘレンが言うように、かれらはモデルそのものを演じていると理解すべきだと考える。なぜなら、筆者は、太った人向けの「かわいい」洋服がないと嘆くメンバーの話を幾度か耳にしたことがあるからだ。モデルたちの「かわいい」洋服に身を包むことができた喜びと、履き慣れないミニスカートや網タイツをまとう初々しい様子、ステージ上でのモデルを演じるときの真剣で堂々した様子、こうした多層的な文脈を、会場にいるメンバーたちも共有している。ゆえに、笑いやかけ声が生み出されているのではないだろうか。

3.7　笑いの効果：言語使用実践から見る「ファット」

以下では、相互作用が行われる場面で、人びとが意味を交渉しながら笑いやユーモアを

使って、その場面を笑いへと転換させていく事例を三つ紹介する。

【事例 8：「なぜダイエットをすると太るのか」に対する指摘（2012 年 8 月 6 日録音データより）】

2012 年に行われた年次大会では、NAAFA HAES Summit と題するワークショップが、一日かけて開催された。HAES とは Health at Every Size（すべてのサイズの健康を）の略称のことで、この日は、健康に関わる課題についての発表と討論が行われた。大学でホリスティック健康教育プログラムを教える S が、ゲスト・スピーカーとして招聘された。彼女は、自分が担当するコース・デザインや学生に教えているゼミの内容を紹介した。S の発表を受けて、マリリンが、S の「ファット」の使い方について、懸念を表明した。

マリリン：あなたのプレゼンテーションを聞いて、アクティビストとして、とても役に立つと思いました。本当にありがとうございます。〈中略〉一つ気になる点があります。もしかしたら、私が誤解しているかもしれませんが。（学生に書かせる）エッセイのトピックが「なぜダイエットをすると太るのか（Why dieting makes you fat）」だとおっしゃいましたが、常にそういう結果、つまり、体重増加がもたらされるのかなと思ったんです。それと、えっと、私には、ダイエットによる体重増加がまるで悪いことのように捉えられているように聞こえるんです。言いたいこと分かりますか？

S：ええ、えっと、もっと良い言い回しがあれば、もちろん大歓迎です。私が言いたいのは、ダイエットは、えっと、ダイエットは身体に相当なダメージを与えることや、身体がどれだけ効率的に出来ているか、身体を飢えの状態にし続けておくと、身体は非常に効率的になり、体重が増加することによってなんとか生き延びることができる。こうしたことを学生に理解させたいのです。

マリリン：もちろん。おっしゃるとおり、そういう現象はあるでしょう。確かに、確かに。それが何なのかは分からないんですけど。ただ、「なぜダイエットをすると〇〇になるのか（Why dieting makes you da da da）」というのは、とても便利な文章だと思ったんです。

S：あー、なるほど。

マリリン：その文章を穴埋めする方法もあるんじゃないかなと思うんです。

S：確かに。クレイジーとか？

会場：一同大笑い。（会場からも意見が出始める。）

マリリン：不幸せ（unhappy）とか、不健康（unhealthy）とか、食べ物に取り付かれる（obsessed with food）とか、お腹が空く（hungry）とか、母親に腹を立てる（angry at your mother）とか。どうでしょうね。（会場大笑い）でも、私自身の経験では、私はただ太っているだけで、ダイエットはほとんどしなか

った。もちろん、私の質問は、必ずしもこのことを言っているわけではないですが。

S：おそらく、えっと、私にとっておもしろいのは、ええっと、私は、父がハンガリーからの移民で不健康な身体は、痩せた身体という考えの家族で育ちました。大きな身体の人は、健康や幸せであることの証なのです。・・・

（括弧内筆者捕捉、下線部筆者強調）

S は「普通」体型の女性である。「なぜダイエットをすると太るのか」というフレーズによって、S が、「ファット」に知らないうちにネガティブな意味を持たせてしまったのか、それとも、身体の仕組みを説明するために必要なフレーズだと判断したのかは、よく分からない。彼女は、最初の方では、ダイエットで身体を飢餓状態にすると体重が増加するという、身体の「生物学的」な仕組みを説明するためのものだと言っている。また、最後の方では、自分の家族は移民出身であり、太った身体は健康や幸せな意味を持つものだったと語っている。そのため、マリリンが指摘するように、「ファット」に悪い意味を持たせているのではないかもしれない。

しかしながら、ダイエットの弊害を「太る（ファット）」という現象で説明するならば、「ダイエットによる体重増加がまるで悪いことのように捉えられている」というマリリンの指摘は理解可能なものである。さらに、NAAFA に来るメンバーたちが経験する苦悩を推し量るならば、「ファット」がそのままでニュートラルな意味とはならないことを、S も知っていたはずだ。

マリリンは、S のファットの使い方を単刀直入に批判するのではなく、徐々に問題の核心に近づこうとしている。そして、「なぜダイエットをすると太るのか」というフレーズの「太る」という部分を空欄にして、さまざまに穴埋めできるのではないかと提案する。「なぜダイエットをすると不幸せになるのか」「なぜダイエットをすると不健康になるのか」「なぜダイエットをするとお腹が空くのか」というように。

人びとは、太ることが否定的な意味を持つことを、当たり前のように刷り込まれているため、そうした慣れに対して批判的な視座を持つことは難しい。大会では、浸食してきた外部の規範や信念や価値観にたいし、参加者たちが、そこに手探りで新しい意味や解釈を見いだしていくのである。このことを上記の事例は示している。

最後の二つの事例は、筆者とメンバー間のやりとりに関するものである。年次大会に来るメンバーはほぼ全員太っているため、NAAFA の集まり場において、「普通」サイズの筆者の身体が目立つことは否めない。その場において、自分自身の身体に言及することは、筆者にとってはためらわれることだった。しかしながら、ある程度信頼関係が形成されると、思いの外、メンバーの方から、筆者の身体サイズについて言及してくる状況が幾度かあった。

【事例 9：プール・パーティと水着についての冗談（2010 年 8 月 7 日フィールドノート）】

顔なじみのフィリーが大会参加登録のカウンターに座っていた。私がフィリーと会話を交わしていたところへ、NAAFA の役員として忙しくしていたリサが駆け寄ってきた。彼女は私に「はーい！陽子、久しぶり。元気にしてるの？博士論文はうまくいきそう？」言いながら、私たちはハグを交わした。フィリー（仮名）は、その様子を見ながら、「今夜のプール・パーティには、陽子もぜひ参加して。もし誰かに入るなと言われたとしても、私が入っていいと言ったと伝えなさい」と言った。「でも、水着を持ってきてないから」と私が言うと、フィリーが「困ったわね」という表情をし、突然、リサがひらめいた様子で「ベンダーで売ってるわよ」と口を挟んだ。リサは、「ベンダーで売ってるから、半分に切ってもらって、半額で売ってもらえばいいじゃない」と笑いながら言った（ベンダーとは、大会期間中、洋服や水着、アクセサリーなど、プラスサイズ用の店が会場内に出店していることを指している）。そこで、フィリスが「半分じゃなくて 4 分の 1 でしょ。陽子は、とっても小ちゃい（so tiny）んだから」と言って、3 人で大笑いした。（括弧内筆者捕捉）

プール・パーティとは、大会期間中、ほぼ毎晩、夜 11 時ぐらいから開かれるプールに入って遊ぶパーティのことだ。プールに入ることは、メンバーにとって大切な意味がある。普段は水着になることはなくても、このときばかりは水着になって皆で騒ぐことによって、気の置けない時間を過ごすのだ。

水着になると、太っている者とそうでない者の区別は、より明確になる。2008 年の年次大会では、筆者は、プール・パーティに受付ボランティアとして洋服を着たまま参加した。もちろん、ホテルには他の滞在客もいる。その年のプールはホテルの中庭にあり、各部屋のバルコニーから見下ろすことができた。ビキニを着たメンバーのジェシー（仮名）は、上の方を見上げると、それまでの楽しそうな様子から一転、「あー、あれ嫌だわ」といって顔を曇らせた。見上げると、一般客の若い男性集団が階上のバルコニーで集まって騒いでいるのが見えた。また、大勢のメンバーたちがプールに入っている様子を見て、筆者に「いったい何の組織なの？」と不思議そうに聞いてくるホテルの滞在者もいた。

フィリーが「もし誰かに入るなと言われたとしても、私が入っていいと言ったと伝えなさい」と筆者にわざわざ言ったように、プール・パーティには太っている人のみが参加できる、という暗黙のサイズの排他性があった。そのため、「私が入っていいと言ったと伝えなさい」というフィリーの発言は、太っていない筆者がプール・パーティに参加することを、彼女が保証すると表明した真剣な言葉なのだと、筆者はその時受け止めた。上記のコミュニケーションでは、「ファット」の対カテゴリーとして「小さい（tiny）」という形容詞が使われている。しかし、インタラクションのなかで、この対関係は、単なる排他的な対関係では終わっていない。むしろ、グレゴリー・ベイトソン［2000］が、ジョークやユ

ーモアは複数の論理階型レベルの交差から生まれると言うように、上記の事例は、コンテクストの多層性のおかげで笑いに変化している。すなわち、リサとフィリーと筆者は、「太っている者」と「痩せている者」という「排他的」な関係であるが、それと同時に、別のレベルでは「水着をどうやって手に入れるか」ということについて悩む三人でもある。このコンテクストの重層的な交差が、笑いを生み出したのだ。

【事例 10：冗談をめぐる緊迫と笑い（2009 年 8 月 3 日フィールドノート）】

ファット・アクティビストのマリリン・ワンとそのボーイフレンド、ジャスティン（仮名）と親しくなり、何度かサンフランシスコにあるしゃぶしゃぶの食べ放題に行ったことがあった。その時のことを、ジャスティンが大会のパーティで話し始めた。

> 私とマリリンとジャスティン、そしてメンバー数人が、ピザ・パーティで同じテーブルに座りおしゃべりをしていた。マリリンとジャスティン以外、私がよく知っているメンバーはいなかった。ジャスティンは、マリリンと私と彼とで、しゃぶしゃぶの食べ放題に行ったときのことを皆の前で話し始めた。「陽子は、すごい食べるんだよ。肉の大皿を 3〜4 皿たいらげて、僕はお腹いっぱいでもう食べきれないぐらいなのに、まだ彼女〔マリリン〕と二人で「もう一皿！と食べ続けていたんだよ」」と話しはじめた。周りのメンバーたちは、「へー」という様子で私を見る。そして、「そんなに痩せている（thin）のに、なんであんなに食べられるの？」と言って、ジャスティンは両手の平を合わせて片目をつぶり、まるで、私の身体の側面の幅を測るかのように示してみせた。それを見たマリリンは、横から手を出し「やめなさい」と諭すように彼の手を下げさせようとした。その瞬間、皆がだまり、どう振る舞えばいいか分からないような気まずい雰囲気が一瞬漂った。そして、彼は「陽子には、次元（dimension）があるんじゃないかと思うんだ」と言った。そして、場の雰囲気は一気に和み、その場にいたメンバーたちは、「4 次元とか？」「それ怖いわ」と言って一同は大笑いした。（括弧内筆者捕捉、下線部筆者強調）

ジャスティンが「次元がある」と発するまで、その場にいた参加者たちが発した相づちの仕方や、気まずい雰囲気から、筆者も含め、参加者たちはこの話がどこへ向かうのかは見当がつかなかったと推測される。話題の対象であった筆者は、何と答えてよいか分からず、非常に居心地が悪い状況だった。

「そんなに痩せているのに、なんであんなに食べられるの？」というジャスティンの質問は、裏を返せば、太っている人はたくさん食べると言っているように聞こえた。筆者は、この発言は「ファット」にネガティブな意味付けを与えていると瞬時に感じた。3.1. で既に見たように、太っていることと食べ物は関連づけられやすい。そのことについて、マリリンは常々、太っている人がたくさん食べているかどうかは証明されておらず、身体のサ

イズと食物摂取の量は関係ないと主張していた。この主張には、太っている人は大食いであるという社会的なステレオタイプを取り除こうという意図がある。そして、マリリンのボーイフレンドである彼は、そのことを知っているはずだった。それにも関わらず、彼はなぜそのような発言をし、身体を測るような行動をとろうとしたのか。そのことに筆者は戸惑った。

しかし、彼の「次元がある」という発言によって、「ファット」カテゴリーの対としての「痩せ」は、もしかして人間じゃないかもしれないというコンテクストのなかで、微妙にずらされて提示される。そのことが、笑いを誘った。

上記の三つの事例から分かるのは、これらのインタラクションは、いつでも否定的なニュアンスを持つ意味や解釈の方向に転がっていきそうな危うさを孕んでいたということだ。しかし同時に、そうした方向に転がっていかないように、その場に参加する者たちは、相互作用の中で舵取りをしていく様子が明らかになったのではないだろうか。

4.　考察

4.1　情動的な関係性から生み出される共同性

前節では、人びとが集う場で起こる相互作用を、参加者同士のファットをめぐる言語使用実践や身体実践を中心に見てきた。そこでは、ファット・カテゴリーや太っている身体に対する意味づけは、言語や身体を介して、相互に交渉または訂正されたり、再確認されたり、可視化されたり、作り上げられていくものであったといえる。

ここで、前章で描いてきた事例を少し整理しておこう。事例 1 では、太っていたときのほうが幸せだったといって、「ファット」の意味付けを転倒させてしまうキャサリンの事例を扱った。事例 2 と事例 3 では、外部の価値規範に引きずられてしまうメンバーの葛藤を扱った。事例 4 と事例 5 では、身体を媒介として、他者への関心や配慮が形成される様子を扱った。事例 6 と事例 7 では、デザート・パーティとファッション・ショーの様子を描き、どのように楽しさや笑いが生まれるのかを論じた。事例 8、事例 9、事例 10 では、外部者も含めた相互作用において、笑いが生まれる言葉使用実践を扱った。

太っているという事実は、それだけで集合性を成り立たせ、「ファット」の意味付けを確立するものとして十分なものに思えるかもしれない。本章で見てきた年次大会の集まりでも、メンバーシップには、太っていること、かつ、白人女性であることという明らかに共通の特徴が見られる。

しかしながら、大会の共同性を、参加メンバーの共通の特徴によって定義しようとするならば、「痩せたい」と語る男性のように、そこに「相応しくない者」も出てくる。ファット・アクセプタンス運動は社会の政治的変革を目的とした集まりであっても、内部と外部の境界は、「ファット」をめぐる価値観や信念、意味付けの仕方という点で、はっきりと区別可能なものではなかった。特に事例 2 や事例 3 から分かるように、外部者との交流によ

って、メンバーたちも太っていることを醜いことや恥ずかしいこととして捉える、一般的なアメリカ社会の常識や価値観に引きずられているようにも見える。

こうした事実から、ファット・アクセプタンス運動の人びとが作り出す共同性は、矛盾や不安定性を抱えているようにも思える。しかしながら、そこは同時に、創発性に富む、他者への配慮、笑い、ユーモアに満ちあふれた場でもあったことは既に見てきた通りだ。

例えば、事例 4 や事例 5 の身体実践で見たように、目の前にいる相手が、自分より大きい人なのか、小さい人なのか、座ることに困難を抱えているか、この通路を通ることが出来るか、杖をついているのか、電動スクーターに乗っているか、そうした諸々のことを察知し､その場に適した介入の作法や椅子の譲り合いの作法､座り方の身体作法などを学ぶ。そして、周りの皆と同じように太った身体を持つ自己が、同じような事情や困難にぶつかった経験があるとすれば、その場は、他者の困難を予期し、共感や配慮が生まれる場となる。

事例 6 や事例 7 で見たように、普段はやらないような、人前で大量のケーキを食べることやミニスカートを履いてモデルになることなどは、ヘレンが言ったように「とても勇気のいること」であり、その場にいる相手を信頼することで成り立つ。その場にいる人たちが、それらの行為に後ろ指を指したり、軽蔑したりしないということを深く信用できるような関係性がなければ、楽しさや笑いは生まれないであろう。

以上のように、ファット・アクセプタンス運動の人びとが集まる場は、情動的な関係性によって生み出される他者への配慮や、喜びや笑いや楽しさに満ちた共同性であるといえる。そして次で分析する事例 8、事例 9、事例 10 から分かるように、外部の価値観や規範をも笑いへと転化していけるような共同性であるのだ。

4.2　笑いによる自他の跳躍：折り重なった矛盾の交渉

ジュディス・バトラーは、女というカテゴリーの多様性に注目するために、アイデンティティを意味づける反復的で規則化されたプロセスに局所的に介入することに、撹乱の契機を見いだした［1999］。ファット・スタディーズの研究者であるキャサリン・ルベスコは、バトラーのこの考えに共鳴し、太った身体に対するネガティブな考え方や理解の仕方をポジティブなものへと鍛え直すプロセスで、言語がどのように使用されるかに注目する［LeBesco 2004: 121］。そして、ある名で呼びかけられることが、呼びかけられた人を侮辱しうる時、それは同時に、その侮辱に対する反撃の契機ともなりうると述べる。しかしながら同時に、それは、幾重にも折り重なった矛盾する感情に折り合いをつけていく契機でもあるという。ルベスコが「幾重にも折り重なった矛盾」というのは､「ファット」という呼びかけが自分自身に向けられたときに感じた、罪悪感、安堵感、違和感などのさまざまな矛盾した感情のことを指している。そのときの彼女の感情の変化を少し長いが、要約しながら引用してみたい。

ルベスコは、出版予定のファット・スタディーズのアンソロジーの共同編者のことを友

人男性に言及した時のことを回顧している。その友人は「彼女も太ってるの？（Is she fat, too?）」と聞いた後、すぐさま、「あなたが太っているという意味ではないんだけど、ええと、あなたは太っていない。なんで、あなたも（too）なんて言ったんだろう。ごめん。だって、私は君がそうだって思ってないから・・・。」としどろもどろになりながら言った。そのとき、ルベスコは、自身のなかにわき起こる矛盾した感情を感じ取った。そのときの矛盾した感情の層を彼女は、以下のように解きほぐそうとしている。

まず、ファット・スタディーズ研究者である自分に対し、友人は「彼女も太ってるの？」という不意の発言に対し謝罪したことに、彼女は驚いた。同時に、彼が、太っている人に対し「コントロールできない」人という一般的な意味付けをしていることも、彼女は読み取った。そして、また、彼が、ルベスコをそういう意味では太っていないと位置づけたことに、彼女は安堵を感じ、同時に、安堵を感じたことに罪悪感を感じたという。もちろん、彼は本当に自分を太っていると思っているのかもしれないとも感じたし、同時に、通常の規範的な礼儀作法が身に付いていれば、そのようなことを無作法に白状することはないだろうとも思ったという。そして、ルベスコは友人に対し、以下のように単純に応えた。「ええ、彼女は太っているよ。そして、あなたが私をどう捉えようと、私は傷つかないよ。私は進歩したのよ」［LeBesco 2004: 122］。

こうした涌き上がる「幾重にも折り重なった矛盾」した感情を、彼女は解きほぐしていった。「ファット」と呼びかけられることによって、人は、「ファット」として主体化される。それは完全な主体化などではない。呼びかけられた瞬間は、呼びかけられた者が、呼びかけによって傷ついた自己をなんとか防御しながら、なおかつ反撃の隙を狙うことが可能な瞬間でもある。ルベスコの反撃は「私は傷つかないよ。私は進歩したのよ」と理性的切り返すにとどまっているため、単に他者（の言ったこと）を否定しながら、自己肯定に至るのみである。

それに対し、本章の事例 8、9、10 は、痩身規範の侵入に対する折り重なった矛盾した感情を交渉しながら、反撃を笑いへと転化させ、「自他の瞬間的な変容」［田中 2011: 128］がもたらされた事例として読むことが出来るのではないだろうか。事例 8、事例 9、事例 10 では、誰かが誰かを侮辱しているかもしれない瞬間が、緊迫の状況や、居心地の悪い状況として訪れた。例えば、事例 8 の講師による「なぜダイエットをすると太るのか」という発言では、ダイエットによるリバウンドでコントロールを失って太った人にとっても、ダイエットをしていないのに太っている人にとっても、「ファット」は否定的な意味付けで使われている。事例 9 では、「とっても小ちゃい」筆者がプール・パーティに「誰かに入るなと言われたとしても、私が入っていいと言ったと伝えなさい」という発言に対し、太っていない筆者は、太っている人たちのプール・パーティに水着で参加することに対する不安感を感じたと同時に、太っていないという安堵感を少なからず感じた。事例 10 で気まずい雰囲気になったのは、「そんなに痩せているのに、なんであんなに食べられるの？」というジャスティンの発言と仕草によって、誰かが侮辱されているかもしれない、誰かが

傷いているかもしれない判然としない状況だったからではないか。

つまり、これらの事例では、誰かを「ファット」や「痩せ」と呼びかけることによって、誰かが傷つき、誰かが安堵し、誰かが罪悪感や憤りを感じている可能性があったのではないだろうか。そうした緊張をはらんだ場で、会話が、最終的にユーモアや冗談によって導かれることによって、「ファット」や「痩せ」に固着していた否定的な意味は解消され、中立的・肯定的な再意味付けが可能になる。事例 8 では、「なぜダイエットをすると「クレイジー」になるのか」と言い換えることで一同に笑いが起こり、会場全員がさまざまなアイデアを出し始めた。事例 9 では、フィリーとリサが、筆者のために、とても小さい水着をどうやって手に入れるかについて一緒に悩みながら笑い合った。事例 10 では、ジャスティンが筆者には「次元」があると言ったことに対し、皆が「4 次元とか？」「それ怖いわ」と言って大笑いした。それぞれのモメントにおいて、誰かが誰かを傷つけることがないようにコミュニケーションが機能している。

こうしたユーモアに富んだコミュニケーションは、形式的で予測可能な儀礼語とは異なり、文脈的知識から大きく飛躍しており、聞き手が話し手の意図を容易に推測し解釈することはできない。柄谷行人は、このことを、コミュニケーションの根底には、なんら規則を共有しない「他者」との非対称的な関係が抱える、無根拠的な危うさ（命がけの飛躍）があると表現する［柄谷 1986］。そして、田中雅一は、「笑い」には、自他の瞬間的な変容が、状況の変化や相互の自省を促すような異化を起こす効果があると指摘する［田中 2011］。そうだとするならば、本章で見てきた笑いの契機は、共同体の内部と外部、そして、「自己」と「他者」の間にある断絶を克服する瞬間だといえるのではないだろうか。そしてその瞬間こそ、バトラーの言葉で言うなら、撹乱の契機となりうるのである。

5. おわりに：第６章に向けて

本章では、ファット・アクセプタンス運動の人びとが相互作用を行う場で生まれる共同性を描写してきた。共同性の根拠となるファットという概念やそれをめぐる価値観は、学びの対象となる知識であり、参加を通して得ることが可能になる言語や身体の作法となっていた。学びの場では、具体的な個人が出会い、ファットであることを語り合い、ファットである他者を配慮し、気まずさや違和感の中からも、冗談や笑いによる情緒的なコミュニケーションが生み出されていく。こうした情動的なつながりが、肥満差別で辛い経験をしている運動参加者や、太っていることに対する否定的な意味付けや価値観を少なからず拭えないでいる運動参加者を支えており、だからこそ、ファット・アクセプタンス運動は持続しているのだと説明することも可能であろう。

それと同時に、運動の場は、内部の共有された規範や価値観と外部の価値観や規範なども入り混じった場所であるため、ファットについての意味は不安定で固定化されえないまま、相互作用は予知不能性をはらむ。逆に言えば、だからこそ、そこに不確実な場の状況

をユーモアやジョークによって臨機応変にいなし、意味付けしていくような即興性や創発性をもった共同性が生まれるのではないだろうか。

規範や価値観をずらしたり、新しく作り変えたりする可能性を持つこうした共同性は、社会運動を持続させていく力となりえるだろう。運動のさらなる展開のためには、それとともに、かれらの運動の根拠や目的を外部社会に知らせ、働きかけていく必要がある。第 6 章では、そうしたプロセスを、ネルソン・グッドマンの世界制作論に倣い、肥満を病気のリスクとする既存の医学的・疫学的な知識の体系に対抗し、かれらの運動が依拠することのできる新たな知の体系を再構築する有り様として描いていく。

序章で述べたように、ハッキングはそのことを「記述の新しい様式が出現すれば、その結果として行為の新しい可能性も生まれる」［ハッキング 2012: 226］と言う。つまり、新しい概念ができると、その概念が自身に適用されることに対し異議申し立てをする人が出てきたり、それによって、それらの人びとが、概念の意味を変更するように促したり、あるいは、新たな概念を作り出したりすることがありうる。第 6 章は、まさにその点を具体的に示すための良い事例となるだろう。

第６章　ファット・アクセプタンス運動による対抗的な〈世界〉の制作

1.　本章の目的

1.1　公民権としての「ファット」の危機

本章の目的は、ファット・アクセプタンス運動の実践を、ネルソン・グッドマンを援用して、肥満を害悪と捉える科学や制度に対抗した新しい〈世界〉を制作していく過程として描くことにある。前章までは、身体サイズや体重を市民権として訴え、身体サイズや外見の偏見に対する制度的改変と社会的な意識の変化を目指すアクティビストたちの活動を、ファット・アクセンス運動として描いてきた。本章では、アクティビストたちの活動だけでなく、この運動に関わるアカデミア、科学的な活動などの総体をファット・アクセプタンス運動とよぶことにする。

すでに何度も触れているが、アメリカでは、1980 年代後半から肥満者の急増が社会的に問題化され始め、現在、人口の 6 割以上が「過体重」や「肥満」のカテゴリーに分類されるといわれる。政府は、この事態を「肥満エピデミック」という言葉を使って問題視し、肥満の予防改善をアメリカの公衆衛生の最重要課題の一つと位置付けている。体重を自己管理し、健康増進に励むことは、良き市民としての「義務」なのだ［Petersen and Lupton 1996］。

このことが、ファット・アクセプタンス運動に与えた影響は大きい。この影響の大きさは、ファット・アクセプタンス運動の誕生と同時代に展開した、公民権運動やフェミニズム、ゲイ解放運動などの社会運動と比較すると理解しやすいだろう。黒人、女、ゲイ／レズビアンなどは、かつて、医学や科学のなかで病理的で「異常」な対象として扱われていた［e.g. グールド 1998; フーコー1986］。しかしながら、これらの人びとに「科学的」に付与されてきた「異常性」は、運動の展開にしたがって、次第に、偏見に満ち溢れたものとして払拭されてきたといえる。

それに対し、ファット・アクセプタンス運動は、これらとは逆の経路をたどっている。肥満差別の廃絶を訴える運動の意義は、運動の誕生から 40 年の時を経た今でも、依然として十分に人びとに認知されていない。むしろ、それに追い打ちをかけるように、疫学や医学などの肥満に関わる科学によって、肥満の「異常性」に太鼓判が押された状況だとい

える[105]。このことによって、公民権としての「ファット」の権利や肯定的な価値観の構築のための基盤は、毀損されかねない状況にあるのだ。そこで、本章では、こうした状況において、ファット・アクセプタンス運動に関わる人びとが、いかにして肥満の「異常性」を支える科学や制度に対抗していくのかを明らかにするために、その実践を描く。

1.2　本章の視座

序章で整理したように、科学が真理性や確実性を持った自然科学的世界の秩序や法則性を明らかにするという役目を担うなかで、不確実性は、科学の対極にある非科学的なものとして出来る限り排除することが望ましいものとされてきた。しかしながら、「リスク社会」に生きるわれわれは、不確実性やリスクは完全に管理し排除することが不可能だという現実を、すでに身をもって知っている。この「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」という相矛盾する厳しい状況に直面した人びとは、どのようにこれと向き合い、対処するのだろうか。「きつい」状況を軽減するための術として注目されているのが、病気や病気のリスクをめぐって動員される運動や集合性である。例えば、序章で言及した遺伝疾患や放射能や HIV/AIDS をめぐる領域においては、生命維持の必要性に応じて形成される「生物学的市民権」［Petryna 2002; Rose and Novas 2005］という新しい種類の市民参加が見られる。ローズやヒースらが指摘するように、市民参加は、生命維持をめぐって、個人的アイデンティティや集団化、承認要求、知識へのアクセスや専門家への異議申し立てが行われるのだ［Rose and Novas 2005: 442; Heath, Rapp, and Taussig 2004］。

本章では、さしあたって、ファット・アクセプタンス運動の実践を、こうした「リスク社会」に特徴的な社会運動として位置付けて理解する方途を探っていくことにする。ファット・アクセプタンス運動は、制度や科学による肥満のリスク化に抗う。すなわち、現在の体重管理が将来の病気のリスクを減らし健康増進につながることを前提とした知や制度に対し、ファット・アクセプタンス運動は異議申立しようとするのだ。こうしたかれらの実践を〈世界〉の制作として描いていくことが本章の目的の一つである。

1.3　〈世界〉という言葉の選択と本章の目的

〈世界〉という言葉を採用するのには、二つの理由がある[106]。まず第一に、文化相対主義への反省があげられる。文化人類学では、文化相対主義の観点から、異なる文化に住む人びとは、文化固有の象徴と意味の体系を通して、それぞれに異なる仕方で世界を認識し意味付けしているという考えが長らく支持されてきた。この場合、世界には「単一の世界」＝自然という含意があり、文化は「単一の世界」に対する複数の世界観を指す。ところが、

105　2013 年 6 月には、アメリカ医学会は、肥満を病気だと公式に発表している。

106　付記しておきたいのは、ハッキングは、「私の「種類の制作」の考え方は、グッドマンの世界制作の考えに何も付け加えていない」というほど、グッドマンから強い影響を受けている［ハッキング 2006: 279］。

近年では、単一の自然と複数の文化という二項対立は、科学の超越性を信奉する西欧中心主義的なものとして反省が促されている。そして、人びとの実践に即して、多元性や複数性を持った〈世界〉が構成されていく様子が論じられつつある［e.g. Mol 2002; ラトゥール 1999; 中川 2009］。この場合の〈世界〉は、人びとの実践の体系に応じて現れ、作られる、多様な〈世界〉を意味する。本章は、これらの研究系譜を踏襲している。

第二に、本章では、〈世界〉を制作するという言い回しによって、ある認識主体にとって、既存の世界が立ち行かなくなったときに、その世界に対抗的な新しい〈世界〉を作る積極的な態度を指摘する。これは、哲学者ネルソン・グッドマンの世界制作という言葉を援用したものである。グッドマンは『世界制作の方法』のなかで、真理、確実性という概念について疑義を呈し、正しい世界の多数性について論じた。「世界制作は（中略）つねに手持ちの世界から出発する。制作とは作り直しなのだ」［グッドマン 2008: 26］とグッドマンが述べるように、世界制作とは、手元にある既存の概念や知識を用いて、知識や概念の新しい体系を生み出していくことである。グッドマンの基本的なスタンスとしては、知の探求のプロセスとは、何かを発見するプロセスというよりも、理解の幅を広げながら世界を再編成していくことなのである。

彼は、また、世界制作とは、ヴァージョンを制作することだと述べる。「ヴァージョン」とはあらゆる媒体における記号体系を意味する。科学理論を初めとして、日常的知覚、言語的表現、絵画作品、音楽、表情、身振りなどはいずれも記号体系であり、科学的言明が世界を構成するのと同じように、小説や絵画や音楽もわれわれが慣れ親しんでいる世界とは別のヴァージョンの世界を作り上げる［グッドマン 2008: 172］。科学は外延指示的な言語を媒体にしたヴァージョン作りをするが、日常的知覚や小説や詩、絵画などの芸術など、外延を指示しないものでも隠喩的な方法や、例示や表出によって指示をなし得るという記号作用があるからだ［グッドマン 2008: 184–191］。グッドマンが芸術について紙幅を割いて論じるのは、彼が芸術愛好家であったという理由からだけではない。芸術は「発見、想像、そして理解の前進という広い意味で解された知識拡張のさまざまな様態である」［グッドマン 2008: 185］から、科学同様に、真剣に解されねばならないとする見方に立ち、真偽を論ずる科学言語を対象としてきた古い認識論を打倒しようとした。それによって、字義的・非字義的、言語的・非言語的、外延指示的・非外延指示的形態を取る、さまざまな様態の指示作用を持つ記号全般を、分析の対象に取り入れようとした。

グッドマンの議論は多岐に渡るため、ここで全貌を述べることはできないが、本章に関係する重要なことは、相対主義的な多元論の立場と「正しさ」についての彼の態度である。彼の相対主義においては、対立する言明の真偽を判定する審級的な存在や唯一の実在世界は想定されていない。その代わりに、対立する言明がそれぞれに属することのできる世界の多数性を説く。グッドマンは、それを、点を定義するやり方で示している。(1) あらゆる点は一本の垂直線と一本の水平線からできている、(2) どの点も直線やその他のものからは出来ていない、という対立する二つの言明は矛盾しているため、同じ世界で両者がど

ちらも真であることはできない。矛盾を解消するために調停することが出来ない以上、二つの言明はそれぞれ「正しい」別個の二つの世界があると見なす方がよいと述べる［グッドマン 2008: 205–207］。この「正しい」という言葉を、彼は、真理や実在によって支えられているものではなく、実践や慣習、関心に適合的であるかに関わるものとして使用する。彼は、以下のように言う。「カテゴリー体系にとって証明の必要があるのは、それが真であることではなく、何をなしうるかということである」［グッドマン 2008: 228］。大工が椅子を制作するのと同じように、記号のでたらめな寄せ集めでは世界の制作は成しえない。「正しさ」の程度は、常に、実践という再帰的な制作過程を経て、鍛えられていくのだ[107]。

以上を踏まえた上で、本章の目的は三つある。一つめに、ファット・アクセプタンス運動の実践を、「肥満」カテゴリーが属する既存の知の体系に対抗した、「ファット」カテゴリーが属する新しい知の体系を作る実践、すなわち、〈世界〉制作として描くことである。二つめは、「肥満」カテゴリーが属する既存の世界と「ファット」カテゴリーが属する制作中の〈世界〉という二つの世界の関係について検討していくことである。三つめに、運動を、文化相対主義的に理解するのではなく、グッドマンの「徹底した相対主義」［グッドマン 2008: 172］を通じて理解することに、どのような意義があるのかを見極めることである。

そこで、次節では、まず、ファット・アクセプタンス運動の〈世界〉制作の基盤となる、「ファット」カテゴリーの特徴について、フィールドデータから明らかにする。3 節では、ファット・アクセプタンス運動の〈世界〉を支える科学がいかに組織化されていったのかについて描く。4 節では、ファット・アクセプタンス運動の人びとが、「肥満」カテゴリーが属する既存の世界と「ファット」カテゴリーが属する制作中の〈世界〉という二つの世界を、どのように捉えているのかについて記述する。5 節と 6 節は考察に当てる。5 節では、(1) ファット・アクセプタンス運動を、「リスク社会」に特徴的な不確実性に直面する人びとの生の技法をめぐるいくつかの事例と比較した上で、運動を対抗的な〈世界〉制作と論じることの意義について改めて検討し、(2) 制作中の〈世界〉と既存の世界の関係について考察を加える。6 節では、複数の世界が、運動参加者に、どのような通約（不）可能性をもたらすのか、そして、「徹底した相対主義」と文化相対主義との違いを検討することによって本論を終えることにする。

「われわれが記述する方法に縛られている以上、あらゆる記述の体系から離れて世界はどのようになっているかと問うことは不可能」であるように［グッドマン 2008: 19–20］、

107　序章でも取り上げたように、ハッキングは、児童虐待や多重人格、同性愛などのカテゴリーの編成を取り上げ、グッドマンの議論を推し進めている。人間についての科学的な記述のためにあるカテゴリーを作り出すと、そのカテゴリーによって記述されるべき人びとに影響を与える。ハッキングは、選び出されたカテゴリーが利用されることによって、再帰的に世界が構成されていくことを論じている［e.g. ハッキング 2000; ハッキング 2006］。

二つの世界を俯瞰して見る位置は筆者にも確保されていない。本章で筆者は、ファット・アクセプタンス運動の人びとに出来る限り寄り添う立場を取りながら、かれらの〈世界〉を描き出していく。

2.　カテゴリーのもとに作られる〈世界〉

2.1　生まれつきの「ファット」

2012 年 8 月 2 日から 8 月 6 日にかけて、NAAFA の年次大会がサンフランシスコ空港近郊のホテルで開かれた。8 月 6 日に行われたミーティング中、メンバーA さんは、怒りと失望が入り混じった様子で、病院で、医師から診察中に否定的な態度を受けた経験を話しはじめた。体重 200 キロ以上はあると思われる彼女は、心臓粘液腫の手術を受ける際、二人の医師から「手術を同意した人の中で、あなたが一番太っている」と言われ、「肥満手術を受けなさい」と言われたという。会場からは、悲鳴にも近い声で「信じられない！」という声があちこちから聞こえる。何より彼女を怒らせたのは、彼女の夫が診察に同席しているときには、医師は彼女の身体サイズについて全く言及しないことであった。むしろ、とても親切に接してきたとのだと言う。隣にいる彼女の夫は細身の男性だった。彼は、「本当に僕には何も言わないんだ」と訴えかけるように語った。彼女は、医療では痩せている人を特権的に扱うことがまかり通っている。「医療は残虐だ」と言う。そして続けて、同じテーブルに座っていた「痩せている」筆者に向かって言った。「あなたは（身体が）小さい（small）から、分かるでしょう？」。筆者は、「(いや、分からないだろうね)」という A さんの含みを感じたが、うなずいた。結局、彼女は、肥満手術を受けずに心臓粘液腫の手術を受けたのだが、今現在、傷口以外は身体に何の問題もないと言う。彼女がメンバーたちを笑わせたのは、「旦那が車を大事にするあまり、スーパーに行っても、店の入り口から一番遠い誰も駐車してないような場所にとめるの。だから、結構歩いてるのよ」と活動的な様子について語ったときだった。

太っている者に対する、医療によるこうした否定的な扱われ方は、メンバーの集まりで頻繁に語られた。多くは太っていることが病気の原因にされてしまう経験にたいする怒りの語りであった。メンバーB さんは「のどが痛くて風邪を引いたようだったから病院に行ったんだけど、真っ先に体重を計られ、睡眠時無呼吸症候群の話を聞かされた。のどの痛みは太っていることが原因だと言われた。痩せることは私の目的ではないと何度言っても、痩せなさいと言われ続けた」と語る。メンバーC さんも、続けて自分のエピソードを披露する。「私が卵巣癌の手術を受けた後、医者から、「分かった？あなたが太っているから卵巣癌になったのよ」と言われた。肥満危機（Obesity Crisis）というくせに、医療業界は私たちのことをケアしたがらない。痩せるまではケアしたくない、と言っているようなものだ」と言う。すると、会場にいるメンバーは、全くその通りだと納得した様子で相づちを打つ。

上記の事例では、太っていることは将来の病気のリスクではなく、むしろ「あなたが太っているから病気になったのだ」と、既に生じてしまった病気という出来事の原因として扱われている。彼らは、太っていることを病気の原因と見なすのではなく、きちんと身体を診察した上で診断を下して欲しいと訴える。病院に行きたくないというメンバーが多いのは、病院に行くと非難の目で見られ、無条件に減量を奨められるからだ。そうしたことに耐えられず、病院に行かなくなり、逆に病気の発見が遅れて亡くなった人の話を、筆者は何度か聞いた。それでも彼らが頑なに減量を否定するのは、太っていることを生まれつきの性質として捉えているからだ。

マリリンの「存在としてのファット」

サンフランシスコを拠点に活動するマリリン・ワンは、筆者が最も親交を深めたインフォーマントである。彼女は、自身の執筆物でも筆者との会話の中でも、「選択して太っているわけではない」と断言する［Wann 2005］。小さい頃から太っていたという彼女だが、何度も食事を共にした経験から、彼女の食べる量が他の人よりとりわけ多いわけでもないということは分かる。また、バレーボール、トランポリン、シンクロナイズド・スイミングなどの運動を好んで行う。ダイエットをしたのも、人生で 1〜2 度だけだと語る。

彼女は、「ファット」は、食生活や運動などの行為（behavior）に還元できるものではないとし、「（それは）存在（being）であり、やめろと言うのは存在否定だ」と筆者に述べた。人口集団のなかの身長のスペクトラムと同様、「生まれつき」体重が軽い人や、「生まれつき」体重が重い人がいる［Wann 2009: ix–x］。彼女にとって、太っていることは、肌の色や「性別」などと同様、生物学的に「本質的」な特徴なのだ。「標準」体重へと近づくことを強制させられるのであれば、それは、人種やエスニシティの多様性を無視したマイノリティ差別と同じ構造を持つのである。

ダイエットを繰り返したエラ

大学院でホリスティック・ヘルスについて学び、現在、保健教育にも関わるメンバーのエラ（仮名）は、マリリンとは少し違う意見を持つ。彼女は、肥満を問題化して減量を強制するのではなく、運動をしないことや食べ物が悪いことをリスクファクターとして問題化すべきだと主張する。彼女の主張には、ダイエットで苦労し続けたバックグラウンドが関与している。彼女は、小さい頃に親からコルセットを着せられた経験もあり、幼少期から太っていて、減量してはリバウンドをすることを繰り返した。一度、ウェイト・ウォッチャーという商業的減量プログラムに入会し、毎日 3〜4 時間の運動を「まるでスポーツ選手のように」こなしながら、150 パウンド（70 キロ近く）の減量に成功した。しかし、大学院に入りダイエットに時間を費やすことが出来なくなると、減らした以上の体重を戻してしまう。46 歳（2009 年当時）の彼女は、43 歳までは、ダイエットをしてはリバウンドを繰り返すといったことを繰り返していた。減量をやめるのが怖かったからだと言う。

こうした経験を持つ彼女は、肥満を問題化し、減量を推奨する現在の医療や公衆衛生に強い違和感を示す。なぜなら、減量に価値を置く社会のなかで、「人は太っている気分にさせられる」からだ。ようやく減量できても、リバウンドして太るというサイクルを繰り返していくうちに、それが結果的に、スティグマやストレス、不健康なライフスタイルに結びつく。そして、医師は「ほらね、心臓病や糖尿病になった。君が減量しなかったからだよ」と言う。しかし、こうした負のサイクル自体が問題なのであると主張する。彼女は、以下のように言う。「ずっと座っている生活や、食べ物の質が悪いことがリスクであって、肥満がリスクなのではないのです。肥満を問題化するのは有効なやり方ではない。だって、「あなたが太っているから」というのは、言われた人に悪い影響を与えるでしょう。（中略）運動と食生活を改善した方がよいと言われる方がいいですよ。こうした問題であれば、わたしたちも取り組むことができる問題だし、人びとにも希望を与えるでしょう。」（2009年9月30日インタビュー）。

このように、マリリンとエラの決定的な違いは、太っていることを運動と食生活という行為に分解するか否かという点である。減量経験がないマリリンにとっては、太っている身体とは、まさに自分という存在（being）そのものであろう。それに対し、エラは、辛い減量と何度ものリバウンド経験により、太っている身体を問題化せずに、運動と食生活を問題化するべきだという考えに至る。二人の事例から分かるように、個々人の経験によって、太っている身体を捉えるやり方は異なる。しかし、どちらにも共通するのは、体重には遺伝的な素因が強く関係しており、身体サイズは自由に選べるものではないという考え方を持っているということである。これは、運動の基本的な考え方でもある。

2.2　疫学理解の「誤謬」：相関関係と因果関係の混同

上述のマリリン・ワンがファット・アクティビストになったきっかけは、医療保険会社から彼女に送られた、「病的肥満」のため「保険に加入出来ない」と書かれた一通の通知がきっかけだったと言う。彼女は、「二流市民（second citizen）」というレッテルとともに、社会から排除されていることに怒りを感じたと述べる。エラは、勤めている会社を辞めて保健教育のカウンセラーとして独立する夢があるが、会社を辞める決断ができない事情が医療保険だと述べた。今の会社のおかげで保険に加入していられるが、辞めてしまうと無保険になり、200キロ近い体重がある彼女は、自分で保険に加入することはできないだろうと予想する。国民皆保険の無いアメリカでは、オバマ大統領のヘルスケア改革以前は、零細な個人事業主や事業所で働く者で、高リスクであると判断された者や、保険料を支払うことが出来ない低所得者は、保険に加入できないことが多かった。

このような保険のシステムは、美馬が言うように、本来の保険テクノロジーのあり方ではない。リスクが計算可能になるには、まず、あるカテゴリーの集団が数え上げられなければならない。しかし、肥満のリスクが既に数値化されたおかげで、その回路は時間的順序が逆になった。人間集団からリスクを割り出すのではなく、既にあるリスクの指標とな

る数字に基づいて、高リスクの集団と低リスクの集団があらかじめ区分されて構成されるようになったのだ［美馬 2012: 140］。社会的なリスクが、個々の身体を対象に個人化されると、標準化や排除の道具として働く。

こうして作り上げられた低リスクの集団全体の医療費は、確かに、高リスクの者の加入を認めた場合と比較して、低負担になるというのは統計学的な事実である。しかし、このことは、太った個人が「標準」体重をめざして減量をすれば、その個人の健康増進につながるということや、さらには、決して病気にならないということまでは意味しない。ここには、疫学を理解する際の初歩的な誤謬がある[108]。

第 1 章で詳しく説明したように、統計的データは、集合に内在する規則性について語っているのであり、個別事象の因果関係を示しているのではない。それにもかかわらず、上述したいくつかの事例で、癌や喉の痛みは肥満が原因であると断定されてしまったように、多因子のリスクは単純化され、個別事象は因果的な説明のモードへと回収されていく。

こうした、一般に受け入れられている相関関係と因果関係を混同した理解に対し、運動に参加する人びとは怒りをあらわにする。マリリンは「毎年、30 万人が、肥満が原因で死ぬと言われているけど、全くのねつ造（fiction）。実際の死因を調べてみれば違うことが分かる。科学は、相関関係として出されたデータを因果関係と読み替えることによって、太っている人は病気だと言っている」のだと言う（2011 年 3 月 12 日のレクチャーでの発言）。

2.3　対立するカテゴリー：「肥満」カテゴリーと「ファット」カテゴリー

このことについて、摂食障害の心理療法を行うデブ・バーガードは「太っていること（fat）は不健康だ」という考えが、証明が必要とされないようなア・プリオリな前提になってしまっていることが問題なのだと指摘する。そして、「この考えにもとづいて、人は、太っていることそれ自体がさまざまな病気を引き起こすと見なしたり、ある人の体重を見てその人が何を食べているか、どれだけ運動をしているかが分かると仮定したり、減量することによって健康になれると仮定したり、長期的な減量が可能であると仮定したりする。なぜなら、われわれの文化では、医師も含め、人びとは頭からこの考えを信じ込んでいるため、科学的な検証がされないのだ」［Burgard 2009: 46］と述べる。バーガードがここで言いたいのは、「肥満」というカテゴリーは、文化的社会的なイメージに依存して不健康という指示内容を持ち、それが規範として働いているということである。

ただし、かれらは、太っていることが痩せていることよりも健康的であると主張しているわけではない。運動に関わる栄養士のリンダ・ベーコンは、「体重がいくつかの病気のリスクの増大に関係しているのは確かだが、因果関係となると話は全く別ものだ」［Bacon

108　肥満疫学者のフーによると、肥満と肥満関連疾患のすべての疾患の原因は多因子であるため、単一の原因と結果のセットとしての因果関係は、肥満の必要条件にも十分条件にもなり得ない。いくつかの要因の組み合わせによって、肥満と肥満関連疾患のメカニズムを説明することが可能になり、因果は確率的に示される［フー2010：7］。

2008: 123］と述べる。また、カリフォルニア大学バークレー校の栄養科学学科の体重と健康センター（Center for Weight and Health）の創立者の一人であるジョアンヌ・イケダは、太っている人びとを一括りにして見ることが問題だと語る。彼女によると、肥満がいくつもの健康リスクを増加させるとしても、健康的な生活を送る身体の大きな人と、不健康な生活をしている身体の大きな人のリスクを比較した研究はまだないという[109]。

つまり、ファット・アクセプタンス運動にかかわる人びとは、太っていることが、有無を言わさず不健康だと理解されることに異議を唱えている。また、肥満についての統計的データを特定個人に当てはめ、肥満を病気の「原因」と見なし、責任の所在を個人レベルにまで落として、その個人を非難するような社会的傾向に疑義を呈しているのだ。

そのため、ファット・アクセプタンス運動では、理想的な体重があることを示唆する肥満や過体重という医学的定義を使わない。医学的定義としての「肥満」カテゴリーは不健康を含意するのに対し、ファット・アクセプタンス運動の人びとが使用する「ファット」カテゴリーには不健康という含意はない。あるべき姿を意味する規範的な用語としての「肥満」カテゴリーのもとに制作される知の体系に対して、かれらは、記述的な用語としての「ファット」カテゴリーのもとで科学的知識や健康へのアプローチ法にかかわる知の体系を作り出そうとする。その立場は、肥満を病気の原因とし、「標準」体重と健康を同一視する認識を覆そうとするものである。それを現実化しているのが、Health at Every Size®（以下 HAES）と呼ばれる科学であり健康管理方法である。次章では、HAES 科学がどのように誕生し、運動の中でどのように組織化されていったのかについて説明していく。

3.　Health at Every Size の組織化と事実作製

あらゆるサイズの健康を追求するというその名の通り、HAES は、体重管理によって健康を維持する従来の減量モデルとは異なり、「体重管理をしない健康管理の仕方」を重要視するオルタナティブな公衆衛生モデルとされる［Burgard 2009: 42］。基本的な考え方としては、人には生まれつきの多様な体型とサイズがあり、各個人に適した運動の仕方や食べ方があるというものである。減量は、たいていの場合、体重の増加、自尊心の低下、摂食障害のリスクを増加させるので、健康管理としては適していない［Robinson 2004: 6–7］。こうした HAES の基本的な考え方は、肥満差別の廃絶を掲げるファット・アクセプタンス運動の理念と親和性がある。このアプローチが、どのように運動と結びついていったのかを、以下で説明していく。

HAES アプローチの第一人者であるデブ・バーガードは、サンホゼ近郊で心理療法家として活動している。彼女は、1983 年から 1989 年にかけダンスクラスのコーチをしていたとき、とても健康な太っている女性」と「とても不健康な痩せた女性」がいることに気づ

[109]　2008 年 8 月 20 日オークランド市のコーヒーショップにて行われたインタビューより。

き始める。この二つのカテゴリーは、多くの場合、偏見によってその区別が認識されることは無い。「医師は本当に病気になっている人を見るでしょう。病気ではないと病院に行かないし。太った人が（病気になって）病院に行くと、医師は太った人のことを健康なはずがないと思う。（健康と太っていることは）結びつけられることはないのよ。でも、私のクラスには、愉快で元気いっぱいで足を 180 度開脚するような人たちがたくさんいたの」と彼女は述べる（括弧内は筆者捕捉）（2009 年 9 月 10 日インタビュー）。

この経験がきっかけとなり、彼女はダンスクラスをやめ、博士論文の調査「200 パウンド以上の女性が、どのように自らの経験を理解しているのかについて」を開始する。「将来減量するつもりはありますか？」「自分の体重をコントロールしていると思いますか？」などを訊ねるインタビュー調査から、彼女は、驚くべき結果を見いだしたという。それは、「体重をコントロールしようとしている人は、皮肉なことに、生活上の（体重以外の）その他のことに関してコントロールできていないと感じていた」というものだった。逆に、体重管理をしない人たちは、「自信に満ちあふれて」いて、「うまくやっていた」という。彼女たちは、減量によって何が起こるかを分かっていて、「（減量は）ばかげている」「減ったり戻ったりしているだけ」、「別の方法でコントロールすればいい。私は自分の人生を取り戻すわ」と応えたという。そして、バーガードは、自分をコントロールできないと思い込む過程が体重の増減の過程で起こるということを明らかにした。これは、彼女が心理学の「学習性無力感」で学んだこと全く同じだったという。

バーガードによると、インターネットが普及する前の 80 年代後半から 90 年代にかけて、臨床や自分の経験から既存の体重パラダイムが役に立たないという結論にたどりついたバーガードのような人たちが、お互いを見つけ合う形で、全米から寄り集まってきたという。セラピストや医者や栄養士、アーティスト、アクティビスト、フィットネスの専門家など、さまざまな分野の人たちが、それぞれの形でこのことに関わっていたと彼女は語る。そして、既に誕生していたファット・アクセプタンス運動と交わるかたちで徐々にネットワークが広がっていった。

さらに、1992 年に、アメリカの医学研究機関である国立衛生研究所が開催した「自発的減量コントロールの方法についての技術評価会議（Technology Assessment Conference on Methods for Voluntary Weight Loss and Control）」での報告も、運動を支える根拠となった。すなわち、提出された減量と体重管理について報告書では、「比較的短期間の減量プログラムでは、初期体重の 10％以上の減量が可能であるが、プログラム終了の 1 年以内には減量した体重の三分の二を、5 年経てば全ての体重を再増量する強い傾向がある」とし、長期間にわたって減量を維持することは、事実上不可能であることを認めている 。政府の保健医療機関は、体重管理による健康を訴えながら、減量の不可能性についての認識も持っている。HAES にかかわる人々やファット・アクセプタンス運動参加者は、ここに「体重管理をしない健康管理」を提唱できる余地があると考えている。

さらに 2000 年代に入り、栄養学者のリンダ・ベーコンがカリフォルニア大学デイビス

校で行った調査によって、初めて HAES の正当性を科学的に証明したと結論づける調査結果が出された。その調査とは、30 歳から 45 歳までの肥満白人女性被験者 78 人を、減量グループと HAES グループの二つに分け、2 年にわたり、被験者の健康状態や体重の変化を記録したものだった。この調査結果はアメリカ栄養学会のジャーナルに掲載され、肥満女性のリスクが HAES アプローチによって改善されることが証明されたと結論づけられた［Bacon et al. 2005］[110]。太っていても健康でいられるという科学的証明は運動を活気づけた。筆者が調査を始めた 2008 年頃も、この研究結果はしばしば会話の引き合いに出され、「リンダによって、科学的に HAES の正当性が証明された」ということを何度も聞いた。

HAES 科学を支える組織として、サイズ・ダイバーシティと健康協会（Association of Size Diversity and Health : 以下 ASDAH）がある。NAAFA と ASDAH の組織のメンバーは重なり合っているが、前者がアクティビズムの要素が強いのに対し、後者は研究者や専門家が中心となって HAES についての情報・意見の交換を行う。バーガードやベーコンをはじめとする HAES の専門家には、ダイエットに苦しむ女性たちや摂食障害者を対象にした心理療法家や栄養士などが多い。太った者に対する差別も摂食に苦しむ者たちも、肥満を嫌悪する文化的社会的状況によって生み出されており、問題の根源は同じだと考えられているからだ。

かれらの活動は、年に一度の年次大会や各地区でのミーティングをはじめとして、「showmethedata」「fatstudies」などのメーリングリストでの情報交換、また、嘆願書の作成[111]や企業の雇用現場での身体の多様性についてのツールキットの配布などを通して多様性への理解を外部にも働きかけている。さらに、各個人の活動は、大学やコミュニティ・カレッジ、高校でのレクチャー、イベントの開催など小規模なものから大規模なものまで多岐にわたる。

4.　制作中の〈世界〉と既存の世界

4.1　世界間の通じなさ

減量に異議を唱え、太っていても健康でいられることを主張する運動に対し、保健医療関係者は、運動の「非合理性」を強調し、ダイレクトに批判する。例えば、ある著名な減

[110] 減量グループには減量プログラムを受けさせ、HAES グループにはカウンセラーによる指導とワークショップが行われた。結果は、体重と BMI の数値、血圧、血中脂肪の代謝状態の数値、エネルギー消費量、抑制や摂食障害の調査項目を使った食行動の測定、自尊心、鬱、ボディイメージなどにたいする心理学的測定によって測られた。調査の結果は、減量グループと HAES グループともに体重に変化はなかったが、HAES グループは、自身のサイズを受け入れ、ダイエット行動を減らし、身体のシグナルに対する意識を高めているという結果が出された［Bacon et al. 2005］。

[111] 最近では、アメリカ医学会が肥満を病気と定義したことに対する抗議の署名活動や、ミシェル・オバマのテレビの減量プログラムへの出演に対する抗議活動がある。

量の専門家は、ニューヨーク・タイムズ紙の記事において「太っているなら、数々の病気にかかるリスクが増える。これは科学的に証明されている。頭を悩ませる問題でもない。差別だと言っている人は、自分を擁護しようとしているだけなのだ」と運動を批判している［Ellin 2006］。また、ハーバード大学公衆衛生大学院栄養学科長は「体重の重い人は軽くした方がいい。体重は問題じゃないと主張している「体重は美しい集団」によって誤った考えが助長されている。データは明らかなのだ」とコメントしている［Katz 2009］。

もちろん、こうしたダイレクトな批判ばかりではない。運動の意図が正確に理解されないために、時にミスコミュニケーションが起こる。筆者がフィールドワーク中に遭遇した事例を紹介しよう。その出来事は、2009 年 10 月 9 日、全米でもトップレベルの医学校であり、多様性に開かれた街サンフランシスコのゲイが集うカストロ通りにも近い場所に位置するカリフォルニア大学サンフランシスコ校にある肥満研究センター（Center for Obesity, Assessment, and Treatment）で起こった。そこで行われた全米の肥満研究者や医療関係者が参加する定例ワークショップでの出来事だった。ワークショップという「排他的」な環境の中、筆者は、アクティビストのマリリンやリンダ・ベーコンと一緒に出席した。その時の発表者は、アメリカの肥満の疫学研究で最も名の知れたキャサリン・フリーガルだった。フリーガルは、「体重と死亡率」というタイトルで、死亡率が最も低いのは「過体重」であるという、彼女が行った有名な調査結果について発表した[112]。質疑応答の時間に入ると、マリリンは一番に挙手をした。「私はファット・アクティビストです」と切り出し、サイズによる差別をなくすべきであるという旨の訴えを数分間行った。発言を終えた途端、50 名近くの聴衆からは拍手が巻き起こった。

セミナー終了後、一人の心理学専攻の研究者がマリリンに近寄ってきて「はじめまして。私は、ストレスがどのように肥満を引き起こすかについての研究をしています」と自己紹介をした。それに対し、マリリンは「社会が太っている人に対して差別的な態度を取るから、私はストレスを感じます」と答えた。そのあと、その女性研究者は、何となくどう振る舞って良いか分からないような表情で、早々に会話を切り上げて去ってしまった。彼女はマリリンが質疑応答のときに発した「肥満差別をなくしたい」という真の意図を理解していないようだった。「ストレスが肥満を引き起こす研究」は、ストレスを軽減し肥満改善を目指す目的のもとになされている研究であるということは明らかだった。マリリンの切り返しは、その研究に対するマリリン流の皮肉でもあったが（とマリリン本人も筆者に言ったが）、その研究者はそれに気づかずに去ってしまった。

その一方で、こうした専門家の場合と違い、一般の人は、ファット・アクセプタンス運動の意図が理解できないという率直な反応を示す。運動の関係者もうまく応答し説明できないことがしばしばある。例えば、2009 年 3 月 5 日、HAES の専門家として活動するコニーによって、「健康的なボディ・イメージ／健康的な体重：親の役割」という講演が、オ

[112] この調査結果は、2005 年の米国医師会雑誌［Flegal et al. 2005］に掲載されている。

リンダ市の高校生の子どもを持つ親たちのために開かれた時のことだった。この講演は、現在、アメリカの 60%の女子大生が抱える摂食障害の問題に対し警鐘を鳴らすことを目的として開かれた。

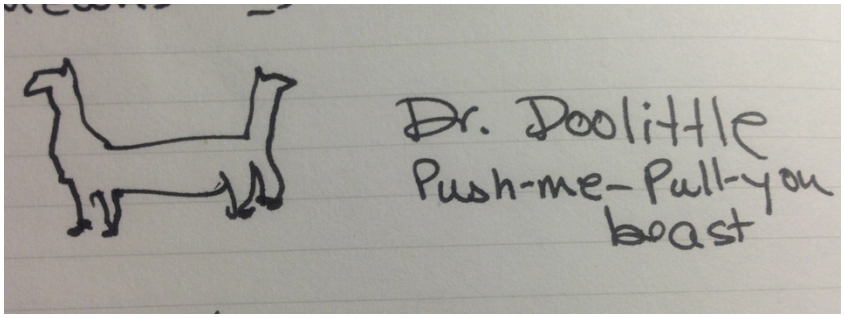
コニーは、アメリカ社会には反肥満メッセージがあふれ、子どもは学校やメディアからそのメッセージを受け取り、摂食の問題が再生産され続けていく。それらのメッセージに惑わされずに、空腹や食欲、満腹のシグナルを自己の身体からきちんと聞き取れるように、家庭でも教育していかなければならない、という内容の講演を行った。講演後の質疑応答になり、30 名程度の聴衆の一人が、自らも過食症の気があるという告白をし始めた。それでも、自分の子どもには過食症が移って欲しくないと言う。しかし「今の社会では、体重が重いといじめられたり、からかわれたりするというのも事実なんです。自分の子どもは、体重のせいでからかわれるような対象にはなって欲しくないんです。どうしたらいいのでしょう？」という質問を投げかけた。それに対し、コニーは、市民運動の一つとしてファット・アクセプタンス運動という運動があること説明しながら、「自分が自分らしくあることが大切なのです。体重の増加というのは、成長過程の一つなのですから。体重が重くてもかまわない。ただし、食べ過ぎは駄目ですよ。身体の声を聞いて食べることによって、自然な体重になります」と応えた。しかし、質問者は、その顔の表情から明らかに納得していない様子だった。すると、別の聴衆から再び手が上がり、「そうはいっても肥満は問題でしょう？」と食ってかかった。すると、コニーは「ジャンクフードばかりを食べて、あまり動かないと言うことが問題なのです。肥満に注目するのではなく、食べ物との関係をうまく保つことに注目してください」と応じた。しかし、質問者たちはコニーの返答に納得している様子もなく、やりとりはどことなく白けた雰囲気になり、それ以上発展しなかった。

我が子が太っているからといじめの対象にはなって欲しくはない、という親の思いに対し、コニーはファット・アクセプタンス運動の人びとがよくやるように、太っていることと食べ過ぎを別々の問題として提示しようとした。そして、太っているために受ける差別は、外見による差別であり、ファット・アクセプタンス運動が公民権の侵害として訴えているものであると伝えた。その一方で、食べ物との関係こそが、個人が取り組むべき課題であると注意を促したのだ。しかし、質問者にとっても聴衆にとっても、太っていることと食べ過ぎの問題は、切り離すことが出来ないものだという認識があったと考えられる。

4.2　「パラダイム・シフト」、あるいは、同時にある二つの世界

メンバー間にも、制作中の〈世界〉と既存の世界の関係について、理解の違いがある。2010 年 8 月 9 日に行われた HAES のワークショップでは、そのことが明らかになる出来事が起こった。その出来事と後日のマリリンとの会話は、二つの世界の位置取りを知る上で、筆者にとって、とても重要な出来事であった。

この日のワークショップは、イギリスやオーストラリアで活躍する HAES の専門家も参



【図 6-1：マリリンが描いた「オシツオサレツ」】

加していた。一日がかりのワークショップも終わりに近づき、会場は高揚感に包まれていた。メンバーたちがワークショップの感想について次々に述べる中、メンバーの中心的な人物の一人、おしゃべりで元気なダイアナ（仮名）が声を上げた。「コペルニクスが、地動説が正しいと言ってから、地球が平らではなく球であると人びとが認識するまでに、いったいどれくらいかかったのでしょうね〈中略〉それと同じように、HAES が人びとに理解されるまでにどれくらいかかるのでしょう！」。会場から「ケリー（仮名）なら知ってるわよ。」と声が上がり、ニューヨークの大学で人類学を専攻するケリーが、コペルニクスについてのコメントのために引っ張り出された。突然引っ張りだされた彼女は、天動説を斥け地動説を唱えたコペルニクスについて、ややしどろもどろに概略を説明した。その説明が終わるやいなや、マリリンは、いらいらした様子でこう言った。「コペルニクスの理論が理解される仕組みを知りたければ、トマス・クーンを読めばいい。科学は信じる人の数の多さ（quantity of believers）の問題ではないのよ」。そのいらいらは、あきらかにダイアナに向けられたものだった。会場はマリリンの勢いに押され静まりかえった。ダイアナは、怒りと困惑の入り交じった表情の顔を下に向け、隣の人に聞こえるぐらいの声で、「誰も信じる人の数の多さの話なんてしてないわよ」とささやいた。

筆者は後日マリリンに会い、大会で発した「信じる人の多さではない」という言葉に込められた考えをたずねた。彼女は、科学や制度による圧倒的な権力に対する、ダイアナをはじめとするメンバーたちの失望感や焦燥感ももちろん理解できると言いながらも、以下のように述べた。「例え地球が丸くても、人が平らだと信じていたら、地球は平らなのよ。マジョリティが決めることじゃないと思う。〈中略〉例え、ミッシェル・オバマが 25 年後には太った子供たちはいなくなるだろうと言ったとしても[113]、彼女は本当にそれを言ったんだけど、それは正しくない」と言う。そして彼女は、私が持っていた紙とペンを取り、一つの胴体から別々の方向を向いた二つの頭を持つ馬の絵を書いた。ドリトル先生に出てくる「オシツオサレツ（Pushmi-pullyu）」だ（【図 6-1 参照】）。絵を指しながら説明を続ける。

[113] 大統領夫人であるミッシェル・オバマは、増加する「子どもの肥満」の対策として、2010 年から Let's Move!というキャンペーンを立ち上げている。

一つの方向とそれとは逆向きの方向という二つの趨勢が、現在同時にある。つまり、こっちの方向では肥満が問題とされている。そうね、それは正しい。同時に、HAES とかファット格好いい、というあっち向きの方向がある。どちらも正しい。地球が平らなのと丸いのが同時に存在したようにね。だから、個々人は瞬時に世界の見方を変えられる。300 年もかからないし、瞬間的に変えられるの。この世界があっちの世界に変わったというように、全然違う世界をね。そしてそれはマジョリティが決めるルールのもとに存在するわけではないの。〈中略〉地球が丸いと思えば、地球は丸い。太っている人が存在していると思えば、太っている人は存在するのよ」と最後は笑いながら言った（2010 年 8 月 14 日、サンフランシスコ市内のコーヒーショップで行われたインタビューより）。

「肥満」カテゴリーが属する知の体系、すなわち、肥満を不健康だと捉える既存の世界と、「ファット」カテゴリーが属する知の体系、すなわち、太っていることは不健康ではないと捉える運動の〈世界〉。この両者は、二つの対抗的な世界である。前者の古い世界では事実が歪められて理解されているのだから、正しい事実を備えた自分たちの〈世界〉を作らなければならないというのが、かれらの運動の原動力になっていることは間違いない。ダイアナの「パラダイム・シフト」という発言は、やがて HAES パラダイムが真理として認められ、既存の体重パラダイムに取って代わるという期待の表明でもあっただろう。実際、トマス・クーンの意図を拡大解釈した「パラダイム・シフト」という言葉は、ダイアナだけでなく、運動に関わる人びとが好んで使う［e.g. Bacon and Aphramor 2011; Robinson 2004］。それによって、科学分野だけでなく価値観や日常の認識の劇的な変化までも当て込んでいるからであろう。

しかしながら、マリリンは、劇的な変化に期待を抱くダイアナの無邪気さに対して、いらだちを向けた。そして、彼女は、ファット・アクセプタンス運動や HAES だけが、正しさを手に入れるわけではなく、信じる人の数だけ正しい世界はあるのだと述べた。すなわち、信じる人の多さによって唯一の正しい世界が出来上がるのではない。「肥満が問題とされている」世界と、「HAES とかファット格好いい」とされている世界は、常に、不均衡に、同時に存在しているのだ。運動だけが正しい世界に近づけるわけではなく、むしろ、人は、まるで異なる二つの世界を、部分的にではあるが、同時に理解できる。マリリンのいらだちには、運動が正当で十分な理解を得られることがないために、運動の展開が難航している現状に対しての鬱積した感情も入り交じっていたであろう。

後に、マリリンは、運動の歴史の流れのなかで目指すべき終着点は、彼女にとっても、時にクリアに見えたり、時にぼやけて見えたりするのだと筆者に語ったことがある。そのとき、彼女は、続けて以下のように自身の思いを吐露している。

> ファット・コミュニティの中には、減量したい人もたくさんいる。ダイエットしたり、肥満手術を受けたり。それは私にとっては悲しいことだけれど、歴史の中の今の事実として避けられないことでもある。減量に対する社会的な圧力があるから。それに、ファット・コミュニティの基盤はまだまだ小さい。人が幸せと健康を感じながら、なおかつ、減量を拒否するというのは、例えファット・コミュニティの中にいても難しいことなのよ。〈中略〉でも、私は、かれらが減量しようと何をしようと、それは、かれら自身の手段であると評価しなければならないと思っている。果てしない歴史の流れの中の終着点を私が決定することはできない。ただ、今現在、私たちの努力の過程で、何が起こっているのか、目的（ends）ではなく手段（means）から評価していくしかないのよ。（2011 年 3 月 22 日サンフランシスコ市内のコーヒーショップにて行われたインタビューより）（括弧内筆者捕捉）

この発言から、ファット・アクセプタンス運動の参加者たちは、二つの世界を行ったり来たり揺らいでいるということ、そして、アクティビストとして運動を牽引してきたマリリンにも、揺らぎ矛盾したかれらの態度を強く反対できないという、ジレンマが読み取れる。

メンバーたちは、実生活では肥満差別やひどい扱いに苦労しているからこそ、年一度の NAAFA の大会での仲間と集いによって「一年の英気を養う」とか、「パワーをもらう」と表現する。NAAFA 設立当初の 1973 年から運動に参加している、71 歳（2010 年当時）のヘレンは、40 年近くを NAAFA とともに生きてきた。彼女は、筆者にこう言った。

> 〔NAAFA の大会に出席して〕私は、残りの一年、この世界を何とか生き延びられるように充電するの。一年が過ぎて、大会に参加するときには、私のバッテリーは切れかかっているから、また充電するの。私が充電するんじゃなくて、NAAFA の大会が充電をしてくれるの。（2010 年 8 月 8 日インタビュー）（括弧内筆者捕捉）

マリリンの説明やヘレンをはじめとするメンバーたちの言葉から、筆者には、二つの世界の間が、一見すると埋めようが無いほど遠く隔たっているように見えて、実は、そうではないように思えた。むしろ、その間は微妙に近く、その距離をどう保つかが、かれらにとっての困難であるのではないか。

次章では、ファット・アクセプタンス運動による〈世界〉制作とはいかなる実践であるのか、また、新しい〈世界〉と既存の世界はどのような関係にあるのかについて、改めて考察を加えていくことにする。

5.　考察：〈世界〉制作と世界間の通約（不）可能性

5.1　ファット・アクセプタンス運動による〈世界〉の制作

ここまで、リスク管理を押し進める制度や科学に対抗するファット・アクセプタンス運動の実践を、〈世界〉制作として描いてきた。その根底には、不確実性を飼いならすための科学的な現実認識や問題対処の方法に、人びとは、どのように向き合っているのかということについての問題関心があると述べた。本節では、不確実性に直面する人びとの生の様態について、四つの事例を検討しながら、ファット・アクセプタンス運動がそれらとは異なる対抗的な〈世界〉の制作であることを、より明確に示していくことにする。

まず一つめに、未来の不確実性がもたらす不利益をできるだけ縮減するために、連帯して立ち向かい、それらを制御しようとする態度の存在を指摘したい。こうした態度は、近年、生の不安に連帯して立ち向かう患者グループやさまざまな運動などの新たな集合性として、人類学や社会学のなかで注目されつつある［e.g. Rose and Novas 2005; 田辺 2008］。例えば、ニコラス・ローズらは、ハンチントン病などの遺伝病患者例に、バイオテクノロジーや遺伝子科学の発展を背景に、生物学を「本質的」なアイデンティティの根拠とするような新たな主体性が形成されつつあることに注目する。専門家によって作られた生物学的なカテゴリーを使って個人的集合的なアイデンティティを形成し、生きていくために必要な科学的知識の理解を向上させるために、科学的知識の産出に関与し、積極的に自らの病に立ち向かおうとする［Rose and Novas 2005］。そこには、従来イメージされてきたような受動的な患者像はなく、医師と患者、疾病と病いという二分法的な理解は無効とすら思える。ただし、ここで重要なことは、こうした集合性が、病気という「生物学的事実」を受け入れた上で成立しているということだ。したがって、田辺が危惧するように、人びとは「科学とテクノロジーに親和的な権力の網の目」のなかで、生の管理が要請する健康増進の規範に回収されてしまう可能性を持つ［田辺 2010: 7］。

それに対し、猪瀬は、科学の計算可能性や普遍性や真理性といった前提すら通用しない状況において、人びとが、いかにして不確実性を制御可能なものにしようとするかを描き出す。東京電力福島第一原子力発電所の事故後の、不確実で混沌とした状況のなかで、個々の経験の単独性を結びつけていくような科学の有り様を、市民科学という概念を使って注視する。人びとは自らの経験に応じて、それぞれの立場で科学を理解可能なかたちにしていくことによって、混沌とした状況が、複数の〈リアリティ〉として再構成されていく様子を描いている［猪瀬 2013］。

上記二つの事例は、科学に依拠する際の態度の違いはあるが、どちらも不確実性を制御しようと試みるものであった。それに対して、三つめに取り上げるのは、コントロールを放棄するような態度である。糖尿病という疾患に対する、困惑やコントロールの放棄という態度のあり方について分析したコーンの事例である。すでに第１章で取り上げたため、ここでは、簡単に紹介するにとどめる。コーンは、慢性病の錯綜した確率論的病因論のもとでは、過去と現在の系統だった分類が単純には成り立たないことを明らかにした。なぜなら、過去から及ぼされた影響の可能性が多数あるために、未来の可能性も同じくらいに多数想起されるからだ。過去に経験されたものとしての原因が見当たらないと、未来の希

望などが消滅してしまう。それゆえ、患者は困惑やあきらめ、コントロールの喪失を抱くのだと、コーンは説明した［Cohn 2000］。

四つ目に、生物医学の外側に病気の治癒の可能性を求めようとする人びとの事例として、牛山によるアトピー性皮膚炎患者の多元的な治癒についての論考を取り上げたい。アトピー性皮膚炎は、その病態や発症メカニズムについては、医療においてある程度のコンセンサスがありながら、治療については極めて混乱をきたしている。アトピー性皮膚炎患者の治癒のイメージやゴールに対する態度は、治療方法によって決まるとして、牛山は、大きく分けて三つの治療方法を提示している。一つめのステロイドを用いた標準治療は、炎症を止める即効性はあるものの、長期的な使用は数々の副作用を招くことが知られており、根治ではなく対症療法をめざす。それに対し、ステロイドを使わない治癒を目指す皮膚科医による脱ステロイド療法や民間療法は、ステロイドで症状が良くならなかった者に、脱ステロイドによる治療と治る希望を提供する。そして、この二つの治療法からもこぼれ落ちた者には、アトピー性皮膚炎とともに生きていくことをサポートする患者団体が受け皿となる。このように、一つの病気が多元的な治癒体系を築いているという［牛山 2011］。

以上四つの事例から、当事者たちは、既にある科学的知識を受動的に受け入れるのではなく、それを、積極的に手に入れ、作り上げ、時には、それを無視したり、異なる解決法を求めたりしながら、直面するリスクや不確実性に対処しようとすることが分かる。

では、本章が取り上げたファット・アクセプタンス運動を検討してみよう。すでに述べたように、肥満についての科学的な「事実」に対し異議を唱え、太っていることは不健康ではないと主張する。そのため、保健医療側は、病気のリスクに目を背けていると、かれらを批判する［cf. Ellin 2006］。しかし、かれらの態度は、コーンの事例に出てくる糖尿病患者のような、リスクを無視し、制御を放棄するような「非合理」なものではない。むしろ、ローズや猪瀬、そして、牛山が描くような、生の不安に立ち向かい、制御可能性を手にしようと試みる態度に類似している。しかしながら、それらとファット・アクセプタンス運動が決定的に異なるのは、「（生物学的）事実」に対する態度である。ローズの事例では、科学的医学的知が提示する病気という「生物学的事実」を積極的に受け入れようとする。猪瀬の事例では、放射能対策に対する科学的知が未だ不確定で普遍性を持ちえない状況において、個別の科学的実践が、人びとを結びつけながら、「事実」についての理解を作り上げていく。一方、牛山の事例に登場する人びとは、医学的知が提供する問題解決の枠組みの外側に、解決の可能性と希望を求めようとする。とはいえ、患者は、アトピー性皮膚炎という病気自体は「生物学的事実」として受け入れる。牛山が「異なるセクター同士が時には敵対しながら共存し、全体的に見れば補完的な医療体系を築いている」［牛山 2011: 81］と述べるように、各セクターにいる人びとの個々の実践は、アトピー性皮膚炎の医学的知の体系自体を否定するものではない。

それに対して、ファット・アクセプタンス運動の場合は、医学的疫学的知の体系が提示する肥満をめぐる「生物学的事実」（やそれをめぐる解釈）に異議を申し立てている。より

正確にいうならば、かれらは、肥満に関わる不確実性を統計的・疫学的手法によって飼い慣らすことで作り上げた「生物学的事実」、すなわち、肥満を不健康だと見なす「確定的」な世界、そして、その世界が産出する知に対抗する。そして、太っていることを不健康と見なさない、かれらにとっての正しい〈世界〉の構築と科学的知の産出を目指しながら、自身の生を再構成しようとする。それは、科学が見落とした何かを発見していくことでも、生物医学の外側に希望を見いだす態度とも異なる。さらに付言するならば、不確実性を飼いならし、肥満を不健康だと見なす「確定的」な世界に対し、運動は、それを揺るがし、未来の非決定性を再び導入しようとしていると見ることも出来る。その点で、不確実な状況を制御し、確実性を求めようとする猪瀬の事例とも異なる。

知は、人びとの関心や実践などに適合するように、再構築されうる可能性を持つ。グッドマンは、知の体系が再構築されることを、世界制作という言葉で言い表している。本章では、自らのおかれた状況を自らの手で制御し、確定的な〈世界〉へと変えていくために、新しい知を再構成していくその実践の一端を、〈世界〉制作として説明してきたのだ。

5.2　世界間の関係

では、ファット・アクセプタンス運動が新しい〈世界〉を作っていく過程において、古い世界との関係はどのようなものなのだろうか。トマス・クーンは、科学革命前後の異なるパラダイム間の関係について、共通の評価基準がないため、両者は非連続的なもので通約不可能なものであると考えた［クーン 1971］。しかしながら、ファット・アクセプタンス運動の〈世界〉制作においては、既存の世界から新しい〈世界〉を再構成していくため、その二つの世界の間は非連続的ではなく、なんらかのつながりや関係性があるのだろうか。

グッドマンは、エルギンとの共著のなかで、新しいカテゴリーが、どのようにして使用されるようになるかについて述べている。「時にはある種のカテゴリーを用いた帰納が、真なる前提から偽なる結論へと至ることがある。そうした挙句にこの種の失敗が、それまで用いてきたカテゴリーが間違いで別のカテゴリーを使用すべきではないか、と考える理由となる」という。そして、真なる前提が偽なる結論へと至る積み重ねのなかで、新しいカテゴリーが、成功しているシステム[114]に組み込まれたり、あるいは巧くいっていないシステムに取って代わることがあると述べた［グッドマン／エルギン 2001: 22］。

本章で扱ってきた「肥満」と「ファット」カテゴリーについて考えてみたい。「肥満が病気と関連している」という言明は、医学疫学的知の体系において真であるという意味で、「肥満」カテゴリーが属する医学疫学的知の体系は、唯一正しい知と見なされてきた。ところが、集合に内在するリスクとして産出された知は、個人に起こる出来事の因果連鎖についての説明として、「肥満は病気の原因である」と、「誤って」理解されるようになって

114　『世界制作の方法』のなかでグッドマンが使用する体系という言葉は、『記号主義』においてはシステム（ある領域に適用された図式）と訳されている。注 116 も参照。

きた。ここに、グッドマンらが指摘する、真なる前提から偽なる結論が積み重なっていく過程がある。「肥満者は病気になる」といういくつかの個別事象の因果関係を持って、「肥満は病気の原因である」という結論を下すことは出来ない。こうした帰納を導くアメリカの社会的背景には、太っていることを、自己統制の出来ない怠惰の現れとして嫌悪する価値観や信念が強固にある。「肥満が病気と関連している」というのは統計論によるものであり、「肥満は病気の原因である」というのは、あくまで因果関係の蓋然性であるため、太っている人でも病気にならないケースはたくさんある。

それに対抗する「ファット」カテゴリーが属する新たな〈世界〉の体系は、マクロに見れば、「肥満」カテゴリーのもとで作られる世界の体系と対立する。しかしながら、世界制作とは手持ちの世界を作り直すことであるため、その二つの世界は断絶しているわけではなく、むしろ、前章で述べたように部分的に近接しているといえる。HAES は、リンダ・ベーコンの場合を除けば、通常の科学的手続きにあるような、仮説の正当性を実験によって証明するような展開の仕方ではなく、むしろ、過去の肥満科学の結果を、HAES をサポートする科学的結果として読み替えたり、方法論の問題点を指摘することによって、その正当性を補強してきた［e.g. Gaesser 2002; Burgard 2009］。すなわち、運動の個々の実践を微視的に見るなら、世界制作の工程では、対抗的な事実を作り上げていくというより、むしろ、部分部分で、もう一つの世界の知を流用したり、リフレイミングしたりするのだ。

例えば、バーガードは、仮に、BMI と病気の相関関係が 9%（相関係数を二乗した値）である場合、そのデータを、病気の 91%は BMI と相関関係がないと読み替えることも可能なのだと述べる［Burgard 2009: 43］。

また、マリリンは、彼女のレクチャーやインタビューのなかで、頻繁に、「過体重」の人口の死亡率が最も低いという疫学の調査結果［Flegal et al. 2005］を引き合いに出し、「ファット」は不健康ではないというかれらの主張の根拠の一つとして利用する。すなわち、既存の保健医療のデータは正しくないとして退けるのではなく、状況に応じて流用し新たな解釈を与えて提示する。そのやり方に、筆者は、始めのうちは困惑していた。なぜなら、体重を健康の指標にするべきではないという主張しながら、保健医療のデータを利用するということは、主張の一貫性が保たれないのではないかと思っていたからだ。だが、彼女の「目的ではなく手段」という発言にも現れているように、手持ちの知識や理解を流用し自分たちのものとして読み替えながら〈世界〉の整合性を保とうとする。そして、それが、結果として、対抗的な世界の構築へとつながっていくのだ。

さらに付言するならば、マリリンが、保健医療用語である「過体重」というカテゴリーを流用し「過体重」でも健康であると説明するとき、肥満を不健康だと見なす世界の「正常」の範囲までも拡張しようとしているように見える。なぜなら、「過体重」や「肥満」という用語を使用する場合において、ファット・アクセプタンス運動の〈世界〉は、「正常／異常」の論理的根拠を、肥満を不健康だと見なす世界と共有しているからだ。つまり、健康と定義される「標準」体重の範囲を広げていくという視座を、肥満を不健康だと見なす

世界に、理解可能な形で提示しているのではないだろうか。

こうした態度は、自身の研究結果を科学者コミュニティの中で提示していくことに強い使命感を持つリンダ・ベーコンにも通じる。彼女は、そうすることに、さまざまな軋轢や苦労があることを著書や NAAFA 関連の講演会などで吐露している。その軋轢や苦労とは、例えば、科学者コミュニティのなかで流通している用語（肥満（obesity）など用語）や測定方法（BMI など）を使用しなければならないことへの抵抗感、また、肥満は健康に害悪をもたらすという認識が前提となっている科学者コミュニティの中で、HAES の正当性を証明するための研究のファンディングを得ることの難しさや、調査結果を学会で発表したり、ジャーナルへの論文投稿によって受ける批判などのことである［e.g. Bacon 2008］。そうした批判や反感を買うような風潮においても、彼女は、自身の研究結果が知られるべきであるという強い使命感を持ち、アカデミアにもファット・アクセプタンス運動にも深くコミットしている。

これらを考慮に入れるならば、二つの世界は、マクロに見ると対抗的でありながらも、細部においては否定し合うものではない。むしろ、肥満を不健康だと見なす人びとにとっての理解可能な幅を広げていくことが、すなわち、かれらが〈世界〉を制作していく工程であるのだ。

5.3　世界間の連続性と同一性について

ただし、世界制作の実践が知識の流用による説明やリフレイミングといった工程であるとしても、既存の世界のなかに存在するものと、制作中の〈世界〉に存在するものとが、同一性を持っているとまでは言えない。すなわち、太った身体という同じ対象を、別々の仕方で指示したり表示したりしているというわけではないのだ。世界間の関係を理解するために、ここでは、グッドマンとエルギンの同一性についての議論を理解しておきたい［グッドマン 2008: 28–30; グッドマン／エルギン 2001: 9–11］。

グッドマンは、世界制作は手持ちの世界から出発すると何度も述べているが、その際、使用する言葉やラベルには以下のような特徴がある［エルギン／グッドマン 2001: 9–11］。まず、システム[115]を構成するラベルは、互いに排他的であるとは限らないという特徴がある。例えば、「ゾウ」が属するシステムは「厚皮動物」というラベルを含んでいることもあるが、例えば他の動物の分類システムにも「厚皮動物」というラベルは適用可能である。

あるいは、一つのラベルがいくつものシステムに属し、各々が異なった解釈を割り当てられることがある。例えば、対象を三原色だけで分類するシステムによれば、ある鳥が青いというのは正しいが、藍と青を別々の色とみなすシステムによれば、その鳥は「青」ではなく「藍」というラベルを貼らねばならない。

115　システムとは、ある領域に適用された図式のこと。システムは図式のことである［グッドマン／エルギン 2001: 9］。

さらに、システムは複数の領域[116]と結びつけられるという特徴を持つ。例えば、「高い」「低い」といったラベルを含むシステムは、人間からなる領域、建物の領域、木の領域などに当てはまる。同様に、単一の領域に対して代替可能な幾つもの図式化を施すことが可能である。例えば、本からなる領域を、その要素のサイズというシステム、主題というシステム、知的価値というシステム、金銭的価値というシステムなどで分類することが可能であり、それぞれのシステムは対象を違った集まりとして分類する。

エルギンは、ここまで説明した上で、システムによって解釈が決められるという場合、あたかもそこに対象の同一性があるかのように語ることに注意を喚起する。日没の同一性は、太陽を同一指定しようとしているのか、沈むことを同一指定しようとしているのかによって左右される。すなわち、毎日沈む太陽、夕暮れごとに新たに沈む太陽、というように、領域内の対象を個別化するシステムが異なれば、同じ領域は全く異なった要素から成るのだ［グッドマン／エルギン 2001: 9–11］。むしろここで大事なのは、「同じか、それとも同じではないか」ではなく、「同じとか同じではないとかいうが、同じ何が問題なのか」であるという［グッドマン 2008: 28］[117]。

確かに、「ファット」カテゴリーが属する新たな〈世界〉の体系と、「肥満」カテゴリーのもとで作られる世界の体系は、その間に連続性を見出せそうではあった。しかし、同一性についてのグッドマンの議論は、二つの世界が異なった要素からなるものとして理解するように促す。それぞれの世界では、太った身体を説明するためのシステムが異なるから、同一のものを説明していることにならないのだ。つまり、保健医療用語の「過体重」と運動参加者が使う「ファット」は、「純粋な」太った身体を、別々に言い換えているわけではない。グッドマンの含意をくみ取れば、むしろここで大事なのは、世界間の関係であり、それが引き起こす齟齬やコンフリクトへの理解であろう。

実際、同一ではないとしても、マリリンがオシツオサレツを例に説明したように、われわれは異なる個々の世界（＝システム）を同時に理解することができる。実際、同じ人が、肥満は病気を引き起こすということを理解することも可能であるし、また同時に、太っていることは不健康ではなく、太った身体も多様性の一つなのだという意見に理解を示すこともできる。これをどう考えるべきか。次節では、このことを、文化相対主義とグッドマンの「徹底した相対主義」［グッドマン 2008: 172］の違いを検討することによって理解したいと考えている。

116　領域とは、システムが分類した諸対象のこと［グッドマン／エルギン 2001: 9］。

117　グッドマンは、「単に「これはあれと同じなのか」という問いへの答えが、問題の「これ」や「あれ」が事物、出来事、色、種等のいずれを指示するのか、という点によること」であると述べている［グッドマン 2008: 51］。つまり、対象の分類の問題というより、特定や指示の問題であると言っているのではないだろうか。

6.　「徹底した相対主義」:「リスク社会」とファット・アクセプタンス運動の世界

6.1　部分的に通約（不）可能な存在として生きること

オーストラリアの多文化主義について論じてきた人類学者エリザベス・ポヴィネリは、近年の民族誌は、サンパウロの先住民アクティビスト、ジャカルタのクイア・アクティビストなど「ラディカルな他者」による、通約不可能な「ラディカルな世界」の出現に注目しつつあると述べる。そして、倫理的にも認識論的にも異なる通約不可能な世界たちが、どのように通約可能なものとして想像され得るのかと問う［Povinelli 2001］。

この問いに対し、人類学者トム・ベルストーフは、インドネシアのムスリムの「ゲイ」の存在を事例に、一つの回答を示している。彼は、まず、ムスリムであり、かつ、「ゲイ」であるインドネシアの人びとは、宗教と性的欲望の関係をどのように理解しているのかと問う。なぜこのような問いを設定するのかというと、インドネシアでは、ムスリムの「ゲイ」は、同性同士の性愛として道徳的な批判の対象になるというより、むしろ、性的自己のあり方として全く理解不可能なものだとされているからだ。ゆえに、それについて語られることも滅多にない。つまり、ムスリムの「ゲイ」のインドネシア人と、異性愛者のムスリムのインドネシア人の間には、セクシュアリティの経験の仕方について根源的な通約不可能性が存在すると指摘する［Boellstorff 2005: 575］。そのような社会で、ムスリムの「ゲイ」であることを、彼らはどのように理解しているのだろうか問うのだ。

その問いに対し、ベルストーフは、ムスリムの「ゲイ」は、通約不可能性を解消しようとするのではなく、生きている（inhabiting）のだと表現する。その生き方は、まるでダビングと同じだと述べる。日本映画を英語にダビングする際、俳優の口の動きまでを英語に合わせることは出来ないように、一つの言語を他の言語へと完璧に翻訳することは不可能である。しかしながら、この唇の動きと音声のズレという「不具合」は、映画の視聴者には前提とされている。それと同様に、ムスリムと「ゲイ」というカテゴリーを同時に生きることは、その本人が、解消されない不完全さ受け入れて生きることであると説明する［Boellstorff 2005: 582–583］。

カテゴリーを同時に生きるということは解消されない不完全さ受け入れることである。この指摘は、ファット・アクセプタンス運動の人びとの生き方を説明する上で重要である。本論で何度も述べてきたように、ファットは、現在までに、人種、ジェンダーなどのマイノリティのように、通約不可能性を克服すべき対象としてとして扱われてこなかった。

肥満であることが不健康で醜いと見なされるアメリカ社会の、家族、学校、仕事場で、かれらは生きていかなければならない。ヘレンが、大会はバッテリーの充電場所だと比喩的に言ったように、〈世界〉に閉じこもったままでいることは出来ず、〈世界〉の外に出ていかなければならないのだ。すなわち、「ファット」と「肥満」という二つのカテゴリーを、どちらも生きていかざるをえないという葛藤を常に抱える。葛藤は、「ファット」を市民権

として訴えながら、減量を試みるという矛盾した態度として現れることもあるだろう。主張が正しく理解されないことへの不満が、怒りやいらだちとなって現れることもある。解消されない不完全さを生きていくということは、人びとの一義的な理解を拒むような、部分的に通約（不）可能な存在として生きなければならないということなのではないだろうか。

6.2　あらゆる視点から離れた世界はない

「肥満」カテゴリーが属する科学的な知の体系は、その知の体系やそれを支配する習慣を全く疑わない「リスク社会」に生きる人びとにとっては、一つの世界として完結している。一方で、ファット・アクセプタンス運動の人びとにとっては、それは、新しく作りかえられるべき体系なのである。グッドマンはそのことを、「われわれはどんな場合でも、ありあわせの、何か古いヴァージョンや世界から出発するのであって、それを新しい世界に作り変える決意を固め、そうする伎倆をもつまではそれにしがみついている」［グッドマン 2008: 176］と表現する。

世界制作には、常に、その体系を作る人の視点がある。換言するならば、ある対象は、それを見るもの（たち）の概念化を逃れることはできない。そもそも、私たちが記述する方法に縛られている以上、あらゆる視点（frame of reference）から離れて世界はどのようになっているかと問うことは不可能であるからだ［グッドマン 2008: 20］。このことを、グッドマンの翻訳者である菅野盾樹は以下のように解説する。すなわち、「概念化を逃れた、その意味で「純粋な」知識の層を探しても無駄だろう。なぜなら、ある知識をどれほど深く穿っても、発見されるのは常に言語や記号に担われた別の知識にすぎないから。きわめて雑然とした感覚、たとえば白っぽい斑点の感覚さえ、具体的な文脈でそのようなものとして把まれた経験の断片に他ならない。ここには概念作用（あるいはなんらかの記号機能）がすでに発動している」［菅野 2008: 280］。

ここから導き出されることは、「異なる文化に住む人びとは、文化固有の象徴と意味の体系を通して、それぞれに異なる仕方で世界を認識しており、その文化的価値に優劣はない」とする文化相対主義は、グッドマンの「徹底した相対主義」とは決定的に違うということだ。倫理的態度としての前者は、文化的な価値の優劣を下す視点が入り込んでしまうことを隠蔽するが、後者はそもそも視点がなければ世界は存在しないという立場をとる。

別の世界を見るということは、すでに得た知識の体系を、別のカテゴリーへも適応することなのである。グッドマンらは以下のように言う。すなわち、「ある記号システムに習熟するとき、私たちは、個々の作品をそのシステムの記号として解釈する能力、および他の事物をそのシステムが提供するカテゴリーによって解釈かつ再解釈する能力を獲得する。したがって、立体派のシステムに習熟することには、単に立体派の作品を理解するすべを知ることだけが含まれるわけではない。それには、立体派のシステムのカテゴリーを他へも適用するすべ〈中略〉を知っていることも含まれている」［グッドマン／エルギン 2001:

28]。

つまり、肥満を排除すべき状態だと捉える人たちにとっても、ファット・アクセプタンス運動による制作中の世界を一定程度理解することは可能である。人口の６割が「過体重／肥満」とされるアメリカでは、太っていることは何も珍しいことではない。特に、公民権運動を経たアメリカでは、太っている者への差別は外見に対する差別として倫理的問題を孕むこと。また、無理なダイエットを繰り返すことによって、リバウンドや摂食障害などの健康を害す可能性があるということ。これらについては徐々にアメリカでも理解が広まりつつある。こうした観点からすると、かれらの〈世界〉は、とりわけ、通約不可能な「ラディカルな世界」とも言えない。

しかしながら、運動参加者が、太っていることを積極的肯定的に捉え「ファット」として声を上げるのであれば、話は別である。ファット・アクセプタンス運動の運動参加者は、〈世界〉を整合性と妥当性をもったものとして成り立たせようと努める。しかし、その取り組みは、既存の世界の住人にとっては「常識的」に考えて「間違っている」のだ。ましてや、痩身が健康的で美しいとされる社会で、断固として痩せようとしないかれらの態度は、運動を傍から眺める者にとっては融通の利かない奇妙な態度として映る。

ファット・アクセプタンス運動の〈世界〉を、既存の世界から眺めるということは、すでに記号や記号に担われた知識を使って、〈世界〉を見るということに他ならない。社会のマジョリティの人からすれば、ファット・アクセプタンス運動は、かれらの理解を拒むような「訳のわからない」実践としてうつるであろう。他者の世界の「訳のわからなさ」を、健康の形態のひとつのあり方として、真に深く受け止めて理解するためには、個々の社会の成員が多様な知識を得て、受け入れ可能で選択可能な世界を数多く作っていくしかない。知ることこそが、世界制作なのであるから。そして、最後に付け加えておきたいのは、世界を制作するということは、ファット・アクセプタンス運動の人びとにとっては、たとえ不確実な状況にあっても、なお、新しい知を再構成していこうとする積極的な態度なのだと筆者は考えている。

終章

1.　「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用

1.1　事実と価値

新しい概念を通して、人びとは、経験の新たな理解の機会に開かれる。そして、そのような機会を得た人びとは、自己認識や世界に対する態度を変える可能性にも開かれる。さらに、そのことが、概念の再形成に影響を与えうる。本論の全ての章を通して描いてきたのは、現代アメリカ社会において、人びとを分類する「新しい」カテゴリー（概念）になりつつある「ファット／肥満」が、どのように形成され、また、それがどのように人びとの行為や経験の理解の仕方に影響を与えるのか、こうした概念と人間存在の相互作用についてであった。

筆者は、序章の冒頭で、肥満の調査を開始して以来、調査対象の人びとと距離の取り方に葛藤し始めたことを説明した。なぜ、距離の取り方に苦心したのだろうか。フィールドワークを終えた今なら、その理由を言語化して述べることができる。それは、以下の点で、筆者にぎこちなさをもたらした。すなわち、「問題状態にある人びと」とフィールドにおいて、顔を合わせ、ラポールを築こうと努力することの直感的な気まずさである。肥満を「問題状態」として恣意的に選択している時点で、肥満という概念は、既に事実と価値が一緒くたになっている。そして、研究者である筆者は概念に埋め込まれた価値を評価することに少なからず加担する。それにもかかわらず、そのことに気づかないふりをしていたからである。対象との距離の取り方に感じていた葛藤の正体は、「肥満」や「過体重」と定義された太った人びとを、人間の問題状態として恣意的に選択し記述するということへの漠然とした気づきであった。

対象に価値評価をくだすことから逃れ得ないという気づきに対して、筆者は、人びとの有り様を説明するための分析概念を相対化する必要があると考えた。どのような概念が、どのように用いられ、それによって人びとの経験がいかに組織化されていくのか、具体的な実践にそくしたプロセスを描写・分析していく必要があったのだ。本論を終えるにあたって、本章では、各章を振り返りながら、何を述べることができたか、そして、これからのファット・アクセプタンス運動の将来について何が言えるのかという点をまとめていくことにする。

1.2　「リスク社会」における「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用

本論の問題関心は、大きく二つあった。一つめに、現代アメリカ社会において、「ファット／肥満」概念と人間存在の間の相互作用のプロセスを描くことである。具体的には、「肥満」や「過体重」というカテゴリーを用いて人びとを分類する制度や知の体系が、分類される人びとに影響を与え、さらに、再び、分類する制度や知の体系や人びとに作用し変化を促していくような動きを、概念と人間存在の間の相互作用として説明してきた。

二つ目は、現代アメリカの肥満をめぐる制度や言説や人びとの実践を「リスク社会」という時代診断に文脈付けた上で、「ファット／肥満」という新たな主体の形成やそれらの人びとが形成する社会関係を論じることであった。「リスク社会」という分析枠組みを挿入することのメリットは、特に、ファット・アクセプタンス運動という社会運動の特質がより明確になったことにある。すなわち、ファット・アクセプタンス運動を、単に、既存のアイデンティティ・ポリティクスであると結論付けることも、「リスク社会」に特徴的な社会運動であると結論付けることもせず、運動の特質に即した理解が可能になった。第二部のメインテーマである「ファット」は、ファット・アクセプタンス運動によって、病気のリスクとしての「肥満」概念のオルタナティブとして提示されてきた概念である。したがって、ファット・アクセプタンス運動の理解は、リスクという概念や「リスク社会」の理解なしには不可能であったといえる。

その意味では、序章から第一部は、第二部のファット・アクセプタンス運動を論じるための背景的な説明であったといえる。すなわち、序章から第一部で、アメリカの肥満問題の様相を「リスク社会」という社会背景のなかで理解することによって、「リスク社会」の特徴や矛盾を浮かび上がらせた。第二部では、「リスク社会」がもたらす矛盾したロジックや状況が、ファット・アクセプタンス運動の活発化を促していると理解することが可能になったといえる。その上で、ファット・カテゴリーによって誰が動員されるのか、運動を通して形成されるような「場」と共同性を成り立たせるものが何であるのか、などの問いを検討してきた。

第一部：「肥満」

第 1 章と第 2 章を含む第一部では、確率統計学の技術によって「肥満」「過体重」などのカテゴリーが作られ、それが具体的な個々の人びとにどのように当てはめられていくのかということについて論じた。ここで重要なキーワードとなったのが、将来において不利益を被る可能性を、確率統計の技術を通して数値化・可視化したリスクという概念であった。リスクをめぐる問題が厄介であるのは、それが問題として見出される際には、巧妙な仕組みによって成り立つからだ。すなわち、集合的な事象のなかに潜む危険性を過去のデータから統計的に導き出し、そのデータを未来の生起確率として読み替えた上で、さらに、その集合に属する個人の過失や責任として転嫁し理解する。つまり、リスクが我々の問題として認識されるには、ある集合の過去のデータから、将来、個人に生じる発生確率へと読み替えていくトリッキーなプロセスが必要なのだ。

第 1 章では、肥満のリスクが新たに見つけ出され、いかにして個人が引き受ける問題として読み替えられていくのかという問題、すなわち、リスクの個人化について論じた。

BMI の小史で明らかにしたように、肥満が病気のリスク要因となる不健康な状態として見出される過程は、まさに統計的な知が駆使された歴史であった。すなわち、その過程では、BMI の数値が実際の体脂肪率と相関することや、体脂肪率の高さが 2 型糖尿病や高血圧、心疾患、がんなどの病気と関係することが統計的に次第に明らかにされていったのだ。しかし、肥満がいくつかの病気と関連性があるとはいえ、ここにあるのはあくまでも相関性であって、必然的で確定的な関係ではない。当然ながら、太っている人が皆病気になるわけではない。そのため、肥満カテゴリーに分類される人を、意思決定者「肥満者」として作りあげるためには、ある種の思考の仕掛けが必要になる。本論では、それを累積的リスクという概念を使って説明した。つまり、ミクロな決断（食事の一口一口など）の膨大な集まりを、現実には存在しない「肥満になる意志決定」をくだしたと読み替えることによって、意志決定者としての「肥満者」が作られるのだ。

序章で論じたように、「リスク社会」といわれる現代社会では、不確実性は常態となりつつある。その一方で、「リスク社会」では、リスクに対する決定を責任に引きつけて考えるため、未来に対する不利益がある決定者に帰責される際には、そこに決定論的な思考が持ち込まれる。そのため、「リスク社会」では、不確実性と決定論のあいだにますます齟齬が生じつつある。この齟齬は、序章で提起した「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」を両立することの矛盾でもある。そして、意思決定者「肥満者」は、不確実性と決定論的な思考の間のこうした齟齬の克服に努めなければならない。第 1 章で導かれたこの結論は、新たな知の体系を再構築しようとする人びとの出現を論じる第 6 章の布石となる。

ハッキングは、分類されることによって、人びとは個人的自己意識や集団的な自己意識を形成し、そのことがかれらの行為にも影響を与えるようになると述べるが［ハッキング 2012: 72］、彼は、分類されたとしても、個人的自己意識や集団的な自己意識を形成しない人びとの存在については述べていない。

第 2 章では、貧困者層における肥満問題を事例に、この問いを検討した。すなわち、貧困の肥満化をめぐる状況を、貧困層に対する政府の支援システムの仕組みや現場の実践から多角的に捉え、貧困者層の肥満問題がどのように構成されているのかを理解した上で、貧困者層の人びとが、肥満のリスクを引き受ける主体として、いかに自己意識を形成するのか、あるいはしないのかということを考察した。そのために、低所得者層向けの福祉制度の一つである食料支援制度を中心に「貧困者層の肥満問題」をできる限り多角的に描いた。

描写から明らかになったのは、農務省、現場の栄養士、公衆衛生で働く人びと、制度を利用する低所得者の人びとなど、それぞれのアクターが、個々の目的を達成するために組織され、任務を遂行する。そうした布置において「貧困者層の肥満問題」は構成されているということだった。さらに、昨今の肥満予防に対する介入方法は、「肥満の原因となる環

境」の改善に重点を置くため、自身が「肥満者」であるという個人的集合的な意識の形成は、不要なプロセスとなってしまう。こうした理由から、貧困者層に対する肥満予防対策という枠組みにおいては、肥満のリスクに対する責任の引き受け手が存在しないのではないだろうかという結論を導き出した。肥満をリスク化し、体型を気にし、リスクコンシャスになっているのは、むしろ、「知識のある」人びとのほうなのではないだろうかという問いを残し、第二部へと移る。

第二部：「ファット」

第二部では、主に、ファット・アクセプタンス運動という肥満差別の廃絶と太った人びとの市民権を訴える社会運動を対象に、「肥満」や「過体重」といったカテゴリーで分類される人びとが、「ファット」として自らを認識し、制度を作り変えていこうとする有り様を示した。この意味で、確かに、ファット・アクセプタンス運動は、ハッキングが示した同性愛の事例、すなわち、精神医学によって同性愛と分類された人びとが、ゲイ解放運動によって専門家や制度からの支配を奪取した歴史的事例と重なる部分も多い［Hacking 2007: 311］。そしてまた、公民権運動やフェミニズム、障害者運動、ゲイ解放運動などのマイノリティのアイデンティティ・ポリティクスと同様、ファット・アクセプタンス運動を、マイノリティの承認を求めて政治的目的の達成やオルタナティブな価値観の構築を目指す社会運動としても理解できる。肥満差別も、見かけによるステレオタイプの付与が差別に結びつくという点で、人種差別、性差別、障害者差別などと類似する点が多くある。しかしながら、アメリカでは、これまで肥満差別をそれらの差別問題と同列に論じる風潮はなかった。そしてまた、ファット・アクセプタンス運動が、マイノリティのアイデンティティ・ポリティクスとして積極的に論じられることもなかった。なぜなら、アイデンティティ・ポリティクスの特徴から逸脱する要素がたくさんあったからだ。

そのことに注目した第 3 章では、アメリカ合衆国で誕生したファット・アクセプタンス運動の現在までの展開を追うことによって、市民権として提起されるファット・カテゴリーが、これまで社会運動で論じられてきた女や障害というカテゴリーが持つ特性と、部分的にであれ、何が共通し、何が共通しないのかについて明らかにした。

ファット・アクセプタンス運動は、1970 年代にフェミニズム運動と、1980 年代から 90 年代には障害者運動との連携を求め、運動の展開を目指した。しかしながら、1970 年代のフェミニズムとの連携においては、太った女性たちは、連帯を組む仲間としても性的対象としても、第二波フェミニズムのなかで排除されてきた。なぜなら、太っていることに対する自己肯定感の乏しさに加え、フェミニズム内部の太った女性に対する理解とサポートが欠如していたからだ。また、1980 年代の「障害」との連携は、法的主体として「ファット」を擁護する必要性から出てきたが、太った身体を障害として捉えることを多くの運動参加者たちは嫌がった。

以上の歴史的経緯を踏まえ、以下の考察を加えた。すなわち、アメリカの反差別法は、

「公民権法」と「障害をもつアメリカ人法」のどちらか一つの法律の適用によってマイノリティが保護されることを想定しており、そこから逸脱する特性を持つファットは、マイノリティとして保護されない。このことが運動の困難を招いていると考えられる。すなわち、人種、皮膚の色、宗教、性または出身国に基づく雇用差別を禁止する「公民権法」と、障害をもつ人びとに対する差別を禁じた「障害をもつアメリカ人法」という二つのアメリカの反差別法は、人間観が全く異なり、両立し得ない。個別性が重視される「公民権法」では、外見は人間の能力に関係ないとされる。他方で、身体的な差異を前提とする「障害をもつアメリカ人法」では、障害をもつ人の外見と能力が無関係だとはみなさない。身体サイズをどちらかの法律で保護しようとしても、そこに回収できない特異性が浮かび上がってくるのだ。ファットがアメリカの反差別法によって保護されるためには、「公民権法」が想定する個人観と「障害をもつアメリカ人法」が想定する個人観を両立させなければならない。つまり、太った状態を医学的状態とみなさずに、なおかつ、個々人の身体の多様性に対応した平等な社会的待遇の権利を保護できるような反差別法が必要なのである。

以上の考察から導き出されたのが、ファット・カテゴリーは複数の差異カテゴリーを内包しているということだ。ゆえに、ファット・アクセプタンス運動は、アイデンティティを一つのカテゴリーに還元するアイデンティティ・ポリティクスとしては理解しづらい面を持っている。つまり、ファットは誰のことであり、ファットとは何であるかについて提示していく運動のプロセスで、どのような「他者」を措定し、その「他者」に対しどのように自己を構築していくか困難を抱えるのだ。

法律の問題は別にして、ファット・アクセプタンス運動に参加する人びとの多くが、アイデンティティとして親和性を感じているのは、障害よりも、女というカテゴリーである。女であるがゆえに、ファットと感じることが圧倒的に多いのだ。ファット・アクセプタンス運動の参加者の多くが白人女性であるためということも、その事実を物語っているだろう。そのため、多くの運動参加者は、ファットとしての自己理解を、女であることや、フェミニズムの枠組みにおいて模索しようとしてきた。ところが、ファット・アクセプタンス運動とフェミニズムという二つの運動の見かけ上の親和性は、逆に、多くの場合、軋轢や不和を生み出す元凶ともなってきた。なぜなら、フェミニズムでは、太った女性に対する偏見や差別が存在していることについて見過ごしてきたからだ。

そこで第4章では、ファットであることは同時に女でもあるという事実が、ファット・アクセプタンス運動の参加者に、具体的にどのような軋轢をもたらすのか。ファットとしての自らの経験や行為を、フェミニズムの枠組みの中で理解することが、ファット・アクセプタンス運動に参加する人びとに、どのような葛藤や対立を起こすのか。そして、その軋轢の場では、どのような自己が立ち現れてくるのか。これらの問いについて考察した。

女であることと、ファットであることは、当事者にとって完璧に切り分けられるものではない。それがゆえに、ファットである経験やファットであることの苦しみを理解するために、女やフェミニズムの枠組が働くとき、その理解を一層困難にする。なぜなら、そも

そもにおいてファット・アクセプタンス運動とフェミニズムは政治的理念や他者観が全く異なるからだ。

男という「他者」を掲げるフェミニズムと異なり、ファット・アクセプタンス運動にとっての他者は、女であり、男であり、太った身体を嫌悪する現実の他者、すなわち、ファットを苦しめる相手でありながらも、それでもなお、コミュニケーションを通して関係を作っていく相手である。そして、ファットという自己自体も、他者とのコミュニケーションを通して立ち現れるものなのだ。だからこそ、ファット・カテゴリーが、誰を指し、どういう意味を持つのか、その外延は不明瞭なものとしてある。にもかかわらず、フェミニズムという枠組みから「特権的に」ファットを理解することによって、「ファットである」自己理解に阻害的に働いたり、自己規定に困難を抱えたりするようになるのだ。

にもかかわらず、なぜファット・アクセプタンス運動に参加する人びとは、外延が不明瞭なものとしてのファットを指向／志向し、集うのか。かれらは、どのようにファットを概念化し、学び、理解しているのか。第 5 章では、これらの問いに答えるために、集団化の根拠に、集合的アイデンティティや政治的アイデンティティを前提とするのではなく、運動参加者が集う場では、どのような関係性が結ばれ、その関係性のなかでファット・カテゴリーはどのように概念化され、そこにどのような共同性が生成するのかを知る必要があった。そのために、ファット・アクセプタンス運動の目的と成果を合理的に判断するのではなく、人びとを結びつける情動的関係性に注目した。

運動参加者同士、そして、筆者とのミクロなインタラクションの場を詳細に描写することによって明らかになったのは、ファット・アクセプタンス運動の人びとの集まりの場において、ファットとは、参加を通して得られる学びの対象となる知識であるということだった。学びの場では、太っていることに対する否定的な意味付けや価値規範を少なからず持っている参加者もいる。それでも、ファットであることを語り合い、ファットである他者を配慮することによって、気まずさや違和感を伴いながらも、それを冗談や笑いに転換していくような情緒的なコミュニケーションが生み出されていた。そのような情動的な関係性を求めて人びとは集う。そしてまた、人びとが集うことによって、運動が持続する力も生成していくだろう。そのような場に生まれる共同性は、規範や価値観をずらしたり、新しく作り変えたりする可能性を志向する共同性といえる。そして、肥満差別で苦しむ運動参加者が、運動を展開していくための力となりえるだろう。さらなる運動の展開のためには、かれらの運動の根拠や目的を外部社会に知らせていく必要がある。

そのことを論じた第二部最終章である第 6 章は、本論のなかでも極めて重要な章である。なぜなら、第一部で描写説明したアメリカの肥満問題や「リスク社会」の特徴や矛盾が、ファット・アクセプタンス運動を結節点として描かれるからだ。第 5 章までは、ファット・アクセプタンス運動を、マイノリティによる既存のアイデンティティ・ポリティクスの枠組みのもとに理解を得ようとしてきた。それに対し、第 6 章では、ファット・アクセプタンス運動を、制度や科学による肥満のリスク化によって促された、新たな市民権を求める

社会運動であり、「リスク社会」に特徴的な不確実性に直面する人びとの生の技法であるとして理解することを目指した。この枠組みを通じて明らかになったのは、アクティビストや研究者たちが、リスク管理を志向する制度や専門家による支配に対抗しようと、科学的知の体系や制度へ働きかけていく様子であった。この意味で、第 6 章は、概念と人間存在の相互作用を論じる上でもきわめて重要な章であった。

分析にあたって依拠したのは、哲学者ネルソン・グッドマンの世界制作論である。ファット・アクセプタンス運動の参加者が、「肥満」カテゴリーが属する医学的・疫学的な知の体系に対抗し、「ファット」カテゴリーが属する新たな知の体系を再構築していく様子を、〈世界〉の制作として描写した。その上で、「肥満」カテゴリーが属する既存の世界と「ファット」カテゴリーが属する制作中の〈世界〉という二つの世界の関係について検討した。そこで明らかになったのは、肥満を不健康だとする世界と太っていることを不健康だとみなさないかれらの〈世界〉は、対抗的で隔絶した二つの世界のように見えて、むしろ、近接しているのではないかということであった。なぜなら、〈世界〉は、既存の「肥満」概念やそれらにかかわる科学的知識に依拠しながら構成されていくからだ。そのため、マクロに見ると対抗的なこの二つの世界は、細部においては否定し合うものではない。むしろ、既存の世界の理解可能な幅を広げていくことが、すなわち、かれらが〈世界〉を制作していく工程であるということだ。

とはいえ、あらゆる視点から離れた世界はないとするグッドマンの「徹底した相対主義」から導き出されることであるが、「リスク社会」という時代診断に特徴付けられるアメリカ社会では、運動が提示する健康の形態や、多様な身体のあり方が、真の理解を得ることは現段階では難しい。そのため、ファット・アクセプタンス運動の参加者は、肥満を悪とする社会の中で不完全さを抱えて生きていかなければならない。それでも、筆者が、ファット・アクセプタンス運動を世界制作の実践として描きたかった理由は、運動の将来が予測もつかない不確実な状況にあっても、なお、新しい知を再構成していこうとする態度を積極的な態度として位置付けたかったからである。

1.3　論じきれなかった点

本論は、ある意味で、フェミニズム、ゲイ／レズビアンやトランスジェンダー、障害のアイデンティティ・ポリティクス、リスクに抗する人びとの社会運動論などの分析枠組みで、「ファット／肥満」をフレイミングしてきたのだといえる。もちろん、人びとが使っている概念を使って分析する、というのが概念と人間存在の相互作用を論じる際のモットーではあるが、分析枠組みの選定にはある程度の恣意性も入ってくるため、除外されてしまった課題もあるだろう。

特に、本論では、概念と人間の相互作用が生み出す変化に注目したために、社会運動が主要な分析の対象となった。そのため、肥満を病気のリスクと捉え健康増進に励む多くの人びとや、太った身体を嫌悪しダイエットに励む人たちによって支えられている「ファッ

ト／肥満」概念は、分析の対象に入れなかった[118]。こうした不足している点については、今後、分析の対象やスコープを広げながら、一つ一つ検討していくことが必要とされる。

時間的制限によって論じきれなかった課題も第 6 章を中心にいくつかある。一つめとして、第 6 章でグッドマンを利用してファット・アクセプタンス運動の人びとの〈世界〉制作を描写するにあたり、分析の中心が、かれらの科学を中心とした言語的表現に偏ってしまった点である。グッドマン議論の真骨頂である、日常的知覚、言語的表現、音楽、表情、身振りなどの記号体系を分析の対象に取り入れることができなかった。本来ならば、ファット・アクセプタンス運動の人びとによる芸術作品、ダンスや演劇、開催されるイベント、雑誌などの媒体なども分析の対象に入れ、かれらが〈世界〉をどのように拡張しようとしているのかを論じるべきであったと考える。

もう一点は、ファット・アクセプタンス運動内部における意見の亀裂が、世界制作にどのような影響をもたらしているのかということは明確にできなかったということだ。世界と世界の対抗的な関係を主題として書いたため、世界内部の亀裂が制作のプロセスにどうつながるのかについては論じきれなかった。これらの点は今後の課題として残しておきたい。

2. ファット・アクセプタンス運動の現在とその将来

2012 年 1 月 28 日、筆者は、サンホゼ市の LGBT センターで開催された、身体をポジティブに捉えること（ボディ・ポジティブ）を理念とした「ファッティ・アフェア（Fatty Affair）」というイベントに参加した。このイベントでは、NAAFA メンバー以外にも、ベイエリア近郊に住むたくさんのファット・アクティビストたちが集まり、ダンスやスピーチやファッション・ショーが行われた。

イベントの主催者のサラによる「私はファット、私は女、私は自由（I am fat, I am a woman, I am free）」というかけ声と共に歓声があがり、イベントが始まった（【図 7-1】）（主催者のサラは、この時はまだ NAAFA のメンバーではなかった。同年の NAAFA の大会に参加してメンバーになっている）。イベントの目玉の一つとして、プラスサイズの洋服のスワッピング大会が行われた（【図 7-2】）。大きなサイズの洋服は、市場にあまり出回っていない上に、売られていたとしても「かわいくない」ことが多いという。そのため、こうしたイベントでは、度々、自分が着なくなった洋服を持ってきて交換し合うスワッピング大会が行われる。あるいは、サラのように自分で既製品をリメイクしたり、布を買って裁縫して好みのドレスを作ったりする人たちもいる。運動参加者たちは、差別の廃絶と市民権の承認を求めるという政治的な目的の達成を目指すと同時に、ファッションやダンスなどによる身体のプレゼンテーション方法にも気を配る。

118　減量グループや減量のためのクリニックでも調査を行ったが、本論では論じなかった。

【図 7-1：ファッティ・アフェア主催者のサラ】彼女は気に入った既製の服を、彼女の体型に合わせてリメイクする。写真で彼女が着ている水玉のドレスは特にお気に入りのもので、彼女は「夢のドレス」と名付けている。サラの後ろのカーテンは、LGBT 運動を象徴するレインボー・カラーだ（Sarah Redman 写真提供）。

【図 7-2：「ファッティ・アフェア」の洋服のスワッピング大会】参加者が持ってきた洋服。サイズ 14 から 36++の洋服が 4 つのセグメントに分けて置かれている。隣にはフィッティングルームも設置されている。各々は、気に入った服を持って帰る（2012 年 1 月 28 日筆者撮影）。

第 3 章で、ファットは複数の差異に貫かれたカテゴリーであると結論付けたように、ファット・アクセプタンス運動は、特に近年、LGBT 運動やクイア・カルチャーなどの「サブカルチャー」との結びつきが見られ、新たな運動の土壌が生まれつつあるともいえる[119]。「ファッティ・アフェア」のイベントもその一つといえよう。

その一方で、ファット・アクセプタンス運動の未来がそれほど希望に満ちあふれたものではないことを予期させるような出来事もいくつかある。ここでは、二つ紹介しておきたい。一つは、運動をめぐる環境の変化である。2014 年後半、バークレー市で肥満予防のためにソーダ税[120]が 2015 年から導入されることが決まった。ソーダ税の導入は、これまでもニューヨーク市などで検討されていたが、業界からの反発が多く実施は見送られていた。健康志向の強いとされるバークレー市では賛成 76.17%で可決したのだった。一方で、バークレー市での投票日と同日、飲料 1 オンスあたり 2 セントの課税する法案が提出されたサンフランシスコでは、賛成が 3 分の 2 に満たず法案は通過しなかった。マリリンらは、投

119　2012 年の NAAFA の大会参加の際には、「クイア・ファットだ」と自認する参加者と出会った。

120　砂糖で甘くした清涼飲料の購入時に、飲料 1 オンス（約 29.5ml）あたり 1 セントの税が課されることになる。350ml 缶では、12 セントの値上げになる。

票前に、太った人を貶め、体重差別をもたらすようなキャンペーンを公衆衛生が主導するべきではないという内容の嘆願書を両市のソーダ税法案支持者に送っている。しかし、ファット・アクセプタンス運動の本拠地ともいえるベイエリアのバークレー市が、皮肉にも、全米初のソーダ税の導入によって肥満予防に力を入れることになってしまった。

もう一つ言及しておきたい出来事は、運動内部の変化である。2013 年 5 月、NAAFA は、名前を変更することを検討していると発表した。明言はされていないが、その発表は、組織名から「ファット」を取り除くことを念頭に置いているという趣旨のものだった。その理由として、「ファット」という言葉が持つネガティブなイメージによって、NAAFA に対して非常に侮辱的で不快なコメントがなされたり、企業や他の組織からの理解やサポートが得にくい、というものが挙げられている[121]。

「ファット」を組織名から取り除くという NAAFA の意図は、ファット・アクセプタンス運動を、一般の理解を得られる運動として提示するための苦渋の決断であろう。「ファット」という言葉が、ポジティブな含意を持つ言葉として浸透しない現状を考えるなら、それが、運動の展開を阻害している大きな一つの要因だという考えに至るのは不思議ではない。しかし筆者は、この知らせを聞いたときに、ファット・アクセプタンス運動の人びとはこのことを反対するだろうと、直感的に感じた。そして、やはり多くのメンバーが反対を表明していた。マリリンが独自で行ったメンバーを対象にした調査「NAAFA は、名前から「ファット」を取り除き、組織名を変更すべきか？」では、回答者 782 名のうち 92.3% の 722 名が、これに反対していると回答している。マリリン自身、筆者とのメールのやりとりのなかで、エンパワメントのカテゴリーとして「ファット」は必要なのだと、NAAFA の考えに強く拒絶を示した（2013 年 7 月 30 日メールのやりとりにて）。そして、結局この案は今のところ、立ち消え状態になっているようだ。

メンバーの反対表明からうかがえるのは、ファットが自己の桎梏となる概念であっても、それが運動の名前から取り除かれるならば、かれらの運動の根拠、すなわち、世界制作のための根拠まで失われてしまう可能性があるということに危機感が持たれているということだ。運動が今後どのように変化・進展していくかは誰にもわからない。マリリンが、運動の目指す終着点がクリアに見えたりぼやけたりすると言ったように、制作中の〈世界〉は、常に、不安定で不確実である。希望と同時に、焦りや怒りに満ちあふれている。なぜなら、多くの人にとって確かに正しいと信じられている世界を、自ら揺さぶり、別の「正しさ」を備えた世界を立ち上げる現在進行中の過程にあるからだ。

3. ファット・アクセプタンス運動を通して見える「多様性」のあり方

アメリカでは、人種、ジェンダーや障害などは、既に、法や科学やアカデミアなどの知

121 「Evolving」『*NAAFA Newsletter*』2013 年 5 月。

のシステムのなかで、一つの学問として成立し、法体系の中で保護されている。ファットは、それらとは異なり、そうした啓蒙的合理的な知のシステムからは排除されてきた。肥満差別や体重差別に対する反差別法は成立していないし、また、肥満が不健康な状態であることは科学や保健医療の制度によって正当化されている。

もし仮に、近い将来、ファット・アクセプタンス運動が政治的目的を達成し、体重やサイズを反差別法の保護カテゴリーとして法制化できたとしたら、あるいは、体重は健康の指標にはならないことが科学的に証明されたとしたなら、それでかれらが抱える問題は収束するだろうか。筆者はそうは思えない。科学的知識や法制度などの形式的な知識によっては拭えない、太った身体に対する嫌悪感や侮蔑の感情、美醜の感覚や価値観にかかわることがそれを阻むだろう。

もちろん、美的価値観が知識と対立する事例は、障害や人種などのマイノリティの人びとにもつきまとう問題であるだろうから、太った人びとだけを特別視する必要はないのかもしれない。しかしながら、それでも、ファットが他のマイノリティ・カテゴリーと異なると思われる点は、特定の人びとの問題でありながら、みんなの問題でもあるということだ。だからこそ、ファット・カテゴリーは複数の差異を抱えることになってきたのだ。

差別や抑圧を受ける人びとが、差別の廃絶を訴え、自分が生きやすい社会を実現するために多様性を訴えるとき、かれらが集団化するためのカテゴリーが必要になる。しかしここで常に問題になってきたのは、多様性が何らかの一つのカテゴリーに還元されるものであれば、結局それは、真の意味で多様性とは言えないのではないかということだった。こうした課題を考える上で、「ファット／肥満」をめぐる概念や人間存在のあり方は、これからの人間の多様なあり方を考えるための重要な課題であると考えている。これからも、ファット・アクセプタンス運動の行方を見続けていく必要があるだろう。

参考文献

【日本語】

秋道智彌

2004　『コモンズの人類学：文化・歴史・生態』人文書院。

浅野千恵

1996　『女はなぜやせようとするのか：摂食障害とジェンダー』勁草書房。

東賢太朗／市野澤潤平／木村周平／飯田卓（編）

2014　『リスクの人類学』世界思想社。

東浩紀／大澤真幸

2003　『自由を考える：9・11以降の現代思想』日本放送出版協会。

アッピア、K・アンソニー

1996　「アイデンティティ、真正さ、文化の存続：多文化社会と社会的再生産」『マルチカルチュラリズム』エイミー・ガットマン（編）、佐々木毅／辻康夫／向山恭一（訳）、pp. 211–234、岩波書店。（Appiah, K. Anthony. 1994. Identity, Authenticity, Survival: Multicultural Societies and Social Reproduction. In *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*. Amy Gutmann (ed.), pp. 149–163 Princeton University Press.）

碇陽子

2005　「「医療化」概念再考—Peter Conradの社会構築主義的アプローチを中心として」『東京大学超域文化科学紀要』10: 197–219。

石川准

1990　「自助グループ連動から他者を巻き込む運動へ：ある障害者グループの活動から」『社会運動論の統合をめざして』社会運動研究会（編）、pp. 281–312、成文堂。

石山文彦

2004　「多文化主義とリベラリズム」『思想』965: 176–194。

市野澤潤平

2013　「〈浸潤〉される身体をめぐる不確実性と累積的リスク：観光ダイビングの経験における減圧症の問題」第47回日本文化人類学会（慶応義塾大学）。

2014　「リスクの相貌を描く人類学者による「リスク社会」再考」『リスクの人類学』東賢太朗／市野澤潤平／木村周平／飯田卓（編）、pp. 1–38、世界思想社。

一ノ瀬正樹

2011　『確率と曖昧性の哲学』岩波書店。

猪瀬浩平

2013　「「放射能が手に届いた気がしたんだ」：原子力災害における〈リアリティ〉の構成をめぐる人類学的考察」『文化人類学』78(1): 81–98。

浮ヶ谷幸代

2004　『病気だけど病気ではない：糖尿病とともに生きる生活世界』誠信書房。

牛山美穂

2011　「治らない病気と多元的な治療：アトピー性皮膚炎の事例から」『生活学論叢』20: 81–94。

浦野茂

2008　「社会学の課題としての概念の分析：「構築主義批判・以後」によせて」『三田社会学』13: 47–59。

2009　「はじめに」『概念分析の社会学：社会的経験と人間の科学』酒井泰斗／浦野茂／前田泰樹／中村和生（編）、pp. i–vi、ナカニシヤ出版。

ウルフ、ナオミ

1994　『美の陰謀：女たちの見えない敵』曽田和子（訳）、TBSブリタニカ。（Wolf, Naomi. 1991. *The Beauty Myth: How Images of Beauty are Used Against Women*. William Morrow.）

エヴァンズ=プリチャード、エドワード E.

2001　『アザンデ人の世界：妖術・託宣・呪術』 向井元子（訳）、みすず書房。（Evans-Pritchard, E. E. 1937. *Witchcraft, Oracles and Magic Among the Azande*. Oxford University Press.）

オーバック、スージー

1994　『ダイエットの本はもういらない』落合恵子（訳）、飛鳥新社。（Orbach, Susie. 1978. *Fat is a Feminist Issue*. Berkeley Books.）

大杉高司

2001　「非同一性による共同性へ／において」『人類学的実践の再構築：ポストコロニアル転回以後』杉島敬志（編）、pp. 271–296、世界思想社。

岡真理

2000　『彼女の「正しい」名前とは何か』青土社。

太田好信

2012a　「二一世紀における政治的アイデンティティの概念化」『政治的アイデンティティの人類学：21世紀の権力変容と民主化にむけて』太田好信（編）、pp. 1–34、昭和堂。

2012b 「政治的アイデンティティとは何か？：パワーの視点からアイデンティティを分析する批判理論に向けて」『政治的アイデンティティの人類学：21世紀の権力変容と民主化にむけて』太田好信（編）、pp. 36–77、昭和堂。

重田園江

2003 『フーコーの穴：統計学と統治の現在』木鐸社。

春日直樹

2007 『「遅れ」の思考：ポスト近代を生きる』東京大学出版会。

金森修

2000 『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会。

柄谷行人

1986 『探求Ⅰ』講談社。

川北稔

2004 「社会運動と集合的アイデンティティ：動員過程におけるアイデンティティの諸相」『社会運動という公共空間：理論と方法のフロンティア』曽良中清司／長谷川公一／町村敬志／樋口直人（編著）、pp. 53–82、成文堂。

カンギレム、ジョルジュ

1987 『正常と病理』滝沢武久（訳）、法政大学出版局。（Canguilhem, Georges. 1966. *Le Normal et le Pathologique, Augmenté de Nouvelles Réflexions Concernant le Normal et le Pathologique*. Presses Universitaires de France.）

ギデンズ、アンソニー

2005 『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』秋吉美都／安藤太郎／筒井淳也（訳）、ハーベスト社。（Giddens, Anthony. 1991. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford University Press.）

ギトリン、トッド

2001 『アメリカの文化戦争：たそがれゆく共通の夢』疋田三良／向井俊二（訳）、彩流社。（Gitlin, Todd. 1995. *The Twilight of Common Dreams: Why America is Wracked by Culture Wars*. Metropolitan Books.）

グールド、スティーヴン J.

1998 『人間の測りまちがい：差別の科学史』鈴木善次／森脇靖子（訳）、河出書房新社。（Gould, Stephen J. 1981. *The Mismeasure of Man*. W.W. Norton.）

グッドマン、ネルソン

2008 『世界制作の方法』菅野盾樹（訳）、筑摩書房。（Goodman, Nelson. 1978. *Ways of World Making*. Hackett Publishing.）

グッドマン、ネルソン／キャサリン・Z. エルギン

2001（1988）　『記号主義：哲学の新たな構想』菅野盾樹（訳）、みすず書房。（Goodman, Nelson, and Catherine Z. Elgin. 1988. *Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences*. Routedge.）

クライツァー、グレッグ

2003　『デブの帝国：いかにしてアメリカは肥満大国となったのか』竹迫仁子（訳）、バジリコ株式会社。（Critser, Greg. 2003. *Fat Land: How Americans Became the Fattest People in the World*. Houghton Mifflin）

クリフォード、ジェームス／マーカス・フィッシャー

1996　『文化を書く』春日直樹／和邇悦子／足羽與志子／橋本和也／多和田裕司／西川麦子（訳）、紀伊國屋書店。（Clifford, James, and George E. Marcus, (eds.). 1986. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. University of California Press.）

クーン、トマス

1971　『科学革命の構造』中山茂（訳）、みすず書房。（Kuhn, Thomas S. 1962. *The Structure of Scientific Revolutions*. University of Chicago Press.）

小山亘

2008　『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』三元社。

コンラッド、ピーター／ジョセフ W・シュナイダー

2003　『逸脱と医療化：悪から病いへ』進藤雄三（監訳）、杉田聡／近藤正英（訳）、ミネルヴァ書房。（Conrad, Peter, and Joseph W. Schneider. 1992. *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*. Temple University Press.）

サイード、エドワード

1986　『オリエンタリズム上巻・下巻』今沢紀子（訳）、板垣雄三／杉田英明（監修）、平凡社。（Said, Edward. W. 1978. *Orientalism*. Pantheon Books.）

酒井泰斗

2009　「おわりに」『概念分析の社会学：社会的経験と人間の科学』酒井泰斗／浦野茂／前田泰樹／中村和生（編）、pp. 261–267、ナカニシヤ出版。

坂本亘／五十川直樹／後藤昌司

2008　「日本の「メタボリック・シンドローム」診断基準の統計的問題」『行動計量学』35(2): 177–192。

佐藤知久

2008　「セルフヘルプ・グループ：非同一的なコミュニティとしての」『人類学で世界をみる：医療・生活・政治・経済』春日直樹（編）、ミネルヴァ書房、pp. 21–38。

2011　「社会運動と時間：アクトアップにおけるエイズ・アクティビズムの生成と衰退」『時間の人類学：情動・自然・社会空間』西井凉子（編）、pp. 88–114、世界思想社。

シェル、エレン・ラペル

2005　『太りゆく人類：肥満遺伝子と過食社会』栗木さつき（訳）、早川書房。（Shell, Ellen Ruppel. 2002. *The Hungry Gene: the Science of Fat And the Future of Thin*. Atlantic Monthly Press）

塩原良和

2012　「多文化主義」『現代社会学事典』大澤真幸／吉見俊哉／鷲田清一（編集委員）・見田宗介（編集顧問）、p. 860、弘文堂。

渋谷望

2003　『魂の労働：ネオリベラリズムの権力論』青土社。

渋谷博史

2010　「アメリカ・モデル福祉国家の本質」『アメリカ・モデル福祉国家I競争への補助階段』渋谷博史／中浜隆（編）、pp. 1–18、昭和堂。

シルヴァスティン、マイケル

2009　「転換子、言語範疇、そして文化記述」『記号の思想：現代言語人類学の一軌跡：シルヴァスティン論文集』小山亘（編）、榎本剛士／古山宣洋／小山亘／永井那和（訳）、pp. 235–316、三元社。（Silverstein, Michael. 1976. Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description. In *Meaning in anthropology*. Keith H. Basso and Henry A. Selby (eds.), pp. 11–55. University of New Mexico Press.）

シュローサー、エリック

2001　『ファーストフードが世界を食いつくす』楡井浩一（訳）、草思社。（Schlosser, Eric. 2001. *Fast Food Nation: The Dark Side of the All-American Meal*. Houghton Mifflin.）

新ヶ江章友

2014　「HIV感染リスク認知の「ずれ」日本の研究者とゲイ男性のあいだの事例から」『リスクの人類学』東賢太朗／市野澤潤平／木村周平／飯田卓（編）、pp. 196–217、世界思想社。

菅野盾樹

2008　「訳者解説：ヴァージョンの狩人のために」『世界制作の方法』ネルソン・グッドマン（著）、菅野盾樹（訳）、pp. 265–294、ちくま学芸文庫。

杉野昭博

2007　『障害学：理論形成と射程』東京大学出版会。

スペクター、マルコム／ジョン・キツセ

1990 『社会問題の構築：ラベリング理論を超えて』村上直之／中河伸俊／鮎川潤／森俊太（訳）、マルジュ社。（Spector, Malcom, and John I. Kitsuse. 1977. *Constructing Social Problems*. Cummings Publishing Company.）

千田有紀

2002 「フェミニズムと植民地主義：岡真理による女性性器切除批判を手がかりとして」『大航海』43: 128–145。

2005 「アイデンティティとポジショナリティ：1990年代の『女』の問題の複合性をめぐって」『脱アイデンティティ』上野千鶴子（編）、pp. 267–287、勁草書房。

ダグラス、メアリー

1983 『象徴としての身体』江河徹／塚本利明／木下卓（訳）、紀伊國屋書店。（Douglas, Mary. 1970. *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*. Barrie & Rockliff.）

1985 『汚れと禁忌』塚本利明（訳）、思潮社。（Douglas, Mary. 1966. *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*. Routledge and Kegan Paul.）

竹沢泰子（編）

2005 『人種概念の普遍性を問う』人文書院。

田中雅一

2002 「主体からエージェントのコミュニティへ——日常的実践への視覚」『日常的実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』田辺繁治／松田素二（編）、pp. 337–360、世界思想社。

2011 「運命的瞬間を求めて：フィールドワークと民族誌記述の時間」『時間の人類学：情動・自然・社会空間』西井凉子（編）、pp. 115–140、世界思想社。

田辺繁治

2002 「日常的実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ」『日常的実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』、田辺繁治／松田素二（編）、pp. 1–38、世界思想社。

2008 『ケアのコミュニティ』岩波書店。

2010 『「生」の人類学』岩波書店。

2012 「情動のコミュニティ：北タイ・エイズ自助グループの事例から」『実践としてのコミュニティ：移動・国家・運動』平井京之介（編）、pp. 247–272、京都大学学術出版会。

ダマシオ、アントニオ

2010　『デカルトの誤り：情動、理性、人間の脳』田中三彦（訳）、ちくま学芸文庫。（Damasio, R. Antonio. 1994. *Descartes' Error: Emotion, Rationality and the Human Brain*, Putnam）

鶴田幸恵

2009　『性同一性障害のエスノグラフィ：性現象の社会学』ハーベスト社。

テイラー、チャールズ

1996　「承認をめぐる政治」『マルチカルチュラリズム』エイミー・ガットマン（編）、佐々木毅／辻康夫／向山恭一（訳）、pp. 37–110、岩波書店。（Taylor, Charles. 1994. The Politics of Recognition. In *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*. Amy Gutmann (ed.), pp. 25–73. Princeton University Press.）

中川敏

2009　『言語ゲームが世界を創る：人類学と科学』世界思想社。

中川米造

1996　『医学と不確実性』日本評論社。

成定薫

1994　「科学社会学の成立と展開：客観主義的科学観から相対主義的科学観へ」『科学論：岩波講座現代思想〈10〉』新田義弘他（編）、pp. 315–336、岩波書店。

西井凉子

2011　「時間の人類学：社会空間論の展開」『時間の人類学：情動・自然・社会空間』西井凉子（編）、pp. 1–36、世界思想社。

ネスル、マリオン

2005『フード・ポリティクス：肥満社会と食品産業』三宅真季子／鈴木眞理子（訳）、新曜社。（Nestle, Marion. 2002. *Food Politics: How the Food Industry Influences Nutrition and Health*. University of California Press.）

長谷川公一

1990　「資源動員論と「新しい社会運動」論」『社会運動論の統合をめざして』社会運動研究会（編）、pp. 3–28、成文堂。

橋都由加子

2010　「WICプログラム」『アメリカ・モデル福祉国家 I 競争への補助階段』渋谷博史／中浜隆（編）、pp. 194–218、昭和堂。

ハッキング、イアン

1999　『偶然を飼いならす：統計と第二次科学革命』石原英樹／重田園江（訳）、木鐸社。（Hacking, Ian. 1990. *The Taming of Chance*. Cambridge University Press.）

2000　「人々を作り上げる」『現代思想』隠岐さや香（訳）、28(1): 114–129（Hacking, Ian. 1986. Making Up People. In *Reconstructing Individualism*. Thomas Heller,

Morton Sosna, and David Wellbery (eds.), pp. 222–236. Stanford University Press.）

2006 『何が社会的に構築されるのか』出口康夫／久米暁抄（訳）、岩波書店。（Hacking, Ian. 1999. *The Social Construction of What?* Harvard University Press.）

2012 『知の歴史学』出口康夫／大西琢朗／渡辺一弘（訳）、岩波書店。（Hacking, Ian. 2002. *Historical Ontology*. Harvard University Press.）

バトラー、ジュディス

1999 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子（訳）、青土社。（Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble and the Subversion of Identity*. Routledge.）

平井京之介

2012 「実践としてのコミュニティ：移動・国家・運動」『実践としてのコミュニティ：移動・国家・運動』平井京之介（編）、pp. 1–37、京都大学学術出版会。

フー、フランク

2010 『肥満の疫学』小林身哉／八谷寛／小林邦彦（訳）、名古屋大学出版会。（Hu, Frank B. 2008. O*besity Epidemiology*. Oxford University Press）

フーコー、ミシェル

1969 『臨床医学の誕生』神谷美恵子（訳）、みすず書房。（Foucault, Michel. 1963. *Naissance de la Clinique*. Presses Universitaires de France）

1986 『性の歴史1：知への意志』渡辺守章（訳）、新潮社。（Foucault, Michel. 1976. *Histoire de la Sexualité: La Volonté de Savoir*. Éditions Gallimard）

2007 『安全・領土・人口：コレージュ・ド・フランス講義1977–1978年度（ミシェル・フーコー講義集成7）』高桑和巳（訳）、筑摩書房。（Foucault, Michel. 2004. *Securité, Territoire, Population: cours au Collège de France (1977–1978)*. Gallimard.）

ブアスティン、ダニエル J.

1990 『現代アメリカ社会：コミュニティの経験』橋本富郎（訳）、世界思想社。（Boorstin, Daniel J. 1969. *The Decline of Radicalism: Reflections on America Today*. Random House）

ベイトソン、グレゴリー

2000 『精神の生態学』佐藤良明（訳）、思索社。(Bateson, Gregory. 1972. *Steps to an Ecology of Mind*. Ballantine Book.)

ベック、ウルリッヒ

1998 『危険社会：新しい近代への道』東廉／伊藤美登里（訳）、法政大学出版局。（Beck, Ulrich. 1986. *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*. Suhrkamp.）

松田素二

2009 『日常人類学宣言！：生活世界の深層へ／から』世界思想社。

美馬達哉

2012『リスク化される身体：現代医学と統治のテクノロジー』青土社。

メルッチ、アルベルト

1997 『現在に生きる遊牧民』山之内靖他（訳）、岩波書店。（Melucci, Alberto. 1989. *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*. Temple University Press.）

森山工

1996 『墓を生きる人々：マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京大学出版会。

ヤング、ジョック

2007 『排除型社会：後期近代における犯罪・雇用・差異』青木秀男／伊藤泰郎／岸政彦／村澤真保呂（訳）、洛北出版。（Young, Jock. 1999. *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*. Sage Publications.）

ライル、ギルバート

1997 『ジレンマ：日常言語の哲学』篠澤和久（訳）、勁草書房。（Ryle, Gibert. 1954. *Dilemmas*. Cambridge University Press.）

ラトゥール、ブルーノ

1999 『科学が作られているとき：人類学的考察』川崎勝／高田紀代志（訳）産業図書。（Latour, Bruno. 1987. *Science in Action*. Harvard University Press.）

リンチ、マイケル

2001 「エスノメソドロジーの実践と論理」『社会学理論の可能性を読む』椎野信雄（訳）、pp. 195–218、 情況出版。（Lynch, Michael. 2001. Ethnomethodology and the Logic of Practice. In *The Practice Turn in Contemporary Theory*. Theodore R. Schatzki, Karin Knorr-Cetina, and Eike von Savigny (eds.), pp. 131–148. Psychology Press.）

ルービン、ゲイル

1997 「性を考える：セクシュアリティの政治に関するラディカルな理論のための覚書」『現代思想』25(6): 94–144。（Rubin, Gayle. 1984. Thinking Sex: Notes for a Radical Theory of the Politics of Sexuality. In *Pleasure and Danger:*

Exploring Female Sexuality. Carol S. Vance (ed.), pp. 267–319. Routledge and Kegan Paul.）

ルーマン、ニクラス

2003 『近代の観察』馬場靖雄（訳）、法政大学出版局。（Luhmann, Niklas. 1988. *Observations on Modernity*. Stanford University Press.）

レイヴ、ジーン／エティエンヌ・ウェンガー

1993 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』佐伯胖（訳）、産業図書。（Lave, Jean, and Etienne Wenger. 1991. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press.）

【英語】

Abu-Lughod, Lila

1991 Writing against Culture. In *Recapturing Anthropology: Working in the Present*. Richard Fox (ed.), pp. 137–162. School of American Research Press.

Agha, Asif

2007 *Language and Social Relations*. Cambridge University Press.

Anderson, Sue A.

1990 Core Indicators of Nutritional State for Difficult-to-Sample Populations. *The Journal of Nutrition* 120(11): 1557–1599.

Andres, Reubin, et al.

1985 Impact of Age on Weight Goals. *Annals of Internal Medicine* 103: 1030–1033.

Azzarito, Laura

2008 The Rise of the Corporate Curriculum: Fatness, Fitness, and Whiteness. In *Biopolitics and The 'Obesity Epidemic': Governing Bodies*. Jan Wright and Valerie Harwood (eds.), pp. 183–196. Routledge.

Bacon, Linda

2008 Health at Every Size: The Surprising Truth about Your Weight, BenBella Books.

2009 Reflections on Fat Acceptance: Lessons Learned from Privilege: An Essay Based on a Keynote Speech Delivered at the Conference of the National Association to Advance Fat Acceptance, August 1, 2009. ［http://www.lindabacon.org/Bacon_ThinPrivilege080109.pdf］（2011年3月30日最終閲覧）.

Bacon, Linda, et al.

2005 Size Acceptance and Intuitive Eating Improve Health for Obese, Female Chronic Dieters. *Journal of the American Dietetic Association* 105: 929–936.

Bacon, Linda and Lucy Aphramor

2011 Weight Science: Evaluating the Evidence for a Paradigm Shift. *Nutrition Journal* 10.9.［http://www.nutritionj.com/content/10/1/9］(2013年11月20日最終閲覧).

Bartky, Sandra L.

1990 *Femininity and Domination: Studies in the Phenomenology of Oppression*. Routledge.

Becker, Anne E.

1995 *Body, Self, and Society: The View from Fiji*. University of Pennsylvania Press.

2004 Television, Disordered Eating, and Young Women in Fiji: Negotiating Body Image and Identity During Rapid Social Change. *Culture, Medicine and Psychiatry* 28(4): 533–559.

Bell, Kirsten and Darlene McNaughton

2007 Feminism and the Invisible Fat Man. *Body & Society* 13(1): 107–131.

Biehl, João

2004 The Activist State: Global Pharmaceuticals, AIDS and Citizenship in Brazil. *Social Text* 22(3): 105–132.

Boellstorff, Tom

2005 Between Religion and Desire: Being Muslim and Gay in Indonesia. *American Anthropologist* 107(4): 575–585.

2007 Queer Studies in the House of Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 36: 17–35.

Boero, Natalie

2007 All the News that's Fat to Print: The American "Obesity Epidemic" and the Media. *Qualitative Sociology* 30(1): 41–60.

Bordo, Susan

1993 *Unbearable Weight: Feminism, Western Culture, and the Body*. University of California Press.

Brewis, Alexandra A., et al.

2011 Body Norms And Fat Stigma In Global Perspective. *Current Anthropology* 52(2): 269–276.

Brewis, Alexandra A.

2011 *Obesity: Cultural and Biocultural Perspectives*. Rutgers University Press.

Brink, Pamela J.

1995 Fertility and Fattening: the Annang Fattening Room. In *Social Aspects of Obesity*. Igor de Garine and Nancy J. Pollock (eds.), pp. 71–85. Gordon and Breach Publishers.

Brown, Phil

1995 Naming and Framing: The Social Construction of Diagnosis and Illness. *Journal of Health and Social Behavior* 35(extra issue): 34–52.

Burgard, Deb

2009 What Is 'Health at Every Size'? In *The Fat Studies Reader*. Esther D, Rothblum, and Sondra Solovay (eds.), pp. 42–53. New York University Press.

Calhoun, Craig

1993 "New Social Movements" of the Early Nineteenth Century. *Social Science History* 17(3): 385–427.

California Department of Public Health, California Obesity Prevention Program

2010 2010 California Obesity Prevention Plan: A Vision for Tomorrow, Strategic Actions for Today. California Department of Public Health, California Obesity Prevention Program.

Campos, Paul F.

2004 *The Obesity Myth: Why America's Obsession with Weight is Hazardous to Your Health*. Penguin.

Caplan, Patrick

2000 Introduction: Risk Revisited. In *Risk Revisited*. Patrick Caplan (ed.), pp. 1-28. Pluto Press.

Caplan, Patrick (ed.)

2000 *Risk Revisited*. Pluto Press.

Castel, Robert

1991 From Dangerousness to Risk. In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. Graham Burchell, Colin Gordon, and Peter Miller, (eds.), pp. 281–290. University of Chicago Press.

Chang, Virginia W. and Diane S. Lauderdale

2005 Income Disparities in Body Mass Index and Obesity in the United States, 1971–2002. *Archives of Internal Medicine* 165(18): 2122–2128.

Chrisler, Joan C.

2012 "Why Can't You Control Yourself?" Fat Should Be a Feminist Issue. *Sex Roles* 66: 608–616.

Clifford, James

2000 “Taking Identity Politics Seriously: ‘The Contradictory, Stony Ground…’ In *Without Guarantees: In Honour of Stuart Hall*. Stuart Hall, Paul Gilroy, Lawrence Grossberg, and Angela McRobbie (eds.), pp. 94–112. Verso.

Cohn, Simon

2000 Risk, Ambiguity and the Loss of Control: How People with Chronic Illness Experience Complex Biomedical Causal Models. In *Risk Revisited*. Patrick Caplan (ed.), pp. 204–225. Pluto Press.

Collier, Stephen J., Andrew Lakoff and Paul Rabinow

2004 Biosecurity: Towards an Anthropology of the Contemporary. *Anthropology Today* 20(5): 3–7.

Collins, Patricia H.

1990 *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and The Politics Of Empowerment*. Routledge.

Comaroff, Jean

1985 *Body of Power, Spirit of Resistance*. University of Chicago Press.

Cooper, Charlotte

1997 Can a Fat Woman Call Herself Disabled? *Disability and Society* 12(1): 31–41.

1998 *Fat and proud: The Politics of Size*. Women’s Press.

2008 What’s Fat Activism?. *University of Limerick Department of Sociology Working Paper Series*. ［http://www3.ul.ie/sociology/docstore/workingpapers/wp2008-02.pdf］（2014年11月1日最終閲覧）.

Cox, Susan M.

2003 Stories in Decisions: How At-Risk Individuals Decide to Request Predictive Testing For Huntington Disease. *Qualitative Sociology* 26(2): 257–280.

de Garine, Igor

1995 Sociocultural Aspects of the Male Fattening Sessions among the Massa of Northern Camaroon. In *Social Aspects of Obesity*. Igor de Garine and Nancy J. Pollock (eds.), pp. 45–70. Gordon and Breach Publishers.

de Garine, Igor and Nancy J. Pollock, (eds.)

1995 *Social Aspects of Obesity*. Gordon and Breach Publishers

DeBono, Nathaniel L., Nancy A. Ross and Lea Berrang-Ford.

2012 Does the Food Stamp Program Cause Obesity? A Realist Review And A Call For Place-Based Research. *Health & Place* 18(4): 747–756.

Dell'Antonia, K.J.

2012 Georgia's Tough Campaign Against Childhood Obesity. *New York Times*. January 3.

DeVault, Marjorie L. and James P. Pitts

1984 Surplus and Scarcity: Hunger and the Origins of the Food Stamp Program. *Social Problems* 31(5): 545–557.

Dinour, Lauren M., Dara Bergen and Ming-Chin Yeh

2007 The Food Insecurity–Obesity Paradox: A Review of The Literature and the Role Food Stamps may Play. *Journal of the American Dietetic Association* 107(11): 1952–1961.

Dolnick, Sam

2010 The Obesity-Hunger Paradox. *New York Times*. March 12.

Douglas, Mary

1992 *Risk and Blame: Essays in Cultural Theory*. Routledge.

Douglas, Mary and Aaron Wildavsky

1982 *Risk and Culture: An Essay on the Selection of Technical and Environmental Dangers*. University of California Press.

Drewnowski, Adam and S.E. Specter

2004 Poverty and Obesity: The Role of Energy Density and Energy Costs. *American Journal of Clinical Nutrition* 79: 6–16.

Drewnowski, Adam

2009 Obesity, Diets, and Social Inequalities. *Nutrition Reviews* 67(1): 36–39.

Duggan, Lisa

2003 *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and The Attack on Democracy*. Beacon Press.

Edelman, Marc

2001 Social Movements: Changing Paradigms and Forms of Politics. *Annual Review of Anthropology* 30: 285–317.

Eknoyan, Garabed

2008 Adolphe Quetelet (1796–1874)—The Average Man and Indices of Obesity. *Nephrology Dialysis Transplantation* 23(1): 47–51.

Ellin, Abby

2006 Big People on Campus. *New York Times*, Nov. 26.

Epstein, Steven

1996 *Impure Science: AIDS, Activism, and the Politics of Knowledge*. University of California.

Ernsberger, Paul

2009 Does Social Class Explain the Connection between Weight and Health? In *The Fat Studies Reader*. Esther D. Rothblum and Sondra Solovay (eds.), pp. 25–36. New York University Press.

Escobar, Arturo

1992 Culture, Practice and Politics: Anthropology and the Study of Social Movements. *Critique of Anthropology* 12(4): 395–432.

Ewald, François

1991 Insurance and Risks. In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. Graham Burchell, Colin Gordon, and Peter Miller (eds.), pp. 197–210. University of Chicago Press.

2002 The Return of Descartes's Malicious Demon: An Outline of Precaution. Translated by Stephen Utz. In *Embracing Risk: The Changing Culture of Insurance and Responsibility*. Tom Baker and Jonathan Simon (eds.), pp. 273–301. University of Chicago Press.

Fabrey, William

2001 Thirty-Three Years of Size Acceptance in Perspective: How Has it Affected the Lives of Real People? ［http://members.tripod.com/~bigastexas/2001event/keynote2001.html］(2013 年 3 月 25 日最終閲覧).

Farrell, Amy E.

2011 *Fat Shame: Stigma and the Fat Body in American Culture*. New York University Press.

Fikkan, Janna L. and Esther D. Rothblum

2012 Is Fat a Feminist Issue? Exploring the Gendered Nature of Weight Bias. *Sex Roles* 66(9/10): 575–592.

Fishman, Sarah

1998 Life in the Fat Underground. Radiance, Winter. ［http://www.radiancemagazine.com/issues/1998/winter_98/fat_underground.html］(2013 年 3 月 25 日最終閲覧).

Flegal, Katherine M.

2006 Excess Deaths Associated with Obesity: Cause and Effect. *International Journal of Obesity* 30(8): 1171–1172.

Flegal, Katherine M., et al.

2005 Excess Deaths Associated with Underweight, Overweight, and Obesity. *JAMA: the Journal of the American Medical Association* 293(15): 1861–1867.

Fraser, Nancy and Linda Gordon

1994 A Genealogy of Dependency: Tracing a Keyword of the U.S. Welfare State. *Signs* 19(2): 309–336.

Freespirit, Judy

2003 On Ward G. In *The Strange History of Suzanne Lafleshe: And Other Stories of Women and Fatness*. Susan Koppelman (ed.), pp. 153–160. Feminist Press.

Freespirit, Judy and Sara Aldebaran

1983(1973) Fat Liberation Manifesto. In *Shadow on a Tightrope: Writings by Women on Fat Oppression*. Lisa Schoenfielder and Barb Wieser (eds.), pp. 52–53. Aunt Lute Books.

French, Simone A., Mary Story and Robert W. Jeffery

2001 Environmental Influences on Eating and Physical Activity. *Annual Review of Public Health* 22(1): 309–335.

Fumento, Michael

1997 *The Fat of the Land: The Obesity Epidemic and How Overweight Americans Can Help Themselves*. Viking.

Gamson, Joshua

1995 Must Identity Movements Self-Destruct? A Queer Dilemma. *Social Problem* 42(3): 390–407.

Gaesser, Glenn

2002 *Big Fat Lies: The Truth about Your Weight and Your Health*. Gürze Books.

Gard, Michael and Jan Wright

2005 *The Obesity Epidemic: Science, Morality, and Ideology*. Routledge.

Gibson, Diane

2003 Food Stamp Program Participation is Positively Related to Obesity in Low Income Women. *The Journal of Nutrition* 133(7): 2225–2231.

Gremillion, Helen

2005 The Cultural Politics of Body Size. *Annual Review of Anthropology* 34: 13–32.

Gould, Deborah B.

2001 Rock the Boat, Don’t Rock the Boat, Baby: Ambivalence and the Emergence of Militant AIDS Activism. In *Passionate Politics: Emotions and Social Movements*. Jeff Goodwin, James M. Jasper, and Francesca Polletta, (eds.), pp. 135–157. University of Chicago Press.

2009 Moving Politics: Emotion and ACT UP's Fight against AIDS, University of Chicago Press.

Gupta, Akhil and James Ferguson

1992 Beyond "Culture": Space, Identity, and the Politics of Difference. *Cultural Anthropology* 7(1): 6–23.

Habermas, Jürgen.

1981 New Social Movements. *Telos* 49: 33–37.

Hacking, Ian

1991 How Should We do the History of Statistics? In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. Graham Burchell, Colin Gordon, and Peter Miller (eds.), pp. 181–195. University of Chicago Press.

1995 The Looping Effects of Human Kinds. In *Causal Cognition: A Multidisciplinary Debate*. Dan Sperber, David Premack, and Ann James Premack (eds.), pp. 351–383. Clarendon Press.

2007 Kinds of People: Moving Targets. *Proceedings of the British Academy* 151: 285–318.

Halberstam, Judith

2005 *In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives*. New York University Press.

Hartley, Cecilia

2001 Letting Ourselves Go: Making Room for the Fat Body in Feminist Scholarship. In *Bodies Out of Bounds: Fatness and Transgression*. Jana Evans Braziel and Kathleen LeBesco (eds.), pp. 60–73. University of California Press.

Heath, Deborah, Rayna Rapp and Karen-Sue Taussig

2004 "Genetic Citizenship." In *A Companion to the Anthropology of Politics*. David Nugent and Joan Vincent (eds.), pp. 152–167. Blackwell Publishing.

Hess, David J.

1997 *Science Studies: An Advanced Introduction*. New York University Press.

Hill, James O., et al.

2003 Obesity and the Environment: Where Do We Go from Here? *Science* 299(5608): 853–855.

Holland, Paul W.

1986 Statistics and Causal Inference. *Journal of the American Statistical Association* 81(396): 945–960.

Hubert, Helen B., et al.

1983 Obesity as an Independent Risk Factor for Cardiovascular Disease: A 26-Year Follow-up of Participants in the Framingham Heart Study. *Circulation* 67(5): 968–977.

Jasper, James M.

1998 The Emotions of Protest: Affective and Reactive Emotions in and around Social Movements. *Sociological Forum* 13(3): 397–424.

Johnson-Hanks, Jennifer

2005 When the Future Decides: Uncertainty and Intentional Action in Contemporary Cameroon. *Current Anthropology* 46(3): 363–385.

Katz, Alfred H.

1981 Self-Help and Mutual Aid: An Emerging Social Movement? *Annual Review of Sociology* 7: 129–155.

1993 *Self-Help in America: A Social Movement Perspective*. Twayne Publishers.

Katz, Mandy

2009 Tossing Out the Diet and Embracing the Fat. *New York Times*, July 15.

Keating, Peter and Alberto Cambrosio

2000 "Real Compared to What?": Diagnosing Leukemias and Lymphomas. In *Living and Working With the New Medical Technologies: Intersections of Inquiry*. Margaret Lock, Allan Young, and Alberto Cambrosio (eds.), pp.103–134. Cambridge University Press.

Kerr, Norwood A.

1990 Drafted into the War on Poverty: USDA Food and Nutrition Programs, 1961–1969. *Agricultural History* 64(2): 154–166.

Keys, Ancel, et al.

1972 Indices of Relative Weight and Adiposity. *Journal of Chronic Diseases* 25: 329–343.

Kirkland, Anna

2003 Representations of Fatness and Personhood: Pro-Fat Advocacy and the Limits and Uses of Law. *Representations* 82(1): 24–51.

2008a *Fat Rights: Dilemmas of Difference and Personhood*. New York University Press.

2008b Think of the Hippopotamus: Rights Conscious in the Fat Acceptance Movement. *Law & Society Review* 42(2): 397–431.

2011 The Environmental Account of Obesity: A Case for Feminist Skepticism. *Signs* 36(2): 463–485.

Klemesrud, Judy L.

1970 There Are a Lot of People Willing to Believe Fat Is Beautiful. . . *New York Times*, August 18.

Kuczmarski, Robert J. and Katherine M. Flegal

2000 Criteria for Definition of Overweight in Transition: Background and Recommendations for the United States. *American Journal of Clinical Nutrition* 72: 1074–1081.

Kulick, Don and Anne Meneley (eds.)

2005 *Fat: The Anthropology of an Obsession*. Jeremy P. Tarcher/Penguin.

Kumanyika, Shiriki Kinika and Sonya Grier

2006 Targeting Interventions for Ethnic Minority and Low-income Populations. *The Future of Children* 16(1): 187–207.

Lakoff, Andrew

2008 The Generic Biothreat, or, How We became Unprepared. *Cultural Anthropology* 23(3): 399–428.

Latour, Bruno and Steve Woolgar

1986(1979) *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts*. Princeton University Press

Leach, Melissa, Ian Scoones and Brian Wynne (eds.)

2005 *Science and Citizens: Globalization and the Challenge of Engagement*. ZED Press.

LeBesco, Kathleen

2004 *Revolting Bodies?: The Struggle to Redefine Fat Identity*. University of Massachusetts Press.

Lepoff, Laurie A.

1975 Fat Politics. *Plexus: San Francisco Bay Area Women's Newspaper*, May.

Livingston, Julie

2009 Suicide, Risk, and Investment in the Heart of the African Miracle. *Cultural Anthropology* 24(4): 652–680.

Love, Barbara J.

2006 Judy Freespirit. In *Feminists Who Changed America 1963–1975*. Barbara J. Love (ed.) p. 160. University of Illinois Press.

Lupton, Deborah

1995 *The Imperative of Health: Public Health and the Regulated Body*. Sage Publications.

2012 *Fat*. Routledge.

Lynch, Michael

1993 *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*. Cambridge University Press.

Lyons, Pat

2009 Prescription for Harm: Diet Industry Influence, Public Health Policy and the "Obesity Epidemic." In *The Fat Studies Reader*. Esther D. Rothblum and Sondra Solovay (eds.), pp. 75–87. New York University Press.

Martin, Paul M.V. and Estelle Martin-Granel

2006 2500-Year Evolution of the Term Epidemic. *Emerging Infectious Diseases* 12(6): 976–980.

Mathews, Holly F.

2000 Negotiating Cultural Consensus in a Breast Cancer Self-Help Group. *Medical Anthropology Quarterly* 14(3): 394–413.

Mayer, Vivian

1983a Forward. In *Shadow on a Tightrope: Writings by Women on Fat Oppression*. Lisa Schoenfielder and Barb Wieser (eds.), pp. ix–xvii. Aunt Lute Books.

1983b The Fat Illusion. In *Shadow on a Tightrope: Writings by Women on Fat Oppression*. Lisa Schoenfielder and Barb Wieser (eds.), pp. 3–14. Aunt Lute Books.

McCullough, Megan B. and Jessica A. Hardin (eds.)

2013 *Reconstructing Obesity: The Meaning of Measures and the Measure of Meanings*. Berghahn Books.

McDonald, Kevin

2002 From Solidarity to Fluidarity: Social Movements beyond "Collective Identity"—The Case of Globalization Conflicts. *Social Movement Studies* 1(2): 109–128.

Miyazaki, Hirokazu

2003 The Temporalities of the Market. *American Anthropologist* 105(2): 255–265.

2006 Economy of Dreams: Hope in Global Capitalism and Its Critiques. *Cultural Anthropology* 21(2): 147–172.

Moffat, Tina

2010 The "Childhood Obesity Epidemic." *Medical Anthropology Quarterly* 24(1): 1–21.

Monaghan, Lee F. and Michael Hardey

2009 Bodily Sensibility: Vocabularies of the Discredited Male Body. *Critical Public Health* 19(3/4): 341–362.

Mohanty, Chandra T.

1991 Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses. In *Third World Women and the Politics of Feminism*. Chandra T. Mohanty, Ann Russo, and Lourdes Torres, (eds.), pp. 51–80. Indiana University Press.

Mol, Annemarie

2002 *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Duke University Press.

Narayan, Uma

1998 Essence of Culture and a Sense of History: a Feminist Critique of Cultural Essentialism. *Hypatia* 13(2): 86–106.

2004 The Project of Feminist Epistemology: Perspectives from a Nonwestern Feminist. In *The Feminist Standpoint Theory Reader: Intellectual And Political Controversies*. Sandra G. Harding (ed.), pp. 213–224. Routledge.

Nash, June C.

2001 *Mayan Visions: the Quest for Autonomy in an Age of Globalization*. Psychology Press.

Nash, June C. (ed.)

2005 *Social Movements: An Anthropological Reader*. Blackwell Publishing.

Nguyen, Vihn-Kim

2005 Antiretrovirals, Globalism, Biopolitics and Therapeutic Citizenship. In *Global Assemblages: Technology, Politics and Ethics as Anthropological Problems*. Aihwa Ong and Stephen Collier (eds.), pp. 124–144. Blackwell.

Nichter, Mimi

2000 *Fat Talk: What Girls and Their Parents Say about Dieting*. Harvard University Press.

Offe, Claus

1985 New Social Movements: Challenging The Boundaries of Institutional Politics. *Social Research* 52(4): 817–868.

Ogden, Cynthia L., et al.

2010 Obesity and Socioeconomic Status in Adults: United States 1988–1994 and 2005–2008. *NCHS Data Brief No. 50*. National Center for Health Statistics.

Ogden, Cynthia L., et al.

2012 Prevalence of Obesity and Trends in Body Mass Index among US Children and Adolescents, 1999–2010. *JAMA: The Journal of the American Medical Association* 307(5): 483–490.

Peters, Kurt and Susan Lobo (eds.)

2002 *American Indians and the Urban Experience*. Altamira Press.

Petersen, Alan and Deborah Lupton

1996 *The New Public Health: Health and Self in the Age of Risk*. Sage Publications.

Petryna, Adriana

2002 *Life Exposed: Biological Citizens after Chernobyl*. Princeton University Press.

Polletta, Francesca and James M. Jasper

2001 Collective Identity and Social Movements. *Annual Review of Sociology* 27: 283–305.

Pollock, Nancy J.

1995 Social Fattening Patterns in the Pacific: The Positive Side of Obesity: A Nauru Case Study. In *Social Aspects of Obesity*. Igor de Garine and Nancy J. Pollock (eds.), pp. 87–106. Gordon and Breach Publishers.

Popenoe, Rebecca

2004 *Feeding Desire: Fatness, Beauty, and Sexuality Among a Saharan People*. Routledge.

2005 Ideal. In *Fat: The Anthropology of an Obsession*. Don Kulick and Anne Meneley (eds.), pp. 9–28. Tarcher/Penguin.

Poppendieck, Janet

1995 Hunger in America: Typification and Response. In *Eating Agendas: Food and Nutrition as Social Problems*. Donna Maurer and Jeffery Sobal (eds.), pp.11–34. Aldine De Gruyter.

Povinelli, Elizabeth A.

2001 Radical Worlds: the Anthropology of Incommensurability and Inconceivability. *Annual Review of Anthropology* 30: 319–334.

Probyn, Elspeth

2008 Silences behind the Mantra: Critiquing Feminist Fat. *Feminism and Psychology* 18(3): 401–404.

Puhl, Rebecca and Kelly D. Brownell

2001 Bias, Discrimination, and Obesity. *Obesity Research* 9(12): 788–805.

2003 Psychosocial Origins of Obesity Stigma: Toward Changing a Powerful and Pervasive Bias. *Obesity Reviews* 4: 213–227.

Puhl, Rebecca M., Tatiana Andreyeva and Kelly D. Brownell

2008 Perceptions of Weight Discrimination: Prevalence and Comparison to Race and Gender Discrimination in America. *International Journal of Obesity* 32: 992–1000.

Rabinow, Paul

1996 *Essays on the Anthropology of Reason*. Princeton University Press.

Rapp, Rayna

1999 *Testing Women, Testing The Fetus: The Social Impact Of Amniocentesis in America*. Routledge.

2000 Extra Chromosomes and Blue Tulips: Medico-Familial Interpretations. In *Living and Working With the New Medical Technologies: Intersections of Inquiry*. Margaret Lock, Allan Young, and Alberto Cambrosio (eds.), pp. 184–208. Cambridge: Cambridge University Press.

Rich, Adrienne

1980 Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence. *Signs* 5(4): 631–660.

Ritenbaugh, Cheryl

1982 Obesity as a Culture-Bound Syndrome. *Culture, Medicine and Psychiatry* 6(4): 347–361.

Robins, Steven

2006 From "Rights" to "Ritual": AIDS Activism in South Africa. *American Anthropologist* 108(2): 312–323.

Robinson, Jon

2004 Health at Every Size: Time to Shift the Paradigm. *Health at Every Size* 18(1): 5–7.

Roehling, Patricia V.

2012 Fat is a Feminist Issue, but it is Complicated: Commentary on Fikkan and Rothblum. *Sex Roles* 66: 593–599.

Romero-Corral, Abel, et al.

2008 Accuracy of Body Mass Index in Diagnosing Obesity in the Adult General Population. *International Journal of Obesity* 32(6): 959–966.

Room, Robin

1993 Alcoholics Anonymous as a Social Movement. In *Research on Alcoholics Anonymous: Opportunities and alternatives*. Barbara S. McCrady and William R. Miller (eds.), pp. 167–187. Rutgers Center of Alcohol Studies.

Rose, Nikolas

2006 *The Politics of Life Itself: Biomedicine, Power, and Subjectivity in the Twenty-First Century*. Princeton University Press.

Rose, Nikolas and Carlos Novas

2005 Biological Citizenship. In *Global Assemblages: Technology, Politics, and Ethics as Anthropological Problems*." Aihwa Ong and Stephen J. Collier (eds.), pp. 439–463. Blackwell Publishing.

Rothblum, Esther D.

1994 “I’ll Die for the Revolution but Don’t Ask Me not to Diet”: Feminism and the Continuing Stigmatization of Obesity. In *Feminist Perspectives on Eating Disorders*. Patricia Fallon, Melanie A. Katzman, and Susan C. Wooley (eds.), pp. 53–76. The Guilford Press.

2012 Why a Journal on Fat Studies?” *Fat Studies* 1(1): 3–5.

Saguy, Abigail C.

2012a *What’s Wrong with Fat?* Oxford University Press.

2012b Why Fat is a Feminist Issue. *Sex Roles* 66(9/10): 600–607.

Saguy, Abigail C. and Rene Almeling

2008 Fat in the Fire? Science, The News Media, and the ‘Obesity Epidemic?’ *Sociological Forum* 23(1): 53–83.

Saguy, Abigail C. and Kevin W. Riley

2005 Weighing Both Sides: Morality, Mortality, and Framing Contests over Obesity. *Journal of Health Politics, Policy and Law* 30(5): 869–923.

Saguy, Abigail C. and Anna Ward

2011 Coming Out as Fat: Rethinking Stigma. *Social Psychology Quarterly* 74(1): 53–75.

Samimian-Darash, Limor

2013 Governing Future Potential Biothreats: Toward an Anthropology of Uncertainty. *Current Anthropology* 54(1): 1–22.

Scheier, Lee M.

2005 What is the Hunger-Obesity Paradox? *Journal of the American Dietetic Association* 105(6): 883–885.

Scott, James C.

1985 *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. Yale University Press.

Shanewood, B.

1999 An Interview with Medical Rights Champion Lynn McAfee. *Radiance,* Winter. ［http://www.radiancemagazine.com/issues/1999/winter_99/truth.html］ (2014 年 10 月 30 日).

Slovic, Paul

2000 What Does it Mean to Know a Cumulative Risk? Adolescents’ Perceptions of Short-term and Long-term Consequences of Smoking. *Journal of Behavioral Decision Making* 13: 259–266.

Sobal, Jeffery

1995 The Medicalization and Demedicalization of Obesity. In *Eating Agendas*. Jeffery Sobal and Donna Maurer (eds.), pp. 67–90. Aldine de Gruyter.

1999 The Size Acceptance Movement and the Social Construction of Body Weight. In *Weighty Issues: Fatness and Thinness as Social Problems*. Jeffery Sobal and Donna Maurer, (eds.), pp. 231–245. Transaction Publishers.

Sobal, Jeffery and Albert J. Stunkard

1989 Socioeconomic Status and Obesity: a Review of the Literature. *Psychological Bulletin* 105(2): 260–271.

Sobo, Elisa

1994 The Sweetness of Fat: Health, Procreation, and Sociability in Rural Jamaica. In *Many Mirrors: Body Image and Social Relations*. Sault Nicole Landry, (ed.), pp. 132–154. Rutgers University Press.

Spiegel, Allen M. and Elizabeth G. Nabel

2006 NIH Research on Obesity and Type 2 Diabetes: Providing the Scientific Evidence Base for Actions to Improve Health. *Nature Medicine* 12: 67–69.

Spielvogel, Laura

2003 *Working out in Japan: Shaping the Female Body in Tokyo Fitness Clubs*. Duke University Press.

Starn, Orin

1999 *Nightwatch: The Politics of Protest in the Andes*. Duke University Press.

Stimson, Karen

1994a Fat Feminist Herstory, 1969–1993: A Personal Memoir. *Largesse Size Esteem Bulletin* #4.

1994b Size Rights: the Disability Debate. *Largesse Size Esteem Bulletin* #6.

Stinson, Kandi M.

2001 *Women and Dieting Culture: Inside a Commercial Weight Loss Group*. Rutgers University Press.

Strathern, Marilyn

1987 An Awkward Relationship: The Case of Feminism and Anthropology. *Signs* 12(2): 276–292.

1999 *Property, Substance and Effect: Anthropological Essays on Persons and Things*. The Athlone Press.

Svendsen, Mette N.

2006 The Social Life of Genetic Knowledge: A Case-Study of Choices and Dilemmas in Cancer Genetic Counseling in Denmark. *Medical Anthropology: Cross-Cultural Studies in Health and Illness* 25: 139–170.

Taylor, Verta and Nancy E. Whittier

1992 Collective Identity in Social Movement Communities: Lesbian Feminist Mobilization. In *Frontiers in Social Movement Theory*. Aldon D. Morris and Carol McClurg Mueller (eds.), pp. 104–129. Yale University Press.

Taylor, Wendell C., et al.

2006 Environmental Justice: Obesity, Physical Activity, and Healthy Eating. *Journal of Physical Activity & Health* 3(1): 30–54.

Teegardin, Carrie

2012 Grim Childhood Obesity Ads Stir Critics. *The Atlanta Journal Constitution* January 1. ［http://www.ajc.com/news/news/local/grim-childhood-obesity-ads-stir-critics/nQPtQ/］(2014 年 10 月 28 日最終閲覧).

Touraine, Alain

1985 An Introduction to the Study of Social Movements. *Social Research* 52(4): 749–787.

Townsend, Marilyn S., et al.

2001 Food Insecurity is Positively Related to Overweight in Women. *Journal of Nutrition* 131: 1738–1745.

U.S. Department of Health and Human Services

2001 The Surgeon General's Call to Action to Prevent and Decrease Overweight and Obesity. U.S. Department of Health and Human Services.

Vade, Dylan and Sondra Solovay

2009 No Apology: Shared struggles in Fat and Transgender Law. In *The Fat Studies Reader*. Esther D. Rothblum and Sondra Solovay (eds.), pp. 167–175. New York University Press.

Valentine, David

2007 *Imagining Transgender: An Ethnography of a Category*. Duke University Press.

Wang, Shirley S., Kelly D. Brownell and Thomas A. Wadden

2004 The Influence Of The Stigma Of Obesity on Overweight Individuals. *International Journal of Obesity* 28: 1333–1337.

Wann, Marilyn

2005 Fat & Choice: A Personal Essay. *MP: An Online Feminist Journal* ［http://academinist.org/wp-content/uploads/2005/09/010308Wann_Fat.pdf］ (2013 年 3 月 10 日最終アクセス).

2009 Fat Studies: An Invitation to Revolution. In *The Fat Studies Reader*. Esther D. Rothblum and Sondra Solovay (eds.), pp. ix–xxv. New York University Press.

Warren, Kay B.

1998 *Indigenous Movements and their Critics: Pan-Maya Activism in Gatemala*. Princeton University Press.

White, Francis

2010 The Loss of a Hero. *NAAFA Newsletter*, September.

Woolgar, Steve and Dorothy Pawluch

1985 Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations. *Social Problems* 32(3): 214–227.

World Health Organization

2000 *Obesity: Preventing and Managing the Global Epidemic*. No. 894. World Health Organization.

Wright, Jan and Valerie Harwood (eds.)

2008 *Biopolitics and The 'Obesity Epidemic': Governing Bodies*. Routledge.

Wunderlich, Gooloo S. and Janet L. Norwood (eds.)

2006 *Food Insecurity and Hunger in the United States, An Assessment of the Measure*. Panel to Review the U.S. Department of Agriculture's Measurement of Food Insecurity and Hunger, Committee on National Statistics, Division of Behavioral and Social Sciences and Education, National Research Council, The National Academies Press.

Yancey, Antronette K., Joanne Leslie and Emily K. Abel

2006 Obesity at the Crossroads: Feminist and Public Health Perspectives. *Signs* 31(2): 425–443.

Yates-Doerr, Emily

2012 The Weight of the Self: Care and Compassion in Guatemalan Dietary Choices. *Medical Anthropology Quarterly* 26(1): 136–158

2013 The Mismeasure of Obesity. In *Reconstructing Obesity: The Meaning of Measures and the Measure of Meanings*. Megan B. McCullough and Jessica A. Hardin (eds.), pp. 49–70. Berghahn Books.

Zaloom, Caitlin

2004 The Productive Life of Risk. *Cultural Anthropology*, 19(3): 365–391.

Zhang, Qi and Youfa Wang

2004 Trends in the Association between Obesity and Socioeconomic Status in U.S. Adults: 1971 to 2000. *Obesity Research* 12(10): 1622–1632.